

吉ヶ谷津遺跡

# 吉ヶ谷津遺跡

(安中市 0201 遺跡)

社会资本総合整備(活力・重点・補正) (一)下里見安中線  
(西毛広域幹線道路安中工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



社会资本総合整備(活力・重点・補正) (一)下里見安中線  
(西毛広域幹線道路安中工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二一

群馬県安中土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2021

群馬県安中土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 吉ヶ谷津遺跡

(安中市 0201 遺跡)

社会资本総合整備(活力・重点・補正)(一)下里見安中線  
(西毛広域幹線道路安中工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

群馬県安中土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





1号古墳前庭部出土の土器



1号古墳 全景 南より



# 序

県内の高速交通網を補完する交通軸のひとつとして整備が進められている西毛広域幹線道路は、前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ延長27.8kmの主要幹線道路です。

関越自動車道駒寄スマートインターチェンジ付近と上信越自動車道富岡インターチェンジ付近の間を結び、周囲の渋滞緩和や物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業・経済・観光の発展を担う道路として開通が望まれています。

安中工区として改良・整備が進められている県道132号下里見安中線は、秋間丘陵の吉ヶ谷津岬を越える峠道で、一帯は古代の窯跡が点在する窯業生産地として、また、近世以降は「自性寺焼」の生産地として知られています。

遺跡の発掘調査においても、秋間古窯群の開窯と古墳群の築造集団との関わりが指摘されている中で、これまで知られていなかった円墳1基や古墳時代から中・近世の集落、農耕地、灌漑用水施設、墓域など、丘陵の傾斜地の一角で営まれた生活の一端を物語る遺構群が調査されました。

発掘調査から報告書刊行に至る間、ご指導・ご協力を賜りました群馬県教育委員会、群馬県地域創生部、安中市教育委員会と地元関係者の皆様方には衷心より感謝を申し上げると共に、本書が地域史解明の一助となりますことを願い、刊行の序といたします。

令和3年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 向 田 忠 正



## 例　　言

1、本書は、社会資本総合整備(活力・重点・補正)（一）下里見安中線(西毛広域幹線道路安中工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された、「吉ヶ谷津遺跡(よしがやついせき)」の調査成果をまとめた発掘調査報告書である。なお、本遺跡の調査時の名称は、自治体の呼称(台帳番号)を用い「安中市0201遺跡」と称した。

2、遺跡は、群馬県安中市下秋間357-2・358-2・360・361-2・362・363-2・363-3・364-1・364-3・364-4・4426-5・4426-6・4427-2・4427-3・4427-4・4428-2・4429-11・4429-12・4429-13・4430-1・4430-2・4431-4・4432-3・4432-4・4433-5・4434-2・4435・4436-1・4436-3・4437-2・4437-3・4439-2・4443-3・4444-4・4444-5・4444-6・4445-4・4445-5・4445-6・4445-7・4458-1・4458-2・4459-4・4460-2・4460-3・4462-5番地に所在する。

3、遺跡の発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課(現群馬県地域創生部文化財保護課)の調整に基づき、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県安中土木事務所よりの委託を受けて実施した。

4、遺跡の発掘調査期間と調査担当者は、以下のとおりである。

・第一次調査 平成31(2019)年1月1日～平成31(2019)年3月31日

　　調査担当者：専門員 鈴木佑太郎、主任調査研究員 山本光明、調査研究員 山本直哉

・第二次調査 令和元(2019)年9月1日～令和元(2019)年11月30日

　　調査担当者：上席調査研究員 新井 仁、主任調査研究員 長澤典子、調査研究員 関 明愛

5、整理事業の期間と執筆・編集の担当者は、以下のとおりである。

整理期間 令和2(2020)年4月1日～令和3(2021)年3月31日

　　(履行期間 令和2(2020)年3月31日～令和3(2021)年3月31日)

編集担当 専門調査役 新倉明彦

デジタル編集 主任調査研究員・資料統括 齊田智彦

観察表執筆 上席調査研究員 松村和男〔石器・石製品〕、資料1課長(総括) 矢口裕之〔陶磁器〕、

専門調査役 神谷佳明〔土師器・須恵器〕、専門員 板垣泰之〔金属器〕

原稿執筆 専門調査役 岩崎泰一〔第1章3節 遺跡の位置と地形〕

　　上席調査研究員・資料統括 杉山秀宏・神谷佳明〔第2章2節5項 古墳〕

　　他 編集担当

鑑定・分析 石材鑑定 飯島静男 (群馬県地質研究会)

人骨鑑定 奈良貴史(新潟医療福祉大学リハビリテーション学部 教授)他

6、発掘調査記録・出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

## 凡　　例

- 1 本報告書の挿図中で使用した座標値は、すべて「日本測地系2011（JGD2011）」を用い、記された方位は座標北を示す。また、等高線や遺構断面図に記した値は、海拔標高値を示す。
- 2 遺構名称は、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲したが、一部に変更を加え新たに名称と番号を付した。変更したものについては、発掘調査時の資料との整合性を保つため( )内に旧称を記し、新旧対照表を掲載した。
- 3 遺構の主軸方位は、座標北を基準として、カマドを有する住居はカマドがある壁を上にして縦中軸の傾きを、それ以外の遺構は長軸の傾きをそれぞれ計測した。
- 4 遺構計測値で、例えば一部が調査対象地外にあるなどして、全容が計測できない遺構については、( )内に検出部の値を記した。
- 5 挿図の縮尺については、原則として以下のとおり掲載した。
  - 〔遺構図〕 穴窓建物=1：60、カマド=1：30、土坑・ピット・溝=1：40
  - 〔遺物図〕 土器・陶磁器1：3、石器・石製品・金属製品1：1・1：2・1：3・1：4
- 6 遺物観察表での表現は、以下のとおりである。
  - ・遺物番号は、観察表・実測図・遺物写真共に共通する。
  - ・土器・土製品胎土の細砂粒と粗砂粒とは、直径2mmを境に区別した。
  - ・土器計測位置の表現は、口径=口、底径=底、器高=高と略記した。
  - ・遺物の計測値で、欠損品の場合は、( )で残存部の値を記した。
- 7 遺物観察表や土層注記文中の色調は、農林水産省技術会議監修、(財)日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1996年版の色名を使用した。
- 8 挿図中で使用したトーンは、次のとおりである。
  - 〔遺構図〕 As-AまたはAs-B
  - 〔遺物図〕 灰軸 緑軸

# 目 次

図 絵

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次・表目次・写真目次	
第1章 調査に至る経緯と周辺の環境	1
第1節 調査に至る経緯と調査経過	1
第2節 調査方法と整理方法	3
第3節 遺跡の位置と地形	5
第4節 周辺の遺跡	8
第5節 基本土層(土層堆積状況)	18
第2章 検出された遺構と遺物	20
第1節 第1面 中世～近世(As-A降下前後)の遺構と遺物	20
第1項 土坑・ピット・焼土	24
第2項 池・溝	31
第3項 煙	46
第4項 道・墓	49
第5項 遺構外出土遺物（第1面）	66
第2節 第2面 古墳時代～平安時代(As-B降下以前)の遺構と遺物	68
第1項 穴穴建物	73
第2項 土坑・ピット・柱列・配石遺構	81
第3項 溝	95
第4項 煙、水田	97
第5項 古墳	100
第6項 遺構外出土遺物（第2面）	125
第3章 分析・鑑定結果	130
第1節 吉ヶ谷津遺跡出土の人骨について	130
第4章 まとめ	136
写真図版	
検出遺構	PL. 1
出土遺物	PL. 52
報告書抄録	

## 挿図目次

第1回 道跡位置図···	1	第45回 第2面 検出道構全体図(1)···	68
第2回 調査区概観···	3	第46回 第2面 検出道構全体図(2)···	69
第3回 調査区設定図···	4	第47回 第2面 検出道構①···	70
第4回 道跡の位置と地形···	6	第48回 第2面 検出道構②···	71
第5回 道跡周辺地質図···	6	第49回 第2面 検出道構③···	72
第6回 道跡周辺段丘地形図···	7	第50回 第2面 1号空穴建物平・断面図···	74
第7回 周辺道路位置図(1)···	10	第51回 第2面 2号空穴建物(使用面)平・断面図···	75
第8回 周辺道路位置図(2)···	11	第52回 第2面 2号空穴建物(掘り方)平・断面図···	76
第9回 道跡周辺の地形···	12	第53回 第2面 1号倒木痕跡面図···	77
第10回 基本上層(土堆積状況)図(1)···	18	第54回 第2面 1号空穴建物出土遺物···	78
第11回 基本上層(土堆積状況)図(2)···	19	第55回 第2面 2号空穴建物出土遺物···	79
第12回 第1面 検出道構全体図···	20	第56回 第2面 1~6号土坑平・断面図···	85
第13回 第1面 検出道構①···	21	第57回 第2面 8~9・11~18号土坑平・断面図···	86
第14回 第1面 検出道構②···	22	第58回 第2面 19~21・23~25・29~31・32号土坑平・断面図···	87
第15回 第1面 検出道構③···	23	第59回 第2面 ピット平・断面図···	89
第16回 第1面 7・10・22号土坑平・断面図···	26	第60回 第2面 1号柱坑・1号配石平・断面図···	91
第17回 第1面 26・27・30号土坑、25号ピット平・断面図···	27	第61回 第2面 土坑・柱坑・配石出土遺物(1)···	93
第18回 第1面 焼成集中平・断面図···	28	第62回 第2面 上坑・柱坑・配石出土遺物(2)···	94
第19回 第1面 上坑出土遺物···	29	第63回 第2面 1・4・10号溝平・断面図···	96
第20回 第1面 1号池、5・6・7・11・12号溝平・断面図(1)···	33	第64回 第2面 3号烟堀・断面図···	98
第21回 第1面 1号池、5・6・7・11・12号溝平・断面図(2)···	34	第65回 第2面 1号水田平・断面図···	99
第22回 第1面 2号溝平・断面図···	35	第66回 第2面 吉ケ谷跡周辺の古墳位置図···	100
第23回 第1面 3・8・9号溝平・断面図···	36	第67回 第2面 1号古墳石室調査前の石の散乱状況···	102
第24回 第1面 1号池出土遺物(1)···	37	第68回 第2面 1号古墳石室セクション図···	103
第25回 第1面 1号池出土遺物(2)···	38	第69回 第2面 1号古墳埴輪区画北側溝···	104
第26回 第1面 1号池出土遺物(3)···	39	第70回 第2面 1号古墳全貌図···	105
第27回 第1面 調出土遺物(1)···	40	第71回 第2面 1号古墳石室掘り方平・断面図···	106
第28回 第1面 調出土遺物(2)···	41	第72回 第2面 1号古墳石室敷石図···	107
第29回 第1面 1・2号烟堀断面図···	46	第73回 第2面 1号古墳石室平面図・見通し図···	110
第30回 第1面 1号烟堀平面図···	47	第74回 第2面 1号古墳平面図・見通し図···	111
第31回 第1面 2号烟堀平面図···	48	第75回 第2面 1号古墳断面···	113
第32回 第1面 1号道平・断面図···	48	第76回 第2面 1号古墳奥壇・左側壁石材補図···	115
第33回 第1面 慶応群全体図···	53	第77回 第2面 1号古墳右側壁石材補図···	116
第34回 第1面 1・2・3・4・8号墓平・断面図···	54	第78回 第2面 1号古墳断面図···	117
第35回 第1面 5・6・7・9・10号墓平・断面図···	55	第79回 第2面 1号古墳石室断面出土状況···	118
第36回 第1面 11~14号墓平・断面図。墓出土遺物(1)···	56	第80回 第2面 1号古墳造築基状況平・断面図···	120
第37回 第1面 墓出土遺物(2)···	57	第81回 第2面 1号古墳遺物出土状況···	121
第38回 第1面 墓出土遺物(3)···	58	第82回 第2面 1号古墳出土遺物(1)···	122
第39回 第1面 墓出土遺物(4)···	59	第83回 第2面 1号古墳出土遺物(2)···	123
第40回 墓標記年銘(1)···	52	第84回 第2面 道構外出土遺物(1)···	125
第41回 墓標記年銘(2)···	62	第85回 第2面 道構外出土遺物(2)···	126
第42回 墓標記年銘(3)···	64	第86回 第2面 道構外出土遺物(3)···	127
第43回 被葬者の性別・年齢等···	65	第87回 出土人骨···	134
第44回 第1面 道構外出土遺物···	66	第88回 秋間川方向より遺跡と秋間丘陵を望む···	137

## 表 目 次

第1表 道構名称変更一覧···	4	第13表 第2面 1号空穴建物出土遺物観察表···	79
第2表 周辺道路一覧(1)古墳···	13	第14表 第2面 2号空穴建物出土遺物観察表···	80
第3表 周辺道路一覧(2)集落···	17	第15表 第2面 土坑・ピット計測表···	92
第4表 周辺道路一覧(3)秋間古窯跡群···	17	第16表 第2面 土坑・柱坑・配石出土遺物観察表···	95
第5表 第1面26・27号土坑出土遺物観察表···	30	第17表 1号古墳石室石材計測表(1)···	115
第6表 第1面上坑・ピット計測表···	30	第18表 1号古墳石室石材計測表(2)···	115
第7表 第1面池・溝出土遺物観察表···	42	第19表 1号古墳石室石材計測表(3)···	116
第8表 第1面量計測表···	60	第20表 1号古墳未掲載遺物一覧表···	119
第9表 第1面調出土遺物観察表···	60	第21表 1号古墳出土遺物観察表···	124
第10表 D区近世墓上部石造物(墓標)一覧···	65	第22表 第2面 道構外出土遺物観察表···	128
第11表 第1面道構外出土遺物観察表···	67	第23表 出土人骨冠計測表···	135
第12表 第2面2号空穴建物ピット計測表···	77		

## 写真目次

PL. 1	1	道路遠景	北東より	2	1号道	検出状態	全景	南より	
	2	道路遠景	北より		1	墓坑群	全景	上空より	
PL. 2	1	道路遠景	南より		2	墓石基礎	検出状態	南より	
	2	道路遠景	東より		3	墓石基礎	下下最状態	北より	
PL. 3	1	道路全貌	上空より		4	墓石基礎	全景	東より	
	2	B・C区1面全貌	上空より		5	墓石基礎	全景	北より	
PL. 4	1	C区1面全貌	上空より		1	墓坑群	全景	南西より	
	2	D区全貌	上空より		2	表採石造物(櫛標)			
PL. 5	1	7号土坑	木棺出土状況	東より	PL. 17	1	1号墓	人骨・副葬品出土状態	北より
	2	7号土坑	全景	西より		2	1号墓	全景	南より
	3	22号土坑	全景	東より		3	2号墓	副葬品出土状態	北より
	4	22号土坑	近景	東より		4	2号墓	全景	南より
	5	10号土坑	全景	北より		5	3号墓	人骨・副葬品出土状態	東より
	6	10号土坑	遺物出土状態	北より		6	3号墓	全景	東より
	7	10号土坑	辨検出土状態	東より		7	4号墓	人骨・副葬品出土状態	北より
	8	10号土坑	辨検出土状態	北東より		8	3・8・4号墓	全貌	東より
PL. 6	1	26・27号土坑	全景	西より	PL. 18	1	8号墓	人骨・副葬品出土状態	東より
	2	26・27号土坑	辨検出土状態	東より		2	8号墓	全景	東より
	3	27号土坑	木棺出土状況	西より		3	5号墓	人骨・副葬品出土状態	北より
	4	27号土坑	辨検出土状態	東より		4	5号墓	全景	東より
	5	27号土坑	全景	西より		5	6号墓	人骨・副葬品出土状態	東より
PL. 7	1	30号土坑	全景	東より		6	6号墓	全景	東より
	2	25号P1	全景	南より		7	7号墓	人骨・副葬品出土状態	南より
	3	焼土集中微量散布1	北より			8	7号墓	全景	南より
	4	焼土集中焼土1	断面	北より	PL. 19	1	墓坑群	全景	上空より
	5	焼土集中微量散布2	北より			2	12号墓	全景	東より
	6	焼土集中焼土2	断面	北より		3	9号墓	人骨・副葬品出土状態	西より
	7	焼土集中微量散布3	南より			4	9号墓	全景	西より
	8	焼土集中焼土4	断面	北より		5	10号墓	人骨・副葬品出土状態	西より
PL. 8	1	1号池	全景	北東より		6	10号墓	全景	西より
	2	1号池	全景	南より		7	13号墓	人骨・副葬品出土状態	東より
	3	1号池	遺物出土状態	南より		8	13号墓	全景	東より
	4	1号池	遺物出土状態	北より	PL. 20	1	11・14号墓	上部墓石基礎	出土状態
	5	1号池	遺物出土状態	近景		2	11・14号墓	全景	南東より
PL. 9	1	5号溝	遺物出土状態	西より		3	11・14号墓	上部墓石基礎下面	
	2	5号溝	近景	南より		4	11・14号墓	上部墓石基礎下面	
	3	5号溝	理上面断面	北より		5	11号墓	人骨・副葬品出土状態	南東より
	4	5・7号溝	全景	南より		6	11号墓	全景	南東より
	5	7・5・12号溝	全景	南より		7	14号墓	人骨・副葬品出土状態	南東より
PL. 10	1	6号溝	全景	南東より		8	14号墓	全景	南東より
	2	6号溝	全景	西より	PL. 21	1	B区2面	遠景	北より
	3	6号溝	遺物出土状態	西より		2	C区2面北	遠景	南より
	4	6号溝	遺物出土状態	近景	PL. 22	1	D区2面	遠景	上空より
	5	11号溝	全景	東より		2	D区2面	遠景	上空より
	6	11号溝	石組み状態	北より	PL. 23	1	1号堅穴建物	遺物出土状態	南東より
	7	12・5号溝	全景	南東より		2	1号堅穴建物	遺物出土状態	近景
	8	12号溝	埋上面断面	南より		3	1号堅穴建物	カマフ	全景
PL. 11	1	B・C区	溝群	上空より		4	1号堅穴建物	遺物出土状態	近景
	2	2号溝	全景	北より		5	1号堅穴建物	カマフ掘り	全景
	3	2号溝	全景	南より	PL. 24	1	1号堅穴建物	貯藏穴全景	南より
	4	3号溝	全景	西より		2	1号堅穴建物	コーナー一部埋溝	北東より
	5	8・9号溝	埋上面断面			3	1号堅穴建物	P1	全景
PL. 12	1	1号烟	全景	北より		4	1号堅穴建物	掘り方全景	南東より
	2	1号烟	検出状態	北より		5	1号堅穴建物	掘り方全景	南西より
	3	1号烟	近景	北東より	PL. 25	1	2号堅穴建物	全景	東より
	4	1号烟	鞋石堆積状況	北より		2	2号堅穴建物	掘り方全景	東より
	5	1号烟	近景	南より	PL. 26	1	2号堅穴建物	遺物出土状態	南より
PL. 13	1	2号烟	全景	南東より		2	2号堅穴建物	遺物出土状態	南より
	2	2号烟	検出~鞋石除去状態	南より		3	2号堅穴建物	P1	全景
	3	2号烟	全景	南より		4	2号堅穴建物	P2	全景
	4	2号烟	全景	南より		5	2号堅穴建物	P3	全景
	5	2号烟	近景	南より		6	2号堅穴建物	P6	全景
PL. 14	1	1号道	検出状態	全景		7	2号堅穴建物	P7	全景

	8	2号墳穴建物 振り方全景 北より	2	1号古墳 石室玄室部 振り方 南東より
PL. 27	1	1号土坑 全景 北より	3	1号古墳 石室玄門部 振り方 東より
	2	2号土坑 全景 北より	4	1号古墳 石室 全景 南より
	3	3号土坑 全景 北より	5	1号古墳 石室 振り方全景 西より
	4	4号土坑 全景 北より	PL. 40	1 1号古墳 石室基底部 全景 南より
	5	5号土坑 全景 北より	2	1号古墳 石室基底部 全景 西より
	6	6号土坑 全景 北より	3	1号古墳 石室基底部 全景 北より
	7	8号土坑 遺物出土状態 南より	4	1号古墳 石室基底部 近景 東より
	8	8号土坑 全景 東より	5	1号古墳 石室基底部 近景 東より
PL. 28	1	9号土坑 全景 東より	PL. 41	1 1号古墳 石室壁設置状況 北東より
	2	11号土坑 全景 北より	2	1号古墳 石室壁裏込石 南東より
	3	12号土坑 理上断面	PL. 42	1 1号古墳 石室壁設置状況 南より
	4	13号土坑 全景 西より	2	1号古墳 石室壁裏込石 南より
	5	14号土坑 全景 東より	PL. 43	1 1号古墳 石室壁設置状況 西より
	6	15・16号土坑 全景 北東より	2	1号古墳 石室壁裏込石 西より
	7	17号土坑 理上断面	PL. 44	1 1号古墳 前部 振り方 西壁下 東より
	8	18号土坑 全景 東より	2	1号古墳 前庭部 振り方 西壁下 東より
PL. 29	1	19号土坑 全景 東より	3	1号古墳 前庭部 振り方 西壁下 南より
	2	20号土坑 理上断面	4	1号古墳 前部 振り方 南より
	3	21号土坑 全景 南より	5	1号古墳 前底部 全景 南より
	4	23号土坑 全景 東より	PL. 45	1 1号古墳 石室 全景 南より
	5	24・25号土坑 全景 東より	2	1号古墳 石室 全景 西より
	6	29号土坑 全景 東より	PL. 46	1 1号古墳 石室 全景 北より
	7	30号土坑 全景 東より	2	1号古墳 石室西壁 東より
	8	31・32号土坑 全景 北東より	PL. 47	1 1号古墳 玄室西壁 東より
PL. 30	1	12号ピット 全景 東より	2	1号古墳 玄室東壁 南より
	2	13号ピット 全景 東より	3	1号古墳 玄室東壁 西より
	3	14号ピット 全景 東より	4	1号古墳 玄室玄門 北より
	4	15号ピット 全景 西より	5	1号古墳 玄室 全景 西より
	5	16号ピット 全景 西より	PL. 48	1 1号古墳 玄門-義道 北より
	6	17号ピット 全景 西より	2	1号古墳 玄門-義道 北より
	7	18号ピット 全景 西より	3	1号古墳 玄門-義道 南より
	8	19号ピット 全景 西より	4	1号古墳 玄門-義道 南より
PL. 31	1	20号ピット 全景 西より	5	1号古墳 義道東壁 西より
	2	21号ピット 全景 西より	PL. 49	1 1号古墳 玄門-前庭 西より
	3	30号ピット 全景 西より	2	1号古墳 義道西壁状況 南より
	4	1号柱列P 2 全景 南より	3	1号古墳 義道西壁状況 北より
	5	1号柱列P 3 全景 南より	PL. 50	1 1号古墳 石室内蔵製品出土状況
	6	1号柱列P 2 全景 西より	2	1号古墳 石室内蔵製品出土状況
	7	1号柱列P 4 遺物出土状態 西より	3	1号古墳 石室内蔵物出土状況
	8	1号柱列P 4 全景 南より	4	1号古墳 義道物出土状況
PL. 32	1	1号柱列 全景 北より	5	1号古墳 前底部遺物出土状況
	2	1号配石造構 遺物出土状態 全景 西より	6	1号古墳 前底部遺物出土状況
PL. 33	1	1号配石造構 碓出土壤状態 全景 東より	7	1号古墳 前底部遺物出土状況
	2	1号配石造構 遺物出土状態 近景 西より	8	1号古墳 前底部遺物出土状況
	3	1号配石造構 全景 東より	PL. 51	1 1号古墳 石室埋没状況
	4	1号配石造構 磨擦去状態 全景 北より	2	1号古墳 石室埋没状況
	5	1号配石造構 磨擦去状態 全景 東より	3	1号古墳 石室埋没状況
PL. 34	1	1号溝 全景 東より	4	1号古墳 石室埋没状況
	2	4号溝 全景 東より	5	1号古墳 石室側面状況 北より
	3	10号溝 全景 上空より	6	1号古墳 石室側面状況 南西より
PL. 35	1	3号烟 1段断面 東より	7	1号古墳 石室側面状況 南より
	2	3号烟 1段全景 南より	8	1号古墳 石室側面状況 南より
	3	3号烟 2段断面 南より		
	4	3号烟 2段全景 南より		
	5	3号烟 全景 南東より		
PL. 36	1	3号烟 3段全景 南東より		
	2	3号烟 5段全景 北より		
	3	1号水田 南西半部全景 北東より		
	4	1号水田 北東部 南西より		
	5	1号水田 中央部 南西より		
PL. 37	1	1号水田 南西半部全景 北より		
	2	1号水田 南西半部近景 南東より		
PL. 38	1	1号古墳 全景 上空より		
	2	1号古墳 全景 上空より		
PL. 39	1	1号古墳 石室振り方 全景 南より		

# 第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

## 第1節 調査に至る経緯と調査経過

### 第1項 調査に至る経緯

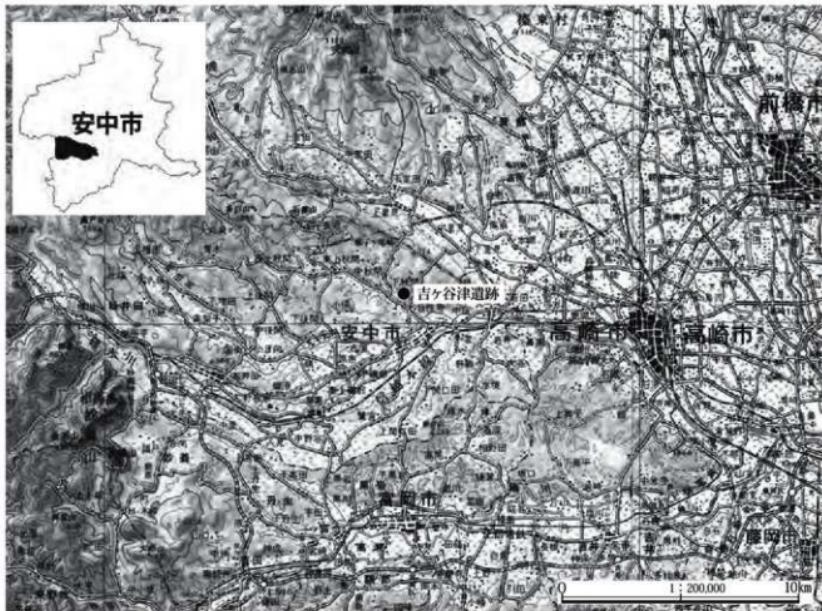
#### 1. 道路整備計画

群馬県は、県内の高速交通網を補完する7つの交通軸（県央軸、東毛軸、西毛軸、吾妻軸、三国軸、尾瀬軸、渡良瀬軸）を整備することにより、地域連携を強化するとともに、それぞれの軸に求められる機能（工業、農業、観光、救急・救命、防災、日常生活）を向上させることを目指した「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」を打ち出した。

7つの交通軸のうち「西毛軸」は、西毛広域幹線道路、国道254号バイパスやJR信越本線、上信電鉄で構成され、

本遺跡の調査要因となる西毛広域幹線道路は、前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ延長27.8kmの主要幹線道路で、関越自動車道の駒寄スマートインターチェンジ付近と上信越自動車道の富岡インターチェンジ付近の間を結び、周囲の渋滞緩和や物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業・経済・観光の発展を担う道路として早期の開通が望まれている。

この西毛広域幹線道路の高崎安中工区から安中工区は、高崎の箕郷地域と安中市を結ぶ現道として、県道132号下里見安中線が走る。本道は、秋間丘陵の吉ヶ谷津峠を越える峠道であるため、起伏に富み、屈曲し復員も挾いため、西毛広域幹線道路整備事業として安中工区分の改良・整備が加えられることとなった。



第1図 遺跡位置図(国土地理院1/200000地勢図「長野」平成24年5月1日、「宇都宮」平成23年6月1日発行を加工)

## 2. 試掘・確認調査

事業対象地域が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、平成30年1月、群馬県教育委員会文化財保護課(当時)は、群馬県土整備部道路整備課の要請に基づき、安中市教育委員会の協力のもと埋蔵文化財試掘・確認調査を実施した。

試掘・確認調査は、約9,300m<sup>2</sup>の対象地内に、小型重機を用いて、1m幅のトレンチを7条(箇所)約152m掘削し、5~7号トレンチにおいて竪穴建物や溝と考えられる遺構の一部を検出した。また、隣接地内には2基古墳も確認されていることから、事業地の南半部は本調査が必要であるとの判断が下された。

## 第2項 調査経過

平成31年1月、群馬県教育委員会文化財保護課(現群馬県地域創生部文化財保護課)調整のもと、群馬県安中土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団の間

安中市0201遺跡 調査日誌(抜粋)	※同作業の継続は不得 【平成30年度】
1月 4日 (金)	調査事務所設営、調査区環境整備・安全対策
1月 9日 (水)	A・B区トレント調査、A・C区空塗削作業
1月10日 (木)	A~C区トレント調査
1月11日 (金)	B区トレント調査、C区表土塗削作業
1月17日 (木)	B区トレント調査、C区表土塗削作業
1月18日 (金)	B区道構確認・井戸調査、C区道構確認、道・As-A下塗調査
1月21日 (月)	B区道構確認 P1・水路等道構調査 C区焼土調査
1月22日 (火)	B区道構確認・上坑等道構調査、C区道構調査
1月23日 (水)	B区道構確認・道構調査、C区道構調査、B区道構確認
1月25日 (金)	B区道構調査、D区表土塗削・道構確認
1月30日 (水)	D区道構調査、B~E区空塗削準備
1月31日 (木)	B~D区E面空塗
2月 1日 (金)	B区2面水路調査、底土坑調査
2月 6日 (水)	B区2面道構確認、C区全景写真、D区土坑調査
2月19日 (火)	B区西側 E面水路・溝調査、D区谷部他掘削
2月20日 (水)	B区2面道構確認、(C区道構確認、D区北2面道構確認、D区中央部1号古墳調査)
2月28日 (木)	古墳調査に関する三者(県文化財保護課・安中土木事務所・事業団)協議
3月 1日 (金)	B~C区空塗削準備、B区池削除、C区土坑・ピット調査、D区古墳掘削
3月 5日 (火)	B区トレント調査・北側埋め戻し、C区2号竪穴建物・土坑調査、D区古墳範囲確認
3月 6日 (水)	B区池・土坑・溝・As-A下塗調査、C区竪穴建物調査、D区古墳範囲確認、安全巡回
3月 8日 (金)	B区2号塗・2面目全景写真、C区竪穴建物調査・2面目掘削、D区古墳範囲確認
3月11日 (月)	午前中降雨作業休止、B区下層確認、C区竪穴建物調査、D区古墳調査、旧石器試掘
3月15日 (金)	埋め戻し作業
3月22日 (金)	調査器材収納、安中土木事務所 理め戻し確認

## 令和元年度

9月 2日 (月)	前年度調査確認
9月 3日 (火)	調査事務所設営

で委託契約が結ばれ、当該対象地の発掘調査が3月までの間で実施された。

調査対象地は、北東から南西に延びる幹線道路用地と、これに付随する生活道付け替え部からなる。対象地は台地の縁辺部に位置するため、比高差は17mほどを計る傾斜地となる。調査に際し、用水路や地境等を境としてA・B・C・D区からなる調査区を設定した。また、調査事務所用地として、現県道下里見安中線の北側の事業地内調査不要箇所が確保された。この平成30年度に行われた第一次調査において、調査区のA・B・C区およびD区本線部の調査を終え、埋め戻すと共に、未調査のD区の生活道付け替え部を除き、引き渡しが行われた。

翌平成31(令和元)年9月から11月までの間、D区の生活道付け替え部の調査が、第二次調査として実施された。調査を終えた幹線道路部の工事が行われる中、工事箇所を迂回しての調査が行われ、終了後に埋め戻し、引き渡しが行われた。

9月 4日 (水)	調査事務所設営、調査地環境整備・安全対策
9月10日 (火)	D区土表塗削作業
9月11日 (水)	1号古墳側面作業
9月13日 (金)	1号古墳東側南面部検出
9月18日 (水)	1号古墳前庭部調査
9月24日 (火)	安全点検(安全確保巡回監視員)
9月25日 (水)	1号古墳石室内調査
9月26日 (木)	1号古墳玄室調査
9月30日 (月)	1号古墳玄室内壁検出
10月 1日 (火)	1号配石調査
10月 3日 (木)	安全点検(安全確保巡回監視員)
10月 4日 (金)	降雨~1号古墳調査作業
10月 8日 (火)	労働安全衛生週間 常務・局長他巡回
10月 9日 (水)	31・32号土坑調査
10月10日 (木)	台風対策
10月14日 (月)	台風通過後安全確認、1号古墳調査
10月17日 (木)	1号古墳調査、土坑調査
10月18日 (金)	午後降雨のため作業休止
10月21日 (月)	1号古墳調査、土坑調査継続
10月25日 (金)	降雨のため作業休止
10月28日 (月)	1号古墳調査、土坑調査継続
10月29日 (火)	午後降雨のため作業休止
10月30日 (水)	1号古墳北側道構調査
11月 6日 (水)	1号古墳空塗、石室全景写真撮影
11月 6日 (水)	1号古墳埴丘部調査、土坑調査 県立歴史博物館右鳥館長、鹿沼市来訪
11月11日 (月)	1号古墳埴丘部調査、土坑調査継続 15時以降降雨のため作業休止
11月14日 (木)	1号古墳石室内玉石・前室敷石除去、土坑調査
11月19日 (火)	1号古墳側壁除去、土坑調査
11月20日 (水)	1号古墳基底部塗方調査、土坑調査
11月22日 (金)	1号古墳基底部塗方調査、土坑調査 午後降雨のため作業休止
11月26日 (火)	1号古墳塗方調査、溝調査
11月27日 (水)	基本土塗調査、器附収取作業
11月28日 (木)	調査区理め戻し作業
11月29日 (金)	調査事務所撤去作業

## 第2節 調査方法と整理方法

1. 調査方法 前記のとおり、用水路や生活道を境として調査対象地内にA・B・C・D区からなる調査区を設定した。

調査に先駆けて安全対策として、調査区の周囲に単管と安全ロープによる柵を巡らし、各種看板等を設置して立ち入りの禁止と危険箇所の明示を行った。

調査事務所は、事業用地の中で試掘結果に基づき調査が不要と判断された箇所に設置した。

表土の掘削に際しては、平成30年1月に実施された試掘・確認調査の結果を参考に調査区ごとに掘削深度を想定し、主に大型の重機(0.7mバックフォー・10t不整地運搬車両)を用いて表土の除去に当たった。掘削土は、事業地外への搬出・仮置きが困難なため、C区南斜面部とD区南部を先行して調査し、堆土置き場とした。また、B・C区はそれぞれ東西に分割し、交互に調査と埋め戻しを行った。D区北部など大型の重機の進入が難しい所

では、小型の掘削機・運搬車両を用いて表土の除去と埋め戻しに当たった。いずれの状況においても安全を重視し、オペレーターとの打合せ、安全巡視員による指導、かつ公道・水路の保護などを心がけた。

遺構の掘削に際して、作業環境の整備を含め、遺跡掘削工事請負を委託して行った。

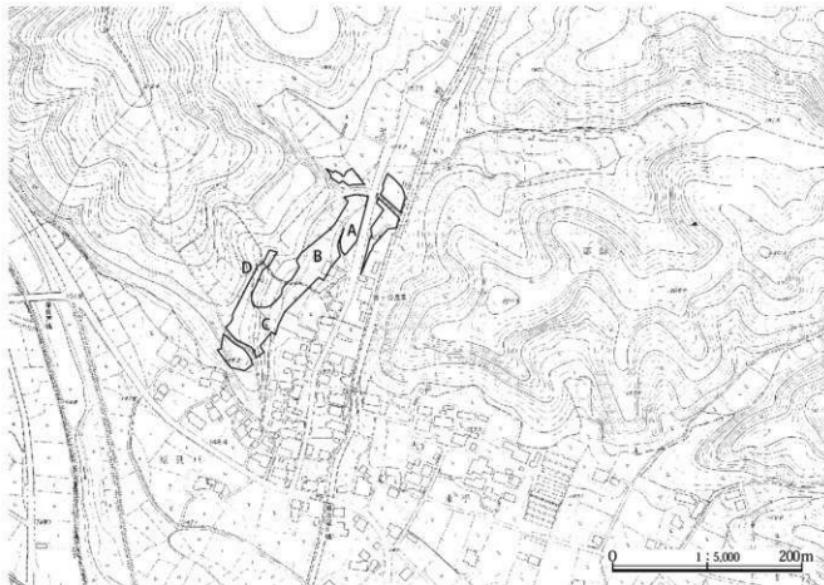
調査の記録に際して、測量用基準・水準杭の設置、遺構平・断面測量等の地上測量業務を専門業者に委託して行った。また、上空からの空中写真撮影についても専門業者に委託して行った。測量に関しては、世界測地系(日本測地系2011、JGD2011)を基準とし、調査グリッドは設定せず、座標値のX・Yそれぞれの下3桁を組み合わせて位置の呼称とした。

写真の記録に際して、35mmデジタル一眼レフカメラと中型プローニー判フィルムカメラを用いて、調査担当者が撮影を行った。

調査区間の斜面など遺構検出面以外の地点、およびローム土堆積地点については、トレンチの掘削による確認調査を行った。



第2図 調査区概観



第3図 調査区設定図(安中市都市計画図No.1 昭和49年を加工)

2. 整理方法 整理作業は、令和2(2020)年4月1日から令和3(2021)年3月31日までの12ヶ月間、群馬県安中土木事務所の委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団が実施した。

具体的には、発掘調査時に記録された遺構平・断面図の整合性の確認および修正、同写真(フィルム・データ)の選出、出土遺物の接合・復元・図化・観察・写真撮影や金属遺物など脆弱遺物の保存処理、検出遺構と出土遺物に関する原稿執筆、報告書掲載図・文・写真的レイアウトおよび版組を行い、自刷用デジタル原稿データの作成を行った。これを基に指名競争入札を行い、自刷業者による印刷・製本、全国の関係機関等への発送、出土遺物・調査資料の保管用収納の作業を実施した。

遺構名称については、原則として調査時に付した名称・番号を踏襲したが、一部に変更を加え新たに名称と番号を付した。変更したもののは新旧対照表を右に記す。

第1表 遺構名称変更一覧

調査区	調査時名称	報告名称
<b>第1面 中近世の遺構</b>		
B区	1号水路	→ 11号溝
B区	2号水路	→ 12号溝
B区	1号池状遺構	→ 1号池
B区	1号道状遺構	→ 1号道
C区	1号～5号埴土 微量焼土散布地	→ 墓土集中
D区	33号上坑	→ 1号上坑墓
D区	34号上坑	→ 2号上坑墓
D区	35号上坑	→ 3号上坑墓
D区	36号上坑	→ 4号上坑墓
D区	37号上坑	→ 5号上坑墓
D区	38号上坑	→ 6号上坑墓
D区	39号上坑	→ 7号上坑墓
D区	40号上坑	→ 8号上坑墓
D区	41号上坑	→ 9号上坑墓
D区	42号上坑	→ 10号上坑墓
D区	43号上坑	→ 11号上坑墓
D区	44号上坑	→ 12号上坑墓
D区	45号上坑	→ 13号上坑墓
D区	46号上坑	→ 14号上坑墓
<b>第2面 古墳時代～平安時代の遺構</b>		
B区	1号～5号畝	→ 3号畝

### 第3節 遺跡の位置と地形

安中市は平成18年度に碓氷郡松井田町と合併、これにより市域最高点は県境留夫山の北、約1.1km地点(1,602m)となり、市域東の板鼻地区(標高111m)とは1,500m近い標高差が生じることとなった。市域の地形は県境から続く山地があり、これに接して段丘地形(安中・松井田の旧市街地)や丘陵地がある。

〈市域西の山地形〉 まず、長野一群馬県境の地形からみてみよう。長野県境には北から留夫山(1,591m)・一ノ字山(1,336m)・矢ヶ崎山(1,184m)がある。いずれも1,100～1,500m級の山々である。県境の山は、長野県側に比べ概して群馬側が急であるという。山並の鞍部には旧碓氷峠(旧中仙道)・碓氷峠(国道18号線)・入山峠(国道18号線、碓氷バイパス)があり、古来街道として栄えたことで知られている。霧積山から浅間隠山・王城山へ続く山々は古い火山列(中新世～鮮新世の火山フロント)として知られ、文化的にも信州の影響が強く、婚姻儀礼等その名残がある。現在県境は鼻曲山付近で大きく西に膨らんでいるが、噴煙たなびく浅間山や白根山の方がランドマークとして適したことであろうか。

県境には増田川・霧積川・中尾川・遠入川・入山川の水源があり、これが合さり、碓氷川・九十九川・秋間川となる。いずれも新第三紀層の丘陵地を切り裂いて東流している。碓氷川や九十九川の流域には河岸段丘が発達、広い段丘面が形成されているが、九十九川支流の後閑川・秋間川流域にも小規模な段丘が形成されている(第5図)。

〈丘陵地形〉 続いて、市域の丘陵地形(北部：秋間・後閑丘陵、南部：岩野谷丘陵)をみていく。秋間丘陵は秋間川より北に広がる丘陵で、主稜線は西北西～東南東に延びる。主稜線は直線的だが石尊山付近に大規模な地滑り地形があり、この地点のみ稜線が乱れる。この主稜線は旧安中市と旧榛名町の行政界になっており、秋間丘陵北を烏川が流れている。

後閑丘陵は九十九川支流、後閑川両岸に広がる第三紀丘陵である。秋間川以南、増田川以北に広がる丘陵で、主稜線は増田川に並行しており、ここも行政界(旧安中市と旧松井田町)になっている。後閑川は丘陵を分断して流れているが、その延長上には断層が想定されている

(安中市表層地質図)。

市の南東部に広がる岩野谷丘陵は、高崎市觀音山の丘陵や富岡市小野・黒岩地区的丘陵に続く。丘陵内を岩井川が北流し、丘陵を二分する。標高は200～270m程度で、北部丘陵のように主稜線を形成することなく、行政界となる稜線もない。

〈段丘地形〉 以上、丘陵地形についてみてきたが、統いて安中市域の段丘地形をみていく。安中・松井田の市街地が段丘面上にあることは、すでに述べたとおりである。安中市史には古い方から順に、間仁田面(最上位段丘面)・中野谷面(上位段丘面)・原市面(中位段丘面)・安中面(下位段丘面)・磯部面群(最下位段丘面)に区分される。

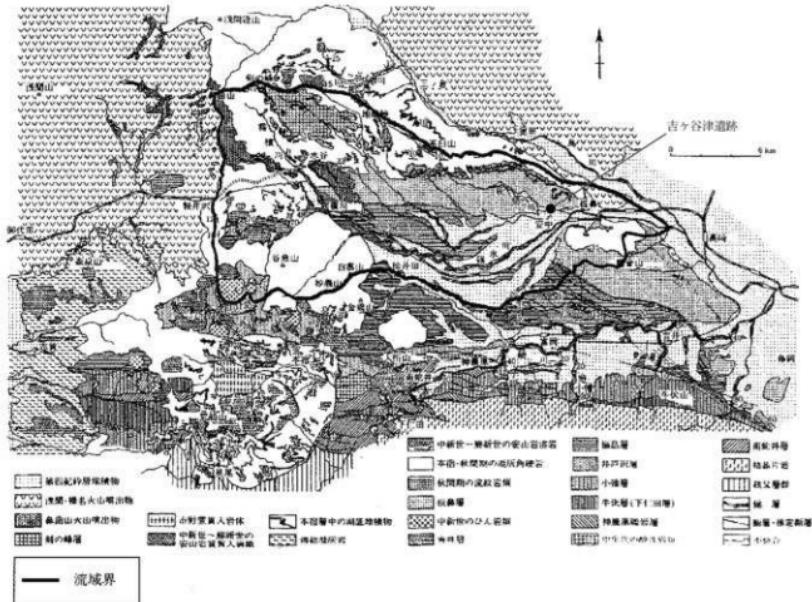
間仁田面は上間仁田～下間仁田の標高240～210mに広がり、猫沢川を境に中野谷台地に接する。中野谷台地とは約20mの比高差があるというが、猫沢川上流域では圃場整備され、言われるような比高差は実感できない。段丘の形成年代は中期更新世とされている。

中野谷面は、碓氷川右岸側(松井田町行田～安中市安中の標高350～170m)に広がる。柳瀬川を境に磯部面に接し、段丘面は広く平坦である。台地内には、松井田町原付近と安中市上宿付近に谷頭があり、これが台地を浸食。流域には狭い谷水田が続いている。広い台地を湧水起源の谷が刻む様子は武藏野台地奥の谷頭をみるとわかる。この地点の標準土層は新第三紀層の上の礫層が堆積、古期～下部ローム以上のロームが堆積している。段丘面の形成年代は24万年以前とされる。

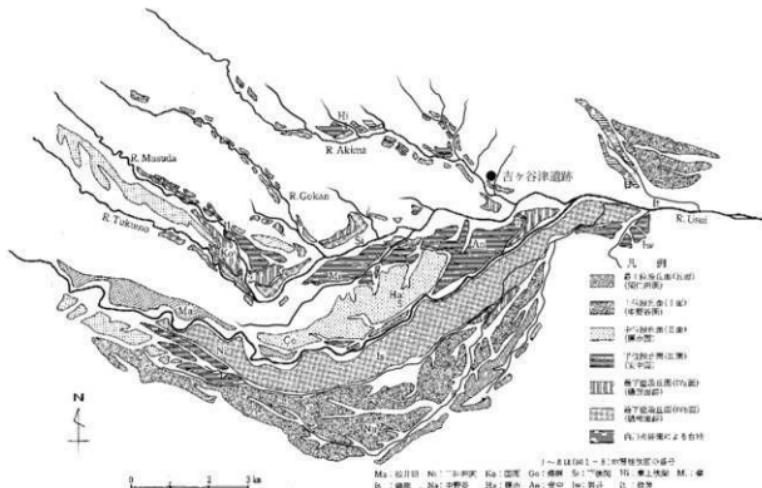
原市面は、碓氷川流域や九十九川流域に広がる。このうち、碓氷川左岸側の郷原～高別当に広がる台地が最も規模が大きい。この台地にはAT以上のロームが堆積する。段丘面の形成は約15万年であるといふ。

安中面は、碓氷川右岸の松井田町二軒在家付近および九十九川右岸の安中市嶺～古谷に広がる。ローム層はAT以後の上部ローム層が堆積しており、地形的には榛名白川火碎流の堆積面に対比されている。段丘面の形成は約5万年である。

磯部面は最も新しい時期の段丘面で、新旧2期がある。古い段丘面にはAs-BP以後のロームが載り、新しい段丘の形成は後期更新世になる。磯部面は丘陵内を流れる河川にも形成されたようである。



第4図 道路の位置と地形(「流域及び河川の概要」国土交通省HPを加工)



第5図 道路周辺地質図(『安中市史第一巻自然編』2000年加工)

＜遺跡周辺の地形＞ 続いて、本遺跡周辺の地形を概括的に記しておこう。本遺跡は安中市下秋間357-2ほかの秋間丘陵上に立地する。秋間丘陵は良く知られた新第三系の丘陵で、北に烏川が、南に秋間川が並行して流れている。秋間丘陵の主稜線は北西—南東方向に走り、これに直交するよう小河川が丘陵を浸食している。秋間川に流れ込む左岸側の小河川は6本があり、最も下流側小河川が鍛冶屋川になる。

本遺跡は、秋間川と鍛冶屋川の合流点に近い丘陵上にある。榛名町から安中市に抜ける県道西の谷は鍛冶屋川が流れおり、これに直交するよう深い谷が入り込んでいる。遺跡周辺の地形は平坦面が乏しく、起伏に富んだ樹枝状を呈する典型的な丘陵地形となっている。

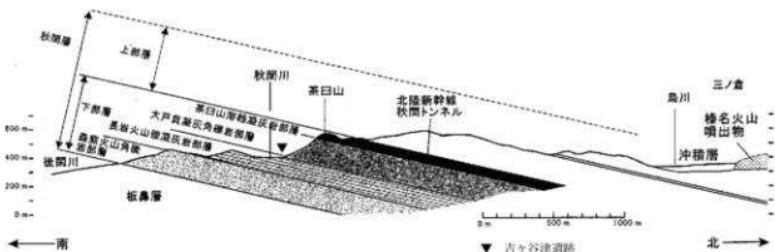
＜地質構造＞ 安中市域の地形は九十九川より北の丘陵地形、及び南の河岸段丘地形という枠組で捉えることができる。地質学的には古く1,500万年前にさかのぼる地層群からなる。

列島誕生のモデルは、大陸から分離→フォッサマグナの順を辿り、列島が形成されたという。そして、伊豆半島が列島に衝突し、東北圧場が形成された。関東山地の隆起。その北側の海底が徐々に隆起(原市層:漸深海、板鼻層:浅海)し、板鼻層上部段階で陸化したものであるという(下司ほか、榛名山地域の地質)。現高田川筋を流れていた初期の碓氷川が流路を北に移し段丘を形成したとする解釈も第4紀中期更新世の関東平野の隆起が原因とされている。

近年は報告書に地形分類図を掲載するものもあるが、そこに遺跡があるのは新第三系丘陵だからではなく、遺跡

として選地するだけの理由があるためであり、考古学的脈絡で評価する必要がある。秋間丘陵には約50の古窯跡群が知られているが、板鼻層(新第三紀中新世)中の凝灰岩がペントナイト化して陶芸に適した粘土となったとする仮説が示されている(安中市史2000)。秋間古窯跡群が分布する秋間丘陵には板鼻層中の上位凝灰岩(館凝灰岩)と中位凝灰岩(中間凝灰岩)があり、秋間丘陵尾根に近い館凝灰岩の分布域周辺に秋間古窯跡群が展開すること、また、自性寺焼は中間凝灰岩付近の粘土が使われたことが指摘されており、窯跡と粘土層の関連が示された(安中のやきもの2018)。そこでは、ペントナイト化した凝灰岩は庭谷層(富岡層群)や原市層(原市凝灰岩)があり、現在も高田川流域で採掘されていることや、板鼻層中の館凝灰岩上部には亜炭層があり、戦前は粘土化した凝灰岩を素材に煉瓦を焼いていたことが紹介されている(安中のやきもの)。

このほか、ペントナイト化していない凝灰岩があり、石造物に利用されたことが指摘されている。安中市史には館凝灰岩や茶臼山凝灰岩が石材として採掘され、古墳時代の古墳石室や石棺・近世・近代の石造物に使われたとする記載もあり、凝灰岩起源の粘土は局所的、部分的に堆積したものと思われ、秋間丘陵に産する粘土は資源的に潤沢とはいえず、その後の窯業生産を規定したということであろう。



第6図 遺跡周辺段丘地形図「榛名山地域の地質」2012独立行政法人産業技術研究所地質調査総合センターを加工)

## 第4節 周辺の遺跡(歴史的環境)

**(旧石器時代)** 安中市域における旧石器検出事例は、AT下の中部ローム最上部の暗色帯に包含される石器群(群馬Ⅰ期)に該当する遺跡として、古城遺跡、中野谷松原遺跡がある。BPグループ相当層および上部ローム層中(群馬Ⅱ期)の検出は見られず、BPとYP間のローム層中(群馬Ⅲ・Ⅳ期)の検出も稀薄でまとまった出土は見られない。また、いずれの検出例も当遺跡地から離れた地点での検出であり、下秋間地域での検出例はない。

**(縄文時代)** 安中市域における縄文時代早期の集落としては、金井谷戸遺跡、前期集落としては、中原遺跡、中野谷松原遺跡、中期～後期前葉の集落として、砂押遺跡、野村遺跡、中島遺跡などでの検出例がある。後期中葉以降の集落は検出されていないが、天神原遺跡より後～晩期の配石墓群や環状列石・石棒祭祀遺構などが検出されている。いずれの検出例も当遺跡地から離れた地点での検出であり、下秋間地域での検出例はない。

**(弥生時代)** 安中市域における弥生時代前期から中期後半にいたる集落の検出例として、注連引原遺跡群、中野谷・原遺跡があり、中期後半から後期にいたる集落の検出例としては、杉名薬師遺跡、荒神平・吹上遺跡、諏訪ノ木遺跡、古屋地区遺跡群などがある。いずれの検出例も当遺跡地から離れた地点での検出であり、下秋間地域での検出例はない。

**(古墳時代)** 安中市域における古墳時代前期の集落として、前記の荒神平・吹上遺跡、諏訪ノ木遺跡、後期の集落として植松池尻遺跡、野殿北屋敷遺跡、西殿遺跡、堀谷戸遺跡などの検出例がある。

市域の墳墓としては、全長80mを計る6世紀初頭の前方後円墳塙瀬二子塚古墳、6世紀後半の径30m程の円墳で、その石室構造から高崎銀音塙古墳との関連性が指摘されている野殿天王塙古墳をはじめ碓冰川流域に磯部12号墳、磯部9号墳、安中4号墳がある。

遺跡周辺の秋間地区には、終末期古墳が谷筋の丘陵ごとに分布する。截石切組積石室をもち、前橋総社古墳群との関係が指摘される二軒茶屋古墳(4)、万福原古墳

(46)、めおと塙古墳(71)を中心に、周辺には、自然石利用の小型円墳が点在する。また、これらの秋間古墳群と後記の秋間古窯跡群との関係も示唆されている。遺跡直近において、吉ヶ谷津北古墳(BK-42)(67)、吉ヶ谷津南古墳(BK-56)(68)が在り、本遺跡の1号古墳と密接な関連があるものと考えられる。

**(奈良・平安時代)** 律令制下の上野国には14郡が置かれ、遺跡地の秋間一帯は碓氷郡に属し、『倭名類聚抄』の碓氷(宇須比)郡の項には、飽間(安木末)、石間(佐加毛土)、磯部(伊曾倍)、石井(伊波井)、野後の六郷が記され、遺跡地は飽間郷に属する。倭名抄にはこれに加えて東山道駿路の駅家と俘因(陸奥・出羽の蝦夷のうち朝廷に降った者の移住地)が記されている。駿路には、昌泰二(898)年に太政官符により碓氷関が設けられ、これらのことから、碓氷の地が東山道の要衝の地であったことが窺える。

天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降灰は、上野国に大きな被害をもたらした。山体に近い碓氷郡の被災状況を物語る遺構として、中宿在家遺跡より厚く積もった降灰(As-B)下の水田跡が検出されている。また、植松池尻遺跡では、規則的に並ぶ掘立柱建物群や大型側柱建物・柵などの遺構と共に、「詳」の刻書土器や帶金具などが出土し、奈良時代の官衙施設の一部と考えられている。

**(中世)** 安中市域の荘園として、「碓氷(宇須井)荘」や「八幡荘」の名が史料に見られる。浅間山の噴火がもたらした災害の復興には、中央の有力貴族・寺社の力添えによる荘園化が不可欠であった。鎌倉期の在地氏族として、磯部郷に入部の御家人佐々木盛綱、八幡莊里見には新田一族の里見氏、飽間郷には飽間斎藤氏などの名が『吾妻鏡』に見られ、南北朝期には、元弘三年の新田義貞による鎌倉攻めに加わり、武州府中にて討ち死にした飽間斎藤三郎盛貞(26歳)・同孫七家行(23歳)、相州村岡にて討ち死にした、飽間孫三郎宗長(35歳)らの名を刻んだ供養板碑が東村山市徳藏寺に残る。八幡荘は、上野守護職となった上杉氏に与えられ、上杉氏の強固な上野領国支配が長く続くが、やがて戦国期に至り北条方・武田方の侵攻により上杉支配は崩壊する。

中世においても、碓氷峠越えの東道や鎌倉街道、河川

の渡河など、平時は基より戦乱時の侵攻・防御に際して、交通路の拠点であったことが当地域の特性となった。

周辺の山城として、雄郷城跡が現存する。また、中宿在家遺跡より中世館跡と思われる建物群が検出されている。

〔近世〕「安中」の地名は、永禄二(1559)年に、安中越前守忠政が野後の地に城を構え、地名を改称した、と伝えられる。天正十八(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めに伴い、松井田城は前田利家・上杉景勝の軍勢により落城。同年、徳川家康は江戸城に入り、重臣井伊直政を箕輪城に配し、江戸防衛と中山道整備、碓氷・牧の両関の警備に当たらせた。その後も子直勝が安中に移り、安中藩初代藩主となり、碓氷・牧の関所警固の任に当たる。このことからも、幕府にとって、防衛上「碓氷の関」が重要であったことが窺える。

天明三(1783)年七月五日の浅間山噴火による大量の降灰は、地域に大打撃を与えた。作物は立ち枯れ、交通は途絶し、諸物価の高騰と商品の買い占め・売り惜しみなどから、やがて一揆・騒動が勃発した。藩による年貢の減免や配給・給付金等の対応策にもかかわらず、農村人口の減少と年貢収入の減少、相次ぐ飢餓と疫病の流行などが藩の財政破綻を招く。

周辺の近世遺跡として、大島田II遺跡(ク)・沼田遺跡(ジ)では、天明三年の噴火災害後の田畠復旧坑が検出されている。

#### 秋間周辺の陶器生産

秋間古窯跡群の存在は、昭和9(1934)年に下秋間字八重巻や東上秋間字苅稲の地より大量の布目瓦が出土し、「その中には山王寺創建期と同様の瓦が含まれる」という田島伊作氏の発見報告により周知され、昭和32(1957)年・同40(1965)年には群馬大学の尾崎喜左雄教授指揮のもと発掘調査が行われ、出土資料より八重巻窯跡(チ)と苅稲窯跡は、7世紀後半に開業し9世紀まで操業されていたことが判明した。昭和56年には下秋間の雄子ヶ尾(タ)において県道工事中に窯跡が発見され、また、平成元(1989)年にはゴルフ場建設に伴い下秋間字二反田の二反田遺跡(ノ)にて発掘調査が行われ、6基の窯跡を検出し、8世紀前半から9世紀中頃に操業された須恵器生産

窯が明らかとなった。この他、字万福(セ)・字熊ノ谷津・字川久保(セ)・字日向(ケ)・字覺院坊(ケ)・字相水谷津(ヌ)などでも須恵器・瓦が採取され、周辺に古窯跡群の存在が想定されている。

これらの古窯跡群は、秋間丘陵の北東部に多く点在し、約50群程度を数える。この一帯は、安中市北部から高崎市の觀音山丘陵にかけて分布する新生代新第三紀中新世の地層である板鼻層があり、この板鼻層内の凝灰岩層帯2带のうち丘陵尾根に近い所を走る中関凝灰岩層帯に沿って良好な粘土層が存在する。この粘土層の存在が、窯業用地の選地の大きな要因と考えられ、併せて、秋間丘陵に植生する赤松林が、火力の強い燃焼材の確保という窯業には欠かせない条件を満たしたものと考えられる。

中世の陶器生産を裏付ける資料としては、平成7(1995)年に発掘調査された、原市町清水遺跡にて15世紀中頃のかわらけ焼成窯1基、15世紀後半~16世紀にかけての内耳銅等瓦質陶器の焼成窯3基と窯業集団の工房とみられる建物跡や井戸、粘土採掘坑、製品貯蔵施設としての地下式土坑などが検出されている。

下秋間地域における近世・近代の陶器生産は、嘉永二(1849)年頃に下秋間村の時澤佐市が陶土を発見したとの記録が有ることから、嘉永年間の初頭にこの地で陶器生産が開業されたものと考えられる。その後、明治9(1876)~10(1877)年に下秋間村字二反田、下野尻村字笛平で官許を得て陶土の採掘が行われ、同10年に開催の第一回内国勧業博覧会に前記の時澤佐市が急須・茶壺などの製品を出品した記録から、明治期には自性寺窯・下野尻窯などで「上野 安中焼」と総称された陶器生産が盛行し、地元はもとより中山道を経て信濃方面にも出荷されていた。その後は、明治35~6年頃には窯の操業を確認できず、明治38(1905)年には日露戦争を機に陶工の須藤勇次郎が益子に移り開窯したのを最後に自性寺窯はその幕を閉じた。点在した窯体は、昭和初期まで明瞭に残っていたという。時を隔て、昭和54(1979)年に里秋窯を営む陶芸家の青木昇氏により地元の陶土を使った「自性寺焼」が再興され、現在に至る。また、大正10(1921)~昭和52(1977)年まで、前記の苅稲の地にて小規模ながら現代瓦の生産が行われていたことも確認されている。

第7图 周边道路位置图(1)





第8図 周辺遺跡位置図(2)



第9図 周辺地域の地形(国土地理院「色別標高図」を加工)

第2表 周辺遺跡一覧(1)古墳

	名称	総覧 古墳番号	所在地	墳形	規模	埋葬施設種類	出土遺物	発掘調査	備考
1	総覧: 秋間村4号古墳 (さとみむら4)	同左	安中市西上秋間字山田	円	-	不明	鐵、直刀	(調)大正10	市史BK-2、市№1021
2	上古墳 (うえづきこふん)	-	安中市西上秋間字上月	円	径16m	不明	-	(調)平成12	市史BK-4、市№1023、葺石有
3	総覧: 秋間村1号古墳(ほうり塚) (さとみむら1)	同左	安中市西上秋間字田入道	方円	長40m	不明	-	-	市史BK-1、市№1020
4	二軒茶屋古墳 (にけんぢやこふん)	秋間村 3号古墳	安中市西上秋間字上原	円	径20m	両横	直刀、壺等	(調)昭和29	市史BK-5、市№1024、旧市台帳№25、県台帳№1941
5	磯貝塚古墳 (いそかいづかこふん)	秋間村 2号古墳	安中市東上秋間字山向	円	径約15m	両横	-	(調)昭和29	市史BK-6、市№1025、旧市台帳№24、県台帳№1940
6	総覧: 秋間村5号古墳 (さとみむら5)	同左	安中市秋間みのりが丘字上久保	-	(20尺)	-	-	-	市史BK-19、市№1038、旧市台帳№23、県台帳№1939
7	北原古墳 (きたはらこふん)	-	安中市秋間みのりが丘	円	径約14m	両横	須恵器	(調)平成8 ~10	市史BK-44、市№1039
8	北川古墳 (きたがわこふん)	-	安中市秋間みのりが丘	円	径16m	両横	土師器、須恵器、釘、刀、武器、刀子、青銅製跨帶金具、鉗	(調)平成8 ~10	市史BK-20、市№1040
9	上馬場古墳 (かみばんばこふん)	-	安中市東上秋間字上馬場	円	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-18、市№1037、石室崩壊
10	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字下受地	不明	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-8、市№1027
11	鍛冶屋古墳 (かじやこふん)	-	安中市東上秋間字鍛冶屋	円	-	横	-	(調)平成12	市史BK-7、市№1026、天井石露出
12	鍛冶屋西古墳 (かじやにしこふん)	-	安中市東上秋間字鍛冶屋	円	径8m	不明	-	(調)平成12	市史BK-46、市№1269
13	鍛冶屋東古墳 (かじやひがしこふん)	-	安中市東上秋間字鍛冶屋	円	径6m	不明	-	(調)平成12	市史BK-45、市№1268、石祠有、葺石有
14	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字下馬場	不明	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-15、市№1034
15	総覧: 秋間村6号古墳 (さとみむら6)	同左	安中市東上秋間字下馬場	円	(25尺)	横	-	(調)	市史BK-16、市№1035
16	総覧: 秋間村15号古墳 (さとみむら15)	同左	安中市東上秋間字下馬場	円	(20尺)	横	-	(調)	市史BK-17、市№1036、旧市台帳№22、県台帳№1938、石室露出
17	刈幡西古墳 (かひねにしこふん)	-	安中市東上秋間字上刈幡	円	径10m	不明	-	(調)平成12	市史BK-21、市№1041、旧市台帳№32、県台帳№1948、石祠有
18	刈幡東古墳 (かひねひがしこふん)	-	安中市東上秋間字東上刈幡	円	径8m	横	-	(調)平成12	市史BK-24、市№1044、旧市台帳№21、県台帳№1937
19	刈幡古墳 (かひねこふん)	-	安中市東上秋間字刈幡	円	径8m	横	-	(調)平成12	市史BK-50、市№1273
20	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市秋間みのりが丘	円	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-22、市№1042
21	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市秋間みのりが丘	不明	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-14、市№1033
22	総覧: 秋間村9号古墳(馬舟さま) (あきまむら9)	同左	安中市秋間みのりが丘字野村	円	-	不明	弥生式土器、陶器	(調)	市史BK-13、市№1032、旧市台帳№30、県台帳№1946
23	総覧: 秋間村8号古墳 (さとみむら8)	同左	安中市秋間みのりが丘字野村	円	(15尺)	不明	-	(調)	市史BK-12、市№1031
24	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字地尻	円	径10m	不明	-	(調)平成12	市史BK-10、市№1029
25	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字地尻	不明	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-11、市№1030
26	総覧: 秋間村10号古墳 (さとみむら10)	同左	安中市東上秋間字池尻	円	径20m	不明	-	(調)	市史BK-9、市№1028
27	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字地尻	円	径8m	不明	-	(調)平成12	市史BK-48、市№1271
28	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字地尻	円	径20m	不明	-	(調)平成12	市史BK-47、市№1270

## 第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

	名称	縄翼 古墳番号	所在地	墳形	規模	埋葬施設種類	出土遺物	発掘調査	備考	
29	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市東上秋間字地尻	方	長10m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-49、市№1272。墳丘上にお宮有		
30	縄翼: 秋間村16号古墳 (さとみむら16)	同左	安中市東中秋間字上黒後乙	円	径5 m 横	-	-	市史BK-28、市№1048		
31	宮貝戸北古墳 (みやがいときたこふん)	-	安中市中秋間字宮貝戸	円	径12m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-25、市№1045。宮貝戸古墳群		
32	宮貝戸西古墳 (みやがいどにしこふん)	-	安中市中秋間字宮貝戸	円	径6 m 横	-	(測) 平成12	市史BK-52、市№1275。宮貝戸古墳群、天井石露出		
33	宮貝戸南古墳 (みやがいとみなみこふん)	-	安中市中秋間字宮貝戸	円	径10m 内横	-	(測) 平成12	市史BK-51、市№1274。宮貝戸古墳群、石祠有		
34	宮貝戸東古墳 (みやがいとひがしこふん)	-	安中市中秋間字宮貝戸	円	径6 m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-26、市№1046。宮貝戸古墳群		
35	縄翼: 秋間村11号古墳 (さとみむら11)	同左	安中市中秋間字塚本	円	径10m 不明	-	-	市史BK-27、市№1047。葺石有		
36	崇徳山古墳 (すとくさんこふん)	秋間村7号古墳	安中市東上秋間字崇徳山	円	径約7 m 内横	刀、武器、須恵器	(調) 昭和138	市史BK-23、市№1043。旧市台帳№26、県台帳№1942。石室露出		
37	中秋間中島古墳 (なかあきまなかじまこふん)	-	安中市中秋間字中島	不明	-	不明	-	(測) 平成12	市史BK-30、市№1050	
38	戸上古墳 (とかみこふん)	-	安中市中秋間字戸上	円	-	横	-	(測) 平成12	市史BK-29、市№1049。石室露出	
39	縄翼: 秋間村14号古墳(原の塚穴) (あきまむら14)	同左	安中市下秋間字野谷野津	方	径6 m 横	-	(調)	市史BK-37、市№1057。石室露出、葺石有		
40	覚院坊古墳 (かくいんぼうこふん)	-	安中市下秋間字覺院坊	円	径16m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-38、市№1058。葺石有		
41	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字戸谷	不明	-	不明	-	(測) 平成12	市史BK-39、市№1059	
42	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字戸谷	円	-	不明	-	(測) 平成12	市史BK-40、市№1060	
43	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字万福	不明	-	不明	-	(測) 平成12	市史BK-34、市№1054	
44	戸谷古墳 (とやみなみこふん)	-	安中市下秋間字戸谷	円	径6 m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-54、市№1277		
45	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字万福	不明	-	不明	埴輪	(測) 平成12	市史BK-35、市№1055	
46	万福原古墳 (まんふくはらこふん)	秋間村12号古墳	安中市下秋間字万福	円	径約20 m 内横	-	(調) 昭和29 (測) 平成12	市史跡、市史BK-36、市№1056。旧市台帳№20、県台帳№1936		
47	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字一堂	円	-	不明	-	縫隙灰岩製小型石棺? (測) 平成12	市史BK-41、市№1061。旧市台帳№33	
48	無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字広町	円	-	不明	-	(測) 平成12	市史BK-43、市№1184	
49	山崎原古墳 (やまさきはらこふん)	-	安中市下秋間字山崎原	円	径10m 不明	-	(測) 平成12	市史BK-33、市№1053		
50	雁又古墳 (かりまたこふん)	-	安中市下秋間字雁又	円	径12m 横	-	(測) 平成12	市史BK-55、市№1278。天井石露出		
51	相水谷津横穴墓 (そうずいわくおうけつぼ)	-	安中市下秋間字相水谷津	他	-	横穴	-	(測) 平成9	市史BK-53、市№1276	
52	縄翼: 後闇村12号古墳 (ごからむら12)	同左	安中市下後闇字矢萩	不明	-	不明	馬具、刀、勾玉、金環	(調) 明治初、大正4	市史AK-1、市№1000	
53	上塙原北古墳 (かみつかはらきたこふん)	-	安中市中後闇字上塙原	円	径10m 不明	埴輪	-	(測) 平成12	市史AK-25、市№1258	
54	縄翼: 後闇村10号古墳 (ごからむら10)	同左	安中市中後闇字上塙原	円	径20m 横	埴輪	(調)	市史AK-8、市№1006		
55	上塙原西古墳 (かみつかはらにしこふん)	-	安中市中後闇字上塙原	円	径12m 不明	埴輪	(測) 平成12	市史AK-24、市№1257		
56	縄翼: 後闇村11号古墳 (ごからむら11)	同左	安中市中後闇字上塙原	円	径3 m 横	埴輪	(調)	市史AK-9、市№1007。天井石露出		
57	縄翼: 後闇村1号古墳(宮ノ後古墳) (ごからむら1)	同左	安中市下後闇字石神甲	円	径20m 片横	-	(調)	市史AK-19、市№1017。旧市台帳№45、県台帳№1961。石室露出		
58	縄翼: 後闇村23号古墳 (ごからむら23)	同左	安中市下後闇字宮貝戸	方	長22m 不明	-	-	市史AK-18、市№1016		
59	松久保原古墳 (まつくぼひがしこふん)	-	安中市下後闇字松久保	円	径8 m 不明	-	(測) 平成12	市史AK-28、市№1261		

名称	緯観 古墳番号	所在地	墳形	規模	埋葬施設種類	出土遺物	発掘調査	備考
60 緯観：後園村19号古墳 (ごかむら19)	同左	安中市下後園字西平	円	-	不明	-	(調)明治初	市史AK-13、市No1011
61 西ノ谷津西古墳 (にしのやつちこふん)	-	安中市小俣字西ノ谷津	円	径20m	不明	-	(調)平成12	市史DK-52、市No1334、諏訪山古墳群
62 西ノ谷津北古墳 (にしのやつきたこふん)	-	安中市小俣字西ノ谷津	円	径20m	不明	-	(調)平成12	市史DK-28、市No1120、諏訪山古墳群
63 諏訪山西古墳 (すわやまにしこふん)	-	安中市小俣字諏訪山	円	径8m	不明	-	(調)平成12	市史DK-51、市No1333、諏訪山古墳群、昔石有
64 緯観：安中町16号古墳 (あんなかまち16)	同左	安中市小俣字諏訪山	円	径12m	不明	埴輪	(調)	市史DK-27、市No1119、旧市台帳No54、諏訪山古墳群
65 緯観：安中町15号古墳 (あんなかまち15)	同左	安中市小俣字諏訪山	円	径8m	不明	-	(調)	市史DK-26、市No1118、旧市台帳No54、県台帳No1970、諏訪山古墳群
66 無名古墳 (むめいこふん)	-	安中市下秋間字二本松	円	-	不明	-	(調)平成12	市史BK-32、市No1052
67 吉ヶ谷津北古墳 (よしがやつきたこふん)	-	安中市下秋間字吉ヶ谷津	円	径5m	横	-	(調)平成12	市史BK-42、市No1062、横六式石室開口
68 吉ヶ谷津南古墳 (よしがやつみなみこふん)	-	安中市下秋間字吉ヶ谷津	円	径8m	不明	-	(調)平成12	市史BK-56、市No1279、昔石有
69 東平野古墳 (ひがしだいらにしこふん)	-	安中市下秋間字東平	方円	長15m	不明	-	(調)平成12	市史BK-57、市No1280、石造物有、昔石有
70 緯観：秋間村13号古墳 (さとみむら13)	同左	安中市下秋間字東平	円	(15尺)	横	直刀、土器	(調)	市史BK-31、市No1051
71 めおと塚古墳 (めおとづかこふん)	安中町14号古墳 (めおとづかこふん)	安中市安中字藤山	円	径約20m	両横	須恵器	(調)昭和38	市史DK-9、市No1101、旧市台帳No53、県台帳No1969
72 緯観：安中町13号古墳 (あんなかまち13)	同左	安中市安中字大字小間字藤山	円	径10m	不明	埴輪	(調)	市史DK-10、市No1102、昔石有
73 安中17号墳 (あんなかじゅうななごうふん)	安中町17号古墳	安中市安中字藤山	円	径約20m	両横	埴輪(円筒、蓋財、家、釘、馬具、刀子、小札、鉢玉、耳環)	(調)平成23	市史DK-11、市No1103
74 緯観：安中町10号古墳 (あんなかまち10)	同左	安中市安中字小間字西臺	円	径12m	横	直刀、馬具	(調)明治35頃	市史DK-6、市No1098、旧市台帳No52、県台帳No1968、小間古墳群
75 緯観：安中町11号古墳 (あんなかまち11)	同左	安中市安中字小間字西臺	円	径8m	不明	-	(調)昭和7	市史DK-7、市No1099、旧市台帳No52、県台帳No1968、小間古墳群
76 緯観：安中町12号古墳 (あんなかまち12)	同左	安中市安中字小間字西臺	不明	(4尺)	不明	-	(調)	市史DK-8、市No1100、県台帳No1968、小間古墳群、昔石有
77 緯観：安中町8号古墳 (あんなかまち8)	同左	安中市安中字小間	円	径15m	横	太刀、勾玉	(調)明治30	市史DK-4、市No1096、旧市台帳No52、県台帳No1968、小間古墳群
78 緯観：安中町9号古墳 (あんなかまち9)	同左	安中市安中字小間	円	径20m	横	直刀、鉢、勾玉	(調)昭和2	市史DK-5、市No1097、旧市台帳No52、県台帳No1968、小間古墳群
79 無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市上里見町新井	不明	径9.5m	不明	-	(調)平成14-17	権名新NoS-82
80 上里見新井道跡1号墳 (かみさとみあらいいせき)	-	高崎市上里見町字新井	円	径約16m	不明	土師器、須恵器	(調)平成21	-
81 上里見新井道跡2号墳 (かみさとみあらいいせき)	-	高崎市上里見町字新井	不明	-	不明	須恵器	(調)平成21	-
82 無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市上里見町字新井	不明	径9.6m	不明	-	(調)平成14-17	権名新NoS-79
83 緯観：里見村57号古墳 (さとみむら57)	同左	高崎市中里見町上里見字新井	円	(不詳)	-	直刀、曲玉、金環	(調)	-
84 緯観：里見村58号古墳 (さとみむら58)	同左	高崎市中里見町上里見字新井	円	(不詳)	-	-	(調)	-
85 緯観：里見村59号古墳 (さとみむら59)	同左	高崎市中里見町上里見字新井	円	(20尺)	-	玉類、金環、鏡	(調)	-
86 緯観：里見村60号古墳(大塚) (さとみむら60)	同左	高崎市中里見町上里見字下ノ原	円	(不詳)	-	-	(調)	-
87 無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町中川	不明	-	不明	土師器	(調)平成14-17	権名新NoS-72
88 無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市上里見町田中	不明	-	不明	-	(調)平成14-17	権名新NoS-75

## 第1章 調査に至る経緯と周辺の環境

	名称	縦覧 古墳番号	所在地	墳形	規模	埋葬施設種類	出土遺物	発掘調査	備考
89	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市上里見町 田中	不明	-	不明	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-74
90	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 根岸・上里見町 田中	不明	-	不明	-	(測)平成14 -7	榛名新NoS-73
91	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 根岸	不明	-	不明	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-70
92	縦覧：里見村54号古墳 (さとみむら54)	同左	高崎市中里見町 字原原	円 (20尺)	-	-	-	-	県台帳No2400 泉福寺古墳
93	縦覧：里見村55号古墳 (さとみむら55)	同左	高崎市中里見町 字根岸	方円 (60尺)	-	-	-	-	県台帳No2401 琥崎古墳
94	縦覧：里見村56号古墳 (さとみむら47)	同左	高崎市中里見町 字根岸	円 (不詳)	-	直刀、玉類	(調)	-	
95	中里見原遺跡第1号古墳 (さとみさとみはらいせき)	-	高崎市中里見町 字根岸・字原	方	長24m	不明	土師器	(調)平成4 -6	周囲理設土中にC軽石層有
96	縦覧：里見村47号古墳(赤城 山)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (72尺)	-	刀、鏡、金環	(調)	-	
97	縦覧：里見村48号古墳 (さとみむら48)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	-	(調)	-	
98	縦覧：里見村49号古墳 (さとみむら49)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	-	(調)	-	
99	縦覧：里見村50号古墳 (さとみむら50)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	-	-	-	
100	縦覧：里見村51号古墳 (さとみむら51)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	-	-	-	
101	縦覧：里見村52号古墳 (さとみむら52)	同左	高崎市中里見町 字原乙	円 (不詳)	-	-	-	-	
102	縦覧：里見村53号古墳 (さとみむら53)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	玉類	(調)	-	
103	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 根岸	不明	-	不明	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-60、古墳跡か
104	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 原	不明	-	不明	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-59
105	縦覧：里見村42号古墳 (さとみむら42)	同左	高崎市中里見町 字原	円 (不詳)	-	-	(調)	-	
106	縦覧：里見村43号古墳 (さとみむら43)	同左	高崎市中里見町 字原	方円 (80尺)	-	-	-	-	
107	縦覧：里見村44号古墳 (さとみむら44)	同左	高崎市中里見町 字原	方円 (48尺)	-	-	-	-	
108	縦覧：里見村45号古墳 (さとみむら45)	同左	高崎市中里見町 字原甲	方円 (116尺)	-	-	-	-	
109	縦覧：里見村46号古墳 (さとみむら46)	同左	高崎市中里見町 字原甲	方円 (90尺)	-	-	-	-	
110	下里見瀧山古墳 (しもさとみすわやまこふん)	里見村41 号古墳	高崎市下里見町 瀧山	造円	長14m	無横 (円筒・人物、馬)、土師器、須 恵器、刀子	(調)平成15	鄰見神社瀧山古墳	
111	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 猪ノ毛山	円 径約6.7 m	横	-	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-92
112	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市中里見町 若林	円	-	横	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-93
113	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	不明	径 6 m	不明	埴輪、土師器、須 恵器	(測)平成14 -17	榛名新NoS-91、角盤、円石 散乱
114	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	不明	-	不明	土師器、須恵器	(測)平成14 -17	榛名新NoS-90
115	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	円 径 5 m	横	-	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-89
116	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	円 径 7 m	横	-	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-88
117	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	不明	長6.5m	不明	-	(測)平成14 -17	榛名新NoS-87
118	無名古墳 (むめいこふん)	-	高崎市下里見町 若林	不明	径9.5m	横	土師器、須恵器	(測)平成14 -17	榛名新NoS-86、円墳あるいは方墳、積石塚か

第3表 周辺遺跡一覧(2)集落

番号	遺跡名	時代	報告書等
A	吉ヶ谷津遺跡	近世、古墳	本報告書
B	北瀬ノ入遺跡	縄文中期、古墳、平安、江戸	
C	中秋間甲木ノ渠谷津遺跡	近世	群理文195集『東上秋間遺跡群』1995
D	中秋間中島遺跡	平安	群理文195集『東上秋間遺跡群』1995
E	東秋間樋貝戸遺跡	縄文、近世	群理文195集『東上秋間遺跡群』1995
F	東秋間沼田遺跡	近世	群理文195集『東上秋間遺跡群』1995
G	東上秋間神水遺跡	近世	群理文195集『東上秋間遺跡群』1995
H	下愛地・十二道跡	縄文前期・中期、古墳、奈良、平安、室町、江戸	
I	竹下遺跡	縄文中期、古墳、奈良、平安、室町、江戸	
J	沼田遺跡	近世	群理文657集『大島田Ⅱ・沼田遺跡』2019
K	大島田Ⅱ遺跡	近世	群理文657集『大島田Ⅱ・沼田遺跡』2019
L	大島田遺跡	近世	安中市教育委員会編『九十九川下流道路群』1993、安中市教育委員会編『安中市道路分布地図』2011
M	安中内出野	中世	安中市教育委員会編『安中市道路分布地図』2011、群馬県教育委員会編『群馬県の中世城館跡』1988、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
N	小原城	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
O	内出城	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
P	八戸戸守	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
Q	礼忠寺(二城)	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
R	藏人城	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
S	若荷沢の野	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
T	秋間館	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79
U	辻城(雁又城)	室町	『安中市史』、山崎一『群馬県古城跡の研究』上・下1971～79

(註)

・表中の「新観」は、「群馬県古墳新観」を示す。

・墳形欄の円は円墳、方円は前方後円墳、方は方墳、造円は造出型円墳を示す。

・埋葬施設欄の横は横穴式石室、両横は内袖型横穴式石室、片袖は片袖型横穴式石室、無横は無袖型横穴式石室を示す。

・発掘調査欄の(調)は調査を、(測)は測量を示す。

・表中の「群理文」は公益財団法人群馬県理文化財調査事業団を示す。

第4表 周辺遺跡一覧(3) 秋間古窯跡群

ア	岩戸	名称
イ	東上丸地	ツ 東谷津
ウ	崇徳	デ 道ノ人
エ	乙木ノ渠谷津	ト 一白堂
オ	茂ヶ谷津	ナ 広田
カ	戸上	二 慶心寺谷津
キ	三角谷津	メ 相木谷津
ク	対院坊	ネ 高森
ケ	日向	ノ 二反田
コ	七曲り	ハ 薩平
サ	明後沢	ヒ 囲ノ入
シ	黒後	フ 穂
ス	岩下	ヘ 屋敷
セ	川久保・万福・立石	ホ 藥師入
ソ	戸谷	マ 寺山
タ	猪子ヶ尾	
チ	八重巻	

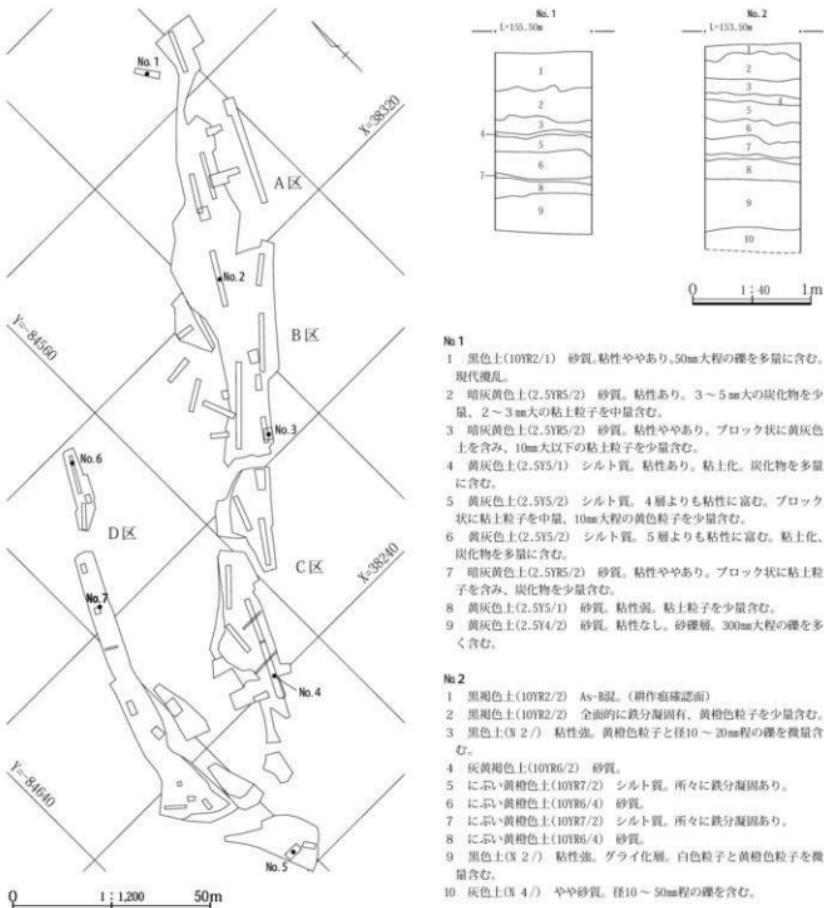
## 第5節 基本土層(土層堆積状況)

遺跡地は傾斜地であり、その比高差は17mほどを計る。因って調査区や地点により堆積土も大きく異なる。

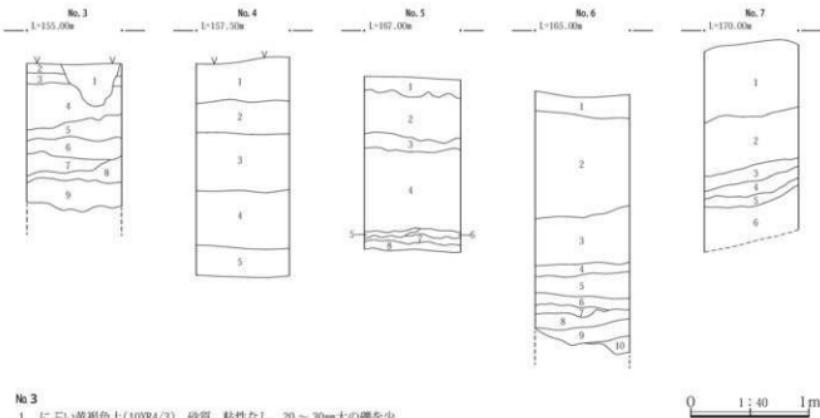
A区は、現県道沿いの旧宅地のため、上層は大きく擾乱を受け、下層は河床の砂礫層の厚い堆積が確認された。B区中央東側のA区と接する地点の低地部より、浅間B

軽石(As-B)混土下の畑や水田の耕作痕が検出された。また、北東端部や南西のC区寄りの地点から浅間A軽石(As-A)の堆積が確認され、噴火テフラによる埋没層・溝などが検出された。C区南西端よりAs-A層下より畑が検出される。C～D区間は急な斜面となり、D区は南部から中央部がローム台地、北部は小谷底となる。

以下に各区・地点の土層堆積状況を記す



第10図 基本土層(土層堆積状況)図(1)

**No. 3**

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質。粘性なし。20～30mmの大の礫を少量、5mmの大の黄色・白色粒子を中量。炭化物を微量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性なし。50mm大の礫を少量含み、As-A混じり。2～3mmの大の黄色・赤色粒子。炭化物を少量含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。擾乱上。炭化物を中量含む。
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 砂質。粘性なし。粒子は2層よりも細かく、As-Aが主体を占める。2～3mmの大の黄色粒子を微量含む。
- 5 灰黃褐色土(10YR4/2) 砂質シルト。粘性あり。鉄分凝固が全体的認められ。2～3mmの大の黄色粒子を中量。炭化物を少量含む。
- 6 灰黃褐色土(10YR4/2) 砂質。5mmの大の黄色・白色粒子を少量含む。
- 7 黑褐色土(10YR3/1) シルト質。粘性あり。5mmの大の黄色・白色粒子を少量含む。
- 8 黑褐色土(10YR3/2) シルト質。粘性あり。粘土粒子を中量、5mmの大の黄色・白色粒子を少量含む。
- 9 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。5mmの大の黄色粒子を少量含む。

**No. 4**

- 1 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。2層より粘性弱。50mm大の礫少量、5mmの大の黄色粒子・褐色粒子・炭化物・白色粒子を中量含む。
- 2 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。1層より粘性あり。3～5mmの大の黄色粒子・白色粒子・褐色粒子を少量含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。1層より粘性あり。5mmの大の黄色粒子をブロック状に中量。3～5mmの大の黄色粒子・白色粒子を中量含む。
- 4 灰黃褐色土(10YR4/2) 砂質。粘性なし。30mmの大の礫。5mmの大の黄色粒子を含む。
- 5 黄褐色土(10YR5/3) 砂質。粘性なし。5mmの大の黄色ブロック・3～5mmの大の黄色粒子・白色粒子を含む。

**No. 5**

- 1 黄褐色土(10YR5/6) 細りなし。黑褐色土を少量含む。
- 2 黑褐色土(10YR4/4) 少量の黄褐色粒子、径30～50mmの礫を含む。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) マンガン凝集層。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 径30～200mmの亜円礫を大量に含む。層の下部には互層状に鉄分凝固あり。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質。層の下部に鉄分凝固あり。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) シルト質。
- 7 灰黃褐色土(10YR6/2) シルト質。
- 8 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質。
- (5～8層は全体的に互層状に砂層とシルト質層が堆積し、水性堆積の様相を呈する。)

**No. 6**

- 1 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性あり。10～20mmの大の礫を少量、5mmの大の黄色ブロック、炭化物を少量含む。
- 2 黑褐色土(10YR2/1) シルト質。粘性強。2～3mmの大の黄色粒子を少量含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性あり。2～3mmの大の黄色粒子を中量。褐色粒子を少量含む。
- 4 黑褐色土(10YR3/1) 砂質度3層より弱。粘性ややあり。2～3mmの大の黄色粒子を少量含む。
- 5 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。5mmの大の黄色粒子をブロック状に含む。
- 6 黑褐色土(10YR3/1) シルト質。粘性に富む。炭化物と5mmの大の黄色粒子をブロック状に少量含む。
- 7 黑褐色土(10YR3/2) シルト質。粘性に富む。5mmの大の黄色粒子をブロック状に少量、2～3mmの大の白色粒子を少量含む。
- 8 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。20～30mmの大の礫少量、10～20mmの大の黄色粒子をブロック状に含む。
- 9 灰黃褐色土(10YR4/2) 砂質。粘性ややあり。粘土・黄色粒子をブロック状に含む。
- 10 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性にあり。白色粒子と黄色粒子を中量含む。

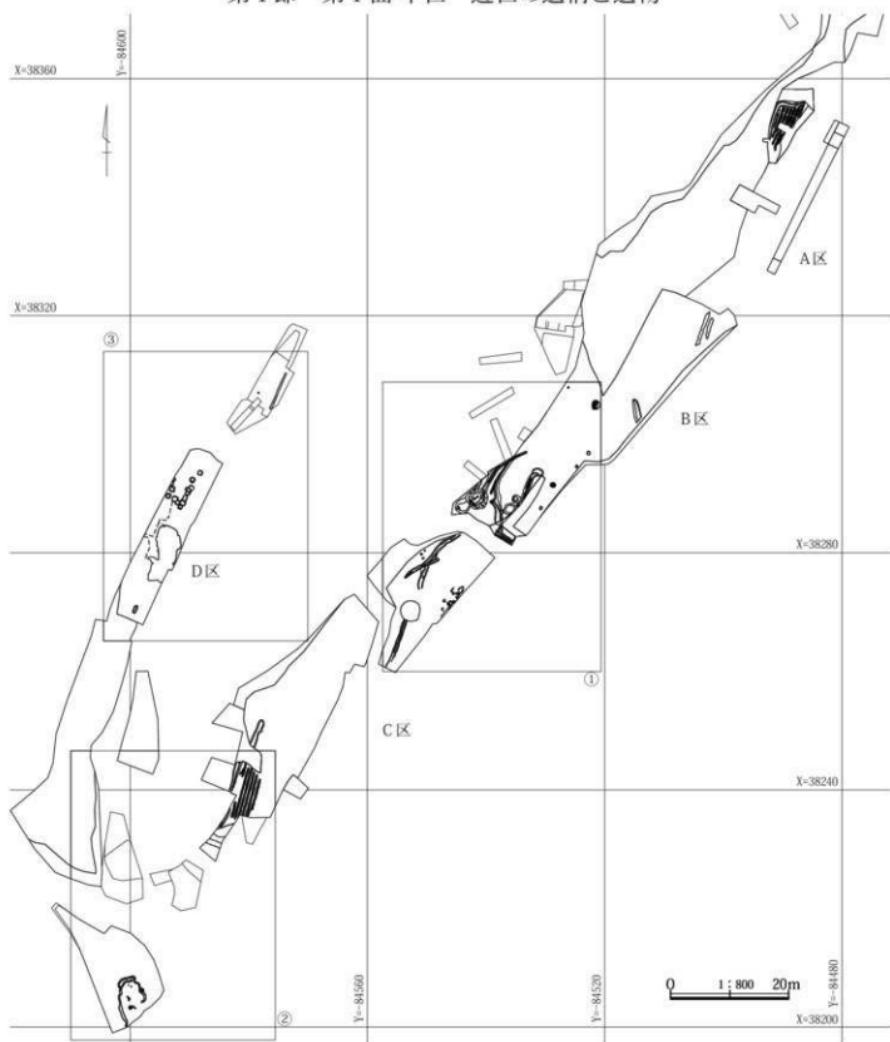
**No. 7**

- 1 黄褐色土(10YR4/4) 粘性やや強。繊り強。少量の白色軽石・マンガニン凝固を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性やや強。繊り強。少量の白色軽石・黄色軽石を含む。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 粘性・繊り強。酸化鉄分凝固層が互層に堆積。
- 4 灰黃褐色土(10YR6/2) 粘性・繊り強。少量の黒色粒子・酸化鉄分凝固を含む。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 粘性・繊り強。黑色粒子・褐色土ブロック・酸化鉄分凝固を含む。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 粘性・繊り強。少量の黒色粒子・酸化鉄分凝固を含む。

第11図 基本土層(土層堆積状況)図(2)

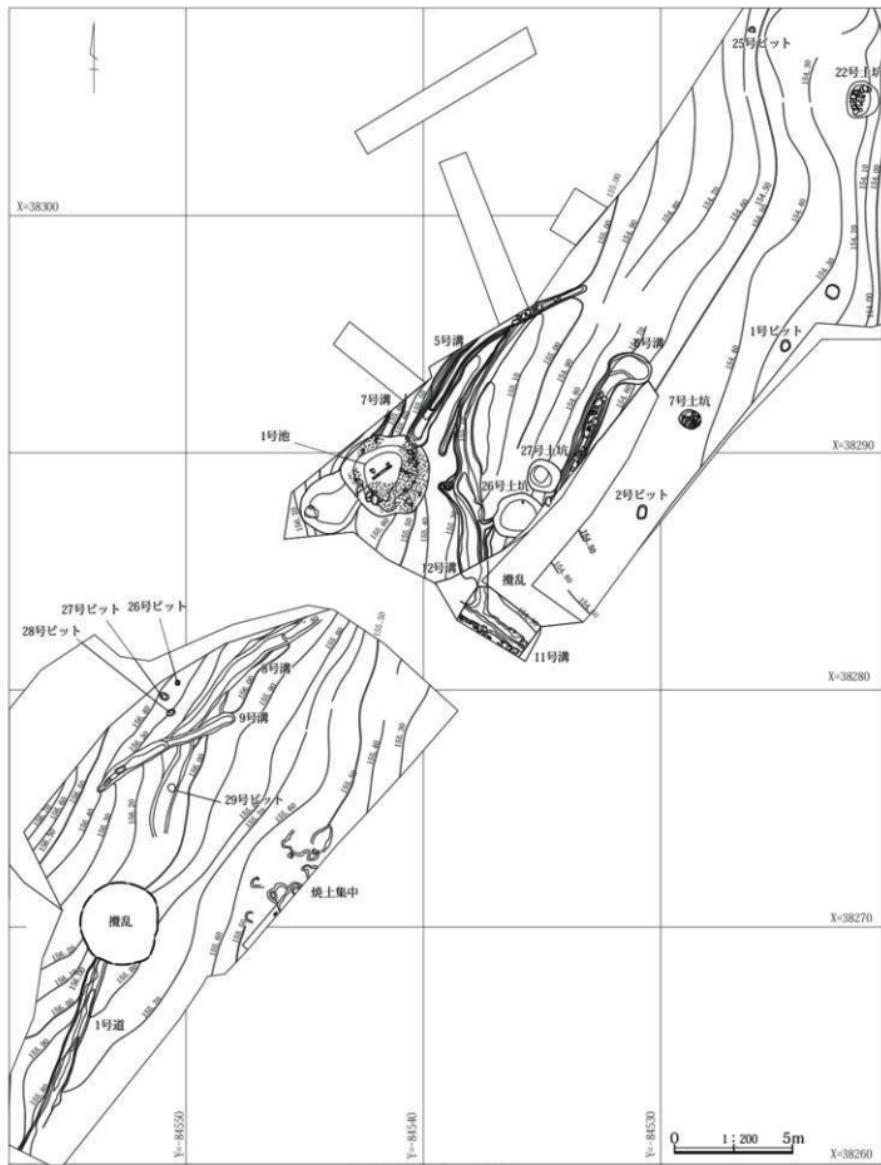
## 第2章 検出された遺構と遺物

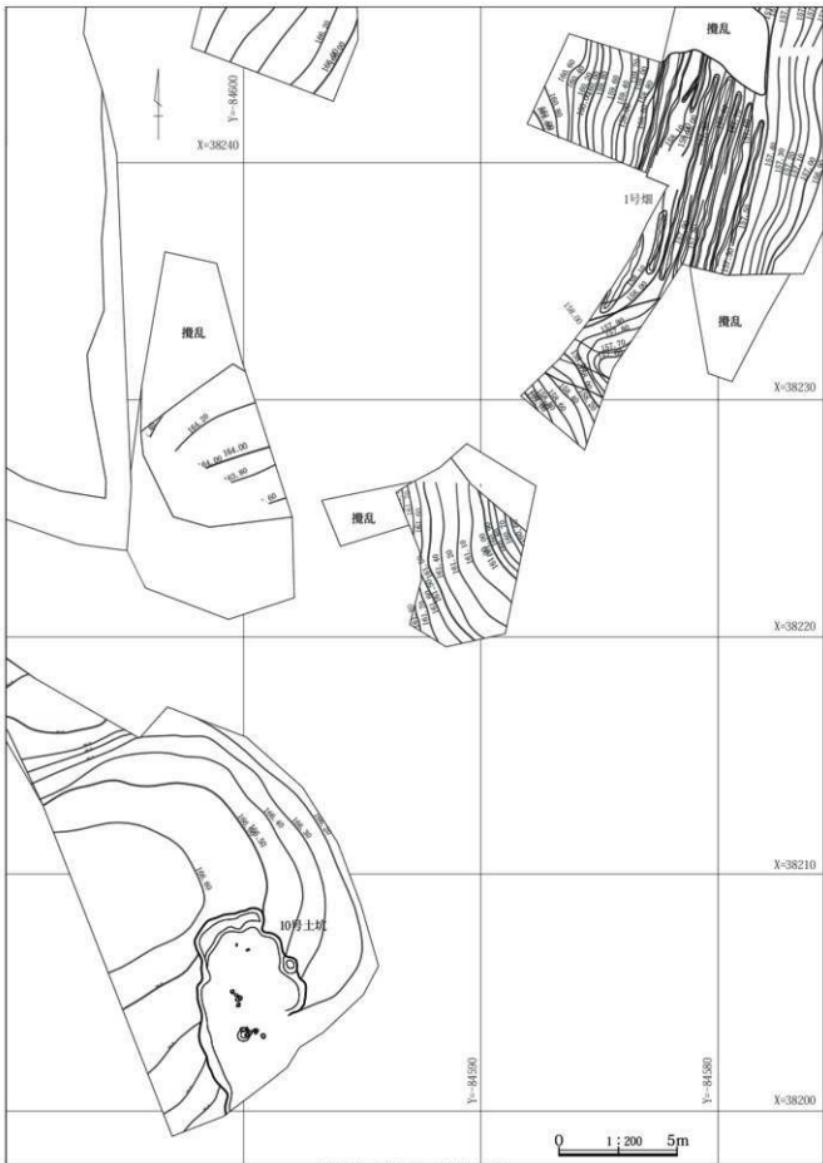
### 第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物



第12図 第1面 検出遺構全体図

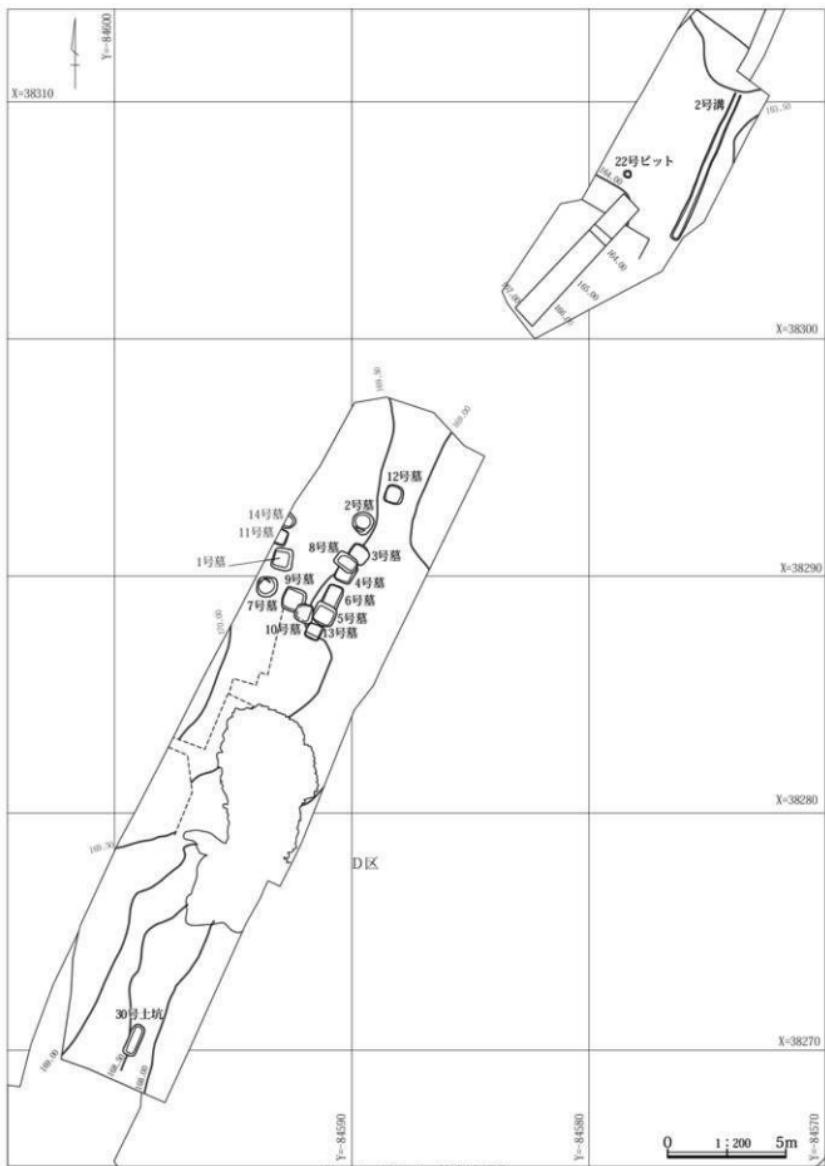
第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物





第14図 第1面 棚出遺構②

第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物



第15図 第1面 棚出遺構③

**概要：(第1面の遺構)** 調査時の第1遺構検出面として、As-A層(天明3(1783)年の浅間山噴火テフラ)を除去した直下面を基本とした。検出される遺構は当然のことながらAs-A層以前の遺構が原則ではあるが、調査地点によりAs-A層の堆積も均質ではなく、場所によっては復興等によりAs-A層が攪拌された状態、所謂As-A混土となっている場合もある。従って検出される遺構の中には、As-A層以下降の遺構も若干含まれている。

第1面において検出された主な遺構としては、B・C区においてAs-A直下の烟跡が、B区において池と溝からなる灌漑用水施設が、D区において墓(土葬墓)跡などが検出された。

### 第1項 土坑・ピット・焼土集中

調査区B区より4基の土坑と1基のピットが検出される。また、調査区D区より2基の土坑が検出されるが、いずれも用途が特定できる遺構はない。

調査区D区の北東端部で検出された14基の土坑群(33~46号土坑)は、いずれも墓坑と判断されたため、名称を墓に改め記載した。

調査区C区で検出された1~4号焼土、及び焼土微量散布地を一括して焼土集中とした。

#### 7号土坑 第16図 PL. 5

位置：291~528グリッド

形状：楕円形

規模：径0.88×0.78m程、深度は0.70m程を計る。

埋没土：黄色・褐色・白色粒子と炭化物を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区B区の中央南東寄りにあり、調査当初は上層から桶の底面と思われる木質片が出土したことから、井戸跡として調査された。出土した桶は土坑の埋没後に据えられたもので、土坑の埋没は自然堆積による埋没の様相を示す。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

#### 10号土坑 第16図 PL. 5

位置：200~208~597~601グリッド

形状：不定形

規模：径(8.0)×4.53m程、深度は0.21m程を計る。

埋没土：As-Aと炭化物を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区D区の南端部にあり、土坑として調査をされたが、形状は不定形で掘り込みにも規則性が見られず、用途は不明。埋土内から出土した礫や出土遺物から、同所にあった何らかの古代の遺構を壊して掘られたものと推察されるが、遺構の痕跡は残らない。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。出土の須恵器は、第2面遺構外出土遺物として掲載した。

#### 22号土坑 第16図 PL. 5

位置：305~521グリッド

形状：楕円形

規模：径1.55×1.35m程、深度は0.64m程を計る。

埋没土：上層にAs-Aを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区B区の中央部にあり。埋土の上層と下層より大量の自然礫が出土し、下層の礫は人為的に敷設されたように並ぶ。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。

#### 26号土坑 第17・19図 PL. 6

位置：287~536グリッド

形状：楕円形

規模：径2.11×(1.60)m程、深度は0.59m程を計る。

埋没土：As-Aを含む褐灰色砂質土。

特徴：調査区B区の中央部にあり。27号土坑と隣接。埋土中より大量の自然礫が出土する。

重複：6号溝・12号溝と重複し、本遺構の方が新しいものと思われるが、溝の埋土にもAs-Aが含まれるため、時期差は少ないものと思われる。

遺物：陶器皿(No1)、地元産陶器行平(No2)、軟質陶器熔炉(No3)が埋土中より出土する。付近の5号溝出土遺物との接合もみられる。

## 27号土坑 第17・19図 PL. 6

位置：289-535グリッド

形状：楕円形

規模：径1.39×1.37m程、深度は0.62m程を計る。

埋没土：As-Aを含む褐灰色砂質土。

特徴：調査区B区の中央部にあり。26号土坑と隣接。26号土坑と同様に理土中より大量の自然礫が出土する。また、礫下より四角形に組まれた木枠が出土する。井戸跡とも考えられるが、木枠の内寸は30～50cmと小さい。

遺物：磁器染付碗(№4・6)、陶器碗(№5)、地元産陶器捏ね鉢(№7)・同壺(№8)、石臼上白(№10)が上層部の礫に混じり出土する。また、磁器染付碗(№5)、地元産陶器すり鉢(№9)が理土中より出土する。付近の1号池出土遺物などとの接合がみられる。

## 30号土坑 第17図 PL. 7

位置：270-599グリッド

形状：隅丸長方形

規模：1.38×0.53m程、深度は0.41m程を計る。

埋没土：As-Aを含む灰黄褐色砂質土。

特徴：調査区D区の中央部にあり。隅丸方形状を呈し、底面は平坦。用途は明らかではない。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。

## 焼土集中 第18図 PL. 7

(旧C区1面1～4号焼土・焼土微量散布地)

位置：272-546グリッド付近

形状：不定形

規模：焼土1～4は径0.4×1.4m程、深度は0.11～0.21m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。上層にAs-Aを含む。

特徴：調査区C区の北東部にあり、調査時には全体を「焼土微量散布地」所々の焼土集中を「1～4号焼土」と称して調査された。検出された焼土は、がれきなどのような地山土の焼化ではなく、ブロック・粒子状の焼土が密集した状態での検出であること、上層に浅間A軽石の堆積が確認されたことから、がれきやカマドを持つ古代の建物遺構などを近世に至り、開墾などの理由で攪拌した結果と推察される。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。2号焼土の位置より出土した須恵器片は、後掲の第2面遺構外出土遺物として扱った。

## 25号ピット 第17図 PL. 7

位置：308-526グリッド

形状：楕円形

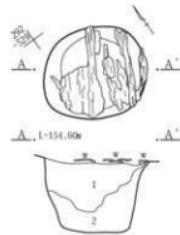
規模：0.42×0.27m程、深度は0.18m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区B区の中央部北西寄りにあり。付近には同種のピットは確認できず、用途は明らかではない。遺構の時期については、検出面の様相から近世と考えられる。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。

7号土坑



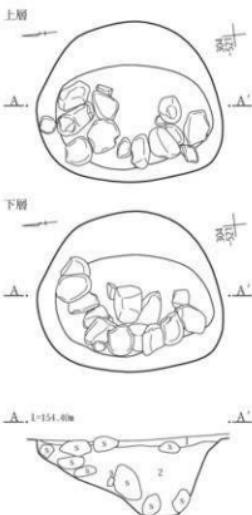
7号土坑SPA-A'

- 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性や  
あり、3~5mmの大黄色粒子を少量、  
2~3mmの大白色粒子を中量。褐色粒  
子・炭化物を少量含む。
- 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性や  
あり、10mmの大礫を微量、3~5mm  
の大黄色粒子・炭化物を少量含む。

10号土坑



22号土坑



10号土坑SPA-A'・B'・C-C'

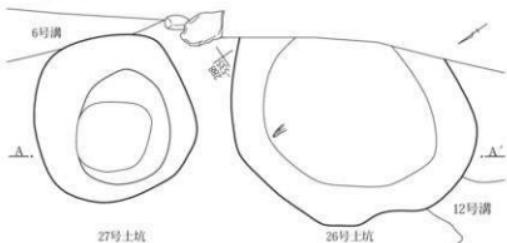
- 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-A混じり、2~3mmの大黄色粒子・炭化物を中量含む。

22号土坑SPA-A'

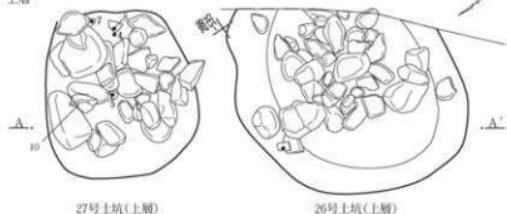
- 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-A混じり、径200mm程の礫を含み、1~2mmの大黄色粒子・白色粒子を少量含む。
- 暗赤褐色土(5YR3/2) 砂質。粘性なし。少量の10~20mmの大礫上ブ  
ロック・炭化物と黄色粒子を含む。

第16図 第1面 7・10・22号土坑平・断面図

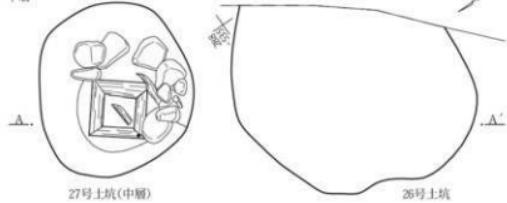
26・27号土坑



上層



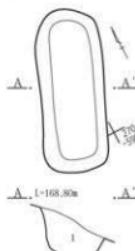
中層



26号土坑SPA-A'

- 1 潤灰色土(10YR4/1) 砂質。粘性なし。As-A混じり、1層よりも粒子が大きい。
  - 2 潤灰色土(10YR4/1) 砂質。粘性なし。As-A混じり、径30.0～50.0mm大的の礫を多量に含む。
  - 3 潤灰色土(10YR4/1) 砂質。1・2層よりも粘性に富む。ブロック状に黒褐色土を含む。As-A混じり。粒子は1層と同じ。
- 27号土坑SPA-A'
- 1 潤灰色土(10YR4/1) 砂質。粘性ややあり。As-A混じり、5mm大的炭化物を少量。1～2mm大的黄色粒子を中量含む。石臼あり。

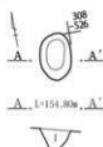
30号土坑



30号土坑SPA-A'

1 潤黃褐色土(10YR4/2) 粗粒。As-A混じる。多量の径3～5mmの輕石と微量の炭化物粒を含む。

25号ピット

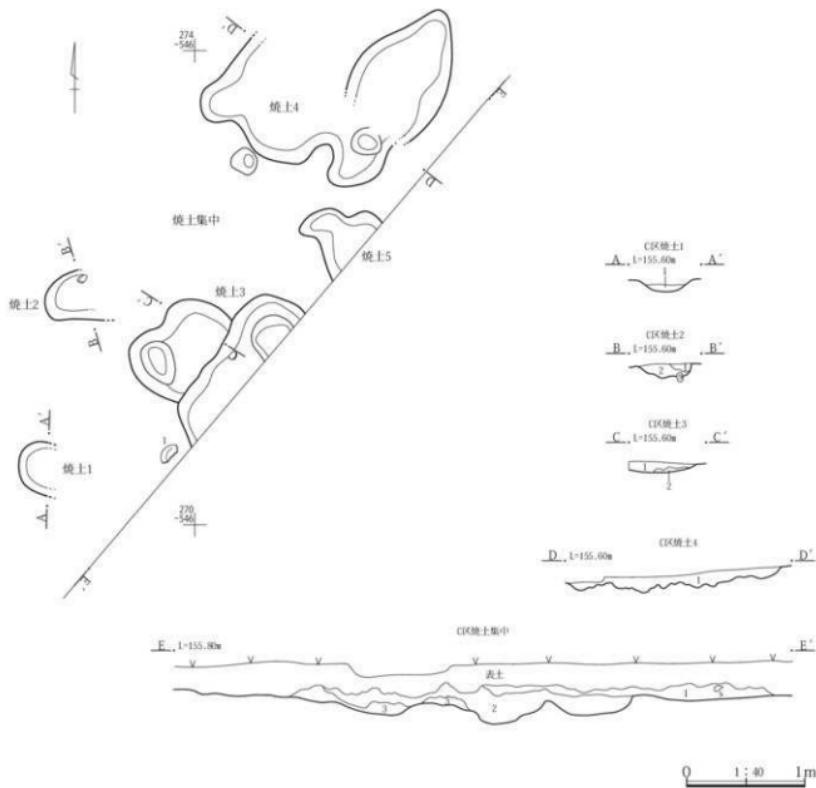


25号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。10mm大程の礫を少量、3～5mm大的の燒上粒子・黃色粒子を中心含む。

0 1:40 1m

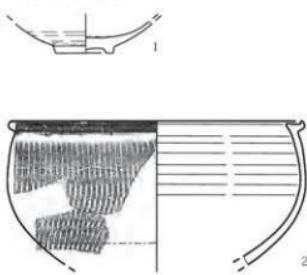
第17図 第1面 26・27・30号土坑、25号ピット平・断面図



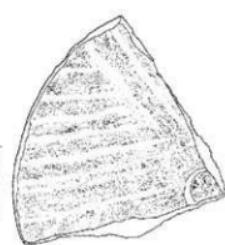
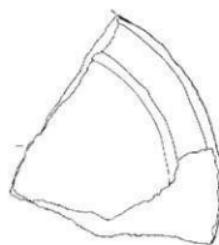
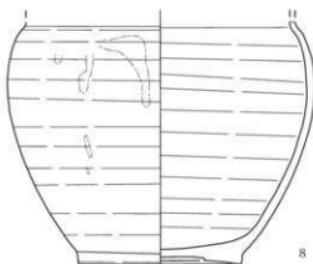
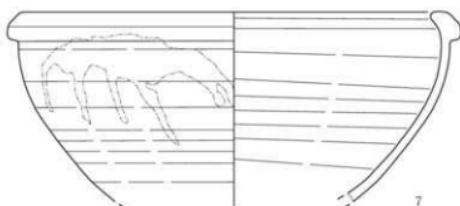
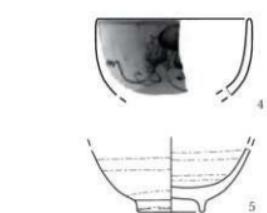
第18図 第1面 燃土集中平・断面図

第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物

26号土坑出土遺物



27号土坑出土遺物



0 1 : 3 10cm  
0 1 : 4 10cm

第19図 第1面 土坑出土遺物

## 第2章 検出された遺構と遺物

第5表 第1面26・27号土坑出土遺物概観表

26号土坑出土遺物

器 種 PL.No.	種類 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	断土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19回 PL.52	1	肥前陶器 皿	埋土中 体部下位から高台 底 4.9	口 (18.4) 底 *	高 * * *	夾雜物微量/*/灰 軸、体部外表面下位から高台は無釉。体部下位を粗く打ち欠いている。	内面は副輪軸を施し、底部は蛇の目輪削ぎ。体部外表面は灰釉。体部外表面下位から高台は無釉。体部下位を粗く打ち欠いている。 18世紀 二次加工品か
第19回 PL.52	2	安中陶器 行平	埋土中 口縁部から体部	口 (18.4) 底 *	高 * * *	夾雜物微量/*/灰 軸	口縁端部は「L」字形に屈曲し、蓋がのる。体部内面は紫黒色釉を施し、体部外面上位～中位は回転施文具による連續文で褐色銷釉を施す。体部外下面下位と口縁端部は無釉。
第19回 PL.52	3	有地系土器 焰塔	埋土中 底部破片	口 (9.6) 底 *	高 * * *	夾雜物少量/*/灰 軸	内外面は灰度が吸着、平底。
第19回 PL.52	4	肥前陶器 染付碗	上部層 口縁部	口 (9.6) 底 *	高 * * *	夾雜物なし/*/灰 軸	口縁端部外面に横線、体部に蔓草様の文様を描く。口縁端部内面に三重巻継。

27号土坑出土遺物

器 種 PL.No.	種類 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	断土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19回 PL.52	5	肥前陶器 碗	上部層 体部下位から高台 台部	口 (4.1) 底 4.1	高 * * *	夾雜物少量/*/灰 軸	高台端部を除き外表面に白土を刷毛目で化粧掛け。
第19回 PL.52	6	瀬戸・美濃 磁器 突起碗	埋土中 4 / 5	口 10.5 底 3.3	高 5.7 * *	夾雜物なし/*/白 軸	体部外表面の輪郭に若松か、開闊を松葉が埋める。体部下位と高台縁に横線。口縁端部内面に二重巻継。中に松葉を描く。見込みに横線、中央に不明文だが松葉か。
第19回 PL.52	7	安中陶器 捏跡	上部層 3 / 4	口 (35.6) 底 *	高 * * *	夾雜物微量/*/灰 軸	口縁端部は緩やかに曲がり、内外に肥厚する。外表面に黄灰色の蘆葦軸を施し、口縁部から体部上位に袖を厚く掛け流す。
第19回 PL.52	8	安中陶器か 甕	上部層 体部から底部	口 * 底 13.6	高 * * *	夾雜物微量/*/灰 軸	外表面に紫黒色釉を施し、体部上位に袖を厚く掛け流す。底部は削り出した四型高台、高台内に紫黒色釉を施し、高台端部は銷釉を拭う。
第19回 PL.52	9	安中陶器 すり鉢	埋土中 口縁部から体部 片	口 * 底 *	高 * * *	夾雜物少量/*/灰 軸	素焼きのすり鉢製品。口縁端部は平坦をなし、外側に肥厚する。口縁部外側は2条の突帯が巡る。内面に21本1単位のケシ目が入る。
第19回 PL.52	10	石臼 上臼	上部層 1 / 4	径 幅 (32.4) 重 359.4	高 * * /*	粗粒輝石安山岩 /*	粉引臼の上臼。厚みは然程厚くはないが、重みのある石材使用。芯孔径(2.8)cm。材は貫通しない。六分画、分画内主副溝合わせて7本。溝は極めて狭狭の部分もあり、目立して直されている。上面と割り合せ面は磨滅し、かなり滑らか。側面も使い混まればやや滑らかとなっている。

第6表 1面土坑・ピット計測表

区	番号	遺構	グリッド	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方位	標図番号	PL番号	備考
B	7	土坑	291・528	楕円形	88	78	70	N-55°-W	16	5	
D	10	土坑	200・208・597・601	不定形	(800)	453	49	N-15°-W	16	5	
B	22	土坑	305・521	楕円形	155	135	64	N-7°-E	16	5	
B	26	土坑	287・536	楕円形	211	(160)	59	N-48°-E	17	6	
B	27	土坑	289・535	楕円形	139	137	62	N-61°-W	17	6	
D	30	土坑	270・599	椭丸長方形	138	53	41	N-23°-E	17	7	
B	1	ピット	350・512	楕円形	51	39	17	—	—	—	
B	2	ピット	287・530	楕円形	58	38	11	—	—	—	
D	22	ピット	307・578	円形	32	32	11	—	—	—	
B	25	ピット	310・574	楕円形	41	27	18	—	17	7	
C	26	ピット	280・550	楕円形	20	18	9	—	—	—	
C	27	ピット	279・550	楕円形	38	28	21	—	—	—	
C	28	ピット	279・550	楕円形	35	26	11	—	—	—	
C	29	ピット	275・550	楕円形	35	32	37	—	—	—	

## 第2項 池・溝

B区で検出された1号池、5・6・7号溝、11・12号溝(旧1・2号水路)は、1号池を中心とする灌漑用水施設と考えられ、1号池よりの湧水を分岐し供給していたものと推察される。いずれの遺構も埋土中にAs-Aが堆積していることから、造られた年代は定かではないが、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴うテフラの降下以前に埋没し始め、テフラの降下後に廃絶されたものと推察される。用水の供給先については、B区低地部分が想定されるが、残念ながら近世の水田は検出されていない。

この他、C区で2条、D区で2条、B区で1条の溝を検出し、水流の確認できる溝はB区の3号溝のみで、残りの4条の溝は、土地の区画を目的とするものと考えられる。

**1号池 第20・21・24～26図 PL.8**

位置：286～290-539～545グリッド

規模：長さ5.76×3.54m程の瓢箪形を呈し、深度は0.78m程を計る。

埋没土：底面から中層に至る埋土中にAs-Aを含む。

特徴：調査区(B区)南西端にあり、接続する5号溝・7号溝・12号溝(旧2号水路)やこれらの溝から分岐する6号溝・11号溝(旧1号水路)に農業用水を供給する湧水点と考えられる。池の縁には礫を用いて簡素な護岸を施す。

後記の本池に直接または間接的に接続する各溝についても、埋土中にAs-Aが含まれることから、全てが一連の遺構(灌漑用水施設)と考えられる。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土下層中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近世末から近代に至り、陶器や石造物などの廃棄場所となったものと推察される。

遺物：磁器染付椀・皿(No. 1～3・No. 5～12)、磁器青磁碗(No. 4)、陶器染付皿(No. 13)、同捏鉢(No. 20)、地元産陶器灯明皿他(No. 14～19)、同捏鉢他(No. 21～23・25～29)、焰焰(No. 31)、窯道具(No. 30)・宝筐印塔塔身(No. 32)・石臼(No. 33)などの18世紀から近代にかけての出土遺物があるが、いずれも池の廃絶後に廃棄された物であり、厳密には遺構に作う物ではない。また、

**5号溝 第20・21・27図 PL.9**

位置：290～297-532～540グリッド

規模：長さ10.35m程を検出し、一部が調査区外にかかる。溝幅は0.32～0.92m程、深度は0.21～0.64m程を計る。

走行：南西→北東→東北東方向に走行。

埋没土：As-Aを含む。

特徴：調査区(B区)南西端にあり、前記の1号池に接続し、池よりの用水を通水するための施設と考えられる。北側で12号溝と接し、この部分に礫が敷設されており、護岸または水量調節のためのものと考えられる。

本溝を含めの1号池に直接または間接的に接続する溝については、いずれの埋土中にもAs-Aが含まれることから、全てが一連の遺構と考えられる。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近代に至るまでの間に徐々に埋没していったものと推察される。

遺物：磁器染付椀(No. 1～4)、白磁香合(No. 5)、地元産陶器片口・捏鉢ほか(No. 6～9)の他、釜道具(王冠状トチン)も出土する。出土遺物は、いずれも溝の廃絶後に廃棄された物であり、厳密には遺構に作う物ではない。また、1号池出土遺物との接合もみられる。

**6号溝 第20・21・27図 PL.10**

位置：288～294-530～534グリッド

規模：長さ5.85m程、溝幅は0.68～0.82m、深度は0.15～0.42m程を計る。

走行：南西→北東方向に走行。

埋没土：As-Aを含む。

特徴：南側を後世の擾乱にて欠失するが、西側を走る12号溝に分岐の痕跡があることから、この部分に接続するものと考えられる。埋土中の多量の礫は、護岸に用いられていて可能性が高い。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近代に至るまでの間に徐々に埋没していったものと推察される。

遺物：陶器染付碗ほか(No. 1～5)、錢貨(No. 6)など

## 第2章 検出された遺構と遺物

18世紀以降の遺物が出土するが、いずれも溝の廃絶後に廃棄された物であり、厳密には遺構に伴う物ではない。

### 7号溝 第20・21図 PL. 9

位置：290～292-540～542グリッド

規模：調査区内において、長さ(0.43)m程を検出。北西側が調査区外にあるため、走行は不明。溝幅は0.5m程、深度は0.35m程を計る。

走行：南西→北東方向に走行。

埋没土：As-Aを含む。

特徴：調査区南西端にあり、5号と同様に1号池に接続し、池よりの用水を通水するための施設と考えられる。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近代に至るまでの間に徐々に埋没していったものと推察される。

遺物：特筆すべき遺物の出土は見られない。

### 11号溝 第20・21・28図 PL.10

(旧B区1面1号水路)

位置：281～283-535～538グリッド

規模：調査区内において長さ(3.1)m程を検出するのみで、大半が調査区外にかかる。溝幅は0.61m程、深度は0.24～0.31m程を計る。

走行：北西→南東方向に走行。

埋没土：As-Aを含む。

特徴：調査区(B区)南東端にあり、現用水路保護のため調査に制限を受ける。12号溝と接し、この部分を分岐点に南東方向と北西方向に分水する。分岐点には礫が敷設されており、護岸のためのものと考えられる。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近代に至るまでの間に徐々に埋没していったものと推察される。

遺物：陶器碗(No. 1)、すり鉢(No. 2・3)、灯明皿(No. 4)など18世紀以降の遺物が出土するが、いずれも溝の廃絶後に廃棄された物であり、厳密には遺構に伴う物ではない。また、遺物には12号溝出土遺物との接合が見られる。

### 12号溝 第20・21・28図 PL. 9・10

(旧B区1面2号水路)

位置：283～295-535～539グリッド

規模：調査区内において、長さ12.65m程を検出する。

溝幅は0.52～1.78m程、深度は0.09～0.43m程を計る。

走行：中央の屈曲部を境に、北東方向と南東方向に走行。

埋没土：As-Aを含む。

特徴：中央の1号池付近に突出部があり、1号池に接続していたものと考えられる。この部分を分岐点に北東方向は5号溝に、南東方向は11号溝に接続し、それぞれに通水していたものと考えられる。遺構の時期については、造られた年代は定かではないが、埋土中にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年以前に埋没し始め、その後の復旧は行われず、近代に至るまでの間に徐々に埋没していったものと推察される。

遺物：陶器器(No. 1・2)、焰烙(No. 3)など18世紀以降の遺物が出土するが、いずれも溝の廃絶後に廃棄された物であり、厳密には遺構に伴う物ではない。また、遺物には11号溝出土遺物との接合が見られる。

### 2号溝 第22図 PL.11

位置：304～310-573～576グリッド

規模：長さ(6.64)m程、溝幅は0.29～0.4m、深度は0.19～0.33m程を計る。

走行：北西→南東方向に直線的に走行。

埋没土：少量の小礫を含む。

特徴：調査区(D区)の東端部より検出されたため、北東部が調査区外にかかる。走行は直線的で、埋土中に少量の小礫を含むものの、明瞭な水流の痕跡は認められない。遺構の時期は明らかではないが、埋土の様相や検出状況から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

遺物：特筆すべき遺物の出土は見られない。

### 3号溝 第23図 PL.11

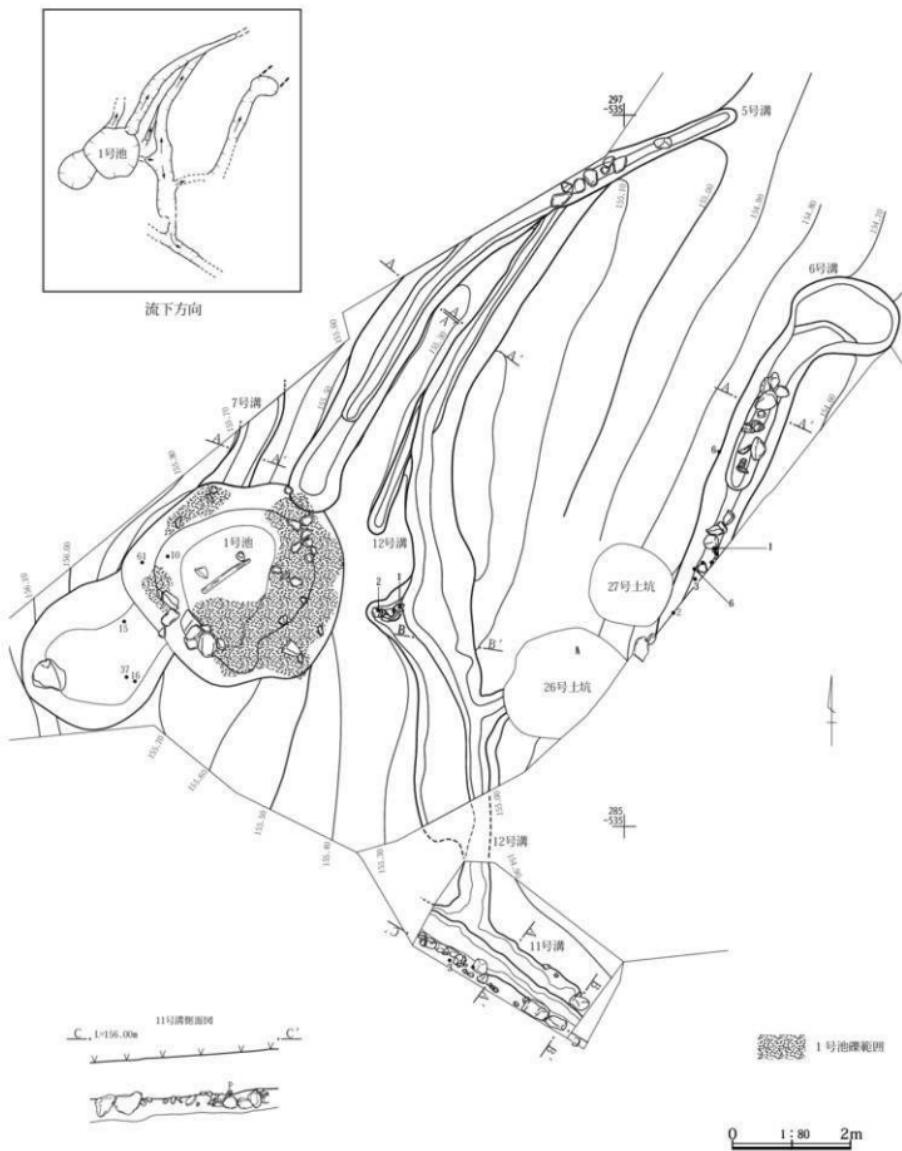
位置：302～305-513～515グリッド

規模：長さ(3.45)m程、溝幅は1.12m、深度は0.22m程を計る。

走行：北西→南東方向に走行。

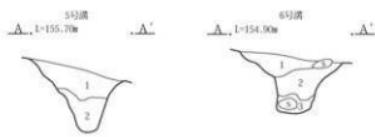
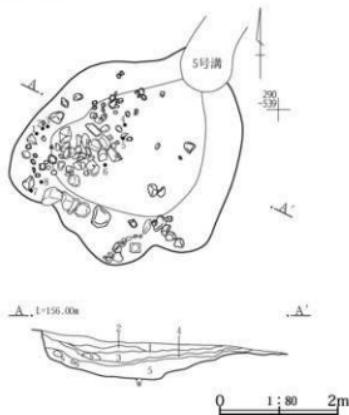
埋没土：少量の小礫を含む。

特徴：調査区(B区)端より検出されたため、南東部が調査区外にかかる。走行は直線的で、埋土中に鉄分の凝固



第20図 第1面 1号池、5・6・7・11・12号溝平・断面図(1)

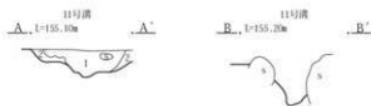
## 1号池(上層)



- 7号溝 SPA-A'
- 褐褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。10mm大の粒子の細かいAs-A含み、鉄分凝固が認められる。
  - 褐褐色土(10YR4/1) 砂質。粘性なし。1層よりも細かいAs-A含む。
  - 褐褐色土(10YR4/1) 砂質。粘性なし。1層よりも粒子の粗いAs-A含む。10mm大の礫を中量含む。



- 11号溝 SPA-A' (旧1号水路)
- 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-A混じり。粒子が細かく。20~30mm大の礫を中量含む。
  - 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-A混じり。1層よりも粒子が粗く。20~30mm大の礫を微量、5mm大の黄色粒子を微量含む。



- 12号溝 SPA-A' (旧2号水路)
- 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。20~30mm大の礫を少量、3~5mm大の黄色粒子を中量含む。
  - 褐色土(10YR5/1) 砂質。粘性なし。粒子の粗いAs-A含む。

0 1:40 1m

第21図 第1面 1号池、5・6・7・11・12号溝平・断面図(2)

や微量の小礫が見られるため、流水の可能性もある。時期は明らかではないが、埋土の様相や検出状況から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

遺物：特筆すべき遺物の出土は見られない。

#### 8号溝 第23・27図 PL.11

位置：274～282—544～551グリッド

規模：長さ(11.09)m程、溝幅は0.55～0.87m、深度は0.13～0.35m程を計る。

走行：南西→北東方向にやや屈曲し走行。

埋没土：少量の小礫を含む。

特徴：調査区の北端部より検出されたため、北側が調査区外にかかる。埋土中に少量の小礫を含むものの、勾配は緩く明瞭な水流の痕跡は認められない。中程で9号溝と重複し、新旧関係は本溝の方が古いものと判明した。遺構の時期は明らかではないが、埋土の様相や検出状況から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

遺物：特筆すべき遺物の出土は見られない。

#### 9号溝 第23図 PL.11

位置：275～278—548～553グリッド

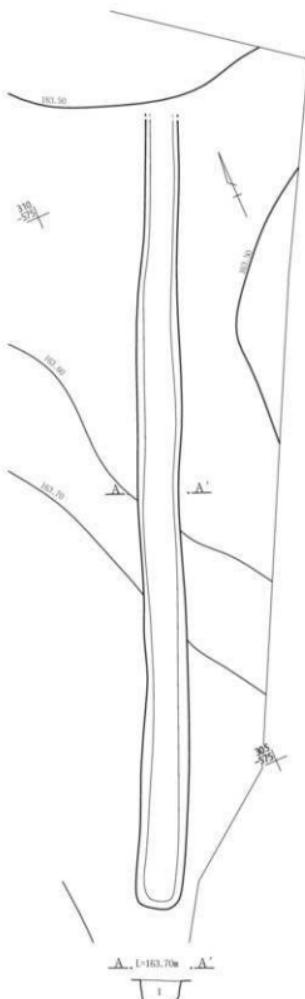
規模：長さ6.6m程、溝幅は0.38～0.59m、深度は0.13m程を計る。

走行：南西→北東方向に直線的に走行。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：勾配は緩く、埋土からも水流の痕跡は認められない。中程で8号溝と重複し、新旧関係は本溝の方が新しいものと判明した。遺構の時期は明らかではないが、埋土の様相や検出状況から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

遺物：特筆すべき遺物の出土は見られない。

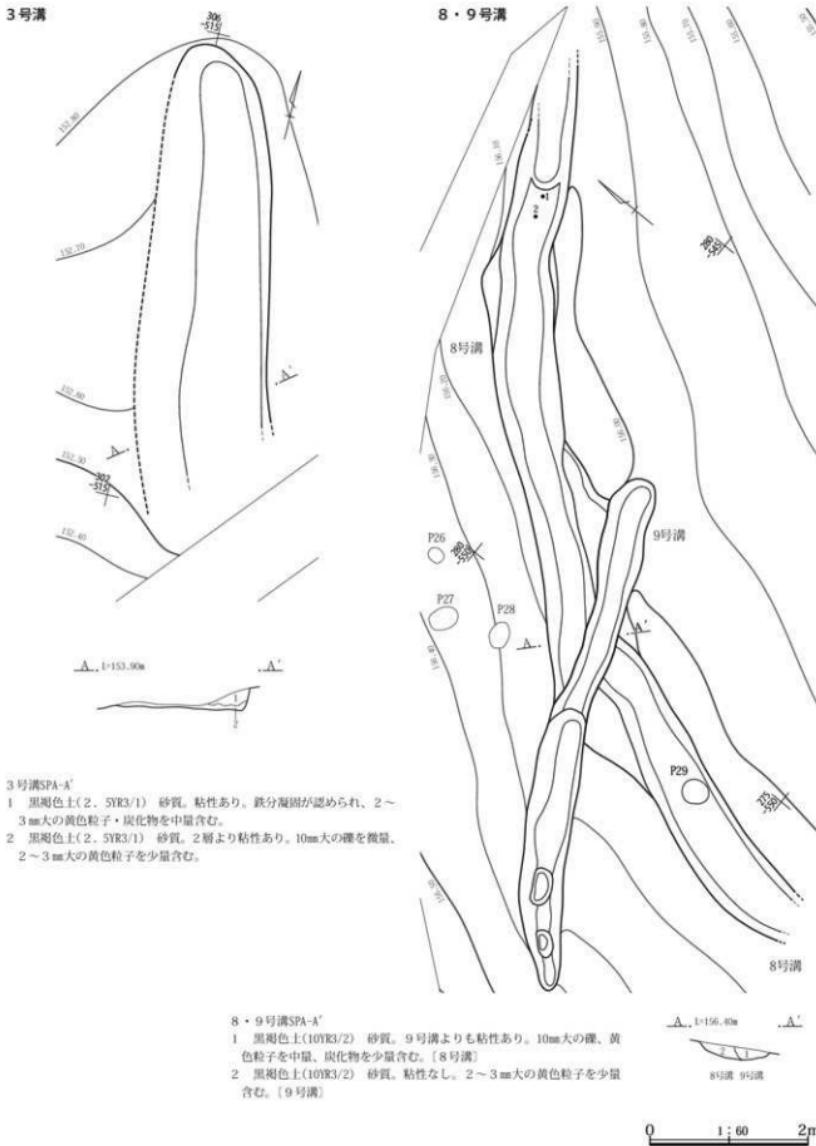


2号溝SPA-A'

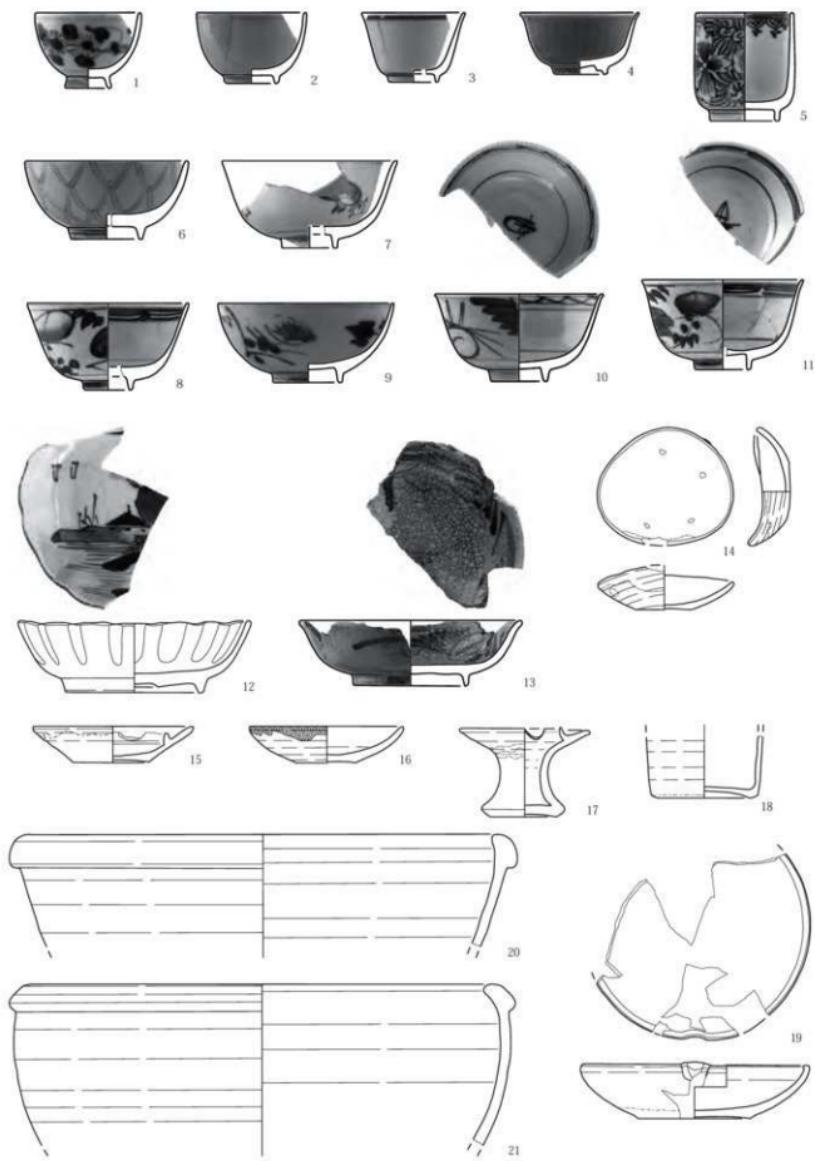
1 灰褐色土(10YR4/2) 砂質。粘性なし。10mm大程の礫と3～5mm大程の黄色粒子を少量含む。

0 1:40 1m

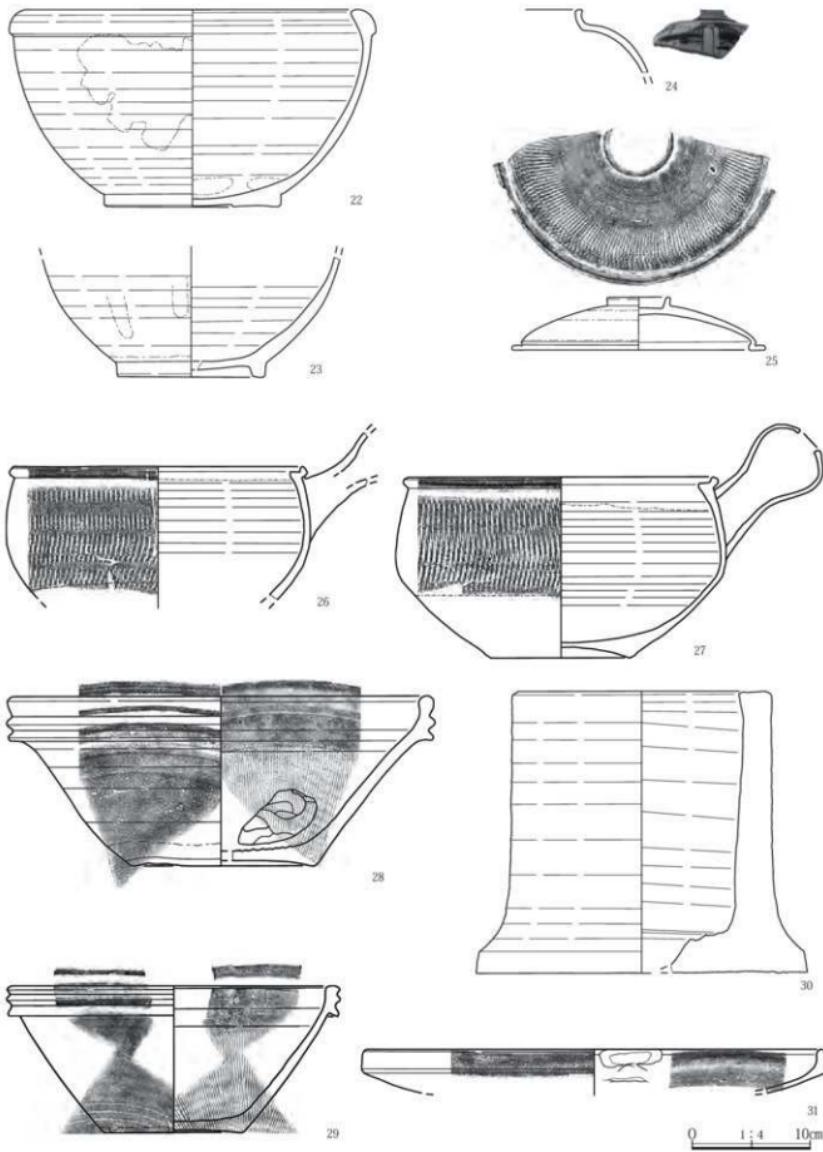
第22図 第1面 2号溝平・断面図



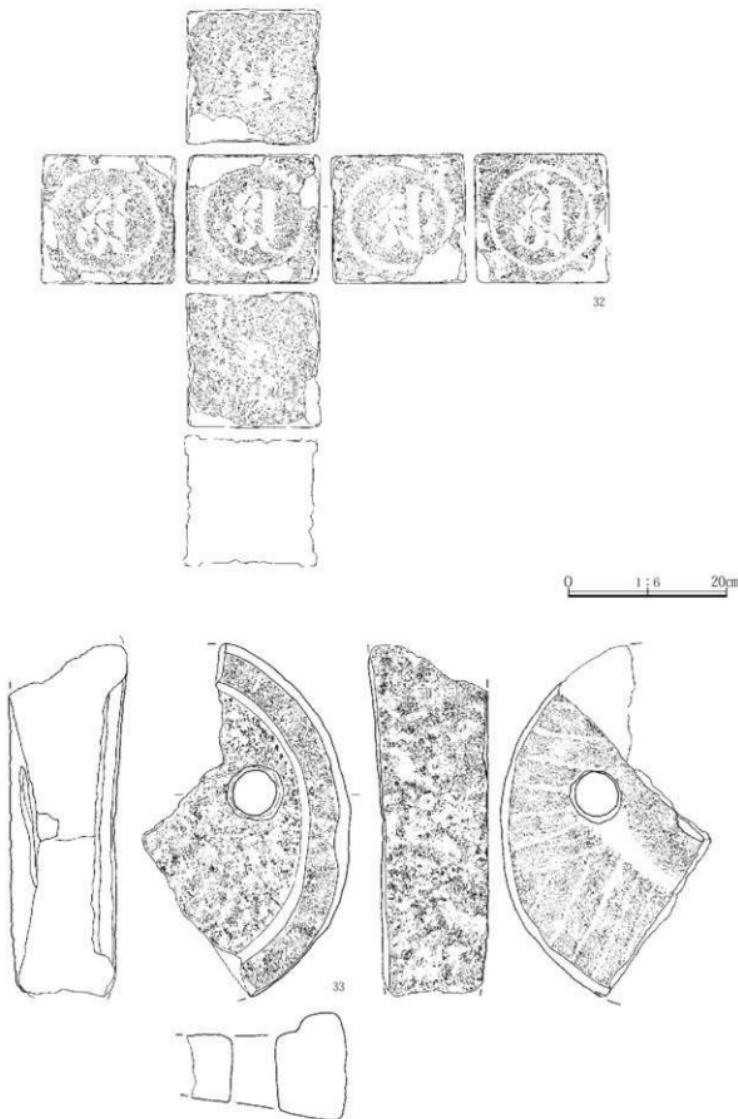
第23図 第1面 3・8・9号溝平・断面図



第24図 第1面 1号池出土遺物(1)

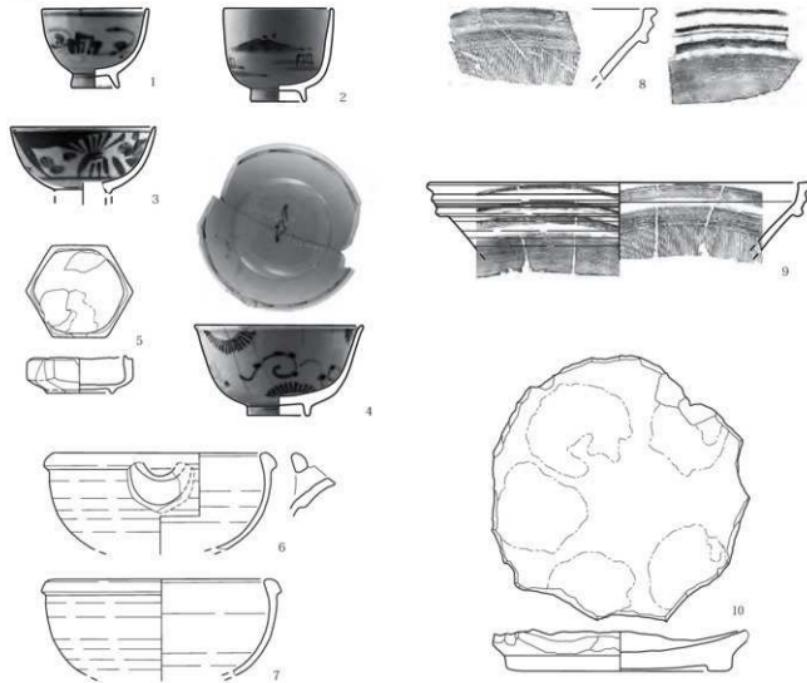


第25図 第1面 1号池出土遺物(2)

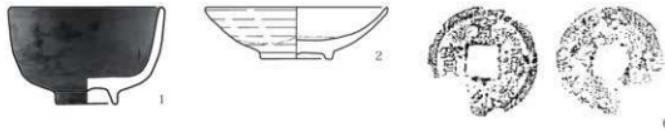


第26図 第1面 1号池出土遺物(3)

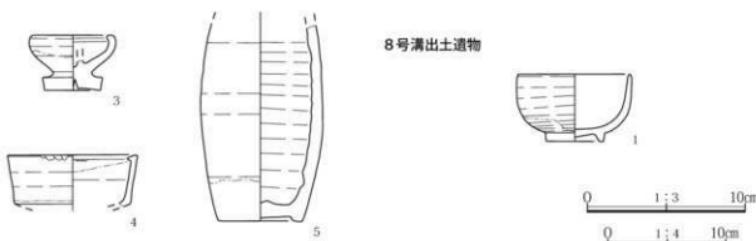
5号溝出土遺物



6号溝出土遺物



8号溝出土遺物

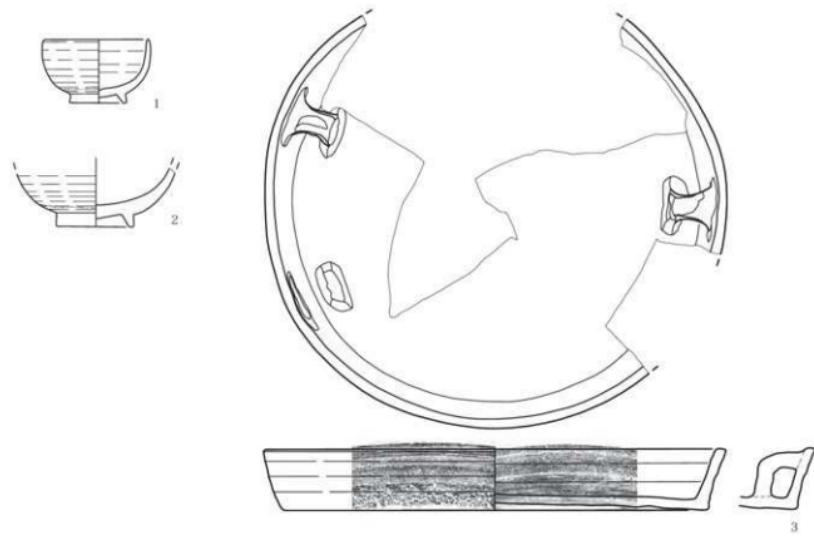


第27図 第1面 溝出土遺物(1)

11号溝出土遺物



12号溝出土遺物



第28図 第1面 溝出土遺物(2)

## 第2章 検出された遺構と遺物

第7表 第1面池・溝出土遺物観察表

1号池出土遺物観察表

師 国 PL.No.	種 類 器 類	出土位置 残 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・材 素 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第24回 PL.52	1 腹前磁器 染付小瓶	0 2 / 3	口 (6.6) 底 (2.9) * *	高 4.8 火薙物なし//白	体部外面に草花と蝶を描く。口縁端部と体部下位、高台壇と高台に團線。内面は無文。	19世紀前半
第24回 PL.52	2 磁器 染付小瓶	3 / 5	口 (6.8) 底 (3.2) * *	高 4.5 火薙物なし//白	口縁端部外面と体部下位の高台壇、高台壇に團線。内面は無文。外側に透明釉、粗い質入が入る。	19世紀前半
第24回 PL.52	3 磁器 染付小瓶	1 / 3	口 (6.5) 底 (3.0) * *	高 4.4 火薙物なし//白	口縁端部は外側に端反る。口縁端部外面と体部下位の高台壇、高台壇に團線。内面は無文。	19世紀後半
第24回 PL.52	4 磁器 青磁小瓶	* 口縁部一部欠損	口 (7.5) 底 (3.4) * *	高 3.9 火薙物なし//白	口縁端部は外側に端反る。外面は緑がかったクロム青磁釉。近現代	近現代
第24回 PL.52	5 腹前磁器 染付高呑み碗	1 / 2	口 (6.1) 底 (4.2) * *	高 6.9 火薙物なし//白	体部外面に施書きで花と唐草を描く。口縁端部と体部下位、高台壇と高台、高台内に團線。口縁部内面に麗文。	19世紀中頃
第24回 PL.52	6 腹前磁器 染付碗	1 / 2	口 (10.2) 底 (4.5) * *	高 5.0 火薙物なし//白	体部外面は二重圓文。体部下位に團線。高台に二重團線。内面は無文。	18世紀前半
第24回 PL.52	7 磁器 染付碗	1 / 5	口 (11.0) 底 (3.4) * *	高 5.5 火薙物なし//白	口縁端部は端に端反る。口縁端部外面と体部下位の高台壇、高台壇と高台に團線。体部に不明文。内面は口縁端部に團線で区画し、区画内に不明文。見込みに團線。中央に不明路。	19世紀前半
第24回 PL.52	8 磁器 染付小瓶	1 / 2	口 (10.2) 底 (2.9) * *	高 5.5 火薙物なし//白	口縁端部は端に端反る。口縁端部外面と体部下位、高台壇と高台に團線。体部に草花文か、内面は口縁端部に團線で区画し、区画内に不明文。見込みに團線。中央に不明路。	19世紀後半
第24回 PL.52	9 磁器 染付小瓶	* 口縁部一部欠損	口 (11.1) 底 (4.2) * *	高 5.0 火薙物なし//白	口縁端部と体部下位、高台壇と高台に團線。体部に草花文か、内面は無文。	現代
第24回 PL.52	10 磁器 染付小瓶	1 / 2	口 (10.6) 底 (3.5) * *	高 5.6 火薙物なし//白	口縁端部は僅に端反る。口縁端部外面と体部下位、高台壇と高台に團線。体部に不明文。内面は口縁端部に團線で区画し、区画内に不明文。見込みに團線。中央に不明路。	近現代
第24回 PL.52	11 磁器 染付碗	1 / 2	口 (10.2) 底 (3.4) * *	高 5.7 火薙物なし//白	口縁端部は僅に端反る。口縁端部外面と体部下位、高台壇と高台に團線。体部に草花文か、内面は口縁端部に團線で区画し、区画内に不明文。見込みに團線。中央に不明路。	19世紀後半
第24回 PL.53	12 腹前磁器 染付碗	* 1 / 3	口 (14.8) 底 (8.7) * *	高 4.3 火薙物微量//灰 灰	口縁端部は鉄錆を施し、内面に家屋山水文。底には蛇の目型高台壇。	19世紀前半から中頃
第24回 PL.53	13 肥前陶器 陶腹染付皿	* 1 / 3	口 (14.0) 底 (7.1) * *	高 4.2 火薙物微量//灰 灰	体部外面及び体部内面と中央に貝殻で不眞切。高台壇部を隙き外側に透明釉、質入が入る。高台内は中央が少し浮む。	18世紀後半
第24回 PL.53	14 安中陶器 灯明皿	* ほぼ完形	口 (8.6) 底 (3.6) * *	高 2.8 火薙物微量//灰 灰	内面から口縁部前面の一部に灰釉。体部外面以下は回転ヘラケシリ。体部内面以下に4所の重ね模様、円窓。全体が焼成時に変形。	幕末から近代
第24回 PL.53	15 安中陶器 灯明皿	* 完全	口 (10.1) 底 (4.8) * *	高 2.3 火薙物微量//灰 灰	受け部は口縁部より背が低い。受け部には1か所丸く削る。口縁部以下は回転ヘラケシリ。内面から口縁部外面の一部に灰釉。体部内面から底部に無釉。	幕末から近代
第24回 PL.53	16 安中陶器 灯明皿	* 完全	口 (9.7) 底 (3.8) * *	高 2.3 火薙物微量//灰 灰	内面から口縁部外面に褐色錆釉。体部外面以下は回転ヘラケシリ。口縁部底に焼化物が付着。	幕末から近代
第24回 PL.53	17 安中陶器 ひょうそく	* ほぼ完形	口 (3.6) 底 (4.2) * *	高 5.6 火薙物微量//灰 灰	受け部は口縁部よりやや背が高く。内面に灰釉。底部は無釉。	幕末から近代
第24回 PL.53	18 安中陶器 利	* 体部から底部	口 (*) 底 (6.0) * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	体部外面は灰釉、底部は無釉。体部から底部内面は錆釉を施し灰釉を掛け付ける。	幕末から近代
第24回 PL.53	19 安中陶器 鉢	* 3 / 4	口 (14.2) 底 (7.0) * *	高 3.5 火薙物微量//灰 灰	口縁端部は平坦でなし、内側に肥厚する。口縁部が1か所内側に歪んで浮む。内面から体部外面下位に黒褐色錆。体部外面下位から底部は無釉。	幕末から近代5講と接合
第24回 PL.53	20 陶器 鉢	* 口縁部	口 (0.0) 底 (*) * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	口縁端部は内側に突り、外側に突いて肥厚する。内面に灰釉、細かな質入が入る。	19世紀中頃から後半
第24回 PL.53	21 安中陶器 鉢	* 口縁部から体部	口 (25.7) 底 (*) * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	口縁端部は平坦をなし、内側に肥厚する。内面に灰釉を施し、体部外側の上位に紫色錆を掛け付ける。	幕末から近代5講と接合
第25回 PL.53	22 安中陶器 鉢	* 1 / 3	口 (28.1) 底 (4.5) * *	高 16.7 火薙物微量//灰 灰	口縁端部は平坦をなし、外側に肥厚する。内面から体部外側下位の高台壇で灰釉。高台に四型に割り出し、無釉。底部内面は3~4角の楕円形の重ね模様、縦子と子か。	幕末から近代22~45~47講と接合
第25回 PL.53	23 安中陶器 鉢	* 体部から底部片	口 (*) 底 (9.3) * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	内面に柿色の模様を施し、体部に釉を厚く掛け流す。体部外面下位と高台は無釉。	幕末から近代60と同一個体か
第25回 PL.53	24 益子陶器 土瓶	* 口縁部破片	口 * 底 * * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	口縁端部下外面に團線。体部上面に二重團線。体部に鉄錆と褐色錆や綠色錆で山水文を描く。口縁端部と内面は無釉。	近現代
第25回 PL.53	25 安中陶器 行蓋	* 1 / 2	口 (16.0) 底 (4.0) * *	高 3.3 火薙物微量//灰 灰	蓋の描みはシーパーに削り出し、表面は蛇の目型に褐色錆を施し、縁切りに回転錆文による連続文。裏面は小豆色の錆釉で重ね模様が入る。	幕末から近代
第25回 PL.53	26 安子陶器 行平	* 1 / 4	口 (18.2) 底 * * *	高 * 火薙物微量//灰 灰	口縁端部はL字形に削り、蓋がのる。体部内面と把手は黒褐色錆を施し、体部外面上位に中位は回転錆文具による連続文で褐色錆を施す。把手は中空で体部に削り付け。体部外面下位と口縁端部は無釉。	幕末から近代

## 第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第25回 PL.53	27	安中陶器 手平	* 2 / 5	口 底 (19.2) (8.8)	高 * 11.4 夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は「L」字形に屈曲し、蓋がのる。体部内面と把手は小豆色釉を施し、体部外面上位～中位は削除文具による連続文で、窓付鉢を施す。把手は端部に孔が開き、中空で体部に貼り付け。体部外面上位から底部に口縁端部は無輪。	幕末から近代 54と同一個体か	
第25回 PL.54	28	安中陶器 すり鉢	* 1 / 2	口 底 (35.0) (15.5)	高 * 14.4	口縁端部は丸く、腹らみ内外に肥厚する。口縁部内面は2条の隆起が盛る。体部内面に18本のクシ目。外面上位から底部は無輪。底部に輪状の重ね焼き痕、輸トチか。体部内面下位に溝の重ね焼き痕、團子形が付着。	幕末から近代 55と接合 29・58・59は同一個体か	
第25回 PL.54	29	安中陶器 すり鉢	* 1 / 4	口 底 (27.4) 11.7	高 * 12.4	口縁端部は平坦をなし、緩く内側に傾き外に肥厚する。口縁部外面は2条の隆起が盛る。体部内面にクシ目。口縁部内面と口縁端部から体部外面上位に褐色の鉄釉を施す。体部内面には薄い輪状を施す。底部は無輪。体部外下面に螺旋状焼成跡が盛る。	幕末から近代 55と接合 29・58・59は同一個体か	
第25回 PL.54	30	安中陶器 煎茶具	* 1 / 2	口 底 (15.6) (21.0)	高 * 17.9	斜方輝石、斜長石、白色砂粒を含む//褐 灰	口縁端部は平底で、体部は筒状で下位が開く。底盤中央は孔円形に凹み、被熱による高温酸化と一部の胎が発泡する。体部外表面は被熱により高溫酸化による変色が認められる。底盤部に輪状の重ね焼き痕。	幕末から近代
第25回 PL.54	31	在地系土器 焙烙		口 底 38.4 底	高 * *	口縁部は内側に肥厚する。体部外表面は炭素が吸着し、炭化物が付着する。底部は鉛灰で板状や丸に曲かる。口縁部内面には耳の痕跡が1ヶ所存在。	近代	
第26回 PL.54	32	石造品 宝篋印塔 (塔身)	*	長 幅 16.4 17.0	厚 重 17.1 7300	粗粒輝石安山岩 より //	塔身。月輪で照れた塔藏界西方佛子塔は四方に彫刻されている。梵字の書まれた四面は滑で、文字表現も研磨に整えられている。上下面とも周辺部は平滑であるが、中心はやや凹凸の鉄製工具痕も残る。	江戸時代
第26回 PL.54	33	石造品 石臼(上)	* 1 / 4	径 幅 (33.0)	厚 重 9.4 5300	粗粒輝石安山岩 より //	やや目が詰まつた硬めの石材使用。六分両で上刷組合せで7本以上。ものくびり孔径1.0cm。裏面にものくびり孔が残る。裏面割れ合わせ面はなり使い込まれ、溝はかなり多く残している。中芯孔推定径約3.5cm。ものくびり孔よりも少し小さく。表面及び側面に鉄製工具痕がある。表面の縁は磨滅してくらくなっている。	
PL.55	34	肥前磁器 染付碗	*	口 底 2 / 3	高 * * * * * *	夾雜物なし//白	体部外表面は施釉された前唐草文。体部下位を圓錐形で区画し、連支弁。高台に二重圓錐。口縁部内面に四方瓣文、見込みに二重圓錐。中央に瓣で松葉模を描く。	18世紀末 5満と接合
PL.55	35	磁器 染付碗	*	口 底 3 / 4	高 * * * * * *	夾雜物なし//白	口縁部外表面は直線張りで白抜きの唐草文。体部外表面は窓給に菊などを描き、青海波やみじん唐草が埋める。体部下位と高台に圓錐。口縁端部内面には埋込文が巡り、見込みに圓錐。中央に瓣模。	19世紀後半 5満と接合
PL.55	36	磁器 染付碗	*	口 底 3 / 5	高 * * * * * *	夾雜物なし//白	口縁部外表面は直線張りでみじん唐草が埋める。高台境と高台に圓錐。口縁端部内面には埋込文が巡る。	19世紀後半 5満と接合
PL.55	37	肥前磁器 染付皿	*	口 底 完形	高 * * * * * *	夾雜物なし//白	体部外にかなり簡略化された唐草文。体部下位、高台境と高台に圓錐。高台内に圓錐、中央に不明輪。体部内面に花などを描き見込みに二重圓錐、中央にコンシャク印判の五弁花。	18世紀後半
PL.55	38	安中陶器 口縁部	*	口 底 底	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	内面から口縁部内面の一部に薙灰釉。底部内面に鉄絆で直立する太線を描く。体部外面上位は回転ヘラケズ。	幕末から近代
PL.55	39	安中陶器 灯明皿	*	口 底 1 / 4	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	内面から口縁部内面に灰釉。体部外面上位以下は回転ヘラケズ。内面に2号の重ね焼き痕、円鑿ビンカ。	幕末から近代
PL.55	40	磁器 染付口	*	口 底 1 / 5	高 * * * * * *	夾雜物微量//淡 黄	口縁端部は平坦をなし、緩く内側に傾き肥厚する。内面から体部外面上位に黄褐色鉄釉。体部外面上位から高台は無輪。底部内面は3号の重ね焼き痕。	江戸時代
PL.55	41	安中陶器 片口	*	口 底 口縁部片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は緩く内側に傾き肥厚する。内外面に灰釉を施す。	幕末から近代
PL.55	42	安中陶器 片口	*	口 底 口縁部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は尖り、斜め外側下に肥厚する。内外面に灰釉を施す。	幕末から近代
PL.55	43	安中陶器 片口	*	口 底 口縁部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	素焼きの鉢形製法か。口縁端部は平坦をなし、内側に肥厚する。	幕末から近代
PL.55	44	安中陶器 鉢	*	口 底 口縁部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は内側に尖り、外側に肥厚する。内外面に灰釉を施す。	幕末から近代 5満と接合
PL.55	45	安中陶器 鉢	*	口 底 口縁部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は尖り、内側に肥厚する。内外面に灰釉、細かな貫入がある。	幕末から近代 22・45・47 は同一個体か
PL.55	46	安中陶器 忍棒不明	*	口 底 体部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	内外面に灰釉、細かな貫入がある。	幕末から近代 22・45・47 は同一個体か
PL.55	47	安中陶器 沿種不明	*	口 底 体部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	内外面に灰釉。細かな貫入がある。	幕末から近代 22・45・47 は同一個体か
PL.55	48	安中陶器 押抜文	*	口 底 口縁部破片	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	口縁端部は内側に尖り、外側に肥厚する。内外面に白陶化した灰釉か。口縁部に灰が付着する。	幕末から近代
PL.55	49	安中陶器 手平蓋	*	口 底 口縁部	高 * * * * * *	夾雜物微量//灰 灰	裏面は無釉で。口縁部高さは回転施文具による埋込文。円形の孔が開く。裏面は灰釉を施し、合わせ部は無釉。	幕末から近代

## 第2章 検出された遺構と遺物

種 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
300008 PL.000	50 安中陶器 行平	* 底部から体部片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	体部内面は紫黒色釉を施し、体部外側中位は回転施文具による連續文で褐色鉄釉を施す。把手の基部がわざりに残存し黒色釉を施し、中空か、体部外側下位と口縁端部は無釉。	幕末から近代
PL.55	51 安中陶器 行平蓋	* 1 / 4	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	蓋の描みはシャープに削り出る。表面は蛇の目状に褐色鉄釉を施し、縁辺は回転施文具による連續文。裏面は小豆色の鉄釉。	幕末から近代
PL.55	52 安中陶器 行平	* 体部から底部	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	煮焼きの行平製品。体部外側中位は回転施文具による連續文。	幕末から近代 未製品 5溝と接合
PL.55	53 安中陶器 行平	* 口縁部から体部 片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	口縁端部は「L」字形に削り出し、蓋がのる。体部内面と把手は小豆色釉を施し、体部外側上位と中位は回転施文具による連續文で褐色鉄釉を施す。把手は体部に貼り付けで剥離している。体部外側下位と口縁端部は無釉。	幕末から近代
PL.55	54 安中陶器 行平	* 体部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	体部内面は小豆色釉を施し、体部外側中位は回転施文具による連續文で褐色鉄釉を施す。体部外側中位以下は無釉。	幕末から近代 27と同じ体 か
PL.55	55 濱田陶器 すり鉢	* 口縁部から体部 片	口 底	*	高 底	*	夾雜物少量/*/ 褐灰	口縁端部は緩く外側に傾き、内側に肥厚する。口縁部内面と体部端部は凹凸で繰り返る。体部内面には17×1単位のクシ目。体部外側下位には回転ヘラケズリ。外側に網状鉄釉を施す。	19世紀後半
PL.55	56 安中陶器 すり鉢	* 体部から底部片	口 底	*	高 底	*	夾雜物少量/*/ 褐灰	煮焼きのすり鉢製品。内面に13本1単位のクシ目が入る。	幕末から近代 未製品
PL.55	57 安中陶器 すり鉢	* 口縁部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物少量/*/ 褐灰	口縁端部は丸く膨らみ内外に肥厚する。口縁部外側には2条の縦帶がある。体部内面には18本1単位のクシ目。外側に褐色の鉄釉を施す。	幕末から近代 28と同じ体 か
PL.55	58 安中陶器 すり鉢	* 口縁部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物少量/*/ 褐灰	口縁端部は平坦をなし、緩く内側に傾き外に肥厚する。口縁部外側は2条の縦帶がある。体部内面にクシ目。口縁部内面と外側に褐色の鉄釉を施す。体部内面は薄い鉄釉を施す。	幕末から近代 29・58は同じ 一個体か
PL.55	59 安中陶器 すり鉢	* 口縁部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物少量/*/ 褐灰	口縁端部は平坦をなし、内側に傾き外に肥厚する。口縁部外側は2条の縦帶がある。体部内面にクシ目。口縁部内面と外側に褐色の鉄釉を施す。体部内面は薄い鉄釉を施す。	幕末から近代 29・58・59は 同じ一個体か
PL.55	60 安中陶器 甕か	* 体部片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	内外面に褐色の鉄釉を施し、体部上位に釉を厚く掛け流す。	幕末から近代 23と同じ体 か
PL.56	61 安中陶器 焼鉢か 空形	* -	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	煮焼きの製品。ロクロ成形で口縁部は平坦をなし、簡式で底部には大きめの孔が開く。底部は木製工具で手す。	幕末から近代 窓道具か
PL.56	62 安中陶器 空皿	* 口縁部	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	煮焼きの蓋状製品。口縁端部は垂直に傾き、尖る。	幕末から近代
PL.56	63 安中陶器 蓋種不明	* 体部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	煮焼きの製品。ロクロ成形。	幕末から近代 未製品
PL.56	64 安中陶器 酒樽不詳	* 体部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	内外面に灰釉、難かな貫入が入る。	幕末から近代
PL.56	65 安中陶器 蓋種不明	* 体部破片	口 底	*	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐灰	内外面に灰釉。体部外側の一部に黒褐色鉄釉。	幕末から近代
5) 漆出土物梗概表									
第27回 PL.56	1 肥前磁器 染付小碗	* 完形	口 底	6.6 2.9	高 底	5.0 *	夾雜物なし/*/ 白	口縁端部外面と体部下位、高台壇と高台に團塊。体部外面に樹木や蝶などを描く。内面は無文。	19世紀前半
第27回 PL.56	2 肥前磁器 染付小碗	* 4 / 5	口 底	6.8 3.4	高 底	5.9 *	夾雜物なし/*/ 白	体部外面に達心上位、家屋と樹木を描く。内面は無文。	19世紀中頃
第27回 PL.56	3 肥前磁器 色絵碗	* 1 / 3	口 底	9.2 1.3	高 底	*	夾雜物なし/*/ 白	口縁端部下面に赤の色絵で團塊、体部下位に二重團塊。高台壇に團塊。口縁端部内面に團塊。体部外面に赤、黄、青の色絵で团塊などを描く。	19世紀後半
第27回 PL.56	4 肥前磁器 染付碗	* 口縁部が欠損	口 底	10.7 4.0	高 底	5.7 *	夾雜物なし/*/ 白	口縁端部外面は外側に反る。口縁端部外面と体部中位、下位、高台壇と高台に團塊。体部外面に半花文と唐草を描く。口縁端部内面を2条の團塊で区画し、区画内に不明文。見込み中に團塊。中位に不明文。	19世紀後半
第27回 PL.56	5 肥前磁器 白磁香合	* 底部の一ヶ所が欠損	口 底	(5.9) 4.3	高 底	2.3 *	夾雜物なし/*/ 白	六角形の容器で打ち成形。蓋のあわせ部と内面は無釉。高台壇部を除き体部外面と高台内は薄い青みを帯びた透明釉。	江戸時代
第27回 PL.56	6 安中陶器 口片	* 1 / 5	口 底	(33.7) *	高 底	*	夾雜物微量/*/ 淡 黄灰	口縁端部は内側に突り、外側に肥厚する。内外面に灰釉。	幕末から近代
PL.56	7 安中陶器 握鉢	* 1 / 3	口 底	(14.0) *	高 底	*	夾雜物微量/*/ 淡 黄	口縁端部は内側に丸く突り、外側に傾いて肥厚する。内外面に灰釉。	幕末から近代
第27回 PL.56	8 安中陶器 すり鉢	* 口縁部破片	口 底	(32.0) *	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐 灰	煮焼きのすり鉢製品。口縁端部は内側に傾き、外側に丸く突いて肥厚する。口縁部外面は2条の突帯が巡る。口縁端部下面までクシ目が入るが口縁部のクシ目は大部分をナデで消し、クシ目の上限を描く。	幕末から近代 未製品
第27回 PL.56	9 安中陶器 すり鉢	* 口縁部	口 底	(32.0) *	高 底	*	夾雜物微量/*/ 褐 灰	煮焼きのすり鉢製品。口縁端部は内側に傾き、5か所に楕円形の重ね焼き痕。底部は低い削り出し高台。高台部を粗く叩き出し円盤状に加工。	幕末から近代 未製品
PL.56	10 濱田・美濃 陶器 二次加工品	* 高台部	口 底	14.0	高 底	*	夾雜物微量/*/ 白	底部内面に灰釉を施し、5か所に楕円形の重ね焼き痕。底部は低い削り出し高台。高台部を粗く叩き出し円盤状に加工。	18世紀後半 大皿か 12溝と接合

## 第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物

備考	成形・整形の特徴	胎土・焼成/色調 石材・素材等	計測値	出土位置 現存率	種類 器種	No.	備 註
近代	紙貼りで窓枠を緑色釉で植物を描き、隙間を紗彫形・泥くづして埋める。底部縁と口縁端部は無釉。	夾雜物なし~/白	口 * 底 *	高 * * *	肥前磁器 染付段重	11	PL.56
幕末から近代 27土7と同一個体か	内外面に黄灰色の炭灰釉。	夾雜物微量~/灰	口 * 底 *	高 * * *	安中陶器 器種不明	12	PL.56
幕末から近代	内外面に灰釉、細かな貫入がある。	夾雜物微量~/灰	口 * 底 *	高 * * *	安中陶器 器種不明	13	PL.56
幕末から近代 窯道具	素焼きの窯道具で口縁部は王冠状に工具で削る。底部は本製工具でナデ。	夾雜物微量~/淡 黄灰	口 * 底 *	高 * * *	王冠状トチ ン	14	PL.56

6号溝出土遺物觀察表

18世紀から19 世紀前半	口縁端部外面と高台壇に圍織。体部外面に木目などを描く。内面は黒文。高台端部を窓枠で外面に透明釉を施し、貫入がある。窓枠端部は鉄筋、砂が付着。	夾雜物微量~/灰	口 (9.6) 底 3.9	高 * * *	肥前陶器 染付茶付碗	3 / 5	PL.56
19世紀から	内面は鋼錆絞を施し、底部は窓枠の目錆削ぎ。口縁端部から体部外面下位まで灰釉。体部外面下位から高台は無釉。	夾雜物微量~/灰	口 (11.5) 底 4.5	高 * * *	肥前陶器 器種不明	1 / 5	PL.56
0	环～体部の内外面に鉄釉。脚台部は無釉。底部は回転糸切後に無調整。底部中央に固定用の円孔があり。	夾雜物微量~/灰 白	口 (5.0) 底 3.5	高 * * *	瀬戸・美濃 ひょうそく	2 / 3	PL.56
江戸時代	口縁端部は内面に細く頸期を肥厚する。口縁端部外面から底部に灰釉、細かな貫入がある。体部内面は無釉。口縁端部縁外面に明治による破損。	夾雜物微量~/灰 灰	口 (20.8) 底 8.0	高 * * *	瀬戸・美濃 青唇	4	PL.56
19世紀から 1面と接合	体部外面中位から下位と高台内の一部に灰釉、体部下位から高台は無釉。高台は削り出している。	夾雜物微量~/灰 白	口 (5.3) 底 5.3	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器瓶	5	PL.56
江戸時代	一部欠損し、変形している。面の文字、輪、郭は明瞭、背は輪。郭が判別しづらい。面の郭は狭い。	外径 2.306 内径 1.928 厚 1.8	重 0.171	*/*	践貢 新草木	6	PL.57
1面と接合	内面から体部外面に褐色鐵釉。体部外面から高台は無釉。高台内面が緩く盛る。	夾雜物微量~/灰	口 *	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器瓶	7	PL.56
江戸時代	体部外面はヨコナデ、内外面に炭素が吸着する。体部内面に耳が1カ所残存する。	夾雜物少量~/灰	口縁部から底部 底	高 * * *	在地系土器 焰燒	8	PL.56

8号溝出土遺物觀察表

18世紀	内面から体部外面下位に灰釉、貫入がある。体部外面下位から高台は無釉。	夾雜物微量~/灰	口 7.1 底 3.6	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器瓶 小瓶	1	PL.57
江戸時代	底部内面は無釉、体部内面の一部と体部外面下位の高台際まで青磁釉。高台端部と高台内は鉄筋。体部外面に2カ所の脚跡。	夾雜物微量~/灰 白	埋土中 底部	高 * * *	肥前磁器 青磁香炉	2	PL.56

11号溝出土遺物觀察表

18世紀後半 柳茶碗	体部外面に鉄釉で柳を描く、内外面に灰釉。	夾雜物少量~/灰	口縁部から体部 底	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器瓶	1	PL.57
18世紀	口縁端部外面に2条の突起が巡る。口縁端部内面にクシ目。	夾雜物微量~/赤 褐	口縁部	高 * * *	瑠璃石 明石系 すり鉢	2	PL.57
18世紀後半 12講と接合	口縁端部は尖り、口縁部は回転糸切後無調整。内面には14本1単位のクシ目が1周する。内面は新鉄釉。体部外面下位から底部は鉄錆を拭う。	夾雜物微量~/灰 白	口縁部から体部 片	高 * * *	瀬戸・美濃 すり鉢	3	PL.57
江戸時代	受け部は口縁より背が高い。口縁部以下外面は回転ヘラケシリ。口縁部内面から外面に鉄錆。体部外面から底部は無釉。	夾雜物微量~/相 手	埋土中 1 / 5	高 * * *	志呂邑陶器 灯明受皿	4	PL.57
江戸時代 碗	内外面に褐色鉄釉。高台脇と高台の一部を粗く打ち欠いて円盤状に加工。	夾雜物少量~/灰	埋土中 高台部	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	5	PL.57

12号溝出土遺物觀察表

18世紀	内面から体部外面下位に灰釉。体部外面下位から高台は無釉。	夾雜物微量~/灰 釉	口 6.6 底 3.5	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器 小瓶	1	PL.57
18世紀	内面と体部外面下位は褐色鉄釉。体部外面下位から高台は無釉。	夾雜物微量~/灰 釉	体部下位から高 台部	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器 瓶	2	PL.57
江戸時代 碗	体部外面はヨコナデ、内外面に炭素が吸着し、体部外面に鉄化物が付着する。底部は砂吹で平。体部内面に耳が二ヶ所残存し、1ヶ所耳跡が残存する。	夾雜物少量~/相 手	埋土中 高台部	高 * * *	在地系土器 焰燒	3	PL.57
江戸時代 碗	内面に褐色鉄釉。外面は高台端部を除き薄く鉛錆を施す。高台脇と高台を粗く打ち欠いて円盤状に加工。	夾雜物少量~/灰 釉	埋土中 高台部	高 * * *	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	4	PL.57

## 第3項 煙

調査区B区北東部とC区南西部において煙跡が検出される。いずれも検出された面積は狭域であり、地形的に小規模な耕作であったと推察される。また、両烟共にサクの理土内にAs-Aが確認されることから、天明3(1783)年の浅間山噴火により埋没し、その後の復興はなされなかったものと思われる。

## 1号烟 第29・30図 PL.12

位置：240-580付近

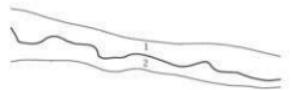
規模：調査区内において5.5m×10m程の耕作痕を検出。北側および南東部を後世の擾乱にて消失する。サクの間隔は60cm程、歛幅は20～40cm程を計る。

埋没土：サクの堆みにAs-Aが堆積。

特徴：緩斜面に作られた烟で、走行は等高線に平行する。天明3(1783)年の浅間山噴火により埋没。復興された痕跡はない。限られた調査範囲で、かつ擾乱による消失のため烟の全容は明らかではないが、地形から考えて狭域の耕作であったと推察される。

## 1号烟

$\Delta$ , 1-158.40m



## 2号烟 第29・31図 PL.13

位置：355-490付近

規模：調査区内において4m×9m程の耕作痕を検出。東側を後世の擾乱にて消失する。サクの間隔は60cm程、歛幅は20～40cm程を計る。

埋没土：サクの堆みにAs-Aが堆積。

特徴：1号烟と同様に緩斜面に作られた烟で、走行は等高線に平行する。天明3(1783)年の浅間山噴火により埋没。復興された痕跡はない。地形から考えて狭域の耕作であったと推察される。烟の北西端部に沿うやや窪んだ部分は、農作業用の道と考えられる。歛部には植物の痕跡が認められ、噴火時に植えられていた作物の痕跡と考えられるが、種別は明きからではない。

## 1号烟SPA-A'

1 灰黄色土(2, 5YR6/2) 砂質。粘性なし。5mm以下のAs-Aが堆積。やや硬い。

2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性あり。3～5mmの黄色粒子を中量含む。2～3mmの白色粒子を中心含む。

## 2号烟SPA-A'

1 As-A

2 黑褐色土(10YR2/2) 繊維あり。少量の径10～30mm程の黒・黄褐色粒子・白色粒子と微量の炭化物粒を含む。(耕作土)

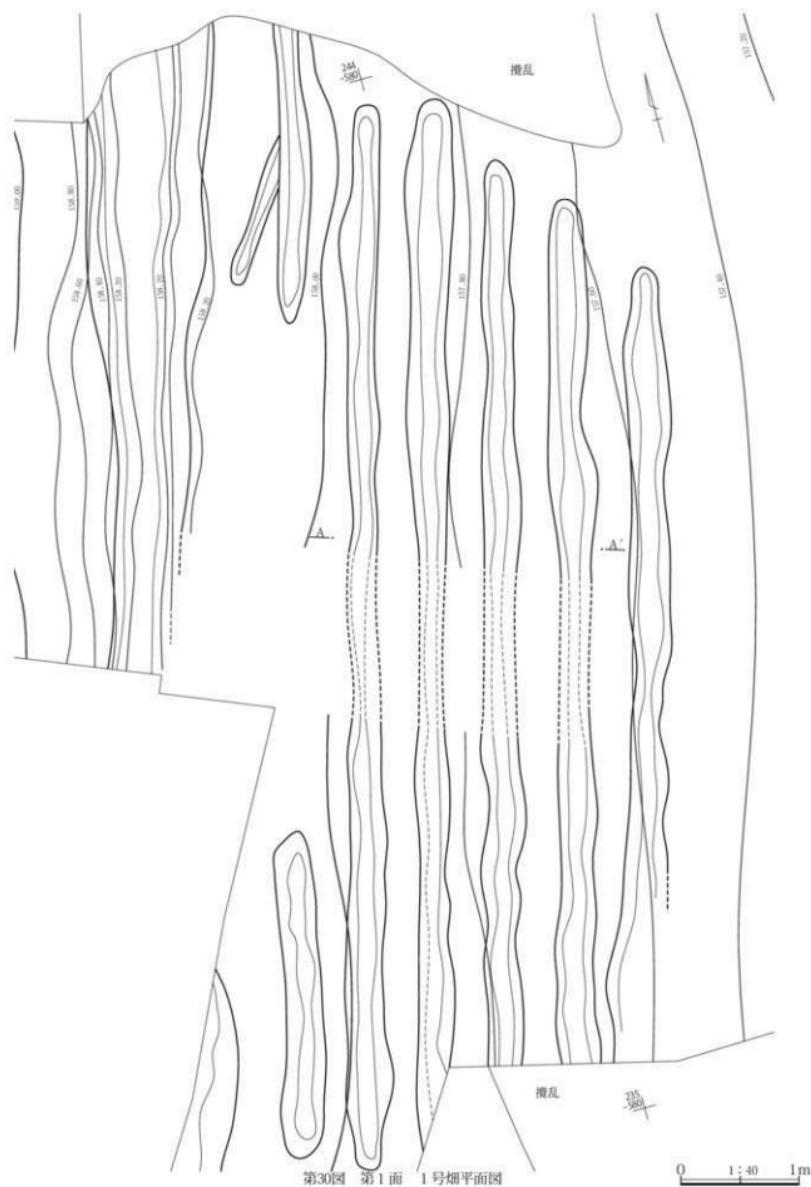
## 2号烟

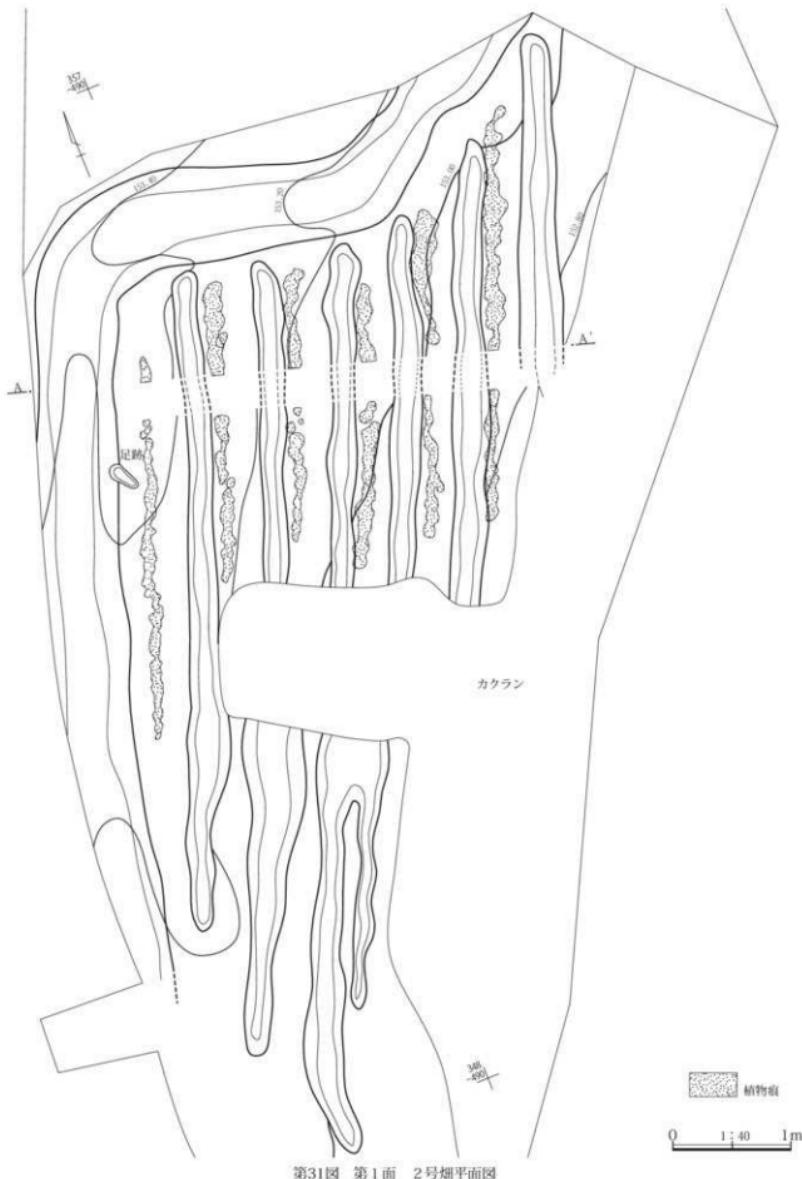
$\Delta$ , 1-153.80m



0 1:40 1m

第29図 第1面 1・2号烟断面図





第31図 第1面 2号石平面図

#### 第4項 道・墓

検出された道は、調査区C区中央部の南東端にて1条のみで、一人分の歩行幅で直線的に走行する。遺構の西側調査区外に、遺構と並行して現生活道が走り、墓地への参道として利用されている。

検出された墓坑群は、調査区D区中央部の北東寄りにあり、調査時には土坑(33～46号土坑)として調査された。調査開始前には同所に14基の石造物が在り、調査された以下の14基の墓坑上に造立された墓標と考えられるが、残念ながら個々の対応は明らかではない。

墓標の紀年鉢等から、墓域は寛保元(1741)年から天保12(1841)年頃の約100年間の墓所であること。記された法名からは、成人男性5名、成人女性6名、子供2名、不明1名の墓であると推定される。(後掲一覧表を参照)

また、出土人骨の鑑定については、遺存状態の良好な3・4・5・8・10号墓の5個体の鑑定を新潟医療福祉大学の奈良貴史教授を中心とする研究チームに依頼した。鑑定結果の詳細については、後掲の第3章に記す。

1号道 第32図 PL.14

(旧C区1面1号道状遺構)

位置: 260～268-553～556グリッド

規模: 長さ(8.78)m、幅0.5～0.72m、深度は0.16m程度を計る。

主軸方位: N-21° E

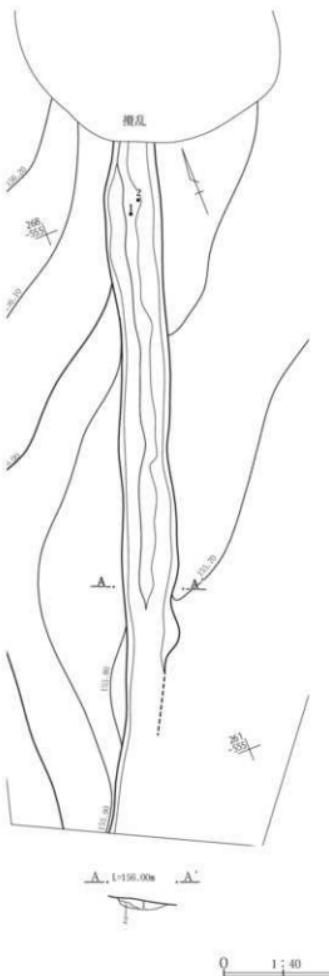
断面形状: 畦状

埋没土: 白色粒子を含む黒褐色砂質土。

**特徴:** 埋没は自然堆積。北側を擾乱にて遮し、南側は調査区外にかかるため、全容は不明。直線的に走行し、幅50～70cmは一人分の歩行幅。西側調査区外に、並行して現生活道があり、墓地への参道として利用されている。時期を判断する根拠に乏しいが、埋土より近世の遺構と推定される。

重複: なし

遺物: 遺物の出土は見られない。



1号道SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。硬く縮まる。褐色粒子と径10mm程の礫を少量、5mm程の白色粒子を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。1層上より柔らかく、縮りがやや弱い。径5mm程の白色粒子を少量と炭化物を微量含む。

第32図 第1面 1号道平・断面図

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 1号墓 第34・37図 PL.17

(旧D区1面33号土坑)

位置：290—592グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.92×0.83m程、深度は0.95m程を計る。

埋没土：ロームブロックを含む暗褐色砂質土。

特徴：没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺葬と推察される。中央部に漆状の有機物が残る。

重複：なし

遺物：鉄釘(№1)、銭貨(№2・3)など17世紀中期以降の遺物が出土する。

### 2号墓 第34・37図 PL.17

(旧D区1面34号土坑)

位置：292—589グリッド

形状：梢円形

規模：径0.93×0.88m程、深度は0.83m程を計る。

埋没土：少量のロームブロックを含む暗褐色土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状から座棺(桶)葬と推察される。

重複：なし

遺物：銭貨(№4・5・6)など17世紀中期以降の遺物が出土する。

### 3号墓 第34・37図 PL.17

(旧D区1面35号土坑)

位置：290—590グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.83×0.81m程、深度は1.04m程を計る。

埋没土：礫・褐色土ブロックを含む暗褐色砂質土。

特徴：土坑の埋没は礫を用いた人為的な埋め戻しの様相を示す。他の墓坑に比べ掘削深度が深い。木質は残らないものの、形状から座棺葬と推察される。出土骨歯の分析から、埋葬者は15歳程度の若い女性とと推定される。

重複：8号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古いものと判断される。

遺物：陶器小碗(№7)、鉄釘(№8・9)など18世紀以降の遺物が出土する。出土した人骨には、重複する部位がないことから、1個体分の埋葬が確認された。

### 4号墓 第34・37図 PL.17

(旧D区1面36号土坑)

位置：290—590グリッド

形状：隅丸長方形

規模：径0.88×0.75m程、深度は0.56m程を計る。

埋没土：礫・褐色土ブロックを含む暗褐色砂質土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状から座棺葬と推察される。出土骨歯の分析から、埋葬者は壮年期後半以降の男性と推定される。

重複：8号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古いものと判断される。

遺物：磁器染付小碗(№10)など18世紀以降の遺物が出土する。出土した人骨には、重複するが部位が無いことから、1個体分の埋葬が確認された。

### 8号墓 第34・37図 PL.17・18

(旧D区1面40号土坑)

位置：290—590グリッド

形状：隅丸長方形

規模：径0.99×0.66m程、深度は0.54m程を計る。

埋没土：礫・褐色土ブロックを含む暗褐色砂質土。

特徴：埋没は礫を用いた人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状から座棺葬と推察される。出土骨歯の分析から、埋葬者は壮年期後半(30～40歳)程度の女性と推定される。既存の3・4号墓間を割って造られ、墓域の中でも比較的新しいものと推察される。重複：3・4号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が新しいものと判断される。

遺物：銭貨(№11～16)など17世紀中期以降の遺物が出土する。出土した人骨には、重複するが部位が無いことから、1個体分の埋葬が確認された。

### 5号墓 第35・37図 PL.18

(旧D区1面37号土坑)

位置：288—591グリッド

形状：隅丸方形

規模：径1.04×0.92m程、深度は0.95m程を計る。

埋没土：少量のロームブロックを含む暗褐色土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残

らないものの、形状から座棺葬と推察される。中央部に漆状の有機物が残る。出土骨歯の分析から、埋葬者は壮年期前半(30～40歳)程度の女性と推定される。

**重複：**6・10号墓と重複し、埋土の様相よりいずれの墓坑より本墓坑の方が新しいものと判断される。

**遺物：**鉄釘(No17)が出土する。出土した人骨には、重複するが部位が無いことから、1個体分の埋葬が確認された。

#### 6号墓 第35・37図 PL.18

(旧D区1面38号土坑)

位置：289-590グリッド

形状：隅丸長方形

規模：径(0.87)×0.71m程、深度は0.61m程を計る。

埋没土：少量のロームブロックを含む暗褐色土。

**特徴：**埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。頭骨が隅より出土し、全体に骨のまとまりがないことから、埋葬方法は不明。出土骨の分析からも埋葬者の性別・年齢は推定出来ない。

**重複：**5号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古いものと判断される。

**遺物：**鉄釘(No18)、煙管(No19・20)、銭貨(No21)が出土する。

#### 7号墓 第35・38図 PL.18

(旧D区1面39号土坑)

位置：289-593グリッド

形状：やや歪な円形

規模：径0.86×0.85m程、深度は0.90m程を計る。

埋没土：少量のロームブロックを含む暗褐色土。

**特徴：**埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺(桶)葬と推察される。端部に漆状の有機物が残る。

**重複：**5号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古いものと判断される。

**遺物：**陶器皿(No22)、鉄釘(No23・24)、銭貨(No25)など18世紀後半以降の遺物が出土する。

#### 9号墓 第35・38図 PL.19

(旧D区1面41号土坑)

位置：289-592グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.98×0.97m程、深度は0.90m程を計る。

埋没土：暗～黒褐色砂質土。

**特徴：**埋没は礫を用いた人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺(桶)葬と推察される。

**重複：**10号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古いものと判断される。

**遺物：**鉄釘(No26)、煙管2本(No27～30)、銅こはぜ(No31・32)、銅不明留め具(No33～36)、銭貨(No38～40)、骨角製ボタン(No37)など17世紀中期以降の遺物が出土する。

#### 10号墓 第35図 PL.19

(旧D区1面42号土坑)

位置：288-592グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.77×0.76m程、深度は0.64m程を計る。

埋没土：少量のロームブロックを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**埋没は礫を用いた人為的な埋め戻しの様相を示す。形状より墓坑と判断され、出土骨歯の分析から、埋葬者は壮年期(20～40歳)段階の女性と推定される。

**重複：**9・13号墓と重複し、検出状況より本墓坑の方が新しいものと判断される。また、5号墓と重複し、本墓坑の方が古いものと判断される。

**遺物：**遺物の出土は見られない。出土した人骨には、重複するが部位が無いことから、1個体分の埋葬が確認された。

#### 11号墓 第36・38図 PL.20

(旧D区1面43号土坑)

位置：291-592グリッド

形状：隅丸方形か

規模：径(0.42)×0.67m程、深度は0.53m程を計る。

埋没土：暗褐色砂質土。

**特徴：**埋没は礫を用いた人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺(桶)葬と推察される。

**重複：**14号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が新

## 第2章 検出された遺構と遺物

しいものと判断される。

**遺物：**鉄釘(No44)、煙管(No41)、銭貨(No42・43・45)、銅不明留め具(No46・47)、墓標台座請花(No48)など幕末頃の遺物が出土する。

### 12号墓 第36図 PL.19

(旧D区1面44号土坑)

位置：293-588グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.78×0.76m程、深度は0.49m程を計る。

埋没土：やや粘性をもつ暗褐色土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。出土遺物・埋葬骨共に検出されていないが、形状より墓坑と判断される。深度も浅く、小児の直葬の可能性もある。

重複：なし。

遺物：本遺構に伴う遺物の出土はみられない。

いものと判断される。

**遺物：**墓標台座請花(No49)などが出土する。

**墓域概観** D区検出の近世墓坑群は、14基の土坑墓で形成され、全体形状は北側部を開口する南北に長いコの字形を呈すると推察され、付近に現在も点在する斜面上の狭い平坦地を利用して造られた小規模な単位の家墓と同様のものであったと考えられる。

後掲の墓坑上に造立されていたと思われる14基の石造物(墓標)に記された紀年銘から、寛保元年(1741)から天明12(1841)年の100年間に渡る墓地であることと、記された法名から成人男子5名、成人女子6名、子供2名、不明1名の墓であることが読み取れる。一世代20年ほどとして5～6世代、ちょうど成人男女の人数とも一致する。この造営期間内には、天明3(1783)年の浅間山噴火の大災害をも含み、天明の浅間焼け以降にも同所に4基の墓が作られていることから、復興後にも村の営みが続けられていたことの証と言える。

### 13号墓 第36図 PL.19

(旧D区1面45号土坑)

位置：287-591グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.65×0.63m程、深度は0.58 m程を計る。

埋没土：暗褐色砂質土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺(桶)葬と推察される。

重複：近接はするものの重複はない。

遺物：遺物の出土は見られない。

### 14号墓 第35・39図 PL.20

(旧D区1面46号土坑)

位置：287-591グリッド

形状：楕円形か

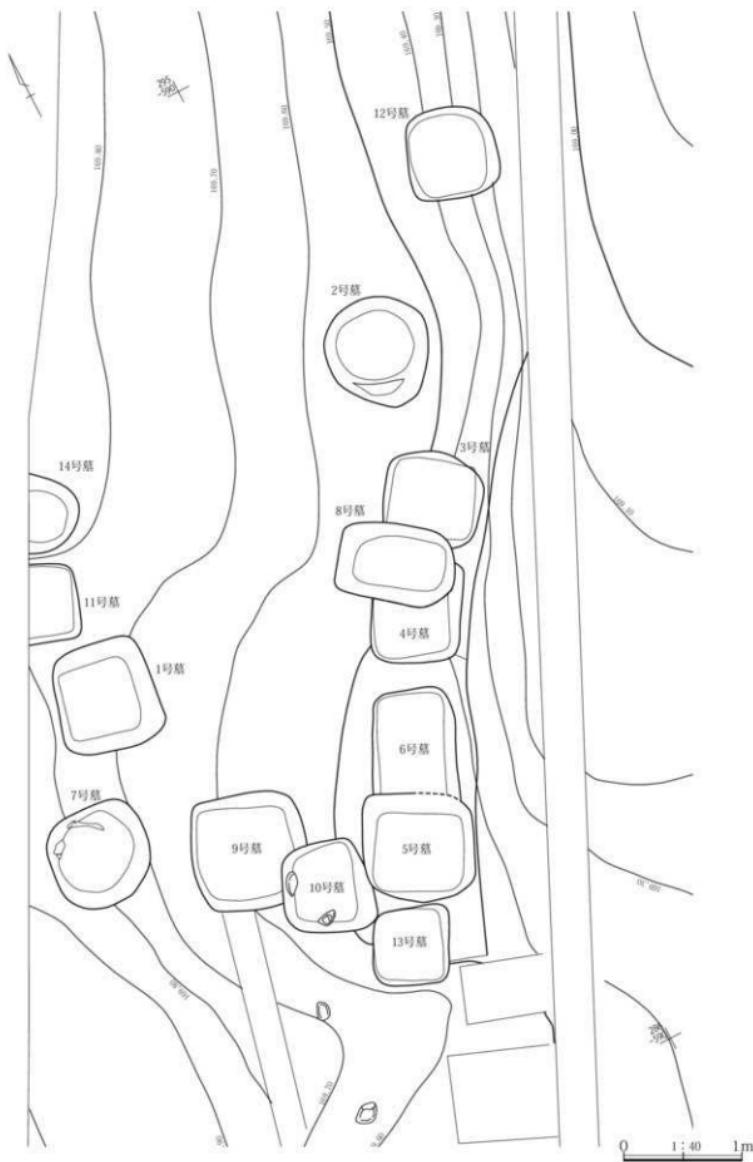
規模：径(0.42)×0.68m程、深度は1.00 m程を計る。

埋没土：暗褐色砂質土。

特徴：埋没は人為的な埋め戻しの様相を示す。木質は残らないものの、形状および棺釘の出土から座棺(桶)葬と推察される。

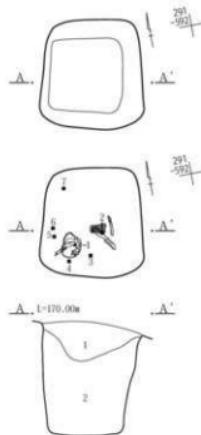
重複：11号墓と重複し、埋土の様相より本墓坑の方が古

第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物



第33図 第1面 墓抗群全体図

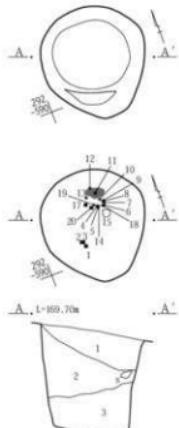
1号墓



1号墓SPA-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。少量の径20～50mmのロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 繊りなし。粘性ややあり。少量のローム土を含む。下層に転化した白色のワックスのブロックあり。

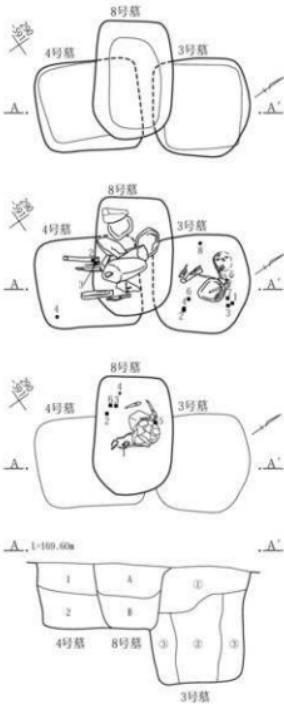
2号墓



2号墓SPA-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。径5mmの大繩を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 繊りわずかにあり。粘性あり。微量のローム土を斑状に含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。

3・4・8号墓



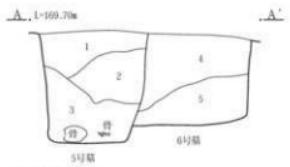
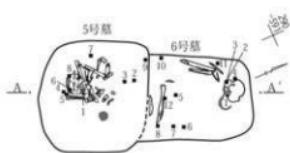
3・4・8号墓SPA-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 粘性やや弱。繊りやや強。少量の砂粒(As-A)と小繩を含む。〔36号土坑〕
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・繊りやや弱。砂粒(As-A)・小繩と少量の褐色土小ブロックを含む。〔36号土坑〕
- ① 暗褐色土(10YR3/4) 粘性・繊りやや強。少量の砂粒(As-A)と小繩を含む。〔35号土坑〕
- ② 暗褐色土(10YR3/3) 粘性やや弱。繊り弱。多量の砂粒(As-A)と繩を含む。〔35号土坑〕
- ③ 暗褐色土(10YR3/4) 粘性・繊りやや強。少量の砂粒(As-A)・繩と褐色土小ブロックを含む。〔35号土坑〕
- A 暗褐色土(10YR3/4) 粘性・繊りやや強。多量の褐色土小ブロックと少量の砂粒を含む。〔40号土坑〕
- B 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・繊りやや弱。多量の砂粒と少量の褐色土小ブロックを含む。〔40号土坑〕

0 1:40 1m

第34図 第1面 1・2・3・4・8号墓平・断面図

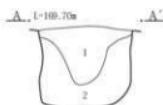
5・6号墓



5号墓

- 5・6号墓SPA-A'
- 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。微量のロームを斑状に含む。
  - 褐色土(10YR4/4) 粘質土。繊りややあり。粘性やや。
  - 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。微量のロームを斑状に含む。
  - 暗褐色土(10YR3/4) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。少量のローム土を斑状に含む。
  - 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。

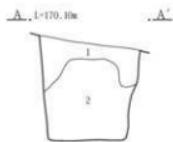
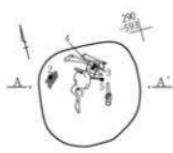
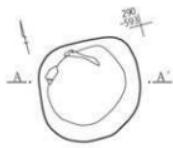
10号墓



10号墓SPA-A'

- 黒褐色土(10YR3/2) 繊りわずかにあり。粘性少。多量のAs-Aを含む。
- 黒褐色土(10YR3/2) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。径30～50mm大のロームブロックを少量含む。

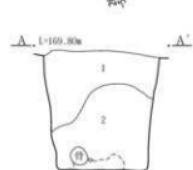
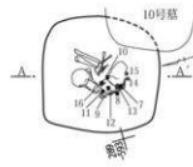
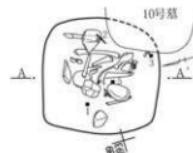
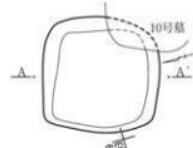
7号墓



7号墓SPA-A'

- にぶい黄褐色土(10YR4/3) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。少量のローム土を斑状に含む。
- 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。

9号墓



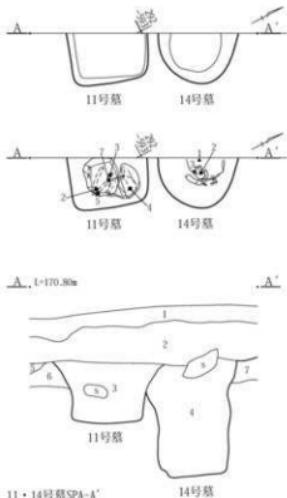
9号墓SPA-A'

- 暗褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性ややあり。微量のローム土を斑状に含む。
- 黒褐色土(10YR3/2) 繊りわずかにあり。粘性ほぼなし。



第35図 第1面 5・6・7・9・10号墓平・断面図

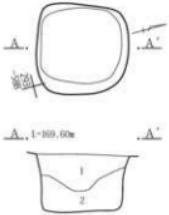
## 11・14号墓



11・14号墓SPA-A'

- 1 表土
- 2 喀褐色土(10YR3/3) 繊りややあり。粘性なし。As-Aと微量の径1~5mmの大白色軽石を含む。
- 3 喀褐色土(10YR3/3) やや砂質。繊りややあり。粘性ほぼなし。As-Aと微量の径10mmの大礫を含む。[43号土坑]
- 4 喀褐色土(10YR3/3) 繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。As-Aと微量の径5mmの大礫を含む。[46号土坑]
- 5 As-A層
- 6 黒色土(10YR2/1) ややシルト質。繊りややあり。粘性わずかにあり。
- 7 喀褐色土(10YR3/4) 繊りあり。粘性わずかにあり。

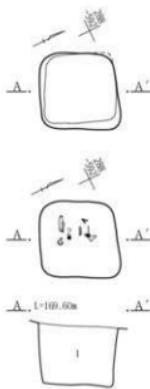
## 12号墓



12号墓SPA-A'

- 1 喀褐色土(10YR3/3) やや砂質。繊りなし。粘性なし。多量のAs-Aを含む。
- 2 喀褐色土(10YR3/4) やや粘土質。繊りややあり。粘性ややあり。

## 13号墓

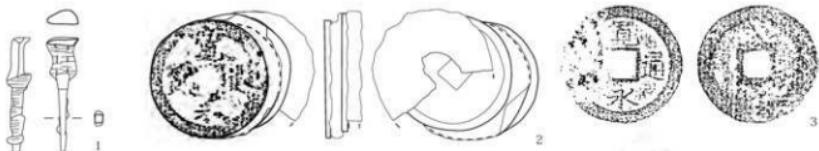


13号墓SPA-A'

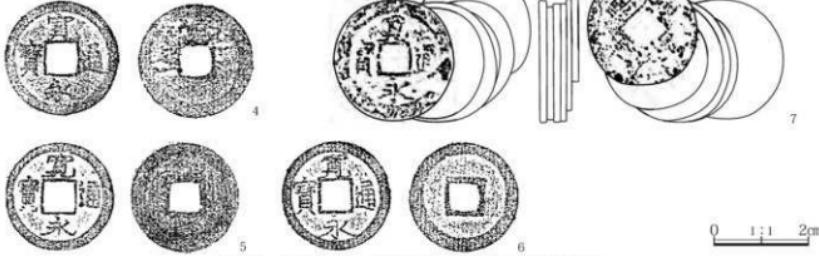
- 1 喀褐色土(10YR3/3) わずかに砂質。繊りわずかにあり。粘性わずかにあり。As-Aを含む。

0 1:40 1m

## 1号墓出土遺物



## 2号墓出土遺物



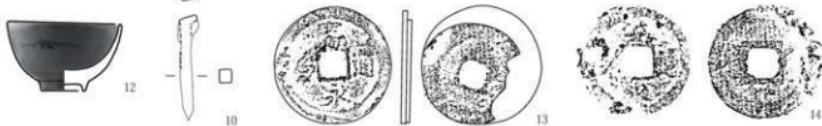
0 1:1 2cm

第36図 第1面 11~14号墓・断面図、墓出土遺物(1)

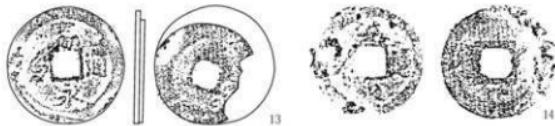
## 3号墓出土遺物



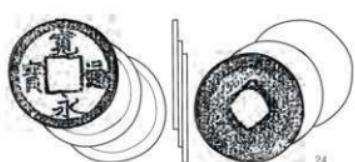
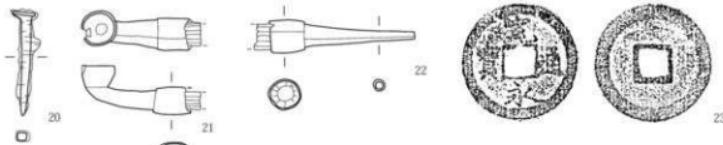
## 4号墓出土遺物



## 8号墓出土遺物



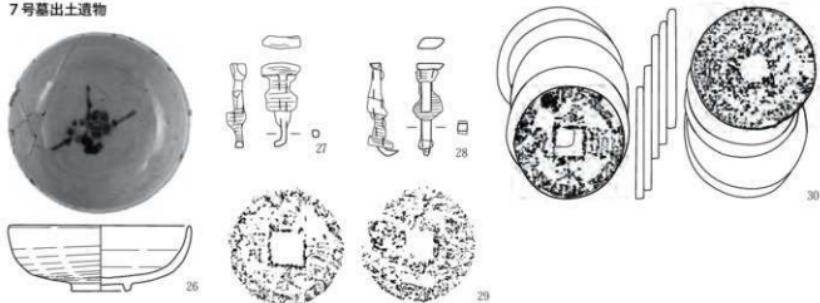
## 6号墓出土遺物



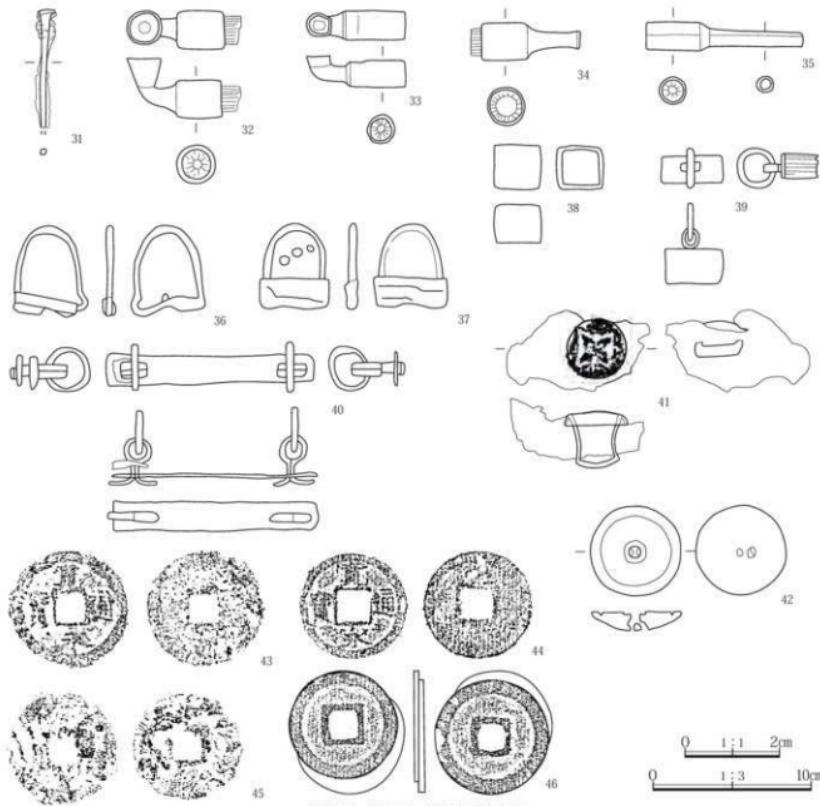
0 1:1 2cm  
0 1:3 10cm

第37図 第1面 墓出土遺物(2)

7号墓出土遺物

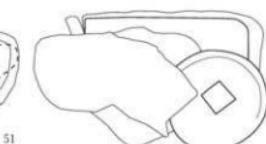
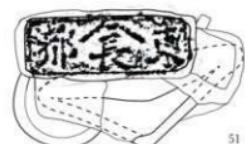
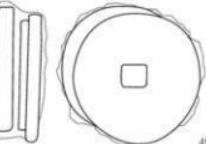
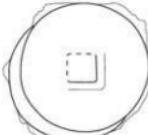
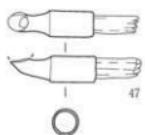


9号墓出土遺物

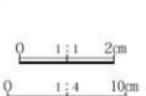
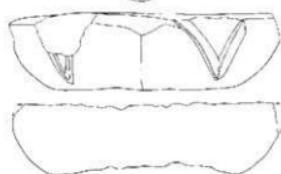
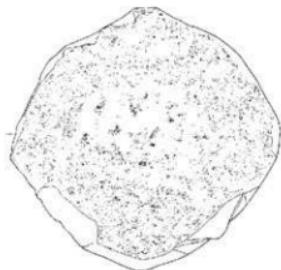
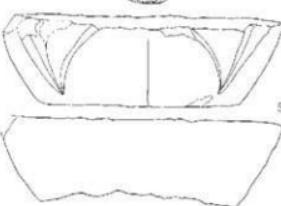
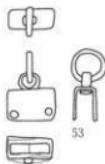
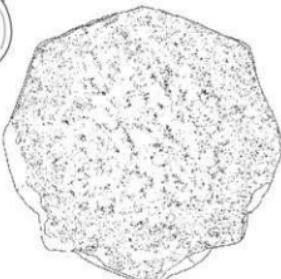


第38図 第1面 墓出土遺物(3)

11号墓出土遺物



14号墓出土遺物



-○-



56



第39図 第1面 墓出土遺物(4)

第8表 積計測表

区	番号	遺構	グリッド	平面形	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	深 さ (cm)	長軸方位	旧遺構名	神 国 番	PL番号	備考
D	1	墓	290・592	圓丸方形	92	83	95	N-13°-E	33号土坑	第34回		
D	2	墓	292・589	稍円形	93	88	83	N-20°-E	34号土坑	第34回		
D	3	墓	290・589	圓丸方形	83	81	104	N-52°-W	35号土坑	第34回		
D	4	墓	290・590	圓丸長方形	88	75	56	N-27°-E	36号土坑	第34回		
D	5	墓	288・591	圓丸長方形	104	92	95	N-60°-W	37号土坑	第35回		
D	6	墓	289・590	圓丸長方形	(87)	71	61	N-25°-E	38号土坑	第35回		
D	7	墓	289・593	円形	86	85	90	N-16°-E	39号土坑	第35回		
D	8	墓	290・590	圓丸長方形	99	66	54	N-52°-W	40号土坑	第34回		
D	9	墓	289・592	圓丸方形	98	97	90	N-20°-E	41号土坑	第35回		
D	10	墓	288・592	圓丸方形	77	76	64	N-18°-E	42号土坑	第35回		
D	11	墓	291・592	圓丸方形か	-	67	25	-	43号土坑	第36回		
D	12	墓	293・588	圓丸方形	78	76	49	N-17°-E	44号土坑	第36回		
D	13	墓	287・591	圓丸方形	65	63	58	N-27°-E	45号土坑	第36回		
D	14	墓	292・592	格円形か	-	-	75	-	46号土坑	第36回		

第9表 露出土遺物

種 国 PL.No.	No.	種 類	出土位置 残存率	計測値	施上/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第36回 PL.58	1	鉄製品 釘	1号墓 完形	長 4.9 幅 0.4 重 2.7	*/*/*	頭部は折り返されている。体部には本質が残存し、1.6cmのところから木取が変化する。	*	
第36回 PL.58	2	鉄製品 新寛永	1号墓 完形	外 2.532 内 1.937 重 3.1	*/*/*	面の文字、縁、郭は明瞭。一部布痕跡が付着し文字が見えづらい。背も縁、郭が明瞭。一部さびにより見えづらい。	*	
第36回 PL.58	3	鉄製品 新寛永	1号墓 完形	外 2.544 内 2.040 重 10.0	*/*/*	鉄貫を含む4枚が接着している。4枚の内2枚が鉄貫。面が見える一枚は文字、縁、郭は明瞭。	*	
第36回 PL.58	4	鉄製品 新寛永	2号墓 完形	外 2.443 内 1.941 重 2.5	*/*/*	面、背ともに文字、縁、郭は明瞭。背に和紙のような有機物が付着している。	*	
第36回 PL.58	5	鉄製品 新寛永	2号墓 完形	外 2.323 内 1.837 重 2.4	*/*/*	面、背ともに文字、縁、郭は明瞭。面は右下の縁の幅がややくつ、背は右上の縁が抜くなっている。	*	
第36回 PL.58	6	鉄製品 新寛永	2号墓 完形	外 2.327 内 1.920 重 3.2	*/*/*	面、背ともに文字、縁、郭は明瞭。背の谷部分の崩がやや粗い。	*	
第36回 PL.58	7	鉄製品 新寛永	2号墓 完形	外 2.335 内 1.887 重 15.7	*/*/*	6枚が接着し、その内2枚は面が焼成でき、新寛永となつている。背は少しが、文字、縁、郭は明瞭。	*	
第37回 PL.58	8	陶器 小瓶	3号墓 完形	口 6.9 底 3.5	* 4.3 夾杂物微量/*/灰	内面から体部外下面に灰釉、買入が入る。体部外下面から高台は無釉。	18世紀	
第37回 PL.58	9	鉄製品 釘	3号墓 完形	長 4.4 幅 0.4 重 4.4	*/*/*	頭部は折り返していると思われるが、錆に覆われており確認できない。木質が残存し木目と横方向に見られる。	*	
第37回 PL.58	10	鉄製品 釘	4号墓 完形	長 4.5 幅 0.5 重 2.0	*/*/*	断面四角形。全角が鋒に覆われている。小口面に打ち込んだと思われる木質痕が残存するか。	*	
第37回 PL.58	11	鉄製品 新寛永	3号墓 完形	外 2.327 内 1.847 重 19.2	*/*/*	6枚が接着している。6枚の内3枚は新寛永。文字、縁、郭は明瞭。	*	
第37回 PL.58	12	肥前磁器 柴舟小瓶	4号墓 完形	口 7.3 底 2.8	* 4.3 夾杂物なし/*/灰	体部外面上に筆を描き、体部下位、高台焼と高台に繋る。内側は無文で鉄錆跡の付着物。	18世紀 紅猪口か	
第37回 PL.58	13	鉄製品 新寛永	8号墓 完形	外 2.441 内 1.980 重 4.4	* 0.225 夾杂物なし/*/灰	新寛永・古寛永の区別はさびが付着し、確認できない。一回り小さな骨の体部の破片が接着している。	*	
第37回 PL.58	14	鉄製品 新寛永	8号墓 完形	外 2.397 内 1.9 重 2.9	* 0.200 夾杂物なし/*/灰	新寛永・古寔永の区別はさびにより判断が難しいが、新寔永の質が高めである。一部布痕跡が残存する。	*	
第37回 PL.58	15	鉄製品 古寔永	8号墓 完形	外 2.543 内 1.9 重 10.1	* 0.770 夾杂物なし/*/灰	鉄貫2枚が接着する。布痕跡がさび化して甲羅。錆が多く、詳細不明。	*	
第37回 PL.58	16	鉄製品 新寛永	8号墓 完形	外 2.324 内 1.854 重 1.7	* 0.101 夾杂物なし/*/灰	面は文字、縁、郭が明瞭。背はやや崩が深いが縁、郭は明瞭。	*	
第37回 PL.58	17	鉄製品 古寔永	8号墓 一部欠損	外 2.511 内 1.942 重 2.4	* 0.138 夾杂物なし/*/灰	面は文字、縁、郭が明瞭。背は布痕と思われる痕跡が強く、縁、郭は不明瞭。	*	
第37回 PL.58	18	鉄製品 新寛永	8号墓 完形	外 2.831 内 2.139 重 4.7	* 0.153 夾杂物なし/*/灰	11枚。面、背ともに文字、縁、郭は明瞭。	*	
第37回 PL.58	19	鉄製品 釘	8号墓 完形	長 4.6 幅 0.9	* 0.6 重 3.9	*/*/*	頭部は薄い鉄の板状を折り返していると見られる。頭部から体部の上部は木質が残存している。脚部にかけては紗を含む錆に覆われている。	*
第37回 PL.58	20	鉄製品 釘	6号墓 完形	長 4.5 幅 0.55	* 0.3 重 2.7	*/*/*	横方向の本目の木質が残存している。頭は折れて、上部を平らに打たれている。	*
第37回 PL.58	21	陶製品 煙管(巻首)	6号墓 完形	長 4.2 幅 1.6	* 2.1 重 5.8	*/*/*	巻首がわずかに残存する。銀色の光沢が見られる。頭の地金の上に銀色の光沢が見られる。	*
第37回 PL.58	22	陶製品 煙管(吸口)	6号墓 完形	長 6.1 幅 1.4	* 1.4 重 6.2	*/*/*	巻首が残存する。銀色の光沢が残る。肩は削りで接合したとみられ、つなぎ目が斜と口吹まででは変化する。	*
第37回 PL.58	23	鉄製品 新寛永	6号墓 完形	外 2.500 内 2.040	* 0.141 重 3.0	*/*/*	面、背ともに文字、縁、郭が明瞭。	*
第37回 PL.58	24	鉄製品 新寛永	6号墓 完形	外 2.316 内 1.894	* 0.32 重 7.7	*/*/*	3枚が少しすつれながら、接着している。3枚とも新寛永と見られ、1番の寛永通字の脚は深く、文字、縁、郭が明瞭。	*
第37回 PL.58	25	鉄製品 新寛永	6号墓 完形	外 2.525 内 1.838	* 0.243 重 6.1	*/*/*	2枚接着し、1枚は新寛永背文。もう1枚も背側が見えていたため鉄種不明。	*

## 第1節 第1面 中世～近世の遺構と遺物

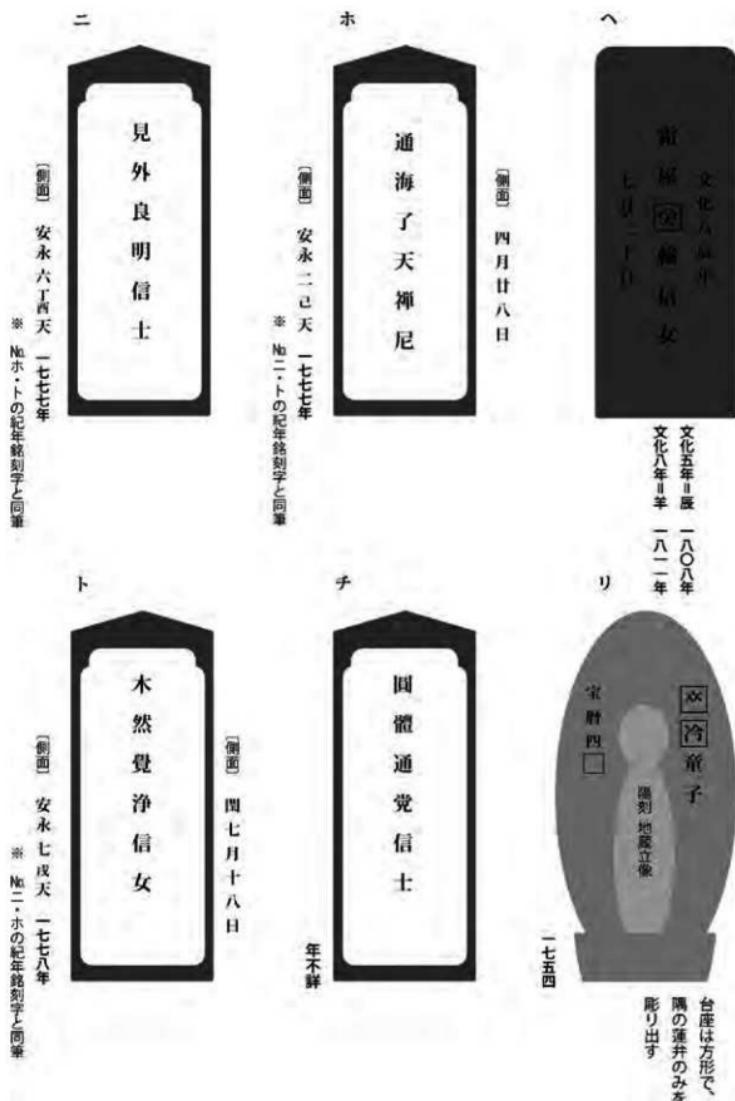
編 號 PL. No.	種 類 器 種	出上位置 残 存 率	計測値			施 工/ 焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口 幅	高 度	厚 さ			
第38回 PL.59	瀬戸・美濃 陶器皿	7号墓 ぼば完形	口 幅3.8	高 度4.2 °	厚 さ0.4	夷物雜微量/*-/灰	内面から体部外下位に灰釉、内面底部に呉須で梅樹、鉄輪で梅花を描く。体部外下位から高台は無地。	18世紀後半 梅文皿
第38回 PL.59	鉄製品 釘	7号墓 完形	長 幅0.4	厚 度0.4 重2.3	厚 度0.4	*/*/*	頭部が折れ曲がる。頭部の形状が不明。頭部の所まで本質が残存し、2.1cmのところで木取りが変化する。	*
第38回 PL.59	鉄製品 釘	7号墓 完形	長 幅0.4	厚 度3.9 重2.5	厚 度0.4 重2.8	*/*/*	頭部が「L」の字形に曲がる。本質が残存し、頭部から2.2cmで木取りが変化する。頭部の形状は木質が付着しているため不明。	*
第38回 PL.59	錢貨 新寶永	7号墓 完形	外 幅2.451 内 幅1.911	厚 度0.261 重2.5	厚 度0.4	*/*/*	全体にさびが見られる。背は特にさびが付着し、輪、郭の様子がわからぬ。	*
第38回 PL.59	錢貨 新寶永	7号墓 完形	外 幅2.414 内 幅1.795	厚 度0.718 重16.5	厚 度0.4 重16.5	*/*/*	新寶永を含む5枚が巻着している。面が見えている1枚は外径2.354cm、内径1.795cm、背が見えている1枚は外径2.631cm内径1.922cmとなっている。	*
第38回 PL.59	鉄製品 釘	9号墓 完形	長 幅5.0	厚 度0.2	厚 度2.0	*/*/*	頭部近くに楕円形の木目本質が残存している。頭部の形状は木質があり確認できないが、薄くして折られてしまつた。	*
第38回 PL.59	銅製品 煙管(撇首)	9号墓 完形	長 幅4.5 幅1.5	高 度2.5 重14.4	厚 度1.4 重12.4	*/*/*	小口から見て右側につなぎ目が確認できる。肩が太く、火皿も体部から直接接く。	*
第38回 PL.59	銅製品 煙管(撇首)	9号墓 完形	長 幅4.2 幅1.3	高 度4.4 重11.0	厚 度1.4 重13.5	*/*/*	つなぎ目は明瞭。首が直接つき、斜めに立ち上がる。	*
第38回 PL.59	銅製品 煙管(吸口)	9号墓 完形	長 幅4.2 幅1.6	厚 度1.6 重12.4	厚 度1.6 重12.4	*/*/*	肩部が残存している。肩と口付けが太く、口付けの直径は0.6cm。	*
第38回 PL.59	銅製品 煙管(吸口)	9号墓 完形	長 幅5.6 幅1.6	厚 度1.2 重13.5	厚 度1.2 重13.5	*/*/*	煙管が残存する。つなぎ目は明瞭で、口付け近くでやや太くなる。	*
第38回 PL.59	銅製品 こはぜ	9号墓 完形	長 幅4.8 幅1.4	厚 度0.8 重0.6	厚 度0.1 重0.6	*/*/*	手元の金属板に縫をかぶせて製作している。根元に当たる部分はやや内がり、構造が確認出来る。	*
第38回 PL.59	銅製品 こはぜ	9号墓 完形	長 幅4.8 幅1.4	厚 度0.1 重0.8	厚 度0.1 重0.8	*/*/*	同構造の2点が異なると見られる。根元に当たる部分には織維質が残存しており、紐の可能性がある。	*
第38回 PL.59	銅製品 不明	9号墓 完形	長 幅1.1 幅0.8	厚 度1.0 重1.5	厚 度1.0 重1.5	*/*/*	四角形の筒状銅製品。つなぎ目は見られず、鍛造製品の可能性がある。	*
第38回 PL.59	銅製品 留め具	9号墓 完形	長 幅3.8 幅0.8	高 度0.5 重1.2	厚 度0.5 重1.2	*/*/*	上面に縫をを持つ金属製品。布と思われる有機物を挟み込んでいる。	*
第38回 PL.59	銅製品 留め具	9号墓 完形	長 幅4.4 幅0.6	高 度1.1 重2.0	厚 度1.1 重2.0	*/*/*	一つの縫を持つ金具。先割れ頭と下の金属板に通され、接続される。一部に布が付着しており、生地を取り付けた可能性がある。	*
第38回 PL.59	銅製品 留め具	9号墓 完形	長 幅1.3 幅1.3	高 度1.2 重1.3	厚 度1.2 重1.3	*/*/*	本質が一部付着し、金属製の留め具により、本質の裏側で留められている。表面には文字の先端が尖る形の文様が彫られている。	*
第38回 PL.59	骨角製品か ボタン	9号墓 完形	球 形1.9 - -0.8	厚 度0.4 重0.8	厚 度0.4 重0.8	*/*/*	球状、平らな面にはやや大きめの穴が1つ空き、球状の面上には2つの穴が空く。2つの穴の大きさは異なる。	*
第38回 PL.59	錢貨 新寶永	9号墓 完形	外 幅2.532 内 幅2.048	厚 度0.224 重3.2	厚 度0.224 重3.2	*/*/*	面上の文字、輪、郭は明瞭。背には布が一部付着している。背の印はやや深い。	*
第38回 PL.59	錢貨 新寶永	9号墓 完形	外 幅2.307 内 幅1.924	厚 度0.258 重2.9	厚 度0.258 重2.9	*/*/*	面上の文字、輪、郭は明瞭。背はやや印が浅く不明瞭。	*
第38回 PL.59	錢貨 錢種不明	9号墓 完形	外 幅2.444 内 幅1.824	厚 度0.248 重6.1	厚 度0.248 重6.1	*/*/*	全体に布痕跡や有機質が付着し、錢種や内径が確認出来ない。	*
第38回 PL.59	錢貨 錢種不明	9号墓 完形	外 幅2.302 内 幅1.924	厚 度0.134 重2.9	厚 度0.134 重2.9	*/*/*	2枚が巻着し、両面とも背が見えている。2枚の背の印は明瞭。	*
第38回 PL.59	銅製品 煙管(撇首)	11号墓 火皿欠損	長 幅1.1 幅1.1	高 度6.8 重6.8	厚 度6.8 重6.8	*/*/*	煙管が残存している。火皿部分が欠損している。つなぎ目は明瞭ではないが、小口から見て右側にある。	*
第39回 PL.59	銅製品 不明	11号墓 火皿欠損	外 幅2.708 内 幅2.166	厚 度0.276 重4.0	厚 度0.276 重4.0	*/*/*	草文。面上の文字、輪、郭は明瞭。背はやや不明瞭。	*
第39回 PL.59	銅製品 鉄鍊	11号墓 火皿欠損	外 幅2.848 内 幅2.048	厚 度0.136 重15.4	厚 度0.136 重15.4	*/*/*	3枚程度の鉄鍊が巻着している。内1枚厚みがあり、2枚が鍊により固定している可能性と鎖継れの可能性がある。	*
第39回 PL.59	銅製品 釘	11号墓 火皿欠損	長 幅5.0 幅0.3	厚 度0.3 重2.5	厚 度0.3 重2.5	*/*/*	本質が残存し、頭部から2cmで本目が変化する。頭部はやや小さく、折れていると見られる。	*
第39回 PL.59	銅製品 留め具	11号墓 火皿欠損	長 幅5.0 幅2.6	厚 度(2.0) 重18.1	厚 度(2.0) 重18.1	*/*/*	寛永通宝、振り玉形火打金、扇切り入り金銅製品の文書は「東山(山)門」と記載される布に巻きつけて出土している。扇切り入り金銅製品の文書は「東山(山)門」と記載される。	*
第39回 PL.59	銅製品 留め具	11号墓 火皿欠損	長 幅4.7 幅0.5	厚 度1.3 重2.2	厚 度1.3 重2.2	*/*/*	留め金状の製品。座金と台座状の金属を先割れ頭で固定し、上面に環をつけた。	*
第39回 PL.59	銅製品 留め具	11号墓 火皿欠損	長 幅1.1 幅1.0	厚 度0.5 重0.8	厚 度0.5 重0.8	0/0/0	環が丈夫に付き、他の布などに留められると思われる部品。布などは頭で継続されると見られる。先割れ頭を環に通して接続する。	*
第39回 PL.59	石造品 蜻花	11号墓 ぼば完形	長 幅33.2 幅34.0	厚 度9.5 重12300	秋開石/*/*	八種の頭部があるが、正面側のみ蓮花纹加工。上面中央には鋲製工具痕が残る部分があり、その形から上ののついていた石造物は正面前側が直線的で裏側がやや丸味がある。下部はやや内凹み、同様な工具痕が剛間に残る。左前極・部欠損。	江戸時代	
第39回 PL.60	石造品 蜻花	14号墓 ぼば完形	長 幅34.8 幅35.2	厚 度11.4 重17600	粗粒輝石安山岩	八種の頭部があるが、正面側のみ蓮花纹加工。上面中央には鋲製工具痕が残る部分があり、その形から上ののついていた石造物は正面前側が直線的で裏側がやや丸味がある。下部はやや内凹み、同様な工具痕が剛間に残る。左前極・部欠損。	江戸時代	
第39回 PL.60	ガラスか ビーズ	14号墓 完形	径 幅0.6 幅- -	厚 度- 重0.3	厚 度- 重0.3	*/*/*	非常に軽くプラスチックの可能性もある。球状で穴が貫通している。	*



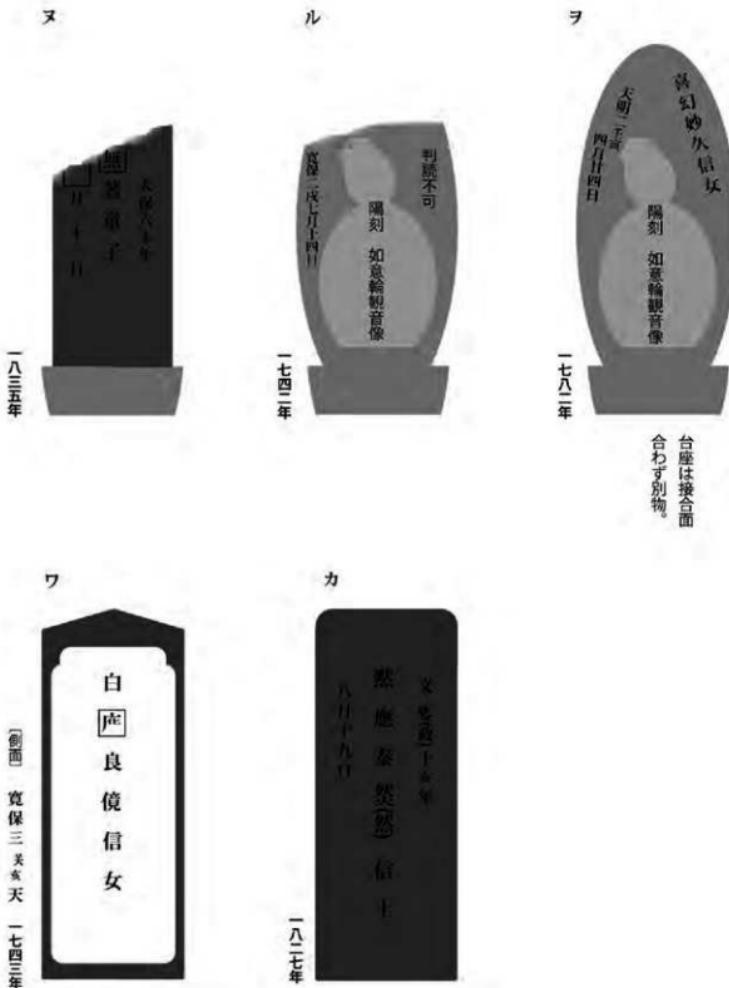
墓坑上に造立されていた近世石造物(墓標)群



第40図 墓標紀年銘(1)



第41図 墓標紀年銘(2)



第42図 墓標紀年銘(3)

第10表 D区近世墓 上部石造物(墓標)一覧

西暦	紀年銘	法名	主尊・刻字
イ	1841 天保12年6月6日	信士	
ロ	1741 寛保元年6月10日	信士	
ハ	1742 寛保2年	信女	
ニ	1777 安永6年	信士	赤・トと同一工人記
ホ	1773 安永2年4月28日	禪尼	二・トと同一工人記
ヘ	1808 文化5年7月20日	信女	
ト	1778 安永7年7月18日	信女	二・ホと同一工人記
チ	不明	信士	
リ	1754 宝曆4年	童子	地蔵像
ヌ	1835 天保6年 月23日	童子	
ル	1742 寛保2年7月14日	不明	如意輪觀音像
ヲ	1782 天明2年4月24日	信女	如意輪觀音像
ワ	1743 寛保3年	信女	
カ	1827 文政10年8月19日	信士	成人男子
ヌ	1835 天保6年 月23日	童子	子供
イ	1841 天保12年6月6日	信士	成人男子
カ	1827 文政10年8月19日	信士	成人男子

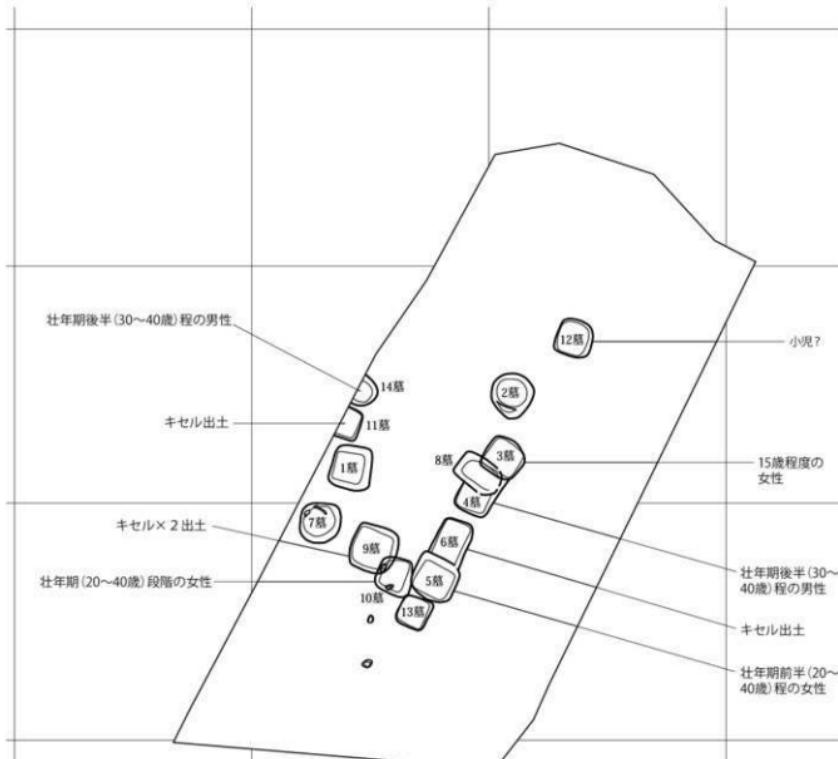
## 【年代順】

西暦	紀年銘	法名	性別等
ロ	1741 寛保元年6月10日	信士	成人男子
ハ	1742 寛保2年	信女	成人女子
ル	1742 寛保2年7月14日	不明	不明
ワ	1743 寛保3年	信女	成人女子
リ	1754 宝曆4年	童子	子供
ホ	1773 安永2年4月28日	禪尼	成人女子
ニ	1777 安永6年	信士	成人男子
ト	1778 安永7年7月18日	信女	成人女子
ヲ	1782 天明2年4月24日	信女	成人女子
ヘ	1808 文化5年7月20日	信女	成人女子
カ	1827 文政10年8月19日	信士	成人男子
ヌ	1835 天保6年 月23日	童子	子供
イ	1841 天保12年6月6日	信士	成人男子
カ	不明	信士	成人男子

※ 寛保元(1741)年～天保12(1841)年の約100年間の墓所

※ 成人男性5名、成人女性6名、子供2名、不明1

名(墓標法名より)

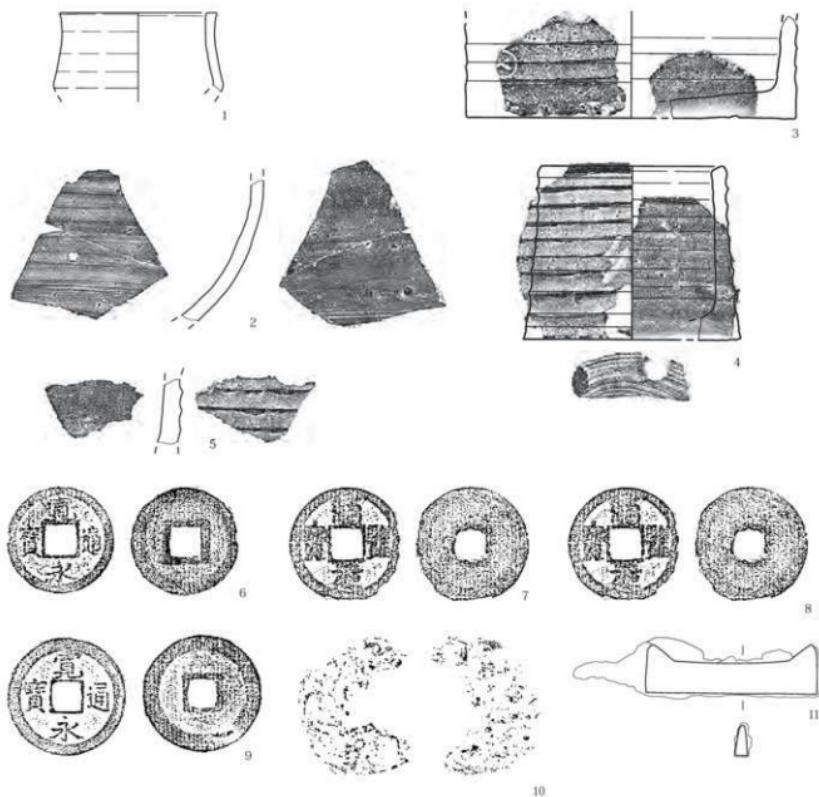


第43図 被葬者の性別・年齢等

## 第5項 第1面遺構外出土遺物

出土は、主に各調査区の第1面遺構確認時に検出面において出土した物で、地元産(安中焼・自性寺焼)を含む

陶器片と窯道具、古銭他である。出土した窯道具の中には、自性寺焼の最後の陶工とされる須藤勇次郎の窯印「丸にト」の入った匣鉢(No.3)も含まれている。

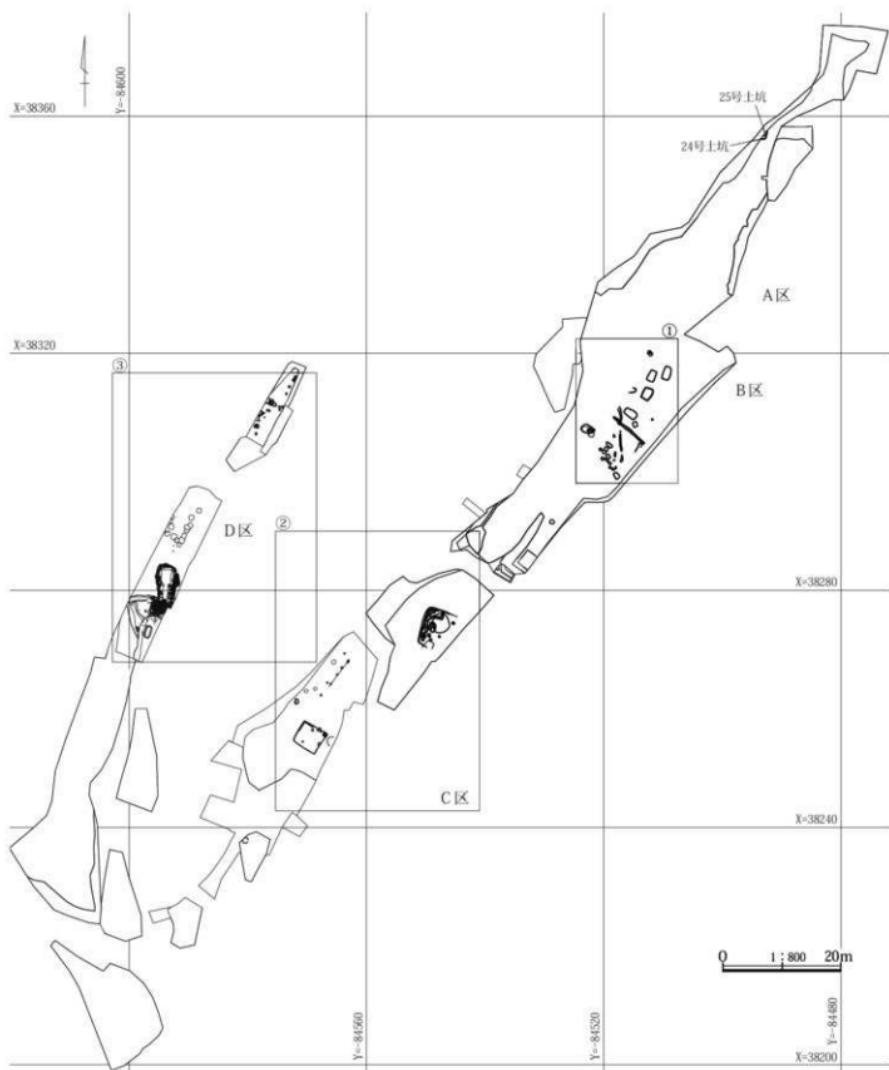


第44図 第1面 遺構外出土遺物

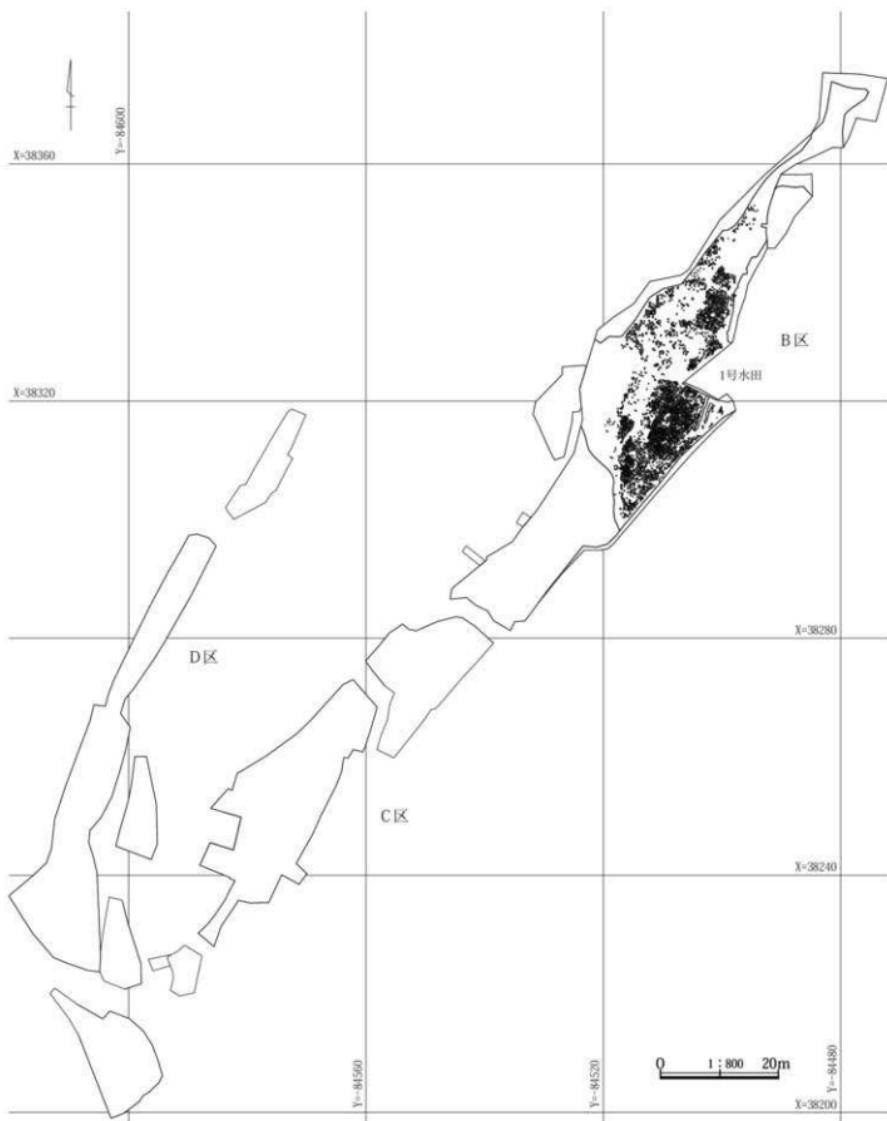
第11表 第1面遺構外出土遺物

所 在 地 PL.No.	種 類 種 別	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備 考
					口	底	
第44号 PL.60	1 安中陶器 口縁部破片	B区 底	口 (9.9) 底 *	高 * 灰	夾雜物微量//	燒成物微量//	素焼きの製品。ロクロ成形で口縁端部は平坦をなし、体部 内面に砂が付着。焼き締められている。
第44号 PL.60	2 安中陶器 鉢か 体部破片	B区 底	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物微量//	燒成物微量//	素焼きの鉢製品か。下位に沈窓が巡る。
第44号 PL.60	3 安中陶器 照鉢	C区 体部から底部	口 *(20.8) 底 *	高 * 灰	夾雜物少量//	燒成物微量//	体部外面は粗いロクロ目が現り、体部下位には丸の中に 「ト」字の印記か。体部外面は高温酸化で橙褐色に焼結まる。
第44号 PL.60	4 安中陶器 照鉢	B区 1 / 5	口 (11.5) 底 (13.8)	高 * 灰 *	11.0	夾雜物少量//	口縁端部は緩く内側に傾き、体部外面は粗いロクロ目が現 る。体部下位から底部にへらで彫り込む。
第44号 PL.60	5 安中陶器 体部破片	B区 底	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物少量//	燒成物微量//	体部外面は粗いロクロ目が現る。
第44号 PL.60	6 銭貨 新壹永 完形	C区 内	2.296 1.857	厚 0.121 重 2.7	/*/*	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	*
第44号 PL.60	7 銭貨 開元通寶 完形	C区 内	2.466 2.065	厚 0.123 重 2.7	/*/*	背上方。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の郭がわず かに右が太い。	*
第44号 PL.60	8 銭貨 初聖元貞 完形	D区 内	2.379 2.014	厚 0.118 重 2.4	/*/*	裏書体。面の文字、輪、郭は明瞭。背はやや輪、郭が見え づらい。	*
第44号 PL.60	9 銭貨 新壹永 完形	D区 内	2.536 1.999	厚 0.134 重 3.5	/*/*	面、背ともに輪、郭は明瞭。文字は一部が潰れていて、見 えづらい。	*
第44号 PL.60	10 銭貨 践鉄 4 / 3	D区 外 - 内 -	厚 0.419 重 2.2	/*/*	全体がさびで覆われている。輪の一部が凹みとして確認で きる。	*	
第44号 PL.60	11 武製品 火打金 宝形	D区 内	長 7.3 幅 1.5	厚 0.8 重 33.0	/*/*	かすがい形の火打金に木質と遺物が含まれる可能性のある 鍔が付着している。	*
PL.60	12 銭貨 表採 完形	D区 外 - 内 -	厚 0.472 重 1.551	厚 0.541 重 15.1	/*/*	釘と銭貨5枚纏めしている銭種は背面のみが見えているた めわからない。纏着している釘は完形。	*
PL.60	13 安中陶器 鉢か 高台部	B区 底	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物少量//	燒成物微量//	素焼きの鉢型製品か。高台は幅広で低く削り出す。
PL.60	14 安中陶器 輪トチ 1 / 5	C区 底	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物少量//	燒成物微量//	素焼きの窯道具で表面はナデ。脚が1か所残存する。
PL.60	15 漆戸・美濃 陶器 第二次加工品	B区 高台部	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物微量//	内面に灰釉、高台端部を餘く体部外面下位と高台内に黒褐 色鉛釉。高台脇を細かく打ち欠いて円盤状に加し。	江戸時代 腰錆鏡
PL.60	16 肥前陶器 第二次加工品 か	B区 体部下位から高 台部	口 * 底 *	高 * 灰	夾雜物微量//	内面は銅錆釉を施し、底部は蛇の目軋剥ぎ。体部外面は灰 釉、体部外面下位から高台は無釉。体部下位から高台の一 部を粗く打ち欠いている。	18世紀

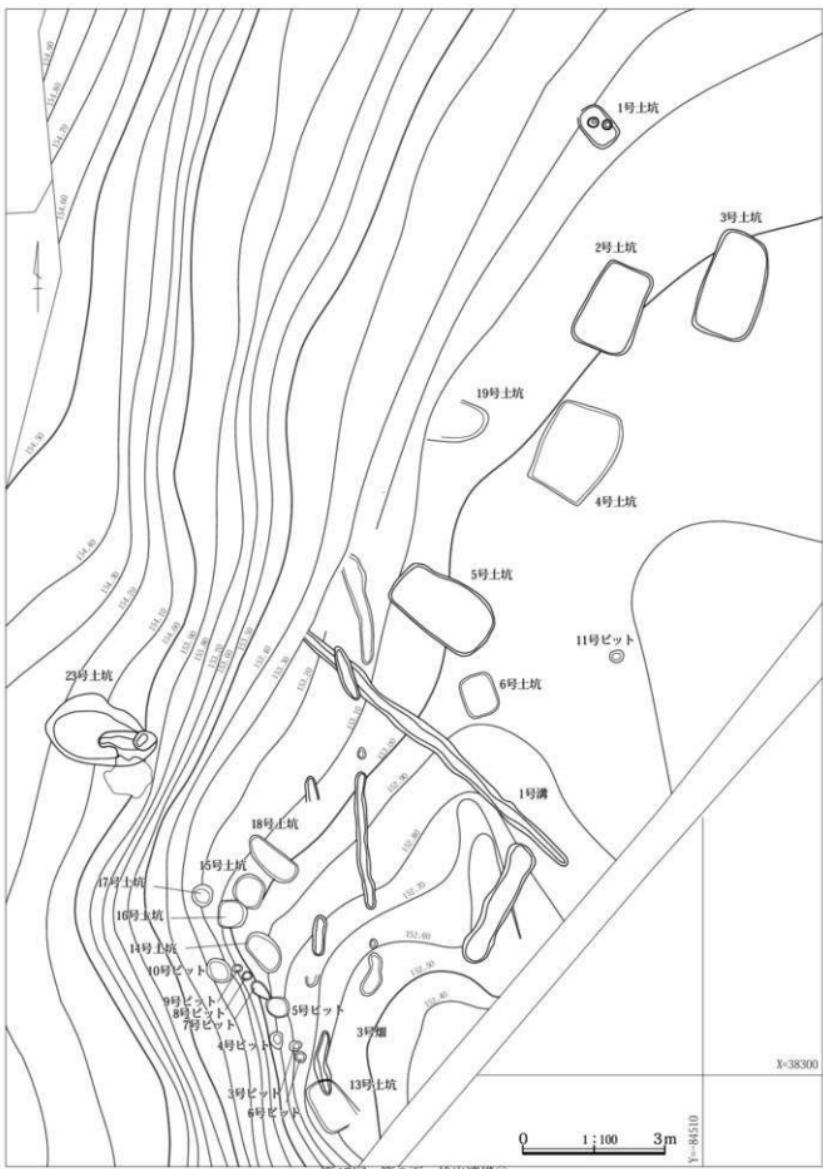
## 第2節 第2面 古墳時代～平安時代の遺構



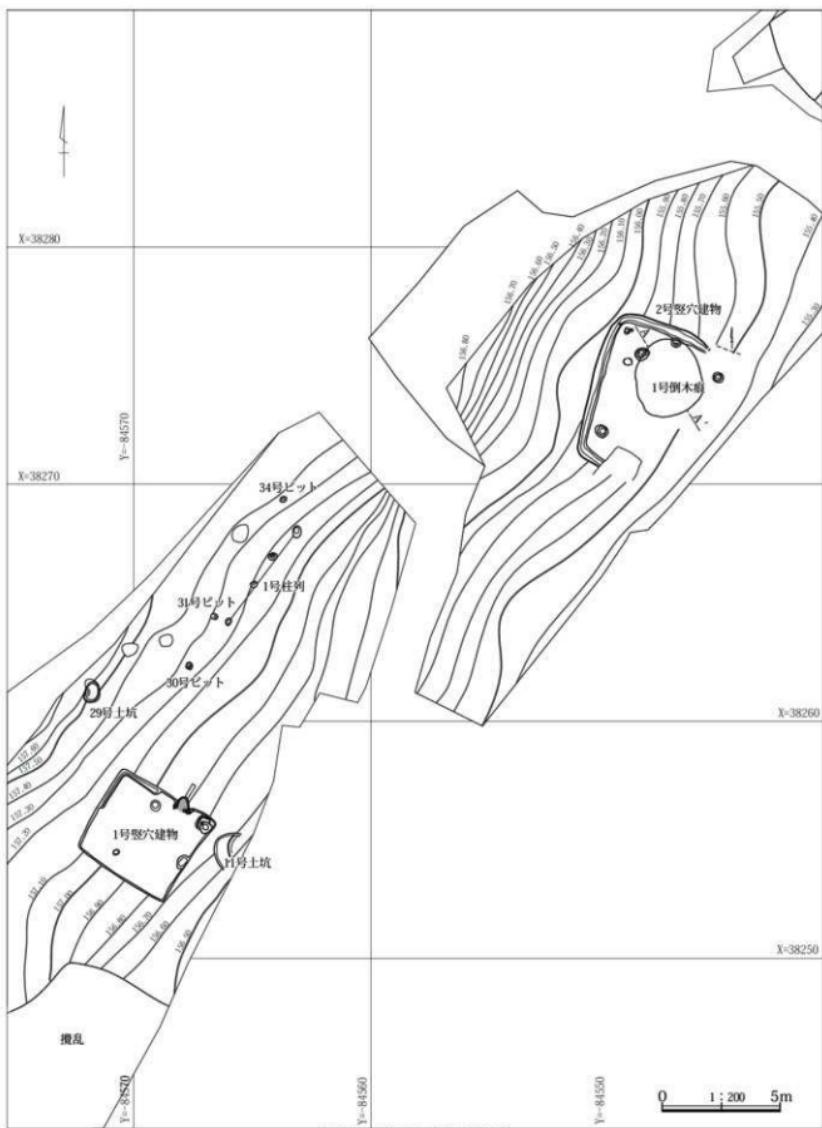
第45図 第2面 検出遺構全体図(1)



第46図 第2面 検出遺構全体図(2)

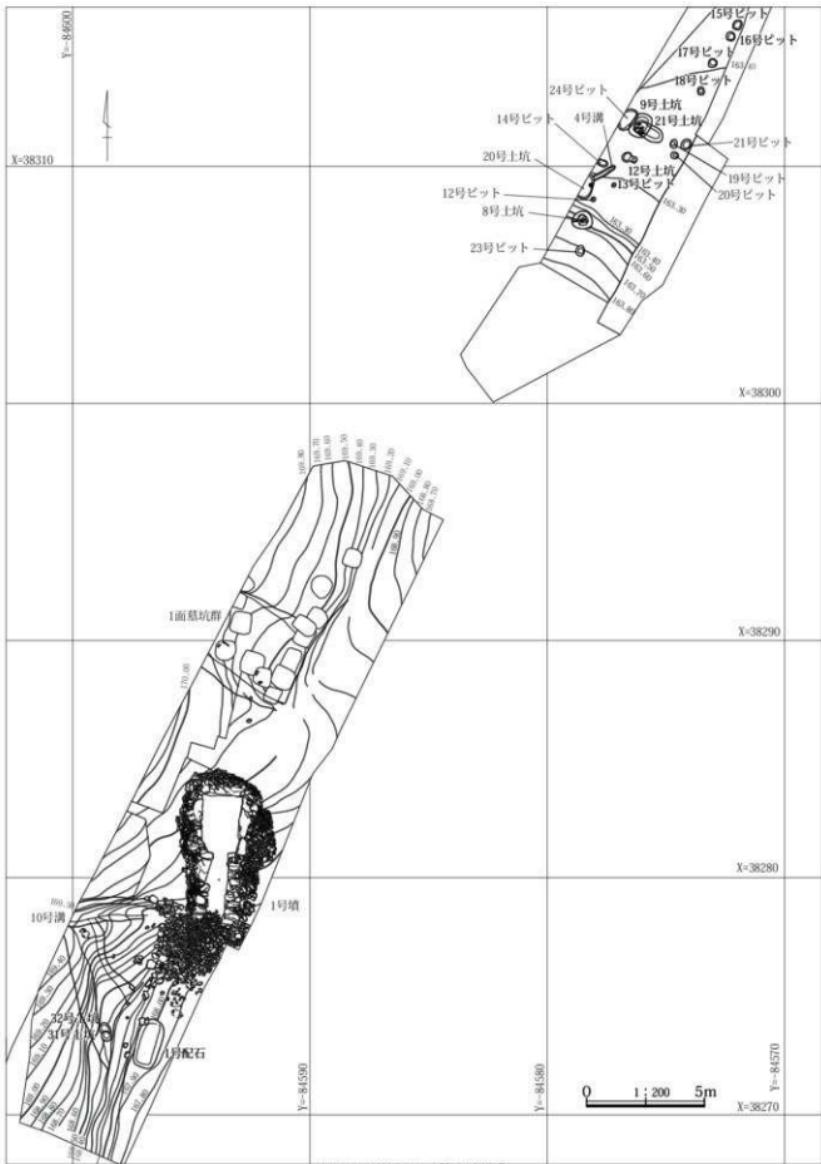


第47回 第2面 横出遺稿①



第48図 第2面 検出遺構②

第2章 検出された遺構と遺物



第49図 第2面 検出遺構③

**2面検出遺構の概要：**調査時の第2遺構検出面として、As-B層(天仁元(1108)年の浅間山噴火テフラ)を除去した直下面を基本とした。検出される遺構はAs-B層下以前の遺構が原則ではあるが、調査地点によってはテフラが掩蔽され、所謂As-B混土となっている場合も含まれる。従つて検出される遺構の中には、平安時代末よりやや新しい中世初頭の遺構も含まれる。

## 第1項 穴穴建物

調査区C区の北東部より2軒の穴穴建物が検出される。調査区の幅が狭く、集落の全容を察するには至らないが、検出された2棟の建物間の間隔が広く、周囲には隣接する建物もみられないことから、傾斜地帯の限られた平坦面という立地上に営まれた極小規模な集落であろうと推察される。

### 1号穴穴建物 第50・54図 PL.23・24

位置：252～257-566～572グリッド

規模：4.46×4.06m程、深度は0.33m程を計る。

形状：正方形

主軸方位：N-32°-E

埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。床面：炭化物・灰・焼土を含む黒褐色砂質土による貼り床を有する。南西コーナー部の床面のみ他所よりやや高く、北側からの壁周溝も途絶えることから、出入り口等の施設の存在が窺える。全体に南東側に向けて床面の傾斜が見られるが、これは後世の地形変動による可能性が高い。

カマド：北東壁中央や南東寄りに位置する。左右袖部の芯材として自然礫が据えられる。残存する礫は少ないが、床面上より引き抜かれたであろう礫が多く出土していることから、礫を組み芯材としたカマドであったものと推察される。燃焼部は壁ラインのやや内側に位置し、煙道部に向けて緩やかに傾斜する。煙道部は壁よりあまり突出せず、急峻に立ち上がる。

柱穴：南東壁中央部壁際より、径0.65×0.45m、深度0.30m程を計る楕円形の柱穴1基のみを検出する。建物内部には他の柱穴は確認されておらず、屋外柱穴の存在が想定されるが、上面の削平により周囲から柱穴は検出

しえなかった。

**貯蔵穴：**東コーナー部壁際より、径0.45×0.49m、深度0.54m程を計り、楕円形を呈する貯蔵穴が1基検出される。カマド側の床面上に比高差7cm程のL字形の段差を有することから、蓋状の施設の存在が推察される。

**壁周溝：**北コーナー部の壁際のみに、幅15～20cm、深度10cm程を計る壁周溝が検出される。

**掘り方：**北西壁側1/3、および南コーナー部に高まりを有する。また、中央やや北東壁寄りにピット状の掘り込みを有する。

**重複：**なし。

**特徴：**調査区(C区)中央部に在り、周囲には隣接する建物がみられない。傾斜地帯の限られた平坦面という立地上に営まれた小規模集落と考えられる。建物の使用は、カマド内の焼成化の様相などから、短期間ではなく長期的な居住の痕跡が窺える。建物の時期については、出土遺物より古墳時代後期と推定される。

**遺物：**埋土中より土師器杯(№1・2・3)・須恵器碗(№5)・土師器短頸壺(№6)が、床面直上より須恵器杯身(№4)・土師器壺(№7)が出土する。また、埋土中より鉄製鋸錐車輪(№8)と滑石製模造品有孔方板(№16)と白玉7点(№9～15)が出土する

### 2号穴穴建物 第51・52・55図 PL.25・26

位置：270～277-545～551グリッド

規模：6.6×(3.7)m、深度は0.30m程を計る。南東側の3/4強が調査区外に在る。

面積：計測不能

形状：不明

主軸方位：N-19°-E

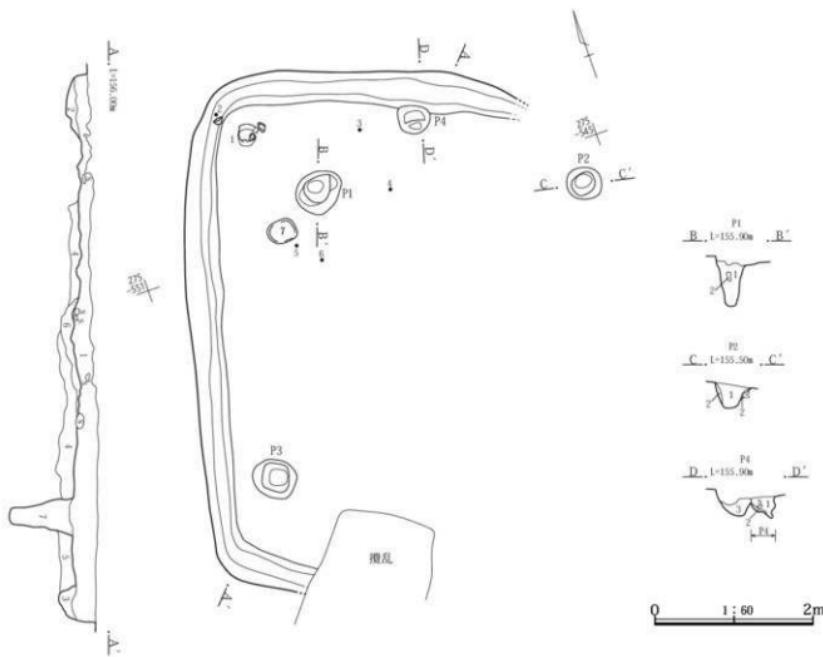
埋没土：黒褐色砂質土による自然埋没の様相を呈する。床面：炭化物を含む黒褐色砂質土による貼り床を有する。検出時の状況は平坦では無く、凹凸が確認された。これは後世の地形変動による可能性が高いものと考えられる。

カマド：調査範囲内においては検出されず、調査区外の東壁に設けられていた可能性が高い。

柱穴：北西(P1)・北東(P2)・南西(P3)コーナー寄りから、径0.40～0.61m、深0.36～0.87mを計る柱穴が3基検出され、主柱穴と考えられる。この他、掘り方



第50図 第2面 1号壁穴建物平・断面図



## 2号竖穴建物SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りあり。少量の黄褐色粒子・白色粒子・炭化物粒を含み、径10～50mm程の礫と径100mm程の礫を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 繊りあり。少量の白色粒子・黄褐色粒子・炭化物粒を含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の黄褐色土ブロック・黄褐色粒子・炭化物粒と微量の焼上粒・白色粒子を含む。
- 4 黑褐色土(10YR3/2) 繊りややあり。少量の黄褐色粒子・炭化物粒と径50mm程の礫を含む。(掘り方理上)
- 5 黑褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の焼上粒・炭化物粒・黄褐色粒子と微量の白色粒子を含む。
- 6 黑褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の黄褐色土をまばらに含む。
- 7 黑褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の白色粒子と微量の黄褐色土ブロック・白色粒子を含む。(P3埋土)

## P 1 SPB-B'

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 繊りあり。所々に黄褐色土含み。黄褐色粒子と白色粒子を少量、炭化物と径10～20mm程の小礫を微量含む。
- 2 にぶい黄褐色土ブロック(10YR5/4)

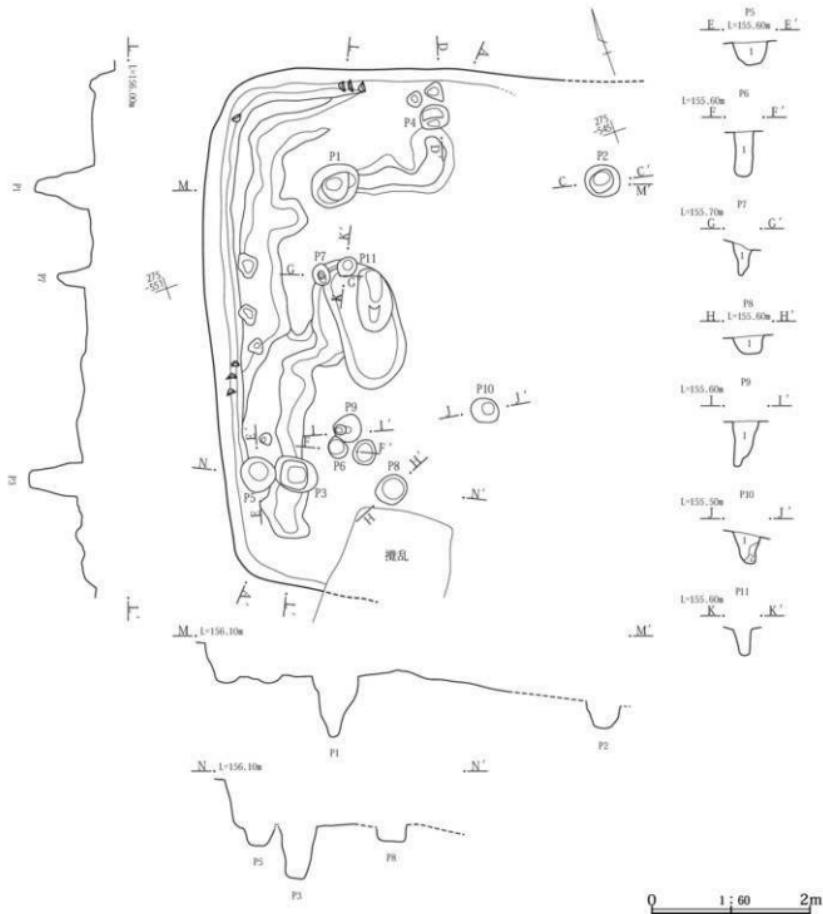
## P 2 SPB-C'

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の黄褐色石・白色粒子と微量の焼上粒・炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 繊りややあり。少量の黄褐色粒子と径100mm程の礫を含む。

## P 4 SPB-D'

- 1 黒褐色土(10YR2/1) 繊りややあり。少量の白色粒子・黄褐色粒子と焼上粒・微量の炭化物粒子、径50mm程の礫を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 繊りややあり。黄褐色粒子・白色粒子を微量含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/1) 黄褐色土との混土。白色粒子・黄褐色粒子を少量、炭化物粒を微量含む。

第51図 第2面 2号竖穴建物(使用面)平・断面図



P 5 SPE-E'

1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。黄褐色土ブロックと少量の黄褐色粒子と微量の炭化物粒を含む。

P 6 SPF-F'

1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の黄褐色粒子と微量の焼土粒・炭化物粒を含む。

P 7 SPC-G'

1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の白色粒子・黄褐色粒子と微量の炭化物粒を含む。

P 8 SPH-H'

1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。黄褐色土を含み。少量の白色粒子と微量の黄褐色粒子を含む。

P 9 SPI-I'

1 黒褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。多量の黄褐色土と少量の焼土粒・炭化物粒・白色粒子を含む。

P 10 SPI-J'

1 黑褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の黄褐色粒子と微量の褐色土・炭化物・焼土粒を含む。

2 黑褐色土(10YR2/2) 繊りややあり。少量の焼土粒と微量の白色粒子、黄褐色粒子を含む。

第52図 第2面 2号竪穴建物(掘り方)平・断面図

## 第2節 第2面 古墳時代～平安時代の遺構

調査の中で、深度が0.5mを超える小径の柱穴も検出されており、支柱穴と考えられる。

**貯藏穴：**調査区内においては検出されていない。

**壁周溝：**なし。

**掘り方：**北東壁寄りに帯状・土坑状の掘り込みを有する。

**重複：**重複する遺構はないが、下記の倒木痕が建物下に存在する。

**特徴：**調査区(C区)北東部に在り、周囲には隣接する建物がみられない。傾斜地帯の限られた平坦面という立地上に營まれた小規模集落と考えられる。建物の規模としては一辺が6m強の比較的大きな建物である。建物の時期については、出土遺物より古墳時代後期と推定される。

**遺物：**埋土中より須恵器甕(№1)・須恵器壺(№3)・須恵器甕(№5)が、床面直上より須恵器短頸甕(№2)・土師器甕(№4)と台石(№6)が出土する。

**1号倒木痕** 第48・53図(全体図)

位置：273～275-546～548 グリッド

形状：楕円形

規模：径3.22×2.74m程、深度は0.78m程を計る。

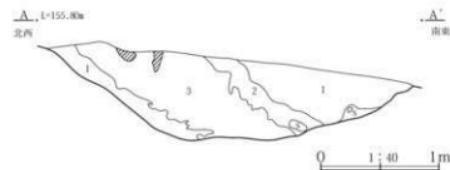
埋没土：埋土中の黄褐色軽石はYPか。

**特徴：**調査区(C区)の2号竪穴建物の下より検出される。埋土の様相より、南東方向(SPA'方向)に倒れたものと推察され、時期は縄文時代～古墳時代初頭と推定され、2号竪穴建物との関係は認められない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない

第12表 2号竪穴建物内 ピット計測表

ピット	長軸	短軸	深度
P 1	0.61m	0.51m	0.66m
P 2	0.44m	0.40m	0.36m
P 3	0.56m	0.48m	0.87m
P 4	0.36m	0.31m	0.21m
P 5	0.44m	0.40m	0.29m
P 6	0.29m	0.24m	0.57m
P 7	0.27m	0.22m	0.44m
P 8	0.40m	0.35m	0.23m
P 9	0.35m	0.35m	0.59m
P10	0.35m	0.31m	0.44m
P11	0.26m	0.24m	0.45m



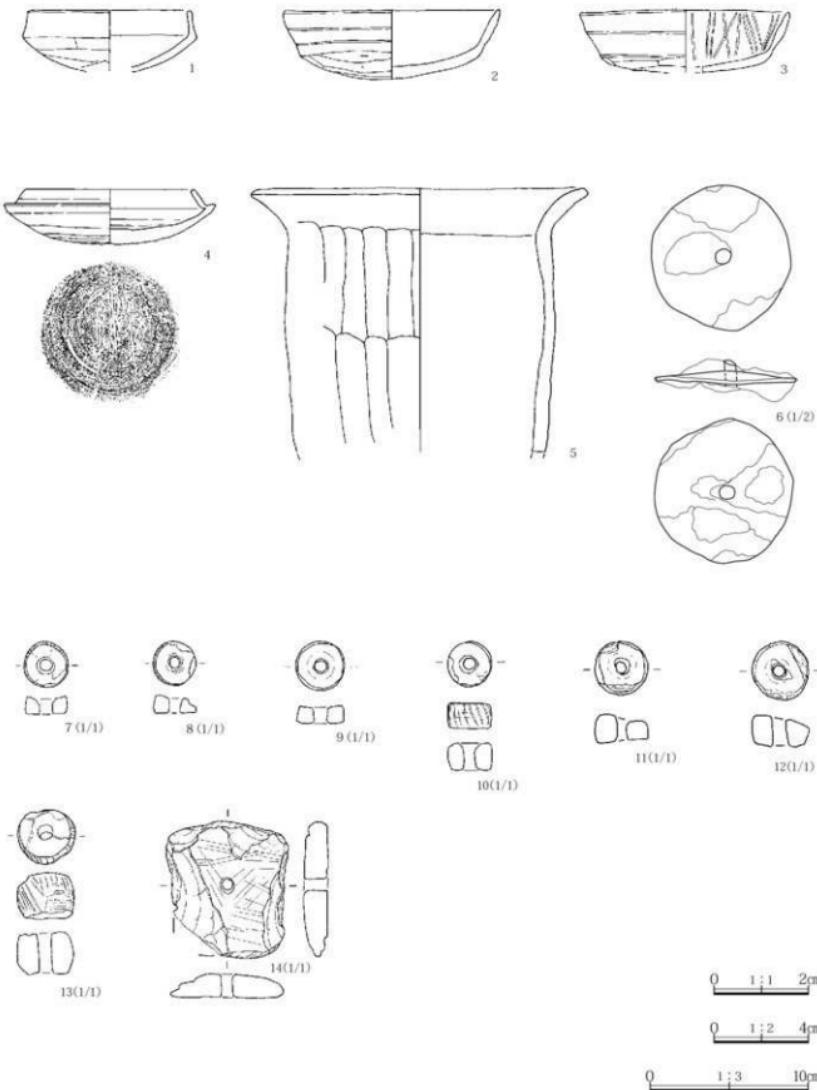
1号倒木痕SPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) やや粘性あり。少量の黄褐色軽石を含む。

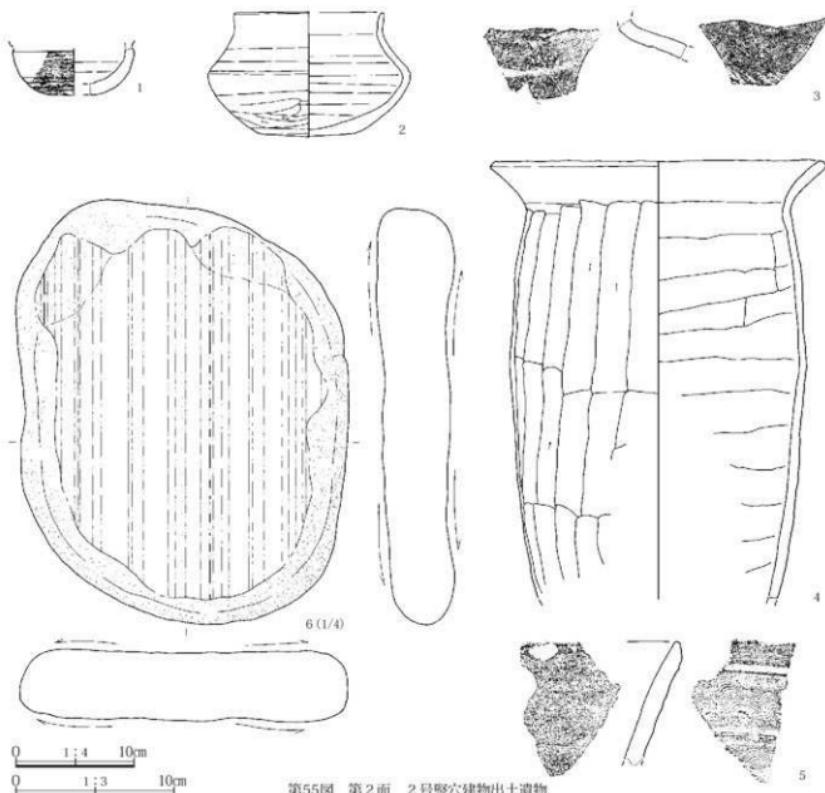
2 黒褐色土(10YR3/1) ～に赤い黄褐色土(10YR4/3) 多量の黄褐色軽石・白色粒子・黄褐色粒子と微量の炭化物粒を含む。

3 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性あり。所々に黒褐色土含む。少量の径50～100mm程の礫・黄褐色軽石を含む。

第53図 第2面 1号倒木痕断面図



第54図 第2面 1号竖穴建物出土遺物



第55図 第2面 2号壁穴建物出土遺物

第13表 1号壁穴建物出土遺物

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第59回 PL.61	1	土師器 杯	埋土中 口縁部～底部片 2 / 3	[口] 10 枝 11	* 磨砂粒/良好/に赤 い黄橙	口縁部は横ナデ、種下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第59回 PL.61	2	土師器 杯	中央寄 + 7 cm 2 / 3	[口] 13.4 枝 11.4	* 磨砂粒・粗砂粒/ * 良好/に赤い黄橙	口縁部は横ナデ、種下から底部は手持ちヘラ削り。口縁部 に2条の幅狭く凹溝が巡る。	*
第59回 PL.61	3	土師器 杯	西隅 + 6 cm 1 / 3	[口] 13.2 枝 10.8	* 磨砂粒/良好・雄 し/暗灰黄	口縁部は横ナデ、種下から底部は手持ちヘラ削り、口縁部 中央に1条の凹溝が巡る。内面口縁部にやや雄な放射状へ ラミガキ。	*
第59回 PL.61	4	須恵器 杯身	中央底直 3 / 4	[口] 10.4 枝 13.2	* 磨砂粒・粗砂粒/ * 還元焰/黄灰	口クロ回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	外底面部に輪 刻、窓印。
第59回 PL.61	5	土師器 甕	カマド前床直 口縁部～胴部上 半	[口] 20.6	* 磨砂粒・粗砂粒・ * 譚/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。 表面摩滅のため単位不明。	*

種 類 PL. No.	器 種	出土位 置	断 面 寸 度	計測値	胎 石 材 素 等	成 形 ・整 形 の特 徴	備 考
第54回 PL.61	6 鉄製品 紡錘車		*	*	*	*	*やや形状に中心部が高くなっている。鋸彎れなども発生している。
第54回 PL.61	7 石製品 白玉	西+16cm ほぼ完形	長 幅	0.9 0.9	厚 重	0.4 0.6	*滑石/* やや人形。やや薄手。見えている部分はかなり白っぽい石材で片岩質、中心には暗緑色の部分があり、表面両面とも削彎後若干研磨されているものと思われるが、裏面は後から落した部分がある。側面に研磨時の輪郭の線状痕がよく残る。両側穿孔。孔の周りに当たり部分は不明瞭。孔の径は約2cm。
第54回 PL.61	8 石製品 白玉	南西+11cm ほぼ完形	長 幅	0.9 0.9	厚 重	0.4 0.4	*滑石/* やや人形。やや薄手。白っぽい石材であるが、暗緑色の部分一部含む。表面両面とも削彎後若干研磨。側面に研磨時の輪郭の線状痕がよく残る。左右で厚みの違う部分あり。裏面はやや茶褐色を呈し、節面より割れが可能性がある。両側穿孔。孔の周りに当たり部分あり、孔の径は約2cm。
第54回 PL.61	9 石製品 白玉	南側床直 完形	長 幅	1.0 1.0	厚 重	0.4 0.5	*滑石/* やや人形。白っぽい石材であるが、黒色の硬い粒子を含み暗緑色部分を含む。やや薄手。左右厚さ不均一。表裏両面とも削彎後研磨。側面に研磨時の輪郭の線状痕及び金属の刃跡の当たったがある。両側穿孔。孔の周りに当たり部分あり。孔の径は約2cm強。
第54回 PL.61	10 石製品 白玉	南西+15cm 完形	長 幅	1.0 0.9	厚 重	0.6 0.9	*滑石/* やや人形。両側穿孔。孔の周りに難の当たりあり。側面には輪郭の粗い研磨痕あり、断面外側中央に最大幅があり、裏面に切った跡の跡は無く、板状の素材から整形したことが分かる。孔の径は約3cm。
第54回 PL.61	11 石製品 白玉	中央+6 cm 完形	長 幅	1.2 1.1	厚 重	0.6 1.0	*滑石/* やや人形。白っぽい石材であるが、黒色の硬い粒子を含む。表面両面とも削彎後若干研磨。側面に研磨時の輪郭の線状痕がよく残る。左右で厚みの違う部分あり。両側穿孔。孔の周りに当たり部分あり。孔の径は約3cm。
第54回 PL.61	12 石製品 白玉	北+20cm 完形	長 幅	1.2 1.2	厚 重	0.6 1.5	*滑石/* やや人形。白っぽい石材であるが、暗緑色の部分一部含むが、黒色の硬い粒子とは全く含まない。表面両面とも削彎後若干研磨。側面に研磨時の輪郭の線状痕がよく残る。左右で厚みの違う部分あり。両側穿孔。孔の周りに当たり部分あり。孔の径は約3cm。
第54回 PL.61	13 石製品 白玉	南西壁寄+15cm ほぼ完形	長 幅	1.1 1.2	厚 重	0.9 1.8	*滑石/* 大形で厚手。白っぽい石材であるが、黒色の硬い粒子を少量含む。最大幅は中央部にあり、上下がやや低くなっているので、厚めの形状素材から製作したことが分かる。表面両面とも削彎後若干研磨。側面に研磨時の輪郭の線状痕がよく残る。両側穿孔。打ち削り後研磨形態。一部の刀子による傷があり。両側穿孔。孔の周りに難の当たりは無い。孔の径は約3cm。
第54回 PL.61	14 石製模造品 有孔方板	中央+9 cm 4 / 5	長 幅	3.0 2.7	厚 重	0.6 5.8	*滑石/* 滑石素材。白っぽい石材であるが、鉄分を含み赤みを帯びる部分あり。厚みが薄いこと、上下を研磨しているが、角を取るような整型はなされていないので、有孔方板した。両側穿孔。打ち削り後研磨形態。一部の刀子による傷があり。上下両面は研磨形態であり、削彎後現れる。左一部欠損。

第14表 2号壁穴建筑物出土遗物

**第2項 土坑・ピット・柱列・配石遺構**

第2面の土坑は、各区に見られるものの、残念ながら明確に用途を限定できる遺構はない。同様にピット・柱列についても直接的に建物と結びつくような遺構はない。

**1号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**320-512グリッド

**形状：**隅丸長方形

**規模：**径 $0.95 \times 0.64$ m程、深度は0.28m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面に小ピットを有するが、柱穴となり得る規模ではない。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

**2号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**316-511グリッド

**形状：**やや歪な隅丸長方形

**規模：**径 $1.88 \times 1.22$ m程、深度は0.10m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

**3号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**316-509グリッド

**形状：**やや歪な隅丸長方形

**規模：**径 $2.25 \times 1.31$ m程、深度は0.13m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

ない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

**4号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**313-513グリッド

**形状：**やや歪な隅丸長方形

**規模：**径 $2.00 \times 1.58$ m程、深度は0.18m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

**5号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**309-515グリッド

**形状：**やや歪な隅丸長方形

**規模：**径 $2.28 \times 1.31$ m程、深度は0.20m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面は凹凸と高低差を有する。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

**6号土坑 第56図 PL.27**

**位置：**308-514グリッド

**形状：**隅丸長方形

**規模：**径 $0.90 \times 0.74$ m程、深度は0.13m程を計る。

**埋没土：**As-Bを含む黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区(B区)北東部にある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。1号溝を境にその北東に同時期の方形土坑が群を成すが、その用途は明らかではない。

**遺物：**本遺構より遺物の出土はみられない。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 8号土坑 第57図 PL.27

位置：307—578グリッド

形状：楕円形

規模：径0.84×0.77m程、深度は0.27m程を計る。

埋没土：焼土・炭化物・灰を含む黒褐色～赤褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部南西寄りにある。皿状の窪みに焼土化した面を有し、炭化物や灰も検出されていることから、軽跡と推察される。焼土下の埋土内にも焼土粒・炭化物などが含まれることから、継続的に使用されていたものと考えられる。時期については出土遺物より平安時代と推定される。

遺物：須恵器楕(No.1・2)、土師器甕(No.3・4)、須恵器羽釜(No.5・6)が埋土中より出土する。

### 9号土坑 第57図 PL.28

位置：311—576グリッド

形状：楕円形

規模：径1.06×0.80m程、深度は0.31m程を計る。

埋没土：焼土・炭化物を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部中央にある。21号土坑・P24と重複するが、遺構の検出状況から本土坑の方が新しいものと判断された。皿状の窪みの埋土内に炭化物や焼土粒を含むことから、軽跡と推察される。前掲の8号土坑に比べ、底面の顕著な焼土化などが見られないことから、使用の度合いはやや低いものと考えられる。時期については出土遺物より平安時代と推定される。

遺物：黒色土器楕(No.7)が埋土中より出土する。

### 11号土坑 第57図 PL.28

位置：254—566グリッド

形状：楕円形か

規模：径(1.28)×1.76m程、深度は0.34m程を計る。東側が調査区外にかかり、全容は不明。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(C区)中央部東端にある。用途については不明。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 12号土坑 第57図 PL.28

位置：310—576グリッド

形状：瓢箪形

規模：径0.65×0.43m程、深度は0.39m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南西寄りにある。形状から、抜き取られた柱穴跡の可能性もある。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 13号土坑 第57図 PL.28

位置：299—517グリッド

形状：やや歪な圓丸長方形

規模：径1.15×0.78m程、深度は0.12m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。埋土内に鉄分凝固が見られるが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 14号土坑 第57図 PL.28

位置：302—519グリッド

形状：楕円形

規模：径0.93×0.56m程、深度は0.20m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 15号土坑 第57図 PL.28

位置：303—519グリッド

形状：楕円形

規模：径(0.65)×0.65m程、深度は0.12m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。16号土坑と重複し、埋土の様相より本土坑の方が古いものと判断される。時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 16号土坑 第57図 PL.28

位置：303-519グリッド

形状：隅丸方形

規模：径0.62×0.60m程、深度は0.11m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。15号土坑と重複し、埋土の様相より本土坑の方が新しいものと判断される。埋土内に鉄分凝固が見られるが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 17号土坑 第57図 PL.28

位置：303-520グリッド

形状：楕円形

規模：径0.46×0.45m程、深度は0.13m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。埋土内に少量の炭化物を含むが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 18号土坑 第57図 PL.28

位置：304-519グリッド

形状：楕円形

規模：径1.23×0.54m程、深度は0.18m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はやや傾斜して掘り込む。埋土内に少量の炭化物を含むが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 19号土坑 第58図 PL.29

位置：313-515グリッド

形状：楕円形か

規模：径(0.80)×0.90m程、深度は0.13m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中央部南寄りにある。底面はほぼ平坦に掘り込む。時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 20号土坑 第58図 PL.29

位置：309-578グリッド

形状：円形又は楕円形か

規模：径1.08×(0.45)m程、深度は0.48m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部中程にある。埋土内に焼土・炭化物を含むが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：遺構上より羽釜片が出土するが、遺構に直接伴うものではない。

## 21号土坑 第58図 PL.29

位置：311-575グリッド

形状：楕円形

規模：径1.27×0.63m程、深度は0.11m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部中程にある。上面の削平により、わずかに皿状の窪みを残すのみ。埋土内に焼土・炭化物を含むが、時期・用途共に明らかではない。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 23号土坑 第58図 PL.29

位置：307-522グリッド

形状：やや歪な楕円形

規模：径2.37×1.47m程、深度は0.48m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)中程にある。掘り込みは凹凸と傾斜を有する。埋土内に焼土・灰・炭化物を含むが、用途は明らかではない。時期については出土遺物から古墳時代後期と推定される。

遺物：土師器環(No.8・9)、須恵器杯(No.10)、須恵器碗(No.11)、土師器甌(No.12)、須恵器甌(No.13)が埋土中よりする。

## 24号土坑 第58図 PL.29

位置：356-492グリッド

形状：不明

規模：径(0.42)×-m程、深度は0.21m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)北東端部にある。西半部が調査区外にかかり、全容は不明。底面が平坦。24号土坑と重複し、

## 第2章 検出された遺構と遺物

埋土の様相より本土坑の方が古いものと判断される。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 25号土坑 第58図 PL.29

位置：356-492グリッド

形状：不明

規模：径(0.75)×0.80m程、深度は0.17m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(B区)北東端部にある。西半部が調査区外にかかり、全容は不明。底面が平坦。25号土坑と重複し、埋土の様相より本土坑の方が新しいものと判断される。時期については埋土内のテフラより、平安時代末から中世初頭と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 29号土坑 第58図 PL.29

位置：261-571 グリッド

形状：楕円形

規模：径0.83×0.61m程、深度は0.18m程を計る。

埋没土：焼土・炭化物・灰を含む暗褐色土。

特徴：調査区(C区)中央部南西寄りにある。皿状の窪みに焼土化した面を有し、炭化物や灰も検出されていることから、か跡の可能性が高い。周辺には焼土の散布も確認される。時期については堅穴建物と同時期と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 31号土坑 第58図 PL.29

位置：273-598 グリッド

形状：楕円形

規模：径0.46×0.42m程、深度は0.24m程を計る。

埋没土：やや粘性のある黒褐色土。

特徴：調査区(D区)中央部1号集石脇にある。皿状に浅く窪むのみ。時期・用途については不明。32号土坑と重複し、埋土断面より本土坑の方が新しいものと判断される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 32号土坑 第58図 PL.29

位置：273-598 グリッド

形状：楕円形

規模：径0.57×0.45m程、深度は0.23m程を計る。

埋没土：やや粘性のある灰褐色土。

特徴：調査区(D区)中央部1号集石脇にある。皿状に浅く窪むのみ。時期・用途については不明。32号土坑と重複し、埋土断面より本土坑の方が古いと判断される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 30号ピット 第59図 PL.30

位置：262-567 グリッド

形状：楕円形

規模：径0.29×0.27m程、深度は0.25m程を計る。

埋没土：黄褐色粒子を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(C区)中央部にある。1号柱列P 1(32号ピット)の南西2.50mの柱列の延長線上に位置する。時期については、埋土から1号柱列と同時期と推定され、柱列との関連性が高いと考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 12号ピット 第59図 PL.30

位置：308-578 グリッド

形状：円形

規模：径0.19×0.19m程、深度は0.31m程を計る。

埋没土：黄色・白色粒子を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。付近には20号土坑があるが、関連は不明。時期については、埋土から古墳時代後期から平安時代初頭頃と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 13号ピット 第59図 PL.30

位置：309-577 グリッド

形状：楕円形

規模：径0.20×0.16m程、深度は0.27m程を計る。

埋没土：黄色・白色粒子を含む黒褐色砂質土。

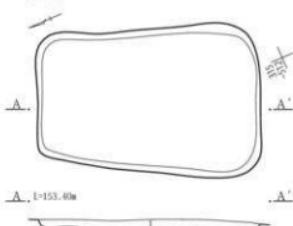
特徴：調査区(D区)北東部にある。付近には20号土坑があるが、関連は不明。時期については、埋土から古墳時代後期から平安時代初頭頃と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

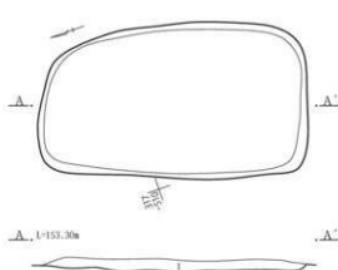
1号土坑



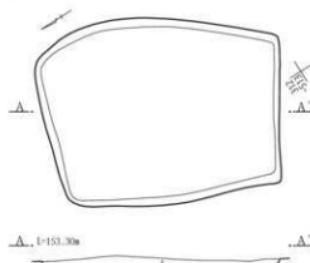
2号土坑



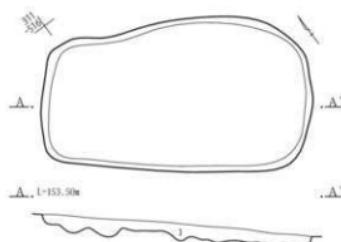
3号土坑



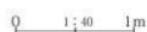
4号土坑



5号土坑

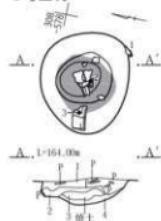


6号土坑



第56図 第2面 1~6号土坑平・断面図

## 8号土坑



## 8号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(7.YR3/1) 砂質。粘性ややあり。3~5mmの燒土粒子、炭化物、黄色粒子を少量含む。
- 2 暗赤褐色土(STY3/2) 砂質。粘性なし。燒土粒子をラック状に含み、炭化物を多量に含む。
- 3 にぶい暗褐色土(5YR3/3) 砂質。粘性ややあり。燒土粒子多量に含み、灰を中量含む。
- 4 暗赤褐色土(STY3/2) 砂質。粘性なし。焼土粒子・炭化物を中量、灰を微量含む。

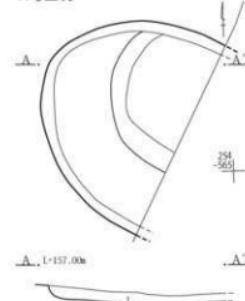
## 9号土坑



## 9号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。10mm大的礫を微量。3~5mm大的燒土粒子・炭化物を中量、白色粒子少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。3~5mm大的炭化物と2~3mm大的黄色粒子を少量含む。

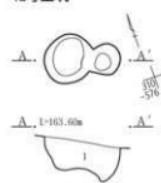
## 11号土坑



## 11号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-B混じり。粒子が粗く、2~3mm大的黄色粒子を微量含む。

## 12号土坑



## 12号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性なし。As-Bを含み、50mm大的礫を微量。2~3mm大的黄色粒子を微量含む。

## 13号土坑



## 13号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性ややあり。鉄分凝固が認められ、2~3mm大的黄色粒子を中量含む。

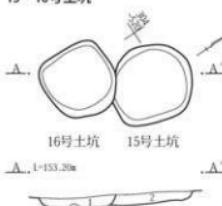
## 14号土坑



## 14号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性ややあり。10mm大的礫を微量。3~5mm大的黄色粒子を中量、炭化物を少量含む。

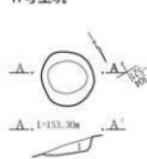
## 15・16号土坑



## 16号土坑

## 15号土坑

## 17号土坑



## 17号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性ややあり。鉄分凝固が認められ、2~3mm大的黄色粒子を中量、炭化物を少量含む。[16号土坑]

## 15・16号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性ややあり。鉄分凝固が認められ、2~3mm大的黄色粒子を中量、炭化物を少量含む。[16号土坑]
- 2 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性あり。10mm大的礫を微量。2~3mm大的黄色粒子を少量含む。[15号土坑]

## 18号土坑



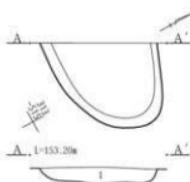
## 18号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性ややあり。10mm大的礫を少量。2~3mm大的黄色粒子を中量、炭化物を少量含む。

0 1:40 1m

第57図 第2面 8・9・11~18号土坑平・断面図

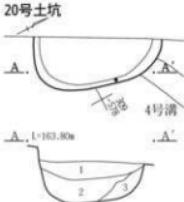
19号土坑



19号土坑SPA-A'

1 黒褐色土(2.5YR3/1) 砂質。粘性や  
あり。5mmの大黄色粒子中量、褐色  
粒子少量含む。2~3mmの大黄色粒子  
を微量含む。

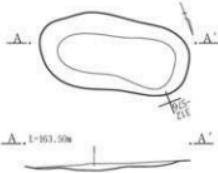
20号土坑



20号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性や  
あり。3~5mmの大黄色粒子と2~3mmの大燒土・炭  
化物・白色粒子少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。  
10mm大黄色粒子をブロック状に含み、2~3mm  
大の焼土・炭化物を中量含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。  
3~5mmの大炭化物を中量。1~2mmの大白色  
粒子少量含む。

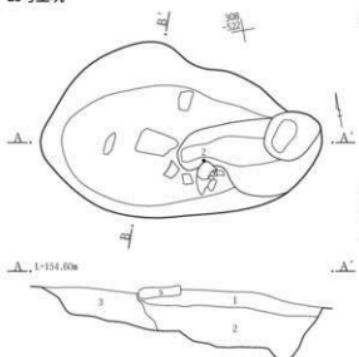
21号土坑



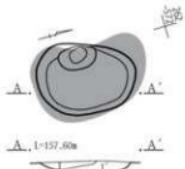
21号土坑SPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性やや  
あり。10~20mm大の炭化物を多量、5  
mm大の焼土粒子・黄色粒子を少量含む。

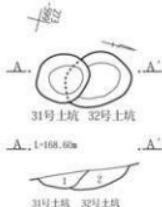
23号土坑



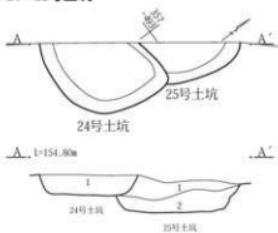
29号土坑



31・32号土坑



24・25号土坑



23号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。5mmの大焼土と1~2mm大  
の灰を少量含む。
- 2 暗赤褐色土(5YR3/2) 砂質。粘性なし。少量の10~20mm大の焼土  
ブロック・炭化物を含む。
- 3 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。黄色粒子を少量含む。

24号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-B混じり、褐色粒子を少  
量含む。

25号土坑SPA-A'

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性なし。As-B混じり、黄色粒子を微  
量含む。

2 褐灰色土(10YR4/1) 砂質。粘性なし。As-B混じり、1層よりも硬い。

29号土坑SPA-A'

- 1 黑褐色土(10YR3/4) 多量の焼土・炭化物粒・にふい黄褐色粒子  
を含む。

1' 1層に炭化物粒を大量に含む。

31・32号土坑SPA-A'

- 1 黑褐色土(7.5YR3/1) やや粘土質。締りあり。粘性ややあり。(31  
号土坑)

2 褐灰色土(10YR4/1) やや粘土質。締りややあり。粘性ややあり。

微量の黄褐色土を斑状に含む。(32号土坑)



第58図 第2面 19~21・23~25・29・31・32号土坑平・断面図

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 14号ピット 第59図 PL.30

位置：310—577グリッド

形状：楕円形

規模：径 $(0.46) \times 0.29$ m程、深度は0.26m程を計る。

埋没土：黄色・白色粒子を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。付近には20号土坑があるが、関連は不明。時期については、埋土から古墳時代後期から平安時代初頭頃と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 15号ピット 第59図 PL.30

位置：316—572グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.43 \times 0.37$ m程、深度は0.15m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色～にぶい黄褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15号の南西方向には16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号ピットといずれも同種の埋土を持つピットが並ぶ。直線的な配列ではなく間隔も均一ではないため、建物等の柱穴と断定はできないものの、関連性が高いものと考えられる。時期については、埋土から平安時代末から中世初頭と推定される。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 16号ピット 第59図 PL.30

位置：315—572グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.40 \times 0.37$ m程、深度は0.31m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色～にぶい黄褐色砂質土ほか。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15・16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号と同種の埋土を持つピットが並び、平安時代末～中世初頭の関連性が高いピット群と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 17号ピット 第59図 PL.30

位置：314—573グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.39 \times 0.36$ m程、深度は0.09m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15・16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号と同種の埋土を持つピットが並び、平安時代末～中世初頭の関連性が高いピット群と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 18号ピット 第59図 PL.30

位置：313—573グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.35 \times 0.29$ m程、深度は0.29m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15・16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号と同種の埋土を持つピットが並び、平安時代末～中世初頭の関連性が高いピット群と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 19号ピット 第59図 PL.30

位置：310—574グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.48 \times 0.39$ m程、深度は0.13m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15・16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号と同種の埋土を持つピットが並び、平安時代末～中世初頭の関連性が高いピット群と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

### 20号ピット 第59図 PL.31

位置：310—574グリッド

形状：楕円形

規模：径 $0.32 \times 0.28$ m程、深度は0.10m程を計る。

埋没土：As-Bを含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。15・16・17・18号ピット、少し間隔を開けて19・20号と同種の埋土を持つピットが並び、平安時代末～中世初頭の関連性が高いピット群と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

## 第2節 第2面 古墳時代～平安時代の遺構

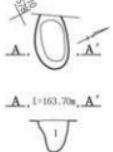
12号ピット



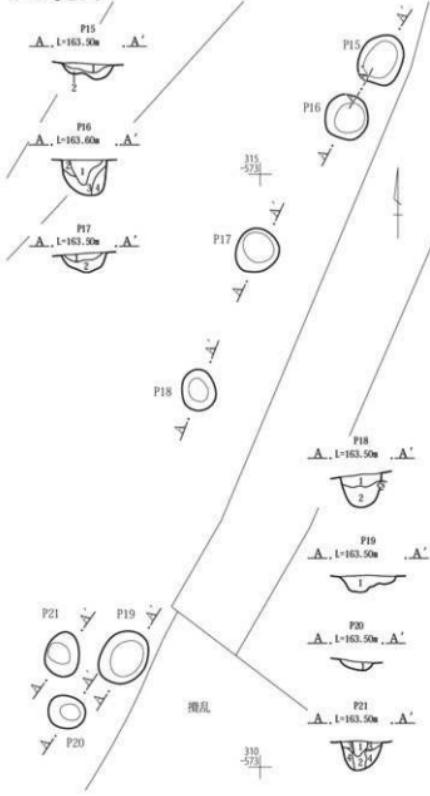
13号ピット



14号ピット



15～21号ピット



0 1:40 1m

12号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。2～3mm大の黄色粒子を少量含む。

13号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性なし。2～3mm大の黄色粒子を少量含む。白色粒子を微量含む。

14号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性なし。2～3mm大の黄色粒子を微量含む。白色粒子を微量含む。

15号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。Asを少々少量、5mm大の黄色粒子を中量含む。

2 にふい 黒褐色土(10YR4/3) 砂質。1層より粘性に富む。As-Bを少々少量含む。

16号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。As-Bを少量、5mm大の黄色粒子を中量含む。

2 にふい 黑褐色土(10YR4/3) 砂質。粘性なし。ロームをブロック状に含む。

3 黑褐色土(10YR3/1) 砂質。粘性ややあり。As-B混じり、3～5mm大の黄色粒子を少量含む。

4 広黄褐色土(10YRA/2) 砂質。3層より粘性に富む。As-B混じり、黄色粒子をブロック状に少量含む。

17号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。As-B混じり、10mm大程の黄色粒子をブロック状に中量、2～3mm大の炭化物を少量含む。

2 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。As-B混じり、3～5mm大の黄色粒子を少量含む。

18号ピットSPA-A'

1 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。As-B混じり、10mm大程の黄色粒子をブロック状に中量、2～3mm大の炭化物を少量含む。

2 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。As-B混じり、3～5mm大の黄色粒子を少量含む。

19号ピットSPA-A'

1 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-B混じり、10mm大程の黄色粒子をブロック状に中量、2～3mm大の炭化物を少量含む。

20号ピットSPA-A'

1 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。As-B混じり、10mm大程の黄色粒子をブロック状に中量含む。

21号ピットSPA-A'

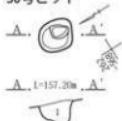
1 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。10mm大程の黄色粒子をブロック状に中量含む。

2 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性ややあり。黄色粒子少量含む。

3 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。やや粘性あり。黄色粒子少量含む。

4 黑褐色土(10YR3/2) 砂質。粘性なし。3～5mm大の黄色粒子を少量含む。

30号ピット



30号ピットSPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) やや  
粘性あり。にふい 黄褐色粒を  
微量含む。

第59図 第2面 ピット平・断面図

## 第2章 検出された遺構と遺物

21号ピット 第59図 PL.31

位置：310-574グリッド

形状：楕円形

規模：径0.38×0.30m程、深度は0.25m程を計る。

埋没土：黒褐色砂質土。

特徴：調査区(D区)北東部にある。隣接する15～20号ピットとは埋土が異なり、やや古い古墳時代後期から平安時代の遺構と考えられる。

遺物：本遺構より遺物の出土はみられない。

1号柱列 第60図 PL.31・32

位置：264～268-563～566グリッド

規模：P 1 (P32) 径0.31×0.24m、深度0.29m

P 2 径0.29×0.24m、深度0.50m

P 3 径0.37×0.30m、深度0.48m

P 4 (P33) 径0.51×0.35m、深度0.47m

柱間 P 1～P 2=1.98m P 2～P 3=1.45m

P 3～P 4=1.45m

埋没土：にぶい黄橙色粒子を含む黒褐色砂質土。

特徴：調査区(C区)中央部に位置し、南西部には1号竪穴建物がある。柱列として調査されたが、一直線上に配列せず、各ピットの規模やピット間の間隔も異なる。埋土も近似し、周囲に他の遺構が少ないとから、同時期の関連する遺構と思われるが、建物など構造物の一部とは考えられない。時期については、埋土や出土遺物より古墳時代後期から平安時代初頭と推定される。

遺物：P 3より土師器杯(Na14)が出土する。

1号配石遺構 第60図 PL.32・33

位置：273-596 グリッド

形状：隅丸長方形

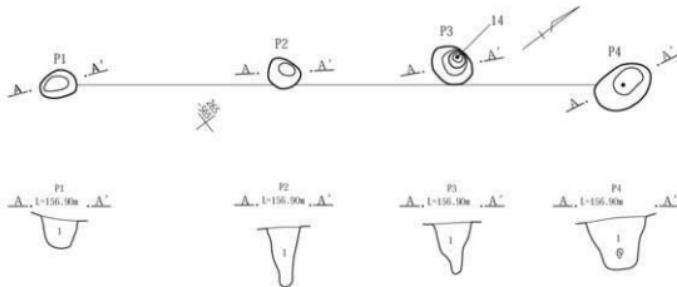
規模：長2.08×1.05m程、深度は0.40m程を計る。

埋没土：やや粘性・しまりのある黒褐色土。

特徴：調査区(D区)中央部にある。土坑内より出土する砾は廃棄によるものではなく、古墳の葺き石を転用し、人為的に埋め込まれたものと考えられ、特に北側は列状に配されていることから、配石遺構として調査された。時期は出土遺物より平安時代と推定される。用途については明らかではないが、砾床と遺物の出土状況から墓の可能性も考えられる。

遺物：北東壁際より灰釉陶器皿(Na15)・(Na16)が重なって出土する。また、周辺の古墳前庭部より出土の灰釉陶器椀(第85図-28)・同長頸壺(第85図-36)も本遺構に伴う遺物である可能性が高い。

## 1号柱列



## 1号柱列P 3 SPA-A' (II32号ピット)

1 黒褐色土(10YR3/1) やや粘性あり。径50mm程の黄褐色の礫を含む。黄褐色粒子を微量含む。

## 1号柱列P 2 SPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) やや粘性あり。にふい黄褐色粒子と炭化物粒を微量含む。

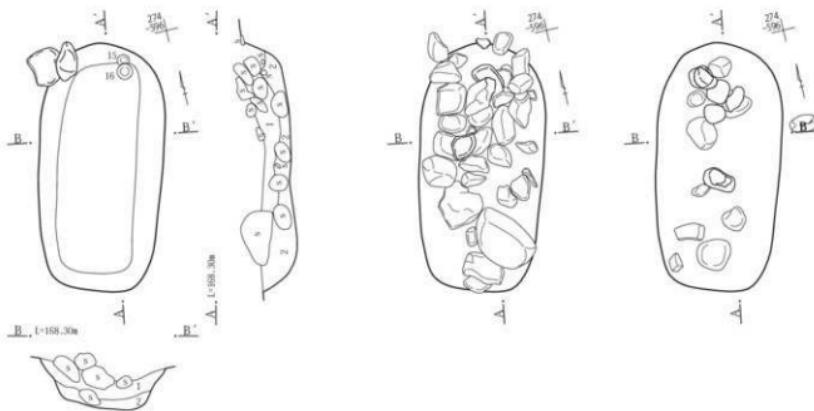
## 1号柱列P 3 SPA-A'

1 黒褐色土(10YR3/1) やや粘性あり。少量にふい黄褐色土と微量の白色粒子・炭化物粒を含む。

## 1号柱列P 4 SPA-A' (II33号ピット)

1 黒褐色土(10YR2/2) やや粘性あり。少量の白色粒子と微量の炭化物粒・焼土粒・黄褐色粒子を含む。

## 1号配石



## 1号配石SPA-A'

1 黒褐色土(10YR2/3) 粘性・締りやや強。少量の黄色粒子を含む。

2 黒褐色土(10YR3/2) 粘性・締りやや強。微量の黄色粒子を含む。

0 1:40 1m

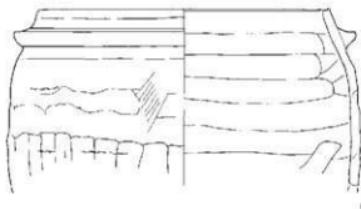
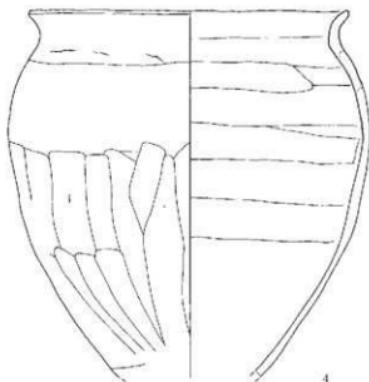
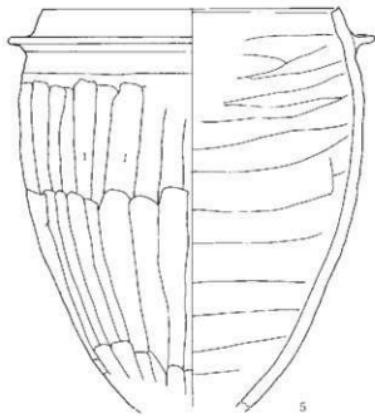
第60図 第2面 1号柱列・1号配石平・断面図

## 第2章 検出された遺構と遺物

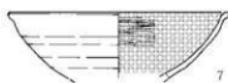
第15表 2面土坑・ビット計測表

区	番号	遺構	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸方位	捕獲番号	PL番号	備考
B	1	上坑	350・-512	楕丸長方形	95	64	28	N-37°-W		27	
B	2	上坑	316・-511	楕丸長方形	188	122	10	N-26°-E		27	
B	3	上坑	316・-509	楕丸長方形	225	131	13	N-19°-E		27	
B	4	上坑	313・-513	楕丸長方形	200	158	18	N-27°-E		27	
B	5	上坑	309・-515	楕丸長方形	228	131	20	N-53°-W		27	
B	6	上坑	308・-514	楕丸長方形	90	74	13	N-20°-W		27	
D	8	上坑	307・-578	楕円形	84	77	27	N-63°-E		27	
D	9	上坑	311・-576	楕円形	106	80	31	N-28°-E		28	
C	11	上坑	254・-566	楕円形か	(128)	176	34	-		28	
D	12	上坑	310・-576	不定形	65	43	39	N-69°-W		28	
B	13	上坑	299・-517	楕丸長方形	115	78	12	N-32°-W		28	
B	14	上坑	302・-519	楕円形	93	56	20	N-38°-W		28	
B	15	上坑	303・-519	楕円形	(65)	65	12	N-29°-E		28	
B	16	上坑	303・-519	楕丸方形	62	60	11	N-0°		28	
B	17	上坑	303・-520	楕円形	46	45	13	N-31°-E		28	
B	18	上坑	304・-519	楕円形	123	54	18	N-53°-W		28	
B	19	上坑	313・-515	楕円形か	-	-	13	-		29	
D	20	上坑	309・-578	不明	108	-	48	N-28°-E		29	
D	21	上坑	311・-575	楕円形	127	63	11	N-58°-W		29	
B	23	上坑	307・-522	楕円形	237	147	48	N-78°-W		29	
B	24	上坑	356・-492	不明	-	-	7	-		29	
B	25	上坑	356・-492	不明	-	-	21	-		29	
C	29	上坑	261・-571	楕円形	83	61	18	N-20°-E		29	
D	31	上坑	273・-598	楕円形	46	42	24	N-31°-W		29	
D	32	上坑	273・-598	楕円形	57	45	23	N-25°-W		29	
B	3	ビット	300・-518	楕円形	27	22	6	-		-	
B	4	ビット	300・-518	楕円形	37	28	16	-		-	
B	5	ビット	301・-518	楕円形	52	46	22	-		-	
B	6	ビット	300・-518	円形	24	24	7	-		-	
B	7	ビット	301・-519	楕円形	(49)	28	16	-		-	
B	8	ビット	302・-519	楕円形	20	18	6	-		-	
B	9	ビット	302・-519	楕円形	21	16	8	-		30	
B	10	ビット	302・-520	楕円形	59	47	21	-		30	
B	11	ビット	308・-511	楕円形	31	26	6	-		30	
D	12	ビット	308・-578	円形	19	19	31	-		30	
D	13	ビット	307・-577	楕円形	20	16	27	-		30	
D	14	ビット	310・-577	楕円形	(46)	29	26	-		30	
D	15	ビット	316・-572	楕円形	43	37	15	-		30	
D	16	ビット	315・-572	楕円形	40	37	31	-		30	
D	17	ビット	314・-573	楕円形	39	36	9	-		30	
D	18	ビット	313・-573	楕円形	35	29	29	-		30	
D	19	ビット	310・-574	楕円形	48	39	13	-		30	
D	20	ビット	310・-574	楕円形	32	28	10	-		31	
D	21	ビット	310・-574	楕円形	38	30	25	-		31	
D	23	ビット	306・-578	楕円形	45	36	29	-		-	
D	24	ビット	311・-576	楕円形	103	(53)	9	-		-	
C	30	ビット	262・-567	楕円形	29	27	25	-		31	
C	31	ビット	279・-550	楕円形	30	24	13	-		-	
C	34	ビット	269・-563	楕円形	31	24	17	-		-	

8号土坑



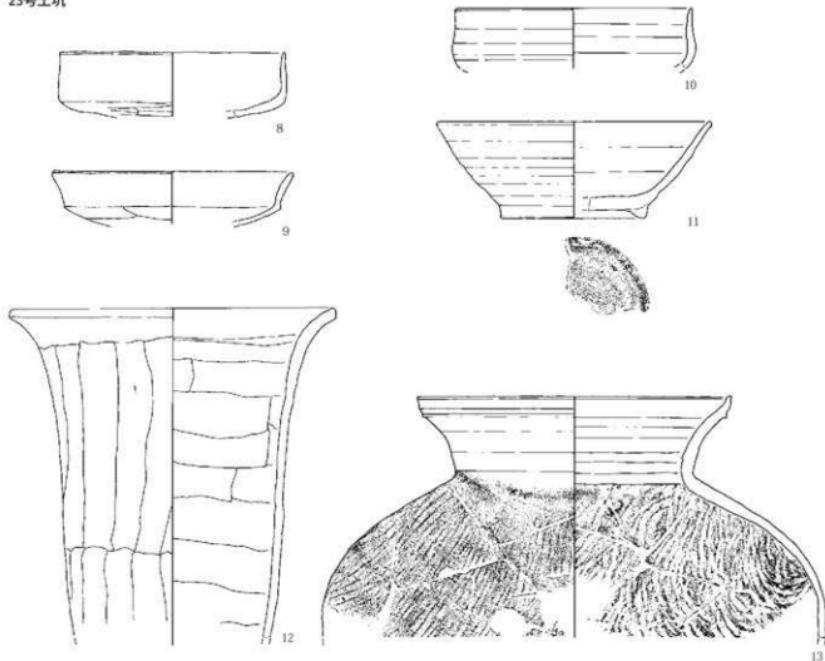
9号土坑



0 1 : 3 10cm

第61図 第2面 土坑・柱列・配石出土遺物(1)

23号土坑



1号柱列



1号配石遺構



0 1:3 10cm

第62図 第2面 土坑・柱列・配石出土遺物(2)

第16表 2面土坑・柱列・配石出土遺物

## 9号土坑出土遺物

跡 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第61図 PL.62	須恵器 楕	* 1 / 3	[口] 13.6 台 底 6.8 高	6.6 4.4	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 焼成焰/にぶい黄 相	ロクロ回転右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	*
第61図 PL.62	須恵器 楕	* ほぼ完形	[口] 13.8 台 底 6.8 高	6.6 5.3	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 焼成焰/赤	ロクロ回転右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。	*
第61図 PL.62	土師器 甕	*	[口] 16.6 * 底 *	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	*	
第61図 PL.62	土師器 甕	*	[口] 20.0 * 底 22.6 *	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面部胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頭部は横ナデ、胴 部上位は横方向のヘラ削り後窓いナデ、中位から下位は縱 方向のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	*	
第61図 PL.62	須恵器 羽釜	*	[口] 18.5 * 底 20.5 *	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 焼成焰/にぶい黄 相	ロクロ整形か、鈎は貼付。胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	*	
第61図 PL.62	須恵器 羽釜	*	[口] 18.4 鋼 底 21.4 *	■ 磨砂粒/還元焰/相 良	ロクロ整形、外面部胴部に輪積み痕が残る。鈎は貼付。胴 部中位から下位にヘラ削り、内面はヘラナデ。	*	
第61図 PL.62	黒色土器 楕	*	[口] 13.6 * 底 *	■ 磨砂粒/焼成焰/に ぶい黄相	内面黒色処理。ロクロ回転右回りか。内面は横方向のヘラ ミガキ。	*	

## 9号土坑出土遺物

跡 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.8	土師器 杯	*	[口] 14.0 * 底 14.0 *	■ 磨砂粒/良好/浅黄 相	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削り。	*

## 23号土坑出土遺物

跡 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 9	土師器 杯	*	[口] 15.0 * 底 13.6 *	■ 磨砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、縦下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第61図 10	須恵器 杯	*	[口] 14.8 *	■ 磨砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ回転右回りか。	*
第61図 11	須恵器 楕	1 / 4	[口] 17.2 台 底 9.2 高	8.8 ■ 磨砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ回転右回り。底部は回転系切り、高台は貼付。焼成 は一部酸化焰。	*
第61図 12	土師器 甕	*	[口] 20.1 * 底 19.1 *	■ 磨砂粒・粗砂粒/片 岩/良好/明褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	*
第61図 13	須恵器 甕	*	[口] 19.6 * 底 31.6 *	■ 磨砂粒・粗砂粒/ 焼成焰/にぶい黄 相	口縁部はロクロ整形、胴部には外面に平行叩き瓶、内面 に同心円状アーチ具現が残る。口縁部は貼付、内面胴部 はヘラナデ。	*
第61図 14	土師器 杯	P 4 土理工中	[口] 11.8 * 底 10.3 *	■ 磨砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、縦下から底部は手持ちヘラ削り。	*

## 1号柱穴列出土遺物

跡 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第62図 PL.63	灰陶陶器 盆	*	[口] 11.7 台 底 5.2 高	4.8 2.5 白	■ 磨砂粒/還元焰/灰	ロクロ回転右回り。底部は回転系切り痕が残る、高台は貼 付。施釉方法は溶け掛け。	大原2号窯式期
PL.63	段皿	完形	[口] 13.6 台 底 7.2 高	7 2.8 白	■ 磨砂粒/還元焰/灰	ロクロ回転右回り。底部はやや難な回転ヘラナデ、高台は 貼付。施釉方法は溶け掛け。	虎溪山1号窯 式期

## 1号配石出土遺物

跡 国 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	施土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第62図 PL.63	灰陶陶器 盆	*	[口] 13.6 台 底 7.2 高	4.8 2.8 白	■ 磨砂粒/還元焰/灰	ロクロ回転右回り。底部はやや難な回転ヘラナデ、高台は 貼付。施釉方法は溶け掛け。	虎溪山1号窯 式期
PL.63	段皿	完形	[口] 13.6 台 底 7.2 高	7 2.8 白	■ 磨砂粒/還元焰/灰	ロクロ回転右回り。底部はやや難な回転ヘラナデ、高台は 貼付。施釉方法は溶け掛け。	虎溪山1号窯 式期

## 第3項 溝

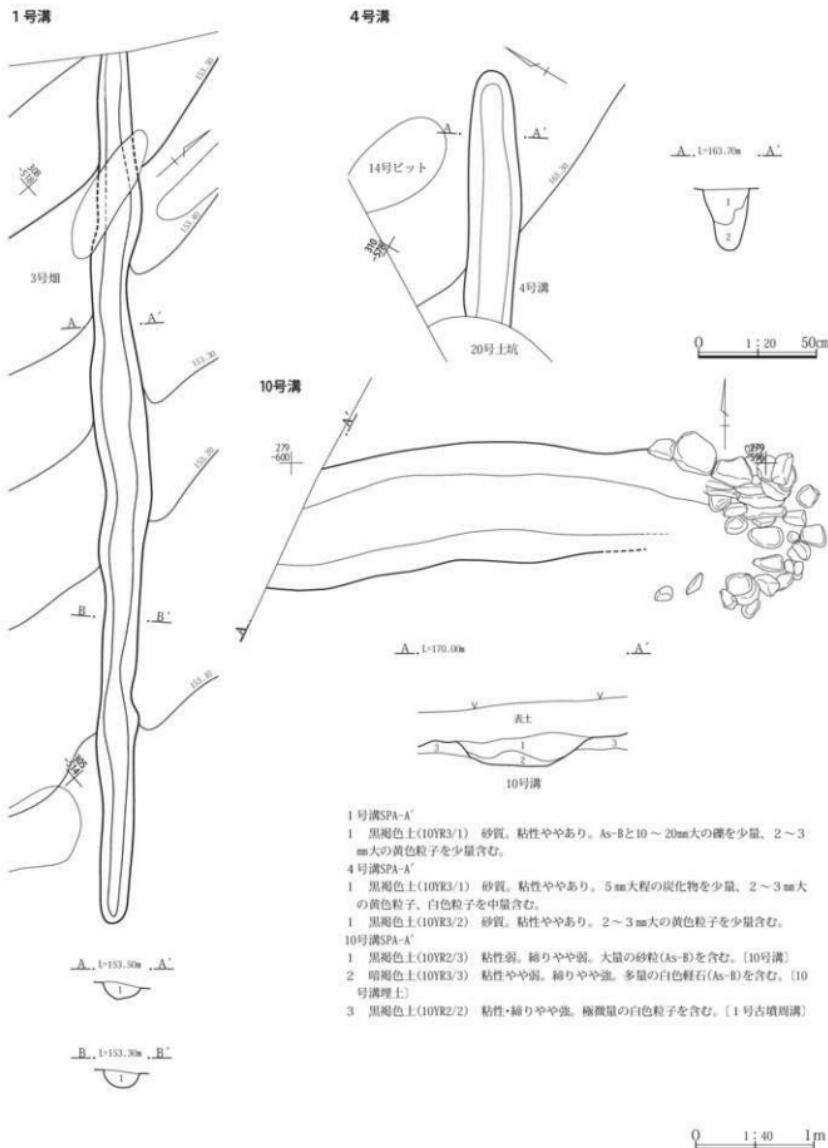
第2面における溝の検出は、B区およびD区の2条となる。B区1号溝は、調査時には第1面の遺構として調査されているが、その埋土より、やや古い遺構と判断されたため、第2面の遺構とした。

## 1号溝 第63図 PL.34

位置: 304 ~ 309-512 ~ 518グリッド

規模: 長さ(7.35)m程を検出し、一部が調査区外にかかる。溝幅は0.32 ~ 0.92m程、深度は0.21 ~ 0.64m程を計る。

走行: 北西→南東方向に走行。



第63図 第2面 1・4・10号溝平・断面図

**埋没土：**As-Bを含む。

**特徴：**調査区(B区)中央やや北東寄りにあり、等高線を斜めに横切るように直線的に走行する。遺構の年代は、埋土内に天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降下テフラを含むことから、平安時代末から中世初頭と考えられる。また、用途については、埋土内に小礫を含むものの、明瞭な水流の痕跡は認められず、区画を目的とした溝と推察される。

**遺物：**本遺構よりの遺物の出土はみられない。

#### 4号溝 第63図 PL.34

**位置：**309-577～578グリッド

**規模：**長さ(1.05)m程、溝幅は0.23m、深度は0.24m程を計る。

**走行：**北東→南西方向に直線的に走行か。

**埋没土：**やや粘性を持つ黒褐色砂質土。

**特徴：**調査区の西端部より検出されたため、南西部が20号土坑に重複し、調査区外に至る。走行は直線的で、底面の勾配もなく、明瞭な水流の痕跡は認められない。時期は明らかではないが、埋土の様相や検出状況から古墳時代後期から平安時代にかけての遺構と考えられる。

**遺物：**本遺構よりの遺物の出土はみられない。

#### 10号溝 第63図 PL.34

**位置：**278～279-596～600グリッド

**規模：**長さ(3.4)m程を検出し、一部が調査区外にかかる。

溝幅は1.0m程、深度は0.24m程を計る。

**走行：**西→東方向に走行。

**埋没土：**底面にAs-Bを含む。

**特徴：**調査区(D区)の1号古墳周溝内より検出される。遺構の年代は、埋土底面に天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降下テフラを含むことから、平安時代末と考えられる。埋土内には明瞭な水流の痕跡は認められず、直線的に走行することから、区画のための溝と推察される。

**遺物：**本遺構よりの遺物の出土はみられない。

## 第4項 畑・水田

B区中央部にて畑(旧畝状遺構)が、また、同区中央から北半部の低地にて水田が検出される。両遺構の時期は、畑が平安時代末、水田が平安時代末～中世と推定される。

#### 3号畑 第64図 PL.35・36

(旧B区1面1～5号畝)

**位置：**300-520～310-515グリッド

**規模：**調査区内において1×10m程の範囲内に畝状の高まりと耕作痕を検出する。調査時には個々に1～5号の畝状遺構として調査される。畝幅は20～40cm程を計る。

**埋没土：**畝上の凹部埋土にAs-Bを含む。

**特徴：**緩斜面に作られた畑で、畝の走行は等高線に平行する。調査時には中世～近世の遺構との判断も下されるが、畝上の凹部埋土内にAs-B(天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降下テフラ)が含まれることから、遺構の時期は平安時代後期と推定される。限られた調査範囲で、かつて擾乱による欠失もあり、畑の全容は明らかではないが、地形から考えて極めて狭域の耕作であったと推察される。

#### 1号水田 第65図 PL.36・37

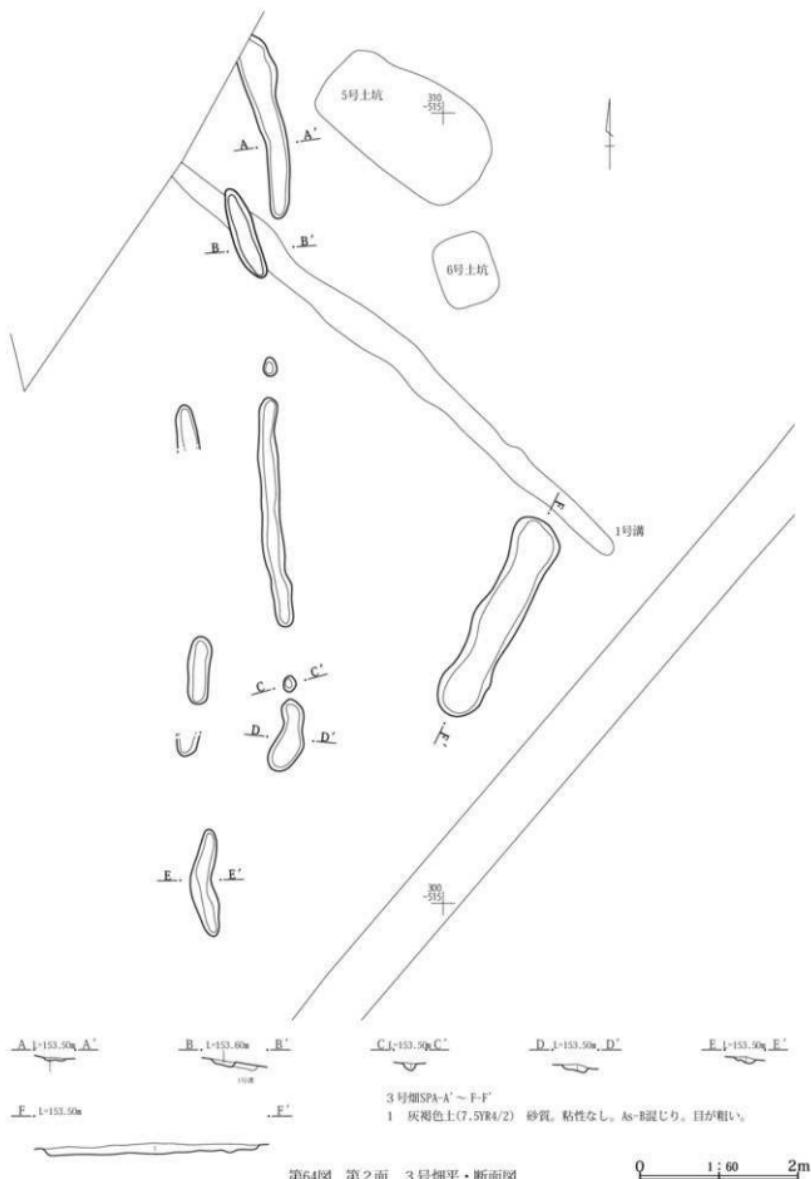
**位置：**300-520～345-500グリッド

**規模：**調査区(B区)の中央部から北半部に一帯において、不規則な耕作痕を検出する。

**覆土：**耕作痕内と埋土内にAs-B混土を確認。

**特徴：**谷地部の標高154.00mの等高線を北西限として、これより低い一帯に浅く皿状に窪む耕作痕(鋤痕)を検出する。畦・水口・水路等は検出されておらず、全容は明らかではないが、地形から考えて狭域の水田耕作であり、整然と区画・整備されたものではなく、自然地形を利用した簡素な水田と推察される。

遺構の時期について、調査時には中世と推定されていたが、初現は浅間B軽石降下前の平安時代に遡り、災害後も復興により軽石を鏝込んで耕作が行われた遺構と考えたい。



第64図 第2面 3号烟平・断面図



第65図 第2面 1号水田平・断面図

## 第5項 古 墳

### 1号古墳

立地と近傍の古墳(第66図、第2図)

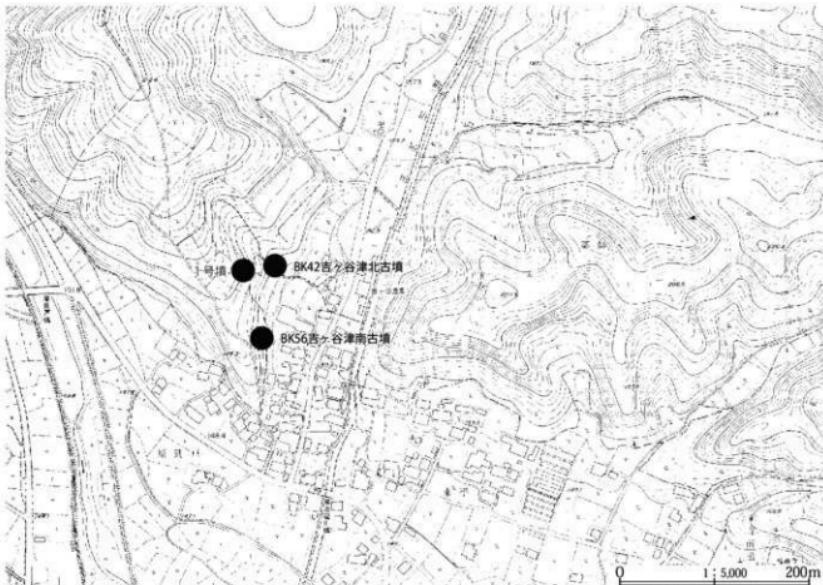
古墳は、丘陵上の調査地の南側中央部から発見された。上毛古墳総覧及び群馬県古墳総覧とともに未記載の古墳である。古墳の南西8mの丘陵のさらに南側先端近くに小円墳があり、吉ヶ谷津南古墳(BK56、安中市1279遺跡)と称される。奥側壁かと思われる巨石が一部露出している。また、丘陵を東側に降りて、丘陵から谷に入る側縁部にやはり円墳と思われる古墳があり、吉ヶ谷津北古墳(BK42、安中市1062遺跡)と称される。後世に、奥壁に虚空蔵菩薩が彫りこまれているもので、奥壁は1枚石である。天井石は2石ある。玄室にかかる手前の天井石は特に大きく奥に入り込み、玄室奥の天井石は、手前の天井石の下側に設置されて、奥室部分の天井石が1段下がるという特異な構造である。側壁は、秋間石の切石が、羨門部に位置しており、玄室内部の側壁は、粗削りの秋間

石を積み上げている。門の部分に整美な切石を配して、玄室の側壁は粗い削石を使用しているのである。この古墳は、奥壁に虚空蔵菩薩を彫刻していることや、側壁が補修されていることなど一部改変されており、石室構造を検討するには注意が必要である。ただし、現状では大幅な改変が無いとみている。羨道部の有無が明瞭でないことが検討事項であるが、側壁の状況を見る限り、本来羨道部が付いたものが、外されたものと推定する。今回調査した総覧漏の吉ヶ谷津1号古墳と比較をすると、羨門の整美な切石の造りや、正方形に近い玄室と想定されることなどからも、年代的には、吉ヶ谷津北古墳は1号墳より下がるものと推定される。

座標値： X=38270 ~ 38290 Y=-84590 ~ -84600

調査前状況 (PL.51)

1号墳を確認した状況をPL.51に示す。玄室及び羨道部と推定される地点に長1cmほどの小砾から長60cmの大石まで出土し、さらに前庭部と推定される地点及びその南側にも同様に大きな石と小砾が散乱した状況で出土し



第66図 吉ヶ谷津古墳と周辺の古墳位置図(安中市都市計画図No.1昭和49年を加工)

ている。最南部にある小礫の集中は、盗掘によって捨てられた葺石や石室床面の小礫が含まれていると想定する。このように石が多く出土していることから、ここに古墳がある可能性が考えられた。

#### 埴丘・石室の調査経過・遺存状況(第67・68図)

埴丘はほとんど残っていない。山寄せの古墳なので、玄室・羨道部分の地山を掘削して、石室全体よりやや大き目に掘方を掘削して底部を平坦にすると想定した。また、現況について確認するために、石室の主軸が南北方向にあると想定し、それに直交するようにトレンチを1本(Cセクション)入れた(第68図)。さらに、前庭と推定する付近からさらにその南方まで含めた小礫が集中して出土する範囲に並行して北東から南西方向にやはりトレンチ(Eセクション)を入れて崩落の石を含めた小礫を中心とした石の出土状況を確認した(第68図)。Cセクションでは、As-Aを多く含む土層が上層にある(第68図)。またその下層にはAs-Bを含む層が入っている。盗掘の際にAs-AとAs-B層を含む層を掘削した可能性を示している。前庭のEセクションを見ると、Eセクションの上から3層目にはAs-Bの純層が形成されている。その下層にはAs-Cを含む少量含む層が8~40cmほど、5~30cmほどの小礫・礫を含みながら堆積している。この層は前庭形成後に堆積してきた層で、古墳構築後ある程度の期間を経てAs-Bが降下堆積したことを示している。下部の平坦面に近い礫は前庭に敷かれた礫群と想定している。石室の内部は石材が散乱する状況となっており、天井石はもちろん、側壁を含めた石材が盗掘時に放置されたものと推定する。

調査は、このセクションを参考にしながら奥壁・側壁を出しながら、慎重に下げていった。前庭にも直交するBセクションを設定し、As-B純層が、前庭の床面に敷かれた小礫の上に少し間層が堆積した段階で降下していることが分かった(第78図)。石室の床面には、玄室には小礫が敷き詰めてあり、羨道にはやや大き目の礫が敷き詰めてある。玄室・羨道にはほとんど遺物が無く、もともと副葬品は少なかった可能性がある。玄室・羨道とともにすべて土は採取し、その後フライに掛けている。それでも、鉄釘の小破片が数点出土したのみで、鐵や装身具なども破片ひとつ出ていないので、前述したように本来副葬品は少ないと推定される。それと対照的なのが、前庭

部で、多量の7世紀~8世紀初頭の須恵器類が出土している。

石室の調査であるが、石室があった箇所に積まれていた石を外していくと、本来の側壁が現われてきた。動いている石を上から随時外していく。この作業に非常に時間がかかった。石が動いているかどうか判断を下すのが容易ではないからである。天井石や側壁の石などが石室内外に崩落している状況で、一部の石は割れていた。盗掘破壊に伴う側壁・天井石の破壊痕跡と推定する。本来の玄室・羨道の側石を露出して、石室内部の状況を示す断面図F~Hセクション(第74・75図)を測図後、セクションベルトを外して、奥・側壁を露出させながら、床面の確認を行った。床面には後述するように小礫が敷き詰められていたことから、床面の確認が行えた。Fセクション(第75図)で分かる様に前庭にも小礫が敷かれており、羨道床面から連続して石敷きがなされていることが確認できた。石室内には歯4点と骨小片が玄室右奥より出土し、遺物は鉄釘の破片と推定する鉄器片が2ヶ所からある程度まとまって数点出土している。棺の位置を想定する際の参考となる。羨道及び前庭には須恵器が多数出土しており、良好なセットを構成する。石室の石材及びその規格などを知るために、石室解体途中に、奥側壁石の個々の石材の石質同定を飯島静男氏に依頼し、長・幅・厚さ・重さの計測を行い資料化した。石室の奥測理及び床に敷き詰められた敷石をすべて外し、石室構築のための掘り方を確認して古墳の調査は終了した。

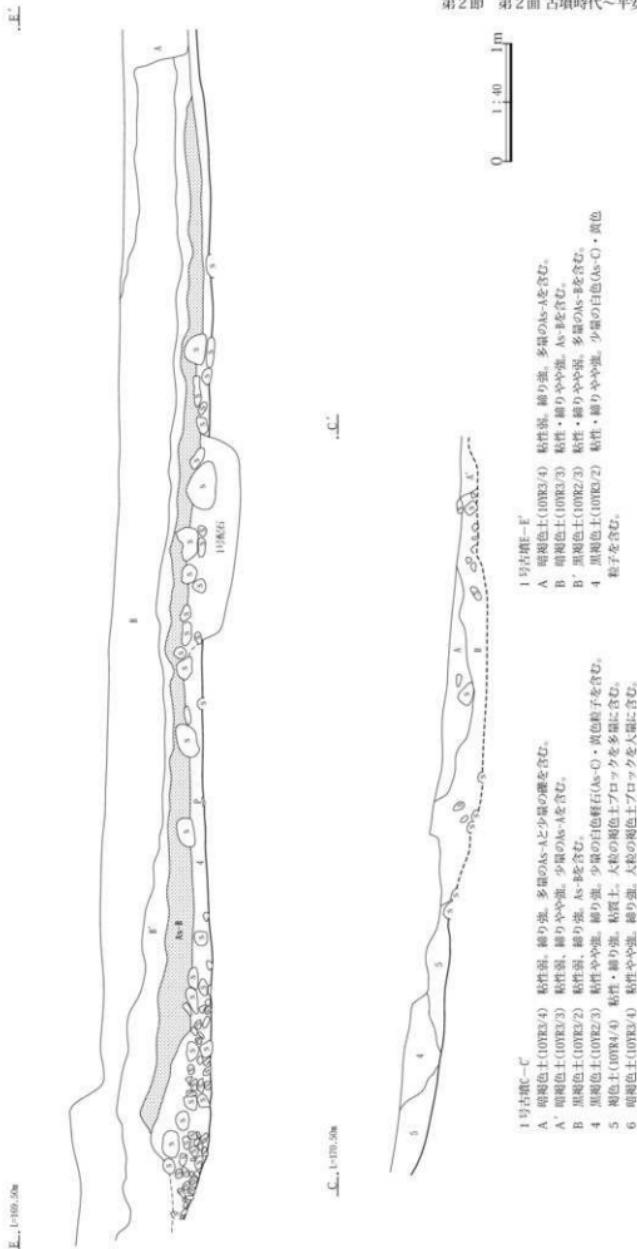
以下、古墳の構築の順序に沿って、埴丘区画・掘方掘削・奥・壁石の構築・床面石の敷き詰め・前庭の構築・石室内遺物出土状況・棺の配置想定・羨道の閉塞の状況・前庭における須恵器の配置・出土遺物について記す。

#### 埴丘区画(第69・70図)

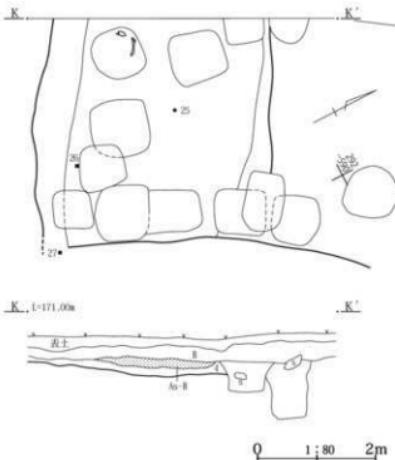
古墳の北部に古墳の大きさを決め、丘陵との区別をつけるための溝が確認できた。幅3.6~3.9m、深さは10cmほどの幅広で浅い溝である。この溝の上にKセクション(第69図)を見て分かる様にAs-Bが堆積していた。古墳の石室主軸に対してやや北西方向に斜交するものである。この溝の内側立ち上がりから前庭までの規模は13.4mである。なお、前庭南西にある幅1.6~1.8m、深さ11cmの幅広で浅い溝が、古墳の埴丘の南側の区画を示す溝の可能性があるが(第70図)、山寄せの古墳で、南



第67図 1号古墳石室調査前の石の散乱状況



第688図 1号古墳断面セクション図



1号古墳K-K'  
B 暗褐色土(10YR3/3) As-B混土。繊りややあり。粘性なし。微量の珪1~5mmの大白色軽石を含む。  
4 黒褐色土(10YR2/3) 粘性・繊りややあり。少量の白色軽石(As-C)・黄色粒子を含む。

第69図 1号古墳埴丘区画北側溝

側の前庭ぎりぎりまで区画の溝状の施設を設ける例がほとんど無いので、現時点では古墳と関係するかどうか判断は保留したい。この溝を古墳の埴丘を区画する溝としても、埴丘径は13.4mである。

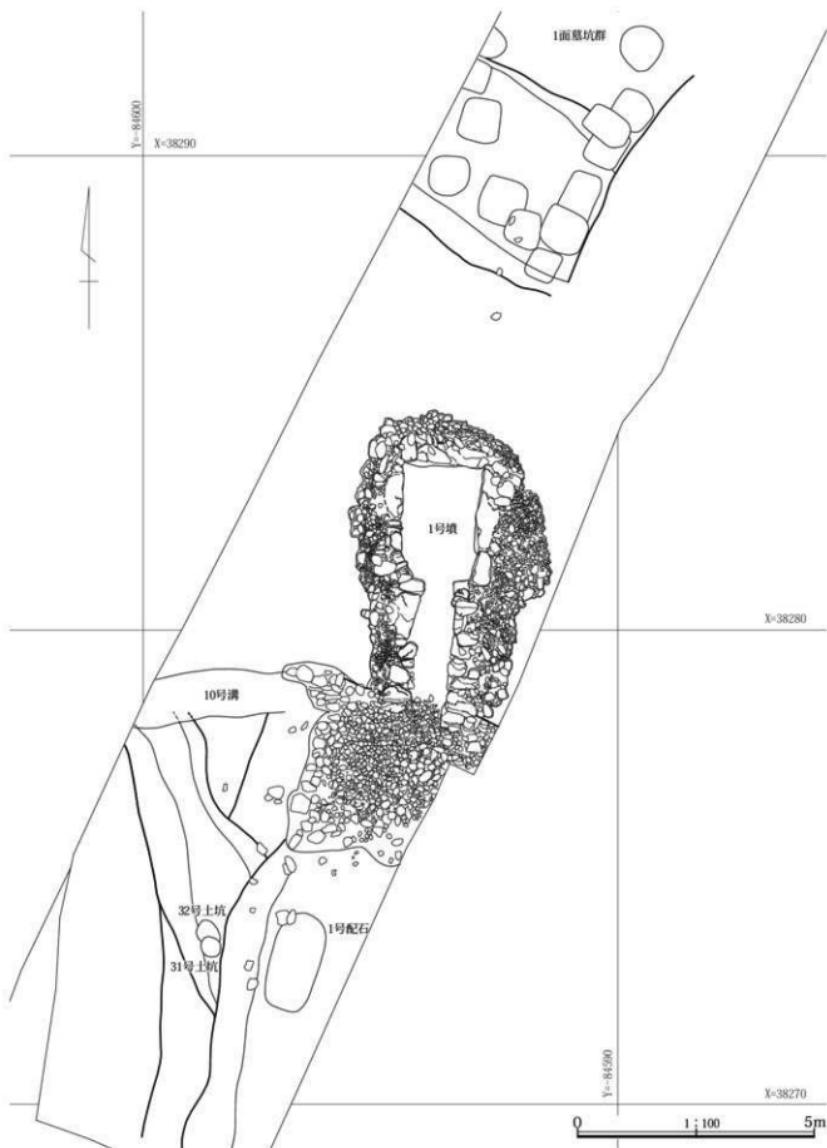
#### 石室掘方(第71図)

石室を構築するためには、北から南に下る丘陵の傾斜部であるために、丘陵北側上部側の標高の高い傾斜面を掘削して、石室配置の為の平坦面を形成する必要がある。北側の奥壁側の掘削の幅が2.8mで、深さは1.5m以上ある。掘方の掘削幅は、玄室から羨道・前庭にかけてだんだんと拡がり幅3.5m以上となるが、羨道及び前庭の東側が調査区外となるために、南側の幅のデータは計測できない。深さは、玄室部中央付近で1.7m以上ある。石室形態で見るに羨道部は狭くなるが掘方においては、長方形あるいは、南に向かうにつれやや拡がりを持つ台形状を呈している。これは、前庭が南側にある程度の広がりを持って構築されることと関係があり、羨道の形に合わせて掘方の幅を決めるのではなく、南側に最終的に拡

がる前庭の側線に沿って、奥壁から線で結んだラインで掘方掘削を行っていることを示している。また、掘方を精査すると、玄門部の樋石及び兩玄門の根石に沿う様に、浅いピットを作成しているのが分る。これは、玄室から玄門に至る玄室の長さ・幅を規定するための記しとなる可能性が高い。そのことは、左羨門部根石に合せてピットがあることからも分かる。この部分も、羨道の先端である羨門の位置を示すための記しと想定する。他の箇所にピットが無いことが、このピットを記しと想定することを間接的に証明している。また、左羨門部下のみにピットがあることで、羨道の構築に際してはまず、左側を先行して構築して、長さを決定した後に、右側を構築していく可能性があることも示している。また、この左羨門部下のピットは、玄室の主軸方向でそのまま延長した場合の本来の羨門部の位置からすると30cmほど西に偏っている。その原因としては、東側は現在激しい崖があり、古墳時代当時からこの崖面が近くにあったわけではないとしても、崖からなるべく離るために羨道部の方向を西に振ったものと推定している。本来ならば最初の玄室の設置箇所や方向であらかじめ西に振った形で行っていれば済んだものである。ただし、掘方段階からの羨門位置の設定なので、当初より玄室本体はなるべく南北方向にして北枕を維持し、そのために羨道部が地形的に構築が難しくなる状況を防ぐ為にあらかじめ、羨道部のみを西に振ったものと推定する。

#### 敷石の敷設(第72図)

掘方掘削の後、石室の奥側壁を配置する箇所及び少し外側の範囲まで、礫を敷く。礫は、長2~50cmほどの大小の礫を敷く。奥壁の下部には長20~50cmほどの大きさの礫を中心に敷かれており、他の敷石の箇所に比べて意識して大きな石を選択して敷き詰めている。左側壁奥部の下も長10~50cmほどの大きさの礫が敷かれている。全体的に、左側壁下部敷石は、右側壁下部の敷石より大きめの礫を選んで敷く傾向がある。玄室内に相当する空間には長2~12cmの小型の礫を敷いている。玄室外側の敷石は、玄室の内側の小礫の敷石の外側70~90cmほどまで石を敷いている。第一段根石とほぼ同じ幅の箇所(奥壁)もあれば、特に左側壁に認められるように、50~60cmほど外側まで石が敷き詰められている箇所もある。羨道内部に相当する空間には、玄室内部よりやや



第70図 1号古墳全体図

大き目の長3~20cmの礫を敷いている。玄室と羨道で、敷石に使用する礫の大きさを変えている。

玄門の欄石の下に長60cm、幅30cmの長方形形状の石を横置きに設置している。この石の下には、この石を設置するための掘方の痕跡があり、さらに、左右の玄門の基底石に合せた掘方もあり、先述したように玄室の長さを決めるための記しとして配置してあったものと推定する。

#### 玄室・羨道の規模

全長：左壁長5.32m、右壁長5.60m、中央長5.48m

玄室：左玄室壁長2.46m、右玄室壁長2.42m、玄室中央長2.52m、玄室奥壁幅1.58m、玄室玄門幅1.42m、左玄室残存最大高1.04m、右玄室残存最大高1.08m、右玄門長0.38m、左玄門長0.40m、(玄門長は羨道長に含む)

羨道：左羨道壁長2.88m、右羨道壁長3.08m、羨道中央長2.94m、羨道玄門部幅0.98m、羨道奥部幅1.1m、羨道羨門部幅1.0m、左羨道残存最大高1.04m、右羨道残存最大高1.1m、左羨門長0.58m、左羨門幅0.38cm、右羨門長0.54m、右羨門幅0.40cmとなる。

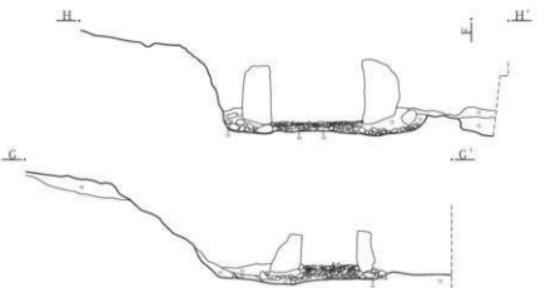
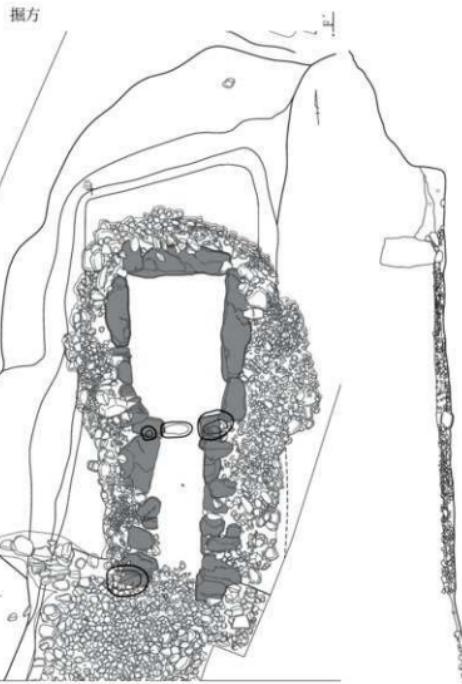
玄室主軸方向：N-2°W

羨道主軸方向：N-71°W

前庭：幅(3.7m)、長3.9m

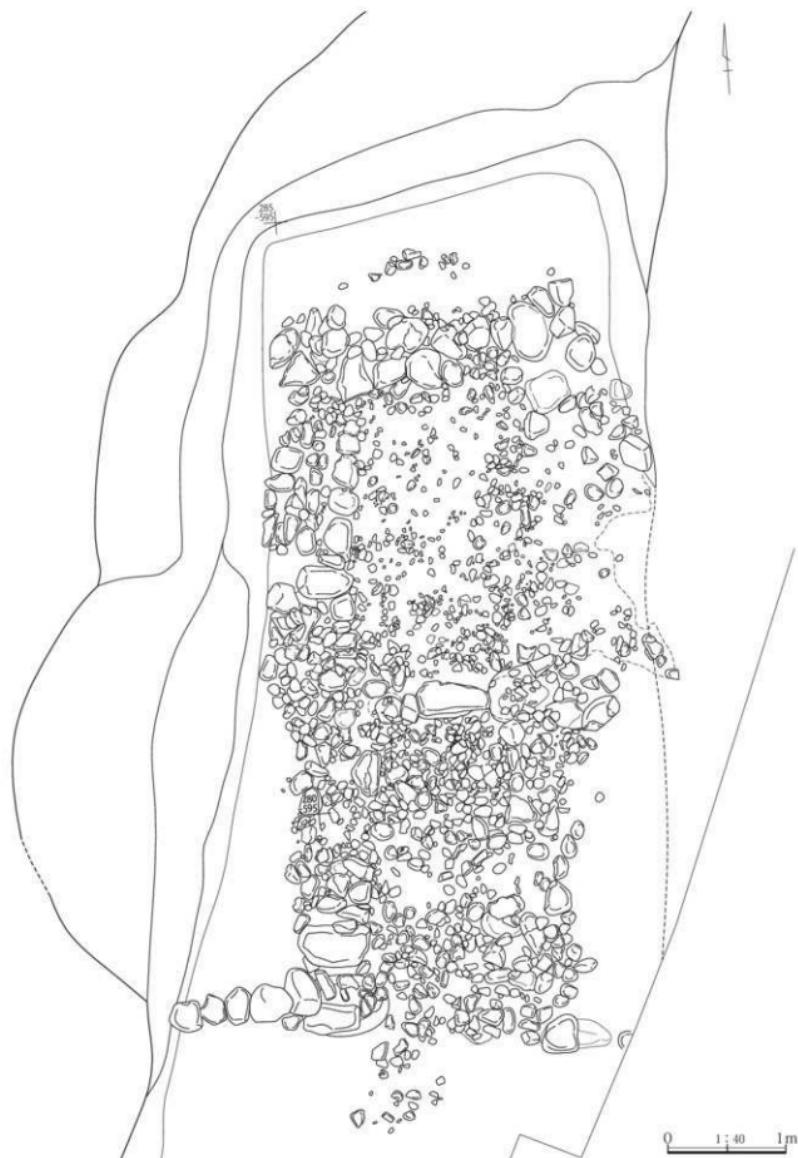
#### 奥・側壁の構築(第71~77図)

**石材(第76・77図)** 石材についてであるが、大きい石はほとんど秋間石である。地理的環境の所でも記したが、秋間石は当古墳が位置する場所より北の峰尾根付近に良質な秋間石の石材産地があり、その地からここまで運んだものと想定している。秋間石以外の隙間を埋める調整石には粗粒輝石安山岩が使用され、ごく一部にデイサイト・チャートが1点ずつ使用されている(第76・77図)。主な石で、石材が秋間石と異なるのは、右側壁の玄門すぐ左隣の玄室右側壁の第一段の粗粒輝石安山岩と、同じ玄門すぐ右隣の右羨道側壁に使用した第一段の石の礫岩の2石である。基本的には、秋間石を使用



0 1:80 2m

第71図 1号古墳石室掘方平・断面図



第72図 1号古墳石室敷石図

して構築するというこの地域の石材使用の原則に則ったものと言える。

**石室構築順序(第73～77図)** 石室構築の順序であるが、まず奥壁の設置が最初に来ることは間違いない。さらに玄室の側壁の左右両壁を見ると、右側壁には、27の奥壁に接する一番奥の側壁と奥壁の間に調整石が4～5個あり、さらに玄門前には、先述したように秋間石ではない33の粗粒輝石安山岩を用いており、さらには28・29・34・35などの小礫を調整石として隙間を埋めている。そのことは更に渓道部に至っても、47の礫岩の使用、また、48・49・40・41・42・43・44・45・51・53などの小礫を調整石として使用している。本来は、大石は秋間石を使用するのが基本の中で他の石材を使用し、また調整石が多いことなどから、右の玄室及び渓道の側壁は、左側の側壁が構築後に構築されたものと推定する。渓道下部の敷石は、左右側壁とともに3～30cmほどの大きさの礫を敷き詰めている。先述したように、左渓門部下には、渓門の基底石に合せたピットがあり、渓門の位置を示す記しとしたものと想定する。そのピットに長10～20cmの礫が数点入り、さらに左渓門の南側に玄門を抑えるような形で長48cm、幅28cmの大き目の石が敷かれており、この石は斜めに据えられる玄門がずれるのを押さえる役目があるものと思われる。

**奥壁設置(第73・75図)** 奥壁から構築状況を説明する。奥壁(第73図)は、横175cm、縦90cm、厚さ50cmで、重さ1,700kgであり、現状で残る石材の中では右側壁27に次いで2番目に大きく重さもある。天井石は盗掘で破壊されているが、もし天井石が残存していれば奥壁よりさらに大きく、重さもある石材があつた可能性もある。奥壁を設置する際には先述した大き目の礫を敷いて、奥壁の荷重に耐えられるように工夫している。Fセクション(第75図)を見ると、裏側の掘方のほぼ垂直に立ち上がる壁と奥壁は、1.2mほど離れている。奥壁と掘り方壁の間に層厚10～30cmほどの褐色土～暗褐色土で、粘性があり、締まりも強いローム土中心の土層が互層で積み上げられて、奥壁との間を充填し、奥壁を支えている。上部の層は、粘性・締まりともに弱い層となっている。

奥壁の高さが90cmなので、この上にさらに、1～2段の大石が重ねられたものと考える。

**左玄室側壁(第73・75図)** 玄室を構築するに当たり、先

述したように左側から玄室、渓道ともに構築したものと推定する。まず、左玄室側壁は、横131cm、縦101cm、厚さ45cmの20の大石を奥壁に接して配置する。この大石の下部にある敷石は、先述したように大き目の礫が敷設されている。この石の続きの第1段左側壁は、18・16と横47・61cm、縦67・85cm、厚さ23・35cmの大石が置かれており、18の石の下部も大きめの礫が敷かれている。奥壁に接する左右の27・20の側壁の裏側のHセクション(第75図)を見ると、左右が極めて対称的である。山側の西側20側壁の裏側は、30～70cmの間隔で掘り方壁になる。奥壁や渓道の掘り方壁からの距離に比べるとかなり短い。20の側壁を支える土層は、10～38cmの層厚を持つもので、いずれも粘性・締まりとともに強い。反対側の東側27側壁東には、地山の掘削痕跡がなく、層厚8～30cmの粘性・締まりとともに強い盛土が互層に27側壁を支えるように積み上げている。

**左玄門設置(第73・74図)** 玄門12が16の側壁横に配置される。玄門12の下部にはピットがあり、そこに嵌めるように12の玄門石を置いたものと推定する。側壁16と左玄門12との間の上部は少し隙間が開いており、粗粒輝石安山岩の調整石(13～15)が置かれている。玄室の配石の安定と押さえを考えると、左側壁に統けて渓道も構築したものと推定する。

**左渓道側壁構築(第73・75図)** 先述したように、設計段階から、渓道を少し西側に振って、東側の崖部から遠ざけるように掘方段階から意図して設計している。12の左玄門に接して、横172cm、縦66cm、厚さ36cmの横長の11の大石を配置している。4の左渓門との間には、9・10などの調整石を置いている。渓道部を11の横長石1石で納めるために調整が必要であったと推定する。他例を見ても、基底石の第1段は一連の構築で一齊に行なうことが多い。また、基底石11の上に4の渓門、12の玄門の高さに合わせるように1～3・2・5～8と、調整石を置いている。左渓道の11側壁の裏側(Gセクション(第75図))には、掘方立ち上がりまで幅90cmほどある。その掘方に粘性・締まりとともに強い裏込めの土が11側壁石を支えるように互層で積まれている。11側壁石の上部には、長5～13cmほどの小礫混じりの裏込め土が互層に積まれている。

**右玄室側壁構築(第73・75図)** 右の玄室側壁27は、横

185cm、縦110cm、厚さ63cm、重さ2,900kgと現状で残る石材のなかでは1番大きく重さもある。ただ、27の正面右下が空いており、そこに28～30の調整石を配置している。先述したように、秋間石ではない粗粒輝石安山岩33をその隣に配置し、上部の隙間に32・34・35の同じ粗粒輝石安山岩を調整石で詰めており、左隣の27の巨石に合せるために第1段の33の基底石の上に31の秋間石を配置する。27側壁石の裏側には粘性・綿りともに強い長5～30cmの土層が互層で積まれている。

**右玄門の設置(第73～75図)** 右玄門36が33・31に接して建てられている。先述したように、設置用の窪みを敷石下に造り、玄門の安定化を図っている。窪みの上に3～10cmの小礫を敷いてその上に右玄門36を置いている。

**右羨道側壁構築(第73～75図)** 右の羨道側壁は、玄門36に接して、基底石の礫岩の47が配置され、その上に玄門36の高さに合わせるように、秋間石39を配置する。この47・39の2段の石に接するように第1段の50の大石が配置されている。周りに隙間が開き、48・49などの粗粒輝石安山岩が47・39の石との隙間に詰められている。50の大石のやや隙間が開いた右隣に52の石がかなり深く床に刺さる様に直立しており、その52の石に、54の羨門が斜めに立てかけられている。50・52の石の上には、39・54の羨門の石に高さを合わせるように40～46、51・53・46などを調整石として積み上げている。秋間石以外の石の配置があり、調整石も左壁に比べて小さくて多いことなど、左側壁を構築した後に、右側壁を構築した様子がうかがえる資料である。

玄室の主軸方向は、N-2°W、羨道の主軸方向は、N-10°Wである。玄室の主軸方向からすると、8°西方向に振れている。前述したように、石室東側の地形が崖面に面しており、それを避けるために羨道部で方向を西にずらしたものである。

**玄室・羨道の石敷床面の形成(第73・75図)** 玄室の床面は、長2～6cmの大いな礫を厚さ8～12cmほどのかなりの厚みを有して充填している。羨道の床面の礫は、玄室より大きめで、長2～10cmの大いな礫を、10～14cmほどと玄室よりさらに厚みを持って充填している。また、玄門の間に3石の楕石を、楕石下部に配置した横長石の上に置いている。

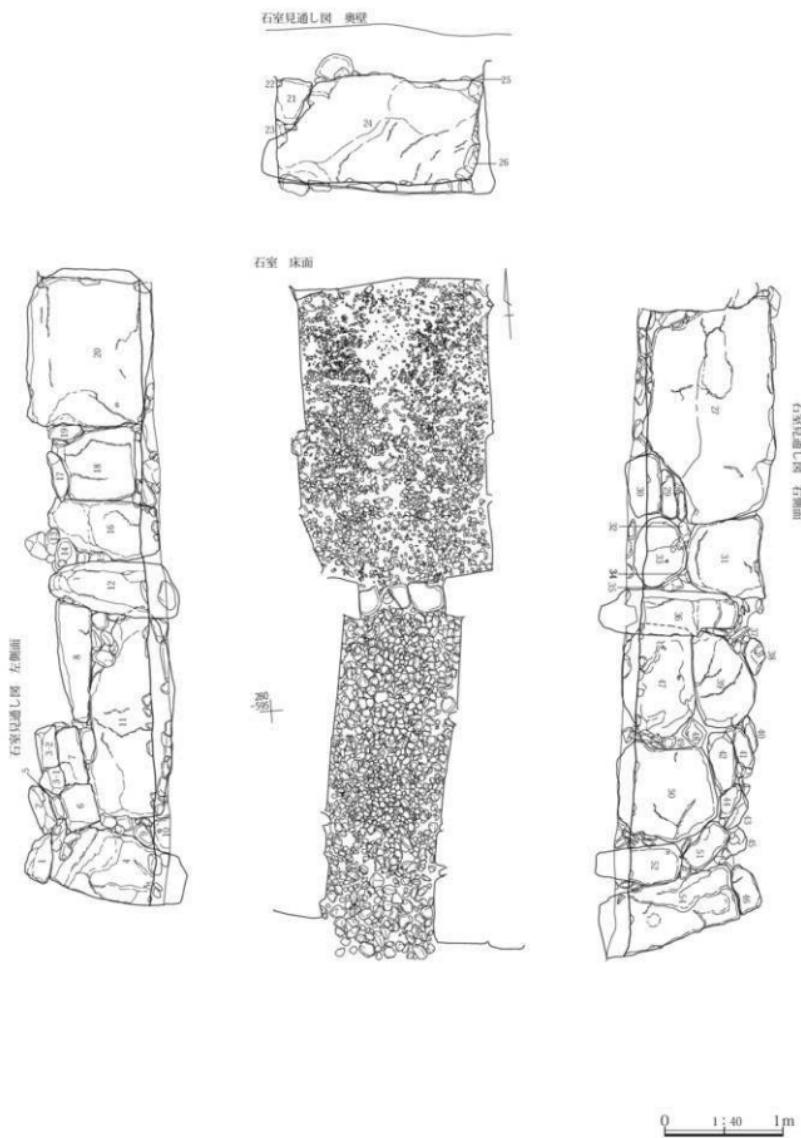
**前庭の構築(第74・75・78図)** 前庭の構築は石室構築後

と想定される。前庭は、右前庭部が、調査区外になるため、前庭の幅は明瞭でない。石室入口部での現状での前庭幅は3.2mあるが、本来は右側にさらに拡がる。左前庭部の翼部は、左羨門から、1.5mの箇所で屈曲しており、それを対称にして東前庭に延ばすと、3.7mの幅が想定される。前庭の長さは、石敷きや石列からすると3.9mほどである。須恵器の出土状況を見るとさらに南側に須恵器が展開しているので、須恵器出土場所も含めた前庭の想定長は、4.3mほどとなる。しかし、石敷きや石列及び遺物の出土量からすれば、前庭長は3.9mと想定したほうが良いと思われる。前庭幅は3.7m、前庭長は3.9mと推定する。

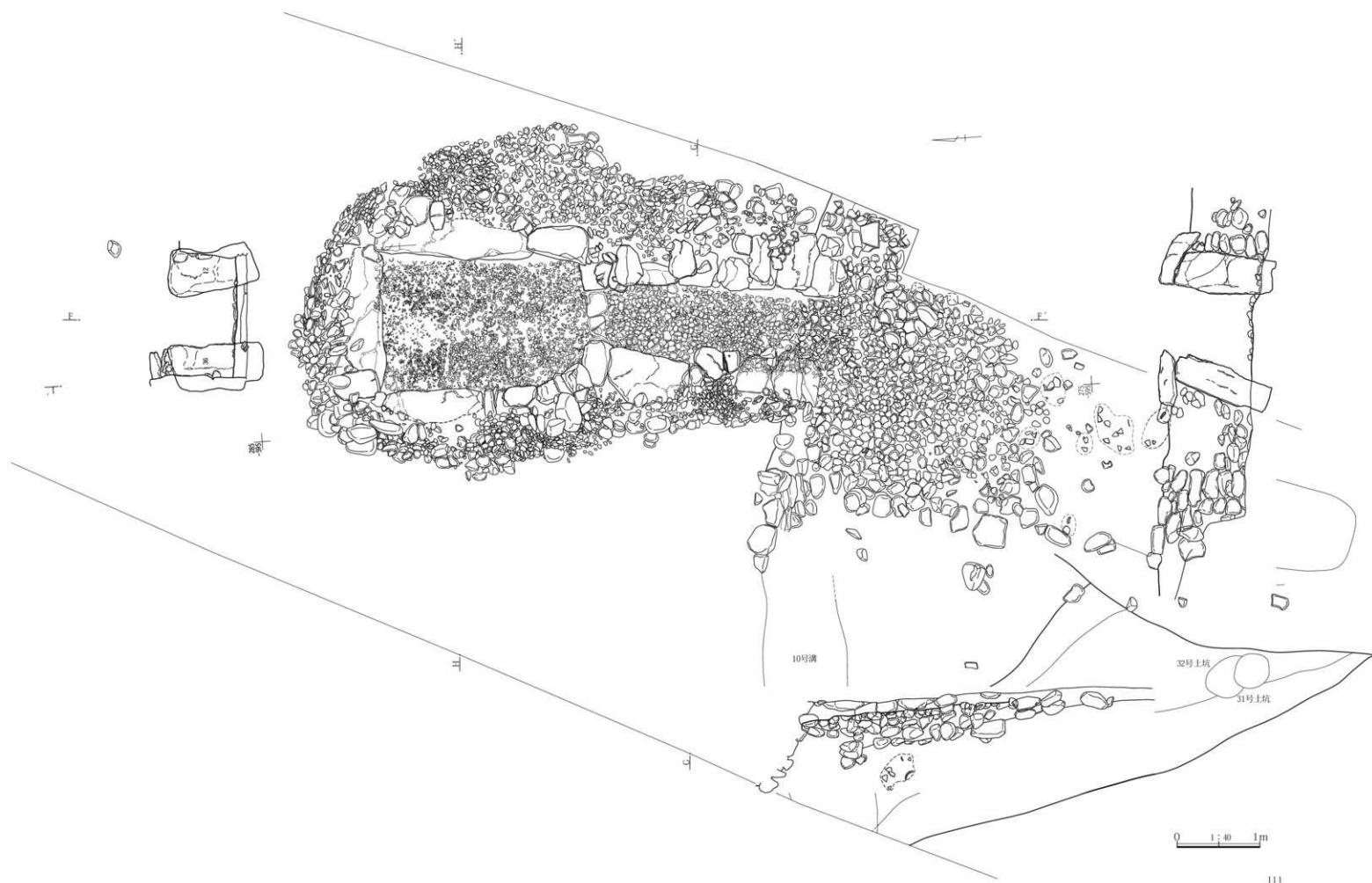
羨門部横には、左羨門から1.5mの幅に、長10～42cmの横長の石が、現状で1.1mの高さを70°の角度で7段積み上げられて左壁を構成する。この壁からほぼ90°に南側に屈曲してやはり70°の角度を有して、2～6段に積み上げた石列が直線状に延びる。南に行くにつれ、石の積み上げ段数は低くなるが、本来の高さは不明である。右側羨門横の壁は現状で70°の角度で6段積の長7～25cmの横長石が確認できるがそれより右側は、壁及び翼部の壁も調査区外で不明である。前庭の礫は長3～32cmの大きさであるが、平均は10cm程度の礫である。礫層の厚みは20～30cmとかなりの厚みを有して敷いている。なお、10号溝は、古墳構築後の新しい溝である。

**遺体・副葬品の配置(第79・81図)** 遺体の痕跡は、歯が4個、石室右奥(北東)側に、奥壁より1～1.4m、右壁沿いから80cmほどとの間に出土している。骨もごく一部が出土しており、この箇所に頭骨があり北枕で遺体を置いていたと推定する。被葬者については、出土歯より15～20歳程度の若い男性の可能性が高いとの鑑定結果である(第3章第1節参照)。鉄釘破片が、先述した頭骨周辺及びその南側から計3点出土している。この遺体を納めた木棺に打ち込まれた釘と想定する。玄室左玄門近くに3点の釘が集中して出土している。もう1体の棺が玄室南西隅に置かれていた可能性もある。玄室ほぼ中央や左から大型白玉が出土している。出土位置がかなり高いレベルから出土しているので、この古墳に伴うか検討を要する遺物である。当古墳の7世紀代の年代の白玉の特徴を示す大型粗製白玉であり、時期的には整合する。

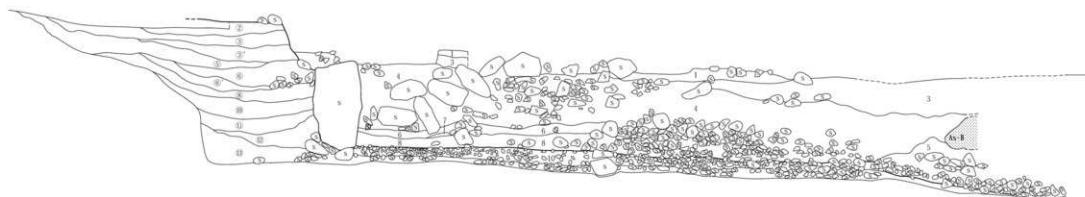
**羨道の土器の配置(第79・81図)** 羨道に須恵器を中心と



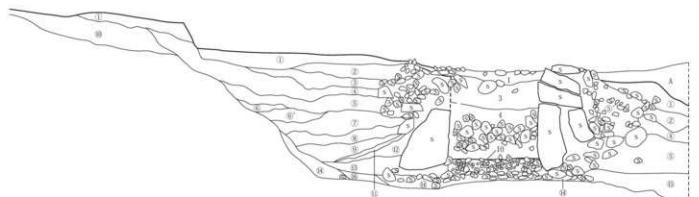
第73図 1号古墳平面図・見通し図



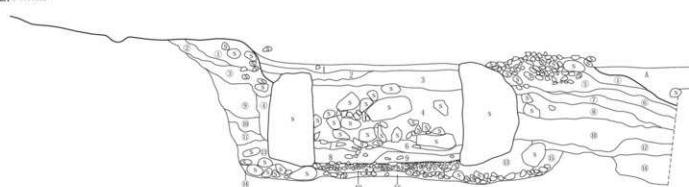




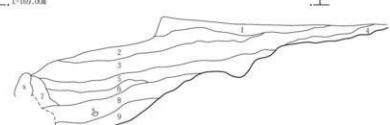
$G_{\text{ext}}$ , t=170,000



$H_{\text{out}}$ , L=170.00m



1 - t=100.00s



- 1号培地-F' -G' -H'

  - 1 希褐色土(10YR4/4) 黏性弱。締り強。白色粒子・黃色粒子・細砂を含む。
  - 2 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや弱。締りやや強。大量的細砂・粗砂を含む。
  - 3 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや弱。締りやや強。少量の細砂を含む。
  - 4 黒褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂・小礫を含む。
  - 5 黑褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。少量の細砂を含む。
  - 6 希褐色土(10YR3/4) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂を含む。
  - 7 希褐色土(10YR3/4) 黏性・締りやや強。細砂の細粒を含む。
  - 8 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。微量の砂粒を含む。
  - 9 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂を含む。
  - 10 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締り弱。大量的礫(敷石)と少量の砂粒を含む。
  - 11 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや弱。締り強。少量の白色粒子と微量の黒褐色土小ブロックを含む。
  - 12 黑褐色土(10YR3/2) 黏性やや強。締り弱。少量の白色粒子・褐色粒子・褐色土小ブロックを含む。
  - 13 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締り強。褐色質粘土(10YR4/4)との混土。互層構造。
  - 14 希褐色土(10YR3/3) 黏性やや弱。締り強。微量の白色粒子と褐色土小ブロックを含む。
  - 15 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや弱。締り強。少量の白色粒子を含む。
  - 16 黑褐色土(10YR2/3) 黏性やや強。締り弱。少量の白色粒子・褐色質小ブロックを含む。
  - 17 希褐色土(10YR4/6) 黏性・締り強。質粘土・少量の黒褐色土を層状に含む。
  - 18 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや強。締り強。少量の褐色土小ブロックを含む。
  - 19 希褐色土(10YR3/4) 黏性やや強。締り弱。微量の白色粒子を含む。
  - 20 細粒土(10YR4/4) 黏性・締りやや強。多量の黒褐色土小ブロックを含む。
  - 21 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。多量の(Ac-)・黃色粒子を含む。

④ 希褐色土(10YR3/3) 黏性やや強。締り強。褐色土小ブロックと黒褐色土小ブロックを含む。

⑤ 希褐色土(10YR4/4) 黏性・締り強。多量の褐色土ブロックと黒褐色土小ブロックを含む。

⑥ にぶい黒褐色土(10YR4/3) 黏性・締りやや強。多量の暗褐色土ブロックを含む。

⑦ 黑褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。少量の褐色土小ブロックを含む。

⑧ 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締りやや強。微量の褐色土小ブロックを含む。

⑨ 希褐色土(10YR3/4) 黏性・締りやや強。微量の褐色土小ブロックを含む。

⑩ 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締りやや強。微量の褐色土小ブロックを含む。

⑪ 希褐色土(10YR3/3) 黏性弱。締り弱。As- $\lambda$ を含む。

1号土「壇一」

  - 1 希褐色土(10YR3/4) 黏性弱。締り強。白色粒子・黃色粒子・細砂を含む。
  - 2 希褐色土(10YR3/3) 黏性やや弱。締りやや強。大量的細砂・粗砂を含む。
  - 3 希褐色土(10YR3/3) 黏性やや弱。締りやや強。少量の細砂を含む。
  - 4 黑褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂・小礫を含む。
  - 5 黑褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。細砂の細粒を含む。
  - 6 希褐色土(10YR3/4) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂を含む。
  - 7 希褐色土(10YR3/4) 黏性・締り強。細砂を含む。
  - 8 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。微量の細砂を含む。
  - 9 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。細砂・粗砂を含む。
  - 10 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締り弱。大量的礫(敷石)と少量の砂粒を含む。

1号土「壇二」

  - A 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締りやや強。As- $\lambda$ を含む。
  - B 希褐色土(10YR3/3) 黏性・締りやや強。多量のAs- $\lambda$ を含む。
  - B 黑褐色土(10YR2/2) 黏性・締りやや強。多量のAs- $\lambda$ を含む。
  - 4 黑褐色土(10YR3/2) 黏性・締りやや強。少量の(Ac-)・黃色粒子を含む。

を含む。  
1. 吊り橋

B 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・練りやや強。As-Bを含む。

B' 黒褐色土(10YR2/3) 粘性・繊りやや弱。多量のAs-B

4 黒褐色土(10YR3/2) 粘性・締りやや強。少量の白

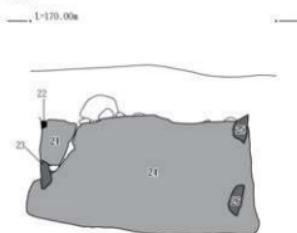
粒子を含む。

5 黒褐色土(10YR2/3) 粘性・締りやや強。微量の黄



## 第2節 第2面 古墳時代～平安時代の遺構

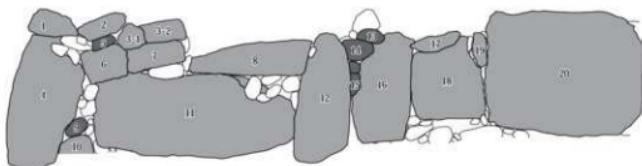
奥壁



第18表 1号古墳石室石材計測表(2)

石番号	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材
21	34	35	63	125.5	秋間石
22	13	6	18	2.6	チャート
23	9	21	28	7.5	粗粒輝石安山岩
24	175	90	50	1,700.0	秋間石
25	27	19	28	12.0	粗粒輝石安山岩
26	15	28	34	28.5	粗粒輝石安山岩

左側壁



0 1:40 1m

第18表 1号古墳石室石材計測表(2)

石番号	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材
1	46	16	68	64.0	秋間石
2	36	14	56	44.0	秋間石
3	16	13	26	9.4	秋間石
	32	16	46		
4	61	92	40	500.0	秋間石
5	19	9	22	5.5	粗粒輝石安山岩
6	34	26	50	100.0	秋間石
7	46	25	49	66.6	秋間石
8	99	28	61	300.0	秋間石
8の下			48	29.9	粗粒輝石安山岩
9	21	14	33	19.6	粗粒輝石安山岩
10	38	19	59	68.0	秋間石
11	172	66	36	800.0	秋間石

石番号	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材
12	36	101	55	500.0	秋間石
13	16	17	28	7.9	粗粒輝石安山岩
14-1	23	18	20	15.2	粗粒輝石安山岩
14-2	24	22	18	8.1	粗粒輝石安山岩
14と15の間	18	6	24	5.2	粗粒輝石安山岩
15	6	19	26	7.2	粗粒輝石安山岩
16	47	85	23	200.0	秋間石
17	41	14	24	16.5	秋間石
18	61	67	35	300.0	秋間石
19	11	29	52	29.0	秋間石
20	131	101	45	1,100.0	秋間石

■ 秋間石

■ 粗粒輝石安山岩

■ 花崗岩

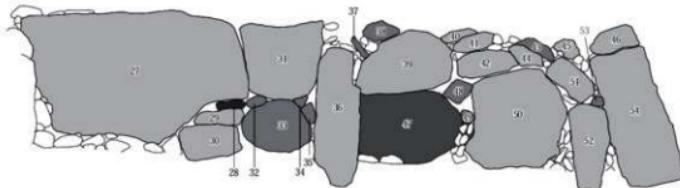
■ ディサイト

■ チャート

第76図 1号古墳奥壁・左側壁石材種類図

右側壁

— 1:170.00m —



0 1:40 1m

第19表 1号古墳石材計測表(3)

石番号	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材
27	185	110	63	2,900.0	秋間石
28	25	8	9	2.2	デイサイト
29	40	15	42	14.2	秋間石
30	54	28	33	71.1	秋間石
31	74	68	41	400.0	秋間石
32	17	9	26	7.4	粗粒輝石安山岩
33	56	48	33	300.0	粗粒輝石安山岩
34	11	10	16	1.8	粗粒輝石安山岩
35	13	8	26	5.3	粗粒輝石安山岩
36	28	88	42	400.0	秋間石
37	19	5	41	6.0	粗粒輝石安山岩
38	34	18	52	31.8	粗粒輝石安山岩
39	80	54	25	300.0	秋間石
40	33	7	48	22.5	秋間石
41	40	15	52	52.6	秋間石
42	47	18	61	72.0	秋間石
43	35	11	41	20.5	粗粒輝石安山岩
44	31	15	73	52.6	秋間石

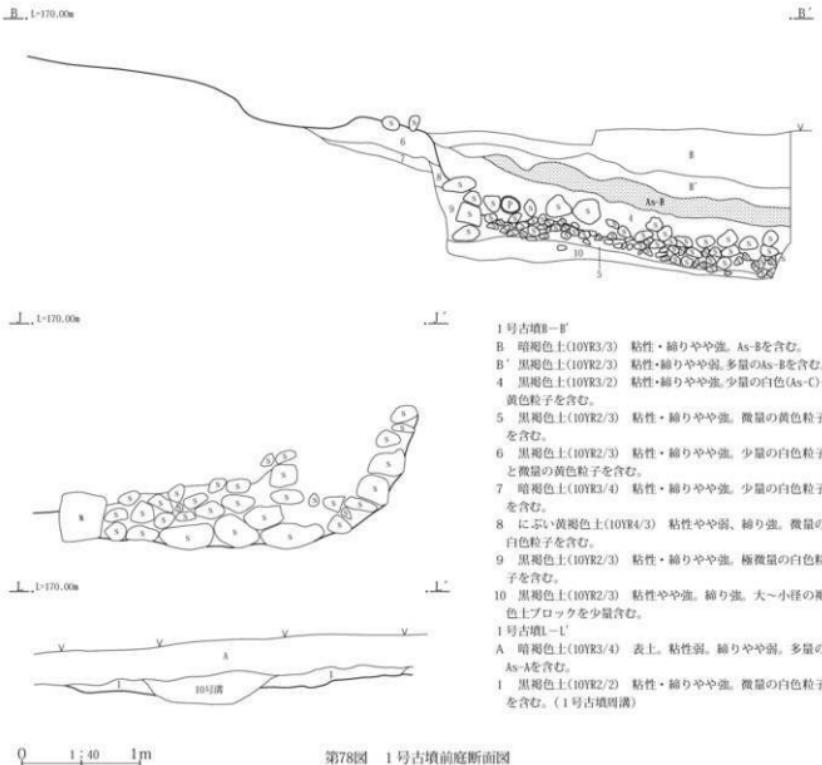
石番号	横(cm)	縦(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	石材
45	27	20	58	48.9	秋間石
46	49	24	68	200.0	秋間石
47	88	59	52	500.0	輝岩
48	30	16	38	23.6	粗粒輝石安山岩
49	10	9	31	5.6	粗粒輝石安山岩
50	82	81	26	400.0	秋間石
51	41	23	42	67.8	秋間石
52	32	37	57	200.0	秋間石
53	11	9	31	5.9	粗粒輝石安山岩
54	57	121	50	700.0	秋間石

\*その他の石 安山岩が50%。他にチャート、砂岩が多い。いずれも近隣で採取可能。

内訳 (kg)	
秋間石	5,901.7
粗粒輝石安山岩	407.9
輝岩	500.0
チャート	2.6
デイサイト	2.2

■ 秋間石 ■ 粗粒輝石安山岩 ■ 輝岩 ■ デイサイト ■ チャート

第77図 1号古墳右側壁石材種類図



第78図 1号古墳前庭断面図

する土器が出土しているが小片である。

**前庭の土器の配置(第81図)** 土器の出土位置は、大部分が前底部からである。羨門やや南からは、須恵器壺(第81図-16)、須恵器フラスコ型長頸壺(第81図-18)が割れた状態で出土している。

羨門左側前底部壁沿い北から、土師器杯(第81図-11)、須恵器長頸壺(第81図-14)がほぼ完形で、須恵器杯蓋(第81図-12)が破片で出土している。また、前庭南西部にある区画～溝の可能性がある溝から須恵器杯蓋が4点(第81図-19～22)出土している。時期的には7世紀後半に位置づけられる。

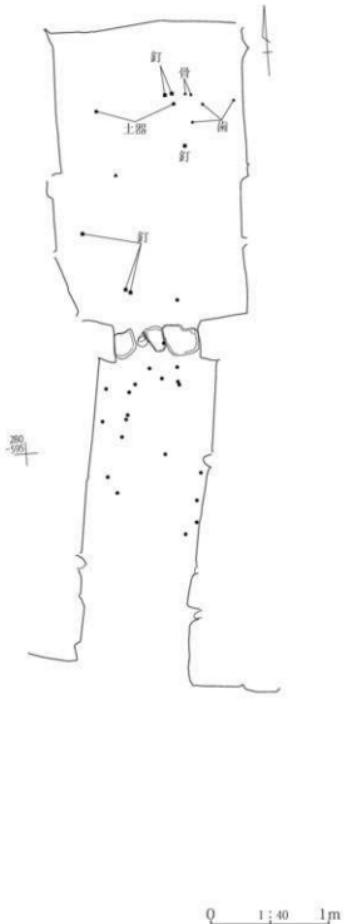
**羨道の閉塞状況(第80図)** 羨道は、初葬後に土石により閉じられるが、追葬の際に上部の土石を外して遺体を埋

葬し、埋葬後土石を詰めて再度閉塞する。当古墳でも追葬の可能性があるが、追葬の有無は明瞭ではない。羨道は長4～30cmの礫で閉塞されているが、特に長10～30cm大の大型の礫を中心に土と併せて土石で閉塞を行っている。(出土土器の詳細は、下記「出土土器」を参照。)

**出土土器(第82・83図)** 1号墳からは、土師器杯・鉢、須恵器杯蓋・杯身・椀・高盤・長頸壺・壺、灰釉陶器皿・椀・長頸壺など第82・83図に図示した土器・陶器の21点の他に第20表に示した未掲載182点が出土している。

なお、前庭部には手前に存在する土坑を伴う配石遺構も含まれている。この配石遺構からは、須恵器椀、灰釉陶器段皿(第62図-15)、灰釉陶器皿(第62図-16)が出土しており、この配石遺構は10世紀代に比定でき、1号墳と

## 遺物出土状況



第79図 1号古墳石室出土状況図

は別遺構と判断される。こうしたことから、灰釉陶器椀(第85図-28)、灰釉陶器長頸壺(第85図-36)はこの配石遺構に伴うものと判断される。

1号噴出土の土器を詳しくみると須恵器は杯G<sup>平1</sup>蓋12点(内、未掲載7点)、杯G身14点(内、グリッド出土の74を含む、未掲載10点)、杯B身1点(未掲載)、杯B蓋3点(内、未掲載2点)、底部回転ヘラ起こしの杯1点(未掲載)、10世紀代の杯・椀3点(未掲載)、瓶・壺9点(図示4点、未掲載5点)、土師器は杯が須恵器杯蓋模倣杯5点(未掲載)、7世紀後半代から出現する口縁部が内湾し、底部が丸底を呈する形態の杯30点(内、未掲載29点)、平底化した形態の杯26点(未掲載、1点に放射状暗文を確認)、甕79点(未掲載)である。なお、土師器甕は口縁部と胴部の小片のため図示できないが、胎土や整形の状態から7世紀代~8世紀前半代に想定される。

1号古墳に伴うものとして図示した土器には、No.11の土師器杯、No.28の土師器鉢、No.19~No.22・25の須恵器杯G蓋、No.24(やや丸底)・No.23(平底)・No.13(平底)・第84図-7(平底)の須恵器杯G身、No.12の須恵器B蓋、No.1の須恵器高盤、No.14の須恵器長頸壺、No.18のプラスコ型長頸壺、No.16の須恵器壺、No.17の須恵器有台壺がある。

これらの土器について詳しくみるとNo.11の土師器杯は口縁部が僅かに内湾気味に立ち上がり、口縁部の横ナデが比較的幅広く行われている。こうした特徴から、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

No.19~No.22・25の須恵器杯G蓋は摘が宝珠状を呈し、No.13・23・24、第84図-7の杯G身はNo.24の底部が手持ちヘラ削りによるやや丸味をもつが、No.23・No.13・第84図-7の杯G身は底部が回転ヘラ起こしによりほぼ平底を呈する。こうした形態は畿内では飛鳥Ⅲ・Ⅳに比定できることから7世紀後半代に位置付けられる。

なお、杯G身は丸底から平底へ変化するとみられる。杯G出現期では蓋の摘が乳頭状を呈し、身は底部と口縁部の区分が明瞭ではない形態を示している<sup>112</sup>が、第2段階では蓋の摘が宝珠状に変化し、身は底部が回転ヘラ削りや手持ちヘラ削りによって形作られ、口縁部と明確な稜によって区分される。そして第3段階では底部がヘラ起こしや回転ヘラ削りによってほぼ平底へ全てが移行する形態的な変化が看取できる。しかし、集落遺跡等で

は第2段階と第3段階の形態の両形態が共存している事例が多くみられる。

No.12の須恵器杯B蓋は身が残存していないが、蓋内面にカエリが設けられ、摘が円盤状の粘土盤を貼付して周囲を持ち上げるようにした所謂環状摘の形態を示している。群馬県内では杯蓋のカエリは周辺地域の古代武藏国などでは、概ね8世紀以降はほとんど残らないのに対しで8世紀第1四半期では大部分の蓋内部にカエリが設けられている。また、環状摘は8世紀前後する時期に擬宝珠から変化している。こうしたことからNo.12は7世紀末～8世紀初頭に位置付けられる。

No.1の高盤は玄室内から出土した土器であるが、残存部位は、盤部の底部片だけのため詳細は不明である。高盤は東海や湖西の諸窯でも概ね7世紀後半から生産が始まっている器種である。群馬県内でも同様であるが、その出土例が増加するのは7世紀第4四半期になってからである。<sup>注3</sup>

No.14の長頸壺は湖西産と想定できる個体である。湖西産の須恵器は奥原古墳群や本郷の場古墳群などに搬入されていることは知られている。No.14は無蓋で胴部の高さが無く、径が大きくなる形態で、高台が剥落しているがやや高い高台が貼付されていたとみられる。この形態は湖西古窯跡群<sup>注4</sup>では7世紀第4四半期に位置付けられている。

No.18はいわゆるフラスコ状長頸壺と呼称されている形態である。口縁端部を欠損しているが頸部が細く、作成時の底部に当たる部分の径が小さいことからフラスコ型長頸壺の中でも後半段階に位置付けられる。<sup>注5</sup>

No.16の広口壺は底部が欠損しているが、小径の丸底を呈するとみられる。口縁部は他の地域ではみられない形状で在地産とみられる。胴部がやや長くなる形態から7世紀末に位置付けられる。

以上のように1号墳から出土した土器については玄室・前庭から出土したもの全てが7世紀第4四半期以降に位置付けられる。その中でも7世紀第4四半期が主体で、7世紀末から8世紀初頭はNo.11の土器器皿とNo.12の須恵器杯B蓋の2点だけである。こうした点から、被葬者の埋葬は7世紀第4四半期、その後7世紀末に墓前祭祀が執りおこなわれたとみられる。

**鉄製品** 小型刀子刃部(第84図-9)、鉄釘破片7点(第

第20表 1号古墳未掲載遺物

種類	器種	部位	形態・出土位置	点数
須恵器	杯B	身		1
	杯G	蓋		7
	杯G	身		10
	杯B	蓋	カエリ有	1
	杯B	蓋	カエリ無	1
	杯	身	底部ヘラ起こし	1
	杯	身	10世紀後半	2
	碗	身	10世紀～	1
	瓶			5
	不明			1
	小計			30
土器	杯		蓋模倣	1
	杯		内湾(新型)	30
	杯		平底	9
	杯		8世紀前半代	25
	杯		8世紀後半代	1
	杯		内面放射状暗文	1
	杯		8世紀以降	4
	小計			71
土器	甕		西ベルト	3
	甕		西墳丘	7
	甕		東裏込	7
	甕		羨道	7
	甕		前庭	5
	甕		2面	14
	甕		前庭部南西	25
	甕		一括	4
	甕		北側周溝	7
	不明			2
	小計			81
	合計			182

82図-2～8)が出土している。刀子刃部片は小型のもので出土位置は玄室内部であるが詳細な位置は不明である。釘は先述したように玄室北東部と南西部にまとめて出土している。完形品がないので大きさは不明であるが、大型品(第82図-2・3・5)と小型品(第82図-4)がある。釘の出土から木棺を置いていたことが分かる。

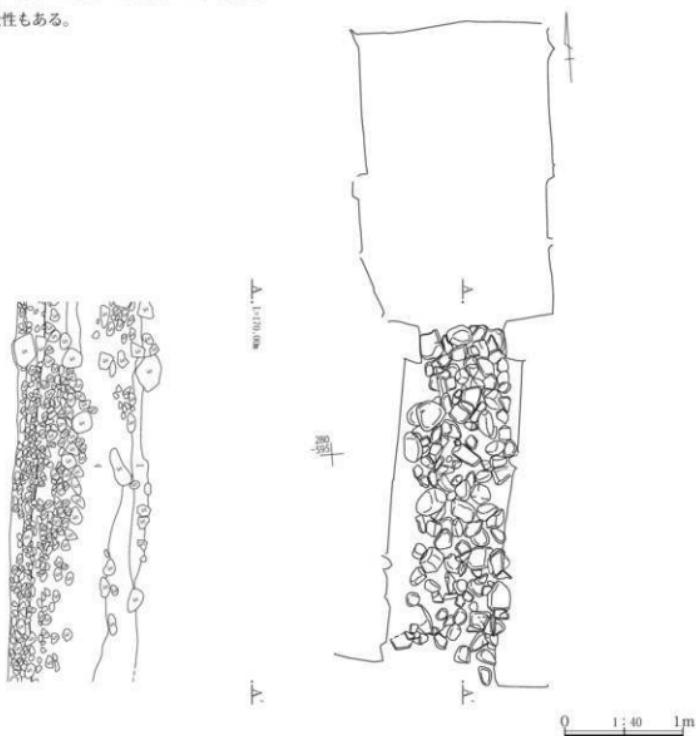
白玉 大型の滑石製白玉(第82図-10)が玄室覆土上部から出土しており、盗掘時に掘り返された副葬品の可能性がある。時期的には7世紀代として整合性がある。

まとめ 秋間石を主に使用した両袖式横穴式石室である。石室が立地した東側の崖面から石室の入口を離すために、羨道の方向が玄室方向に比べ西に振られている。

石室は、台形状に掘方を設け、礫を玄室・羨道に大きさの異なる礫を敷いている。奥壁、左側壁、右側壁の順に石を設置したことが、掘方の左羨門のピットや、調整石の状況から推察される。副葬品の出土は盗掘もあってほとんど検出されなかったが、本来副葬品は少なかったものと推定される。

玄室内には、釘と備の出土位置から、右側壁沿いに北頭位で1体埋葬された可能性が高い。また、南西部からの釘の出土からもう1体が左側壁沿い南側にあった可能性がある。前庭部に7世紀後半から8世紀初頭の須恵器が出土しており、出土土器の所で述べたように、7世紀後半に初葬が行われた可能性が高い。その後、追葬があるとすれば8世紀初頭の時期となる可能性がある。また、前提における土器の様相から見れば墓前祭が8世紀初頭まで行われた可能性もある。

## 石室閉塞状況



第80図 1号古墳羨道閉塞状況平・断面図

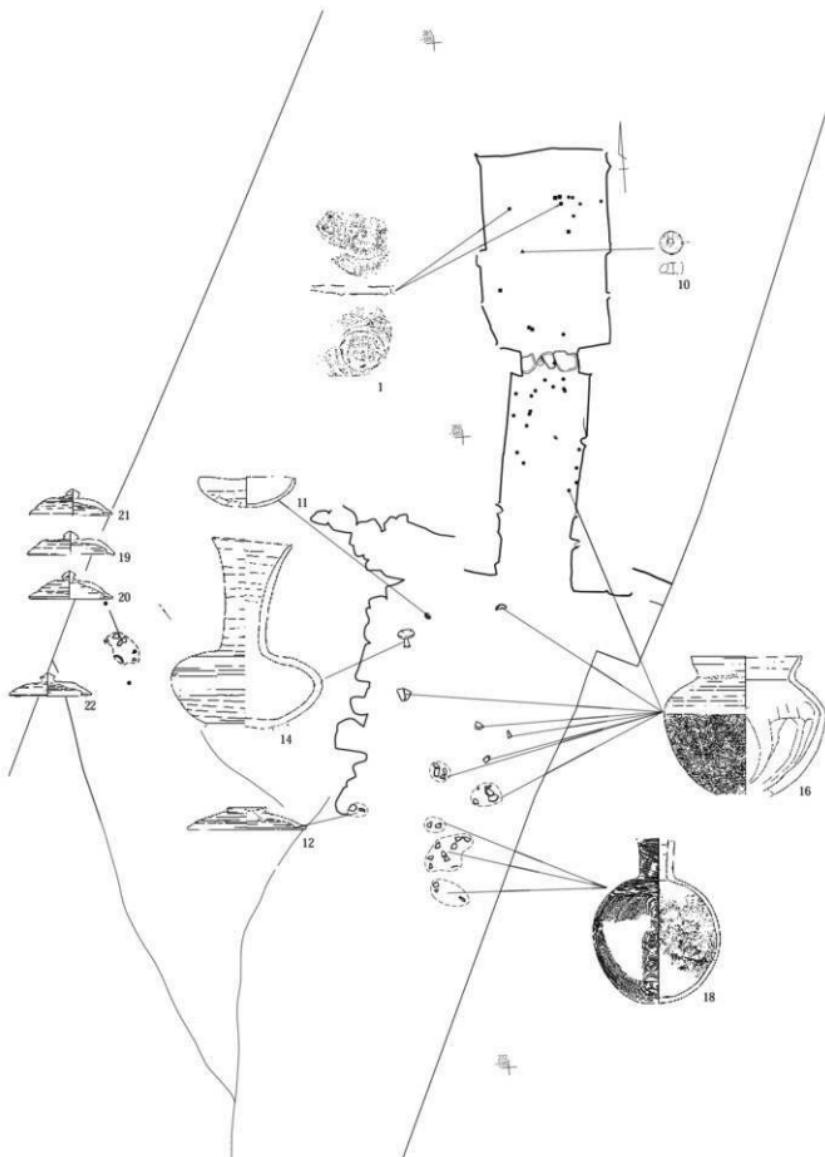
注1 土器の形態に使用しているB・G・Hなどのアルファベットは独立行政法人奈良文化財研究所による平城宮の土器分類による。なお、都馬県内では須恵器杯B蓋としたものの身は高台が貼付されたものに伴うだけではなく、太田市金山古窯跡群の発掘調査成果から高台が付かない形態にも伴う事例がある。

注2 須恵器杯Gの出現期としては奥原古墳群53号墳から出土した一群が該当する。

注3 神谷佳明1994「律令的土器様相の検討—古代の高杯について」『群馬考古学手帳』vol.4都馬土器総合会

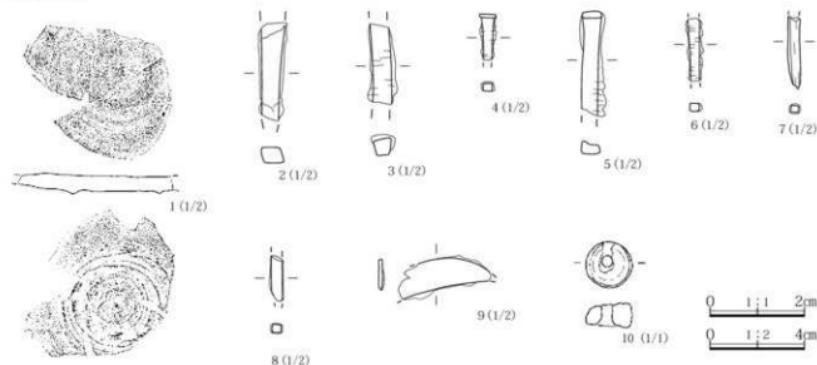
注4 財團法人都馬県埋蔵文化財調査事業団1983「奥原古墳群」  
路木敏則2000「古墳時代西宮編年再構築」・賀元洋2000「古代湖西宮編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会

注5 藤野一之2019「関東地方における須恵器生産と展開」『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房、50~51p第15回在地化したフラスコ瓶の成立過程

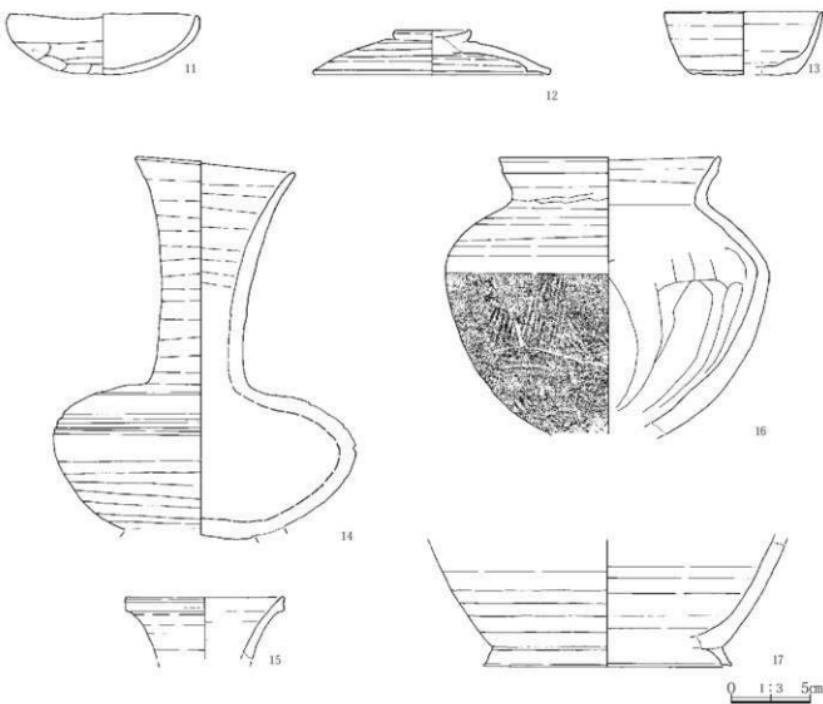


第81図 1号古墳遺物出土状況

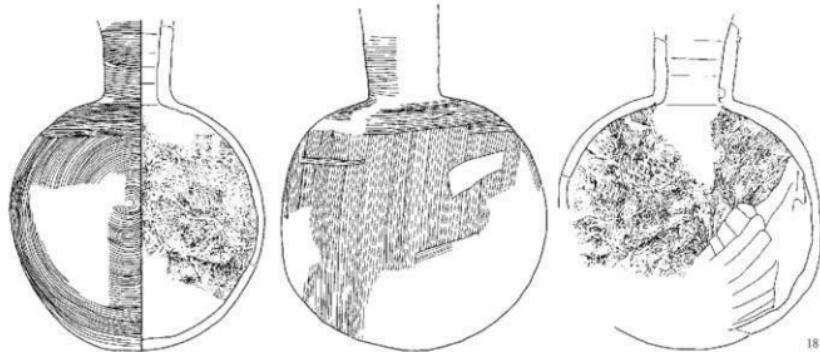
玄室出土遺物



前庭出土遺物

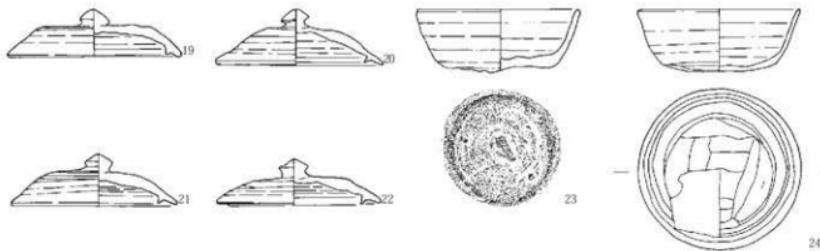


第82図 1号古墳出土遺物図(1)



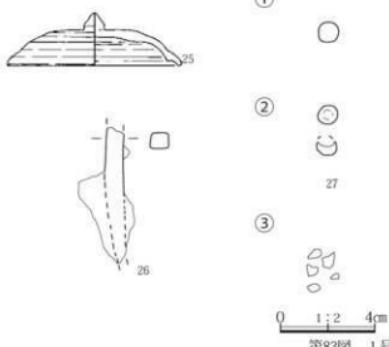
18

前庭西出土遺物



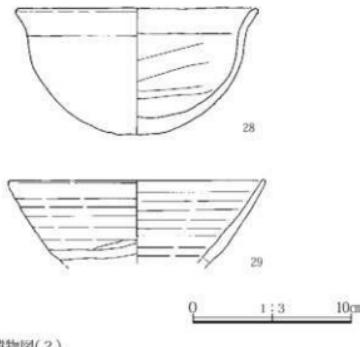
24

北部墳丘溝出土



0 1:2 4cm

1号古墳埋土出土遺物



第83図 1号古墳出土遺物図(2)

## 第2章 検出された遺構と遺物

第21表 1号古墳出土遺物観察表

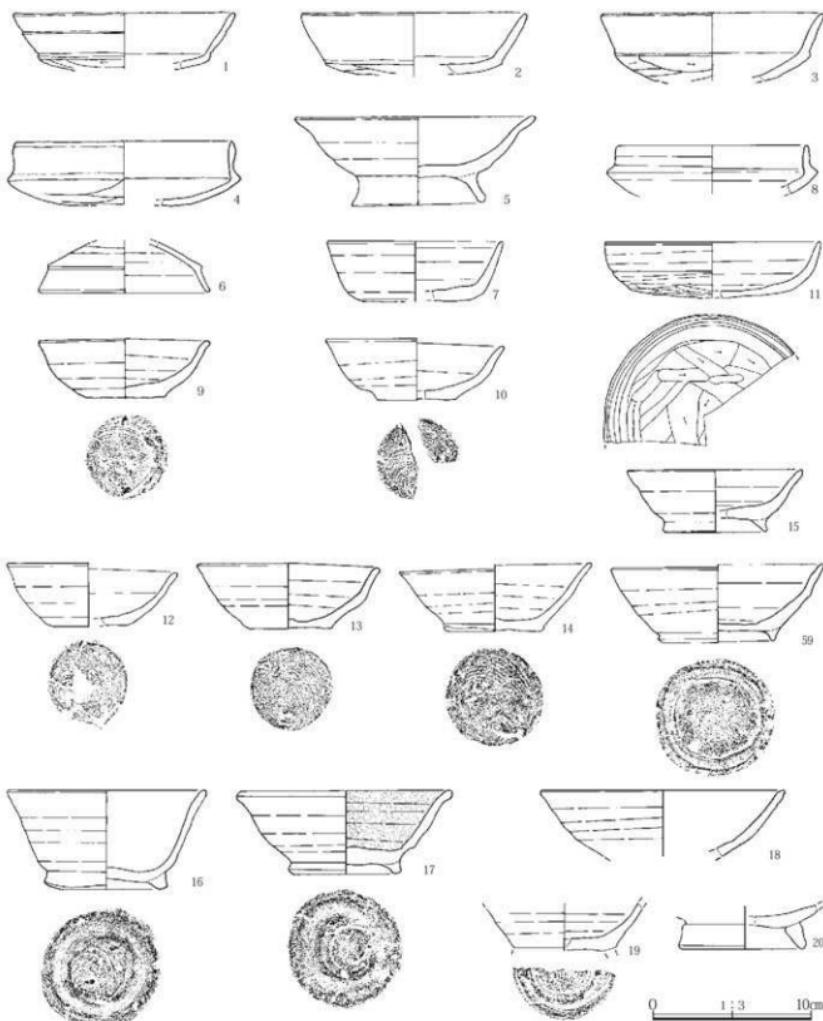
編 號 PL.No.	項 目 No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値				胎上/成形/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				*	*	*	*			
第82回 PL.63	1	須恵器 高盤	玄室内 底部片	長 幅	(2.0)	厚 重	0.3	細砂粒・還元焰/灰	クロロ回転右回り。盤部と脚部は貼付。	*
第82回 PL.63	2	鉄製品 釘	玄室内 破片	長 幅	0.5	厚 重	1.2	*/*/*	釘全体が残存。木質が残存し、木目が横方向に確認できる。	*
第82回 PL.63	3	鉄製品 釘	玄室内 破片	長 幅	0.4	厚 重	1.1	*/*/*	釘全体が残存。木質が残存し、木目が横方向に確認できる。	*
第82回 PL.63	4	鉄製品 釘	玄室内 3/4	長 幅	0.4	厚 重	1.3	*/*/*	頭部から体部にかけて残る釘。木質が残存し、木目が横方向に見られる。	*
第82回 PL.63	5	鉄製品 釘	玄室内 一部欠損	長 幅	0.4	厚 重	0.9	*/*/*	頭部の折れはあると思われるが、頭頂部、脚部は欠損。木質が残存し横方向の木目が確認できる。	*
第82回 PL.63	6	鉄製品 釘	玄室内 2/3	長 幅	(2.7)	厚 重	0.3	*/*/*	横方向の木目が残存する釘。頭部、脚部が欠損する。	*
第82回 PL.63	7	鉄製品 釘	玄室内 一部欠損	長 幅	(3.1)	厚 重	0.4	*/*/*	脚部から体部にかけて残存している。縱方向の木目が見られ、木口面から打ち込まれたと考えられる。	*
第82回 PL.63	8	鉄製品 釘	玄室内 破片	長 幅	2.0	厚 重	0.4	*/*/*	体部のみが残存する釘。横方向の木目を持つ木質が残存している。	*
第82回 PL.63	9	鉄製品 月子	玄室内 破片	長 幅	(3.9)	厚 重	0.2	*/*/*	刃の一部が残る。非常に薄手。反り0.2cm見られる。	*
第82回 PL.63	10	白玉	玄室内 完形	長 幅	1.0	厚 重	0.5	滑石/*/*	やや大型。白っぽい石材であるが、黒色の硬い粒子を含み緑色を呈する部分あり、薄手。表面両面とも剥離後研磨。側面に研磨時の相応の線状痕が明顯に残る。両側穿孔。孔の周りに当たり部分あり。孔の径は0.2m強。	*
第82回 PL.63	11	土師器 杯	前底部 ほぼ完形	口 高	11.8	*	*	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部から底部は手持ちヘラ削り。	*
第82回 PL.63	12	須恵器 杯蓋	前底部 2/3	口 幅 高	14.8	紐 幅	12	細砂粒/化粧焰/橙	クロロ回転右回り。縄は貼付。天井部は回転ヘラ削り。	*
第82回 PL.63	13	須恵器 小型杯	前底部 1/4	口 幅 高	9.8	紐 幅	6.6	細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラ削り、体部下位は回転ヘラナデ。	平底
第82回 PL.63	14	須恵器 長鏡面	前底部 高台欠損	口 幅 高	10	紐 幅	7	細砂粒・還元焰/灰 灰	ロクロ回転右回り。高台は貼付が剥落。底部は回転ヘラ外側削り。脚部下半は回転ヘラ削り。脚部中位に3条、上位に1条の凹溝が確認。	外側脚部に隣接する。
第82回 PL.63	15	須恵器 長鏡面	前底部 口縁部片	口 幅 高	9.8	紐 幅	6	細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ回転右回り。口縁部は上下に引き出されている。	*
第82回 PL.63	16	須恵器 壺	前底部 4/5	口 幅 高	13.7	紐 幅	20.3	細砂粒・還元焰/灰 灰	底部から脚部下位の外面に明き痕が残る。脚部上半から口縁部はロクロ整形。内面は底部から脚部中位にかけてナデ。	*
第82回 PL.63	17	須恵器 壺	前底部 高台・脚部下位 片	口 幅 高	14.4	紐 幅	15.4	細砂粒・還元焰/灰 灰	ロクロ回転右回りか。高台は貼付。脚部下位は回転ヘラ削り。	短頭壺か
第83回 PL.63	18	須恵器 フラスコ形 長鏡面	前底部 1/2	口 幅 高	4.2	紐 幅	16.0	細砂粒・還元焰/灰 灰	脚部は内面にアコス痕が残ることから粘土紐巻き上げながらの叩き技法。脚部に口縁部を削付。脚部は左から右へのカキメ。脚部から口縁部は下から上へのカキメ。内面脚部下半はアテ貝皿銀ナデ消している。	*
第83回 PL.63	19	須恵器 小型杯蓋	前庭西 2/3	口 幅 高	10.9	紐 幅	9	細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。縄は貼付。天井部は中程まで回転ヘラ削り。	*
第83回 PL.64	20	須恵器 小型杯蓋	前庭西 3/4	口 幅 高	10.3	紐 幅	8.6	細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。縄は貼付。天井部は回転ヘラ削り。	*
第83回 PL.64	21	須恵器 小型杯蓋	前庭西 3/4	口 幅 高	10.3	紐 幅	7.4	細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ回転左回りか。縄は貼付。天井部は回転ヘラ削り。	*
第83回 PL.64	22	須恵器 小型杯蓋	前庭西 1/3	口 幅 高	10.3	紐 幅	8.4	細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ回転右回り。縄は貼付。天井部は中程まで回転ヘラ削り。	*
第83回 PL.64	23	須恵器 小型杯	前庭西 2/3	口 幅 高	10	紐 幅	3.8	細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラ起こし後回転ヘラ削り、内部下位は回転ヘラ削り。	平底
第83回 PL.64	24	須恵器 小型杯	前庭西 7	口 幅 高	10.1	紐 幅	3.9	細砂粒・還元焰/褐 灰	ロクロ回転右回り。底部は手持ちヘラ削り。	丸底
第83回 PL.64	25	須恵器 北部埴丘講	北部埴丘講 1/2	口 幅 高	10.3	紐 幅	9.3	細砂粒・還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。縄は貼付。天井部は回転ヘラ削り。	*
第83回 PL.64	26	鉄製品 釘	北部埴丘講 一部欠損	長 幅	5.8	厚 重	0.7	*/*/*	縄が多く付着し、内部は劣化により空洞化している。脚部はほぼ先端に至る脚部は不明。	*
第83回 PL.64	27	鉄製品 空玉か	北部埴丘講 一部欠損	径 幅	0.45	-	0.2	*/*/*	中心部は空洞で、非常に小さな玉状の鉄製品。半球状に割れる傾向が見られる。極小の空玉も見られるが、詳細不明。	*
第83回 PL.64	28	土師器 鉢	埋土 1/4	口 幅 高	15	*	*	細砂粒・粗砂粒/良 好/灰	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか器面削。	*
第83回 PL.64	29	須恵器 鉢	埋土 口縁部片	口 幅 高	16	*	*	細砂粒・還元焰/灰	ロクロ回転右回り。体部下位は回転ヘラ削り。	*

## 第2節 第2面 古墳時代～平安時代の遺構

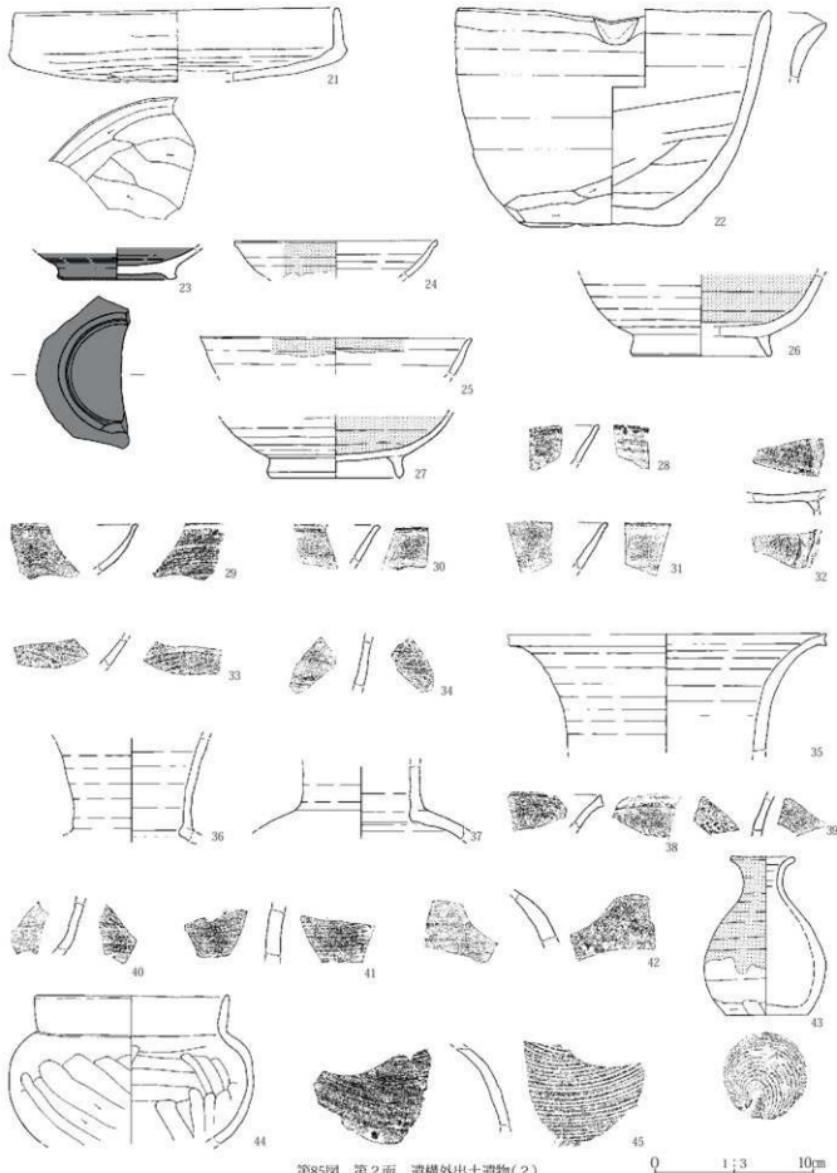
### 第6項 第2面遺構外出土遺物

出土は、主に竪穴建物など古墳時代～古代に至る生活遺構が検出されたC区よりの出土である。また、第1面

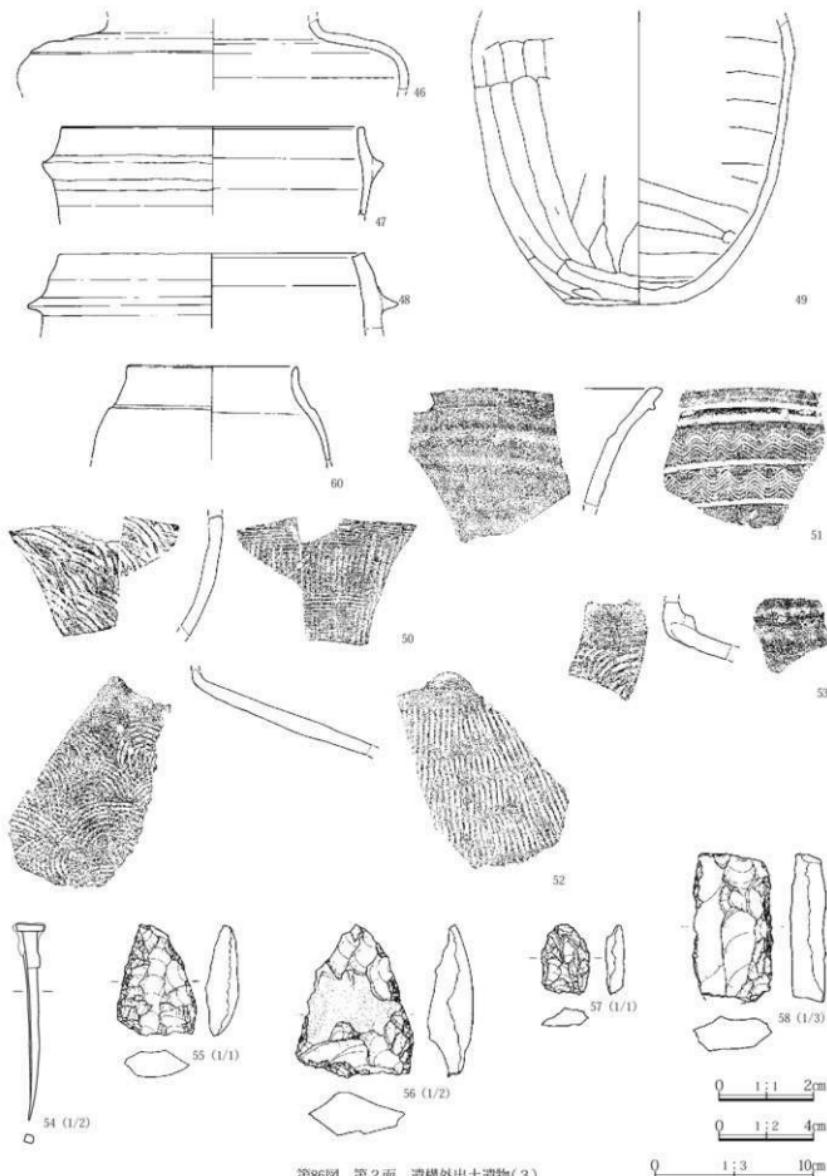
の遺構ではあるが、古代の生活以降を搅拌する形で掘り込まれたD区10号土坑より出土がある。縄文時代の遺物は極めて少なく、僅かに石器片4点のみの出土である。



第84図 第2面 遺構外出土遺物(1)



第85図 第2面 遺構外出土遺物(2)



第86図 第2面 遺構外出土遺物(3)

第22表 2面遺構外出土遺物

器 No. Pl. No.	種 類 種 類	出上位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴		備 考
			口 縁 部	横 断 面	縦 断 面		口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り、口縁部 内に1条の目跡が巡る。	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	
第84回 PL.64	1 上彌器 杯	*	口 縁 部	13.9 10.8	※ ※	細砂粒/良好/帽 リープ/滑	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り、口縁部 内に1条の目跡が巡る。	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第84回 PL.64	2 上彌器 杯	*	口 縁 部	14 11.2	※ ※	細砂粒/良好/に ぶい黄	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第84回 PL.64	3 上彌器 杯	*	口 縁 部	13.8 12.3	※ ※	細砂粒/良好/に ぶい黒	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第84回 PL.64	4 上彌器 杯	*	口 縁 部	13.6 14.6	※ ※	細砂粒/良好/棕	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	口縁部は横ナデ、稜下から底部は手持ちヘラ削り。	*
第84回 PL.64	5 上彌器 杯	*	口 縁 部	15 7.4	台 高 5.6	8.1 粗砂粒・粗砂粒/ 化焰/棕	ロクロ回転右回り。底部切り離し技法は器皿が荒れており 不明、高台は貼付。	ロクロ回転右回り。底部切り離し技法は器皿が荒れており 不明、高台は貼付。	*
第84回 PL.64	6 須恵器 杯蓋	*	口 縁 部	11.6 9.8	※ ※	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。天井部は回転ヘラ削り。	ロクロ回転右回りか。天井部は回転ヘラ削り。	*
第84回 PL.64	7 須恵器 杯	*	口 縁 部	11.2 7	高 3.4	細砂粒、黑色斑点 /還元焰/褐	ロクロ回転右回り。	ロクロ回転右回り。	*
第84回 PL.64	8 須恵器 杯	*	口 縁 部	11.6 13.4	※ ※	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。	ロクロ回転右回り。	*
第84回 PL.64	9 須恵器 杯	*	口 縁 部	10.5 5.1	高 3.7	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/黄 褐	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	*
第84回 PL.64	10 須恵器 杯	*	口 縁 部	11.2 5.1	高 3.8	細砂粒・化焰/明 黄褐	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	*
第84回 PL.64	11 須恵器 杯身	*	口 縁 部	13.5 10	高 3.5	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ回転右回り。底部は手持ちヘラ削り。	ロクロ回転右回り。底部は手持ちヘラ削り。	*
第84回 PL.64	12 須恵器 杯	*	口 縁 部	10.6 4.8	高 4	細砂粒/化焰/灰 灰	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	*
第84回 PL.64	13 須恵器 杯	*	口 縁 部	11.1 5.2	高 4.1	細砂粒・化焰/に ぶい黄	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	*
第84回 PL.64	14 須恵器 杯	*	口 縁 部	12 6.3	高 4.3	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/灰	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	*
第84回 PL.64	15 須恵器 杯	*	口 縁 部	10.8 6.4	台 高 3.9	6.2 細砂粒・細砂粒/に ぶい黄褐	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。	*
第84回 PL.64	16 須恵器 杯	*	口 縁 部	12.2 7.4	台 高 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/灰/オリ ーブ	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付。	*
第84回 PL.64	17 須恵器 杯	*	口 縁 部	12.9 6.8	台 高 6.4 5.2	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/内面焼 /灰闊	内面は焼し焼成。ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、 高台は貼付。	内面は焼し焼成。ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、 高台は貼付。	*
第84回 PL.64	18 須恵器 杯	*	口 縁 部	15.2 *	※ ※	細砂粒/化焰/棕	ロクロ回転右回りか。	ロクロ回転右回り。	*
第84回 PL.64	19 須恵器 底部-体部下位 片	*	底 部	6.4	※ ※	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付が剥落。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り、高台は貼付が剥落。	*
第84回 PL.64	20 須恵器 底部片	*	底 部	7.2 7.5	※ ※	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/滑	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無、高台は貼付。	ロクロ回転右回り。底部は回転糸切り無、高台は貼付。	*
第84回 PL.64	21 須恵器 底部-体部下位 片	*	底 部	21.0 21.2	※ ※	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。底部は手持ちヘラ削り、底部周縁か ら体部下位は回転ヘラ削り。	ロクロ回転右回りか。底部は手持ちヘラ削り、底部周縁か ら体部下位は回転ヘラ削り。	*
第84回 PL.65	22 須恵器 片口鉢	*	口 縁 部	19.6 10	高 13.6 5.2	細砂粒・粗砂粒/ 化焰/棕	ロクロ回転右回りか。底部は器皿面滅のため整形不良。体 部下位は回転ヘラ削り。内面は底部から体部下位にへラナ デ。	ロクロ回転右回りか。底部は器皿面滅のため整形不良。体 部下位は回転ヘラ削り。内面は底部から体部下位にへラナ デ。	*
第85回 PL.65	23					//			
第85回 PL.65	24 灰釉陶器 口縁部	*	口 縁 部	12.7 *	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ回転右回り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	25 灰釉陶器 口縁部	*	口 縁 部	17 *	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	26 灰釉陶器 底部-体部下半 片	*	底 部	8.6 8.4	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。体 部下位は回転ヘラ削り。施釉方法は漬け掛けか。	虎山浜号窯式 期	
第85回 PL.65	27					//			
第85回 PL.65	28 灰釉陶器 口縁部片	*	口 縁 部	12.7 *	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。口唇部の外反は みられない。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	29 灰釉陶器 口縁部	*	口 縁 部	17 *	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。施釉方法は漬け掛け。口唇端部は外 反。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	30 灰釉陶器 口縁部片	*	口 縁 部	13.8 12.3	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。施釉方法不明。口唇端部は僅かに外 反。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	31 灰釉陶器 口縁部片	*	口 縁 部	13.8 12.3	※ ※	微砂粒/良好/に ぶい黄	ロクロ回転右回りか。施釉方法不明。口唇端部は僅かに外 反。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	32 上彌器 杯	*	口 縁 部	13.8 12.3	※ ※	微砂粒/良好/に ぶい黄	ロクロ回転右回りか。底部は手持ちヘラ削り。	大原2号窯式 期	
第85回 PL.65	33 灰釉陶器 体部下位片	*	体 部	13.8 *	※ ※	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。体部下位は回転ヘラ削り。施釉方法是 漬け掛けか。	大原2号窯式 期	

種類 Pl.No.	種類 Pl.No.	出上位置 残存率	計測値				触・焼成・色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第85回 Pl.65	34	灰釉陶器 刷部片	*	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転左回りか。施釉方法不明。内部のロクロ痕が明 確に残る。	
第85回 Pl.65	35	灰釉陶器 長頸瓶	*	20	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。施釉方法不明。	大原2号窯式 期～虎尾山 号窯式初期
第85回 Pl.65	36	灰釉陶器 長颈瓶	頭 頸部片	7.6	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。頭部で胴部に口縁部を貼付。施釉方法 不明。	
第85回 Pl.65	37	灰釉陶器 長颈瓶	頭部～胴部片	8	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。頭部で胴部に口縁部を貼付。施釉方法 不明。	
第85回 Pl.65	38	灰釉陶器 瓶	口縁部片	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。施釉方法不明。口唇部は上下に引き出 されている。	
第85回 Pl.65	39	灰釉陶器 瓶	頭部片	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。施釉方法不明。	
第85回 Pl.65	40	灰釉陶器 瓶	胴部下位片	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。胴部下位は回転ヘラ削り。施釉方法不 明。	
第85回 Pl.65	41	灰釉陶器 瓶	口縁部片	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。施釉方法不明。	
第85回 Pl.65	42	灰釉陶器 瓶	胴部上位片	*	*	*	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転左回りか。施釉方法不明。内部のロクロ痕が明 確に残る。	
第85回 Pl.65	43	須恵器 小瓶	口唇部3/4欠損	口 3.7	底 5.2	*	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラ切り無調整、胴部最下位 に回転ヘラ削り。施釉方法は清け掛けか。	大原2号窯式 期
第85回 Pl.65	44	上師器 短颈瓶	口縁部～胴部下位片	口 12.2	*	*	粗砂粒/良好/にぶ い黄 白	口縁部は横ナデ、胴部の頭部下にはナデ、中位から下位はヘ ラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第85回 Pl.65	45	須恵器 提手罐	胴部片	口 21.4	*	*	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。外側はカキメ。	
第86回 Pl.65	46	須恵器 短颈瓶	頭部～胴部上位 片	胴 24.4	*	*	粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回りか。肩部に凹線が巡る。	
第86回 Pl.65	47	須恵器 羽釜	口縁部～跨片	口 21.4	*	*	粗砂粒・粗砂粒/ 灰白/浅黄白	ロクロ整形。跨は貼付。	
第86回 Pl.65	48	須恵器 羽釜	口縁部～跨片	口 19.1	*	*	粗砂粒・粗砂粒/ 灰白化粧/明赤	ロクロ整形。跨は貼付。	
第86回 Pl.65	49	須恵器 羽釜	底 底部～胴部片	底 7.1	*	*	粗砂粒・粗砂粒/ 灰白化粧/明赤	底部・胴部はヘラ削り、底部は墨面摩滅のためヘラ削りの 跡。内面はヘラナデ。	
第86回 Pl.65	50	須恵器 甕	胴部片	*	*	*	粗砂粒/還元焰/灰 白	胴部は外面に平ら叩き瓶、内面に同心円状アテ具痕が残る。 外側には隙間をあけてカキメを施す。	
第86回 Pl.65	51	須恵器 甕	口縁部片	*	*	*	粗砂粒/還元焰/暗 灰	口縁部はロクロ整形。口縁部下面に断面三角形の凸部が巡る。 口縁部は横線による区画を3段以上設け、区画内に波状文 を施す。	
第86回 Pl.65	52	須恵器 甕	胴部上位片	*	*	*	粗砂粒/還元焰/灰 白	胴部上面は平行叩き瓶、内面は同心円状アテ具痕が残る。 胴部上面はナデ。	
第86回 Pl.65	53	須恵器 甕	頭部片	*	*	*	粗砂粒/還元焰/黑 褐	胴部上面に同心円状アテ具痕がみられる。頭部で口縁部 を割裂して断面四角形の補強部を貼付。	
第86回 Pl.65	54	鉄製品 釘	完形	長 幅 0.5	厚 重 0.5	0.5	/*/*	頭部が折れる釘。頭部は鉄を薄くして折り返す。状態が良 い。	
第86回 Pl.65	55	石器未成品	完形	長 幅 1.7	厚 重 2.3	0.7	曜變石/*/*	平基無墨釦？先端部と茎部は作出されず、未完成と考えら れる。胴片素材？基盤部は薄く整形されている。側面形に 反対は無い。横断面は裏面側の方が盛り上りする傾い厚レ ンズ状。	
第86回 Pl.65	56	スクリエ バー	完形	長 幅 5.0	厚 重 47.2	1.9	珪質白石/*/*	横長片素材。平基形は二等辺三角形、直刃斧状。表面に 1/3程の斜面を残す。断面はやや厚い凸レンズ状。刃先 は薄いが、段状剝離。	
第86回 Pl.65	57	石器未成品	完形	長 幅 1.0	厚 重 0.6	0.4	馬蹄石/*/*	馬蹄形片素材。表面に馬蹄形が大きく残るが、 打点痕が除去されている。対側一部欠損。上端は上からの削 離があるが、欠損していないものと考えられる。側縁は 敲打清されている。使用による削減は極端かである。	
第86回 Pl.65	58	打製石斧	ほぼ完形	長 幅 (9.3)	厚 重 5.1	2.3	硬質岩石/*/*	短柄片素材。表面に馬蹄形が大きく残るが、 打点痕が除去されている。対側一部欠損。上端は上からの削 離があるが、欠損していないものと考えられる。側縁は 敲打清されている。使用による削減は極端かである。	
第86回 Pl.65	59	須恵器 甕	CIK 完形	口 7.6	台 高 4.9	13.2	6.8 粗砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ回転右回り。底部は回転ヘラ切り、高台は貼付。	
第86回 Pl.65	60	上師器 短颈瓶	CIK 口縁部～胴部片	口 10.6	*	*	粗砂粒/良好/檢	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

## 第3章 科学分析

### 第1節 吉ヶ谷津遺跡出土の人骨について

奈良貴史<sup>1</sup>・佐伯史子<sup>1</sup>・鈴木敏彦<sup>2</sup>・波田野悠夏<sup>2</sup><sup>1</sup>新潟医療福祉大学大学<sup>2</sup>東北大学大学院 歯学研究科

#### はじめに

2017年群馬県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査で安中市(0201)遺跡から人骨が出土した。これは人類学的調査の報告である。骨の計測はMartin and Saller (1957)と馬場(1991)に、歯の計測は藤田(1949)に準拠した。歯の咬耗度はMolnar (1971)に基づいて分類した。歯の計測値は表1に示す。

#### 1号古墳

遺存状況：歯冠の破片4点確認される。同定できる歯は以下の歯式に示すとおり、下顎左側第3大臼歯のみである。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を示す。記号と数字の組み合わせが記入されているものが存在を確認された歯である。歯式に対応する上下の数字はMolnar (1971)の咬耗度を示す。

M 3	M 2	M 1	P 2	P 1	C	I 2	I 1		3	3	I 1	I 2	C	P 1	P 2	M 1	M 2	M 3
M 3	M 2	M 1	P 2	P 1	C	I 2	I 1		1	1	1	1	C	P 1	P 2	M 1	M 2	M 3
									3	3	3	3						0

年齢： 同定できた下顎左側第3大臼歯の歯根部が遺存しておらず、歯冠の形成状態は不明である。咬耗が認められないMolnar (1971)の0度なことから、第3大臼歯が萌出途中か萌出直後の15～20歳程度の若い個体の可能性が高いが、第3大臼歯の萌出時期の個体差が大きいことから、断定はできない。

性別：下顎左側第3大臼歯の歯冠近遠心径の大きさが江戸時代男性の第2大臼歯の平均値(長岡 2003)よりか1標準偏差以上大きいので、男性の可能性が高い。

#### 3号墓

遺存状況：保存状態は概して不良である。細片化が著しく同定できる部位は限定される。頭骨においては左側頭骨の外耳道部、右側頭骨錐体部、左眼窩上縁部片、下顎右側臼歯部と歯が同定できる。同定できる歯は以下の歯式に示されるところおりである。

	P 1	P 2	M 1	M 2	M 3
	1	1	1	1	0

重複する歯は認められず、1個体が埋葬されたものと思われる。

下顎右側第1・2小白歯、第1・2大臼歯が植立した状態、第3大臼歯が萌出途中の状態で確認された。

四肢・体幹骨では、左右上腕骨骨幹部、桡骨、尺骨、大腿骨骨幹部片のみが同定できた。

年齢：下顎左側第二大臼歯が萌出完了してて、第3大臼歯が萌出途中であることと、下顎第2大臼歯の咬耗がMolnarの1度であることから、15歳程度の若い個体と推察される。

性別：性別の推定に有効な部位が遺存していないが、大腿骨の骨幹部がきしゃな印象を受けることと歯冠計測値の大きさが江戸時代男性の平均値（長岡 2003）よりか小さい傾向にあるので、女性の可能性が高い。

#### 4号墓

遺存状況：保存状態は不良である。細片化が著しく同定できる部位は極めて限定される。頭骨においては、わずかな頭蓋冠の破片と下顎骨の左下顎体、ならびに歯が確認される。同定できる歯は、下の歯式に示されるとおりである。全てが遊離歯である。

2 1 2	3 1 1	3 1 1	3 1 2	3 C
			1 2 3	C 3
			2 3	P 1 2

四肢・体幹骨では、大腿骨骨幹部片のみが同定できた。

年齢：年齢推定に有効な部位が遺存していないので大まかな推定だが、下顎左側第2大臼歯の咬耗がMolnarの5度であることから成人段階でも壮年期後半以降だと思われる。

性別：右側頭骨乳様突起部が比較的大きく、大腿骨の骨幹部が頑強なことから、男性と思われる。

その他特記事項：齶歯は、下顎左側第2大臼歯の遠心面歯頸部に認められた。大腿骨後面の粗線は内側唇・外側唇とも発達するが、後方に張り出す柱状大腿骨ではない。破損のため正確に計測できないが、ピラスタ示数は100程度である。

#### 5号墓

遺存状況：頭骨は比較的良好に保存される。下顎骨は完形である（写真1-B）。同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。

I M 3	2 M 2	2 M 1	2 P 2	2 P 1	3 C	3 I 2	3 I 1	3 I 1	1 2 C	P 1 P 1	P 2 P 2	M 1 M 1	M 2 M 2	M 3 M 3
									1 1 3	1 2 3	C 3	P 1 1	P 2 2	M 1 5
1	3	3	2	2	1									0

重複する歯は認められず、1個体が埋葬されたものと思われる。

四肢・体幹骨では、右寛骨の大坐骨切痕部、多くは骨端部が破損しているが、上腕骨、桡骨、尺骨、大腿骨、脛骨、腓骨が同定される(写真図版1-C・D)。

年齢：確認できる右桡骨の骨端線の癒合が完了していることと下顎右侧第3大臼歯が萌出済みであることから成人段階には達していた。頭骨3主縫合の内・外板とも閉じていない、第3大臼歯の咬耗がエナメル質に限定的なMolnarの1度であることから成人段階でも比較的若い壮年期前半(20～30才)程度と思われる。

性別：左寛骨の大坐骨切痕は広く鈍角で女性的である。さらに頭骨の額が垂直に立ち上がり、前頭結節が明瞭に観察でき、乳様突起が比較的小さなことから女性と思われる。

その他特記事項：右下顎枝高51.3mm、下顎枝幅34.6mm、下顎枝示数67.4である。推定値だが右大腿骨骨体中央矢状径21.6mm、骨体中央矢状径24.2mmで、中央横断示数89.3で、内外側方向に扁平である。

#### 8号墓

遺存状況：保存状態は概して不良である。頭骨において頭蓋冠は左側の側頭部から後頭部を破損するが、比較的良好に保存される。顎面部と下顎骨は破片化が著しい。同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。全て遊離歯である。

2	2	2	2	2	2	2	3	3	2	2	2	2	3	3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	C	P1	P2	M1	M2	
M3	M2	M1	P2	P1	C				I2	C	P1	P2	M1	M2
1	3	3	2	2	1				2	2	2	2	3	2

重複する歯は認められず、1個体が埋葬されたものと思われる。

四肢・体幹骨では、上腕骨骨幹部、左右大腿骨骨幹部が同定できた。

年齢：観察できる冠状縫合の内板が半分程度閉じ・外板が閉じていないことから成人段階でも壮年期後半(30～40才)程度と思われる。

性別：性別の推定に有効な部位が遺存していないが、大腿骨の骨幹部がきしゃな印象を受けることと歯冠計測値の大きさが江戸時代男性の平均値(長岡 2003)よりか小さい傾向にあるので、女性の可能性が高い。

#### 10号墓

遺存状況：保存状態は概して不良である。頭骨においては左側頭蓋冠が比較的良好に遺存する。顎面骨は、左頬骨、左右上顎骨臼歯部、下顎骨と歯が同定できる。同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。

重複する歯は認められず、1個体が埋葬されたものと思われる。

## 第1節 吉ヶ谷津遺跡出土の人骨について

2 M2	3 M1	P2 P1	3 C	3 I2		3 I1	3 I2		2 P1	P2 P1	3 M1	2 M2
				I2 3	I1 3		I2 3		C 3	P1 2	M1 2	

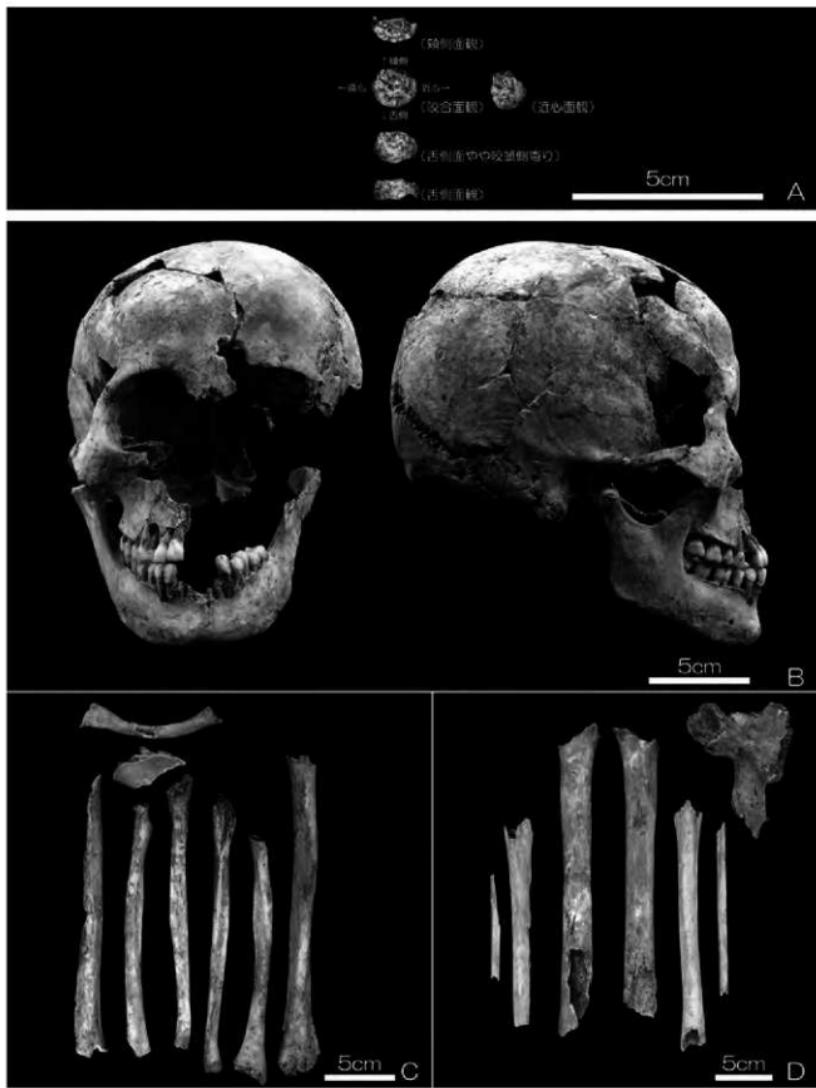
四肢・体幹骨では、左右大腿骨骨幹部片のみが同定できた。

年齢：上下の左側第二大臼歯が萌出済みであることから12歳以上である。観察できる頭蓋3主縫合が内・外板とも閉鎖していないことから比較的若いこと個体だと推定され、さらに四肢骨の筋付着部が明瞭にみられることから成人段階には達していたと思われことから、壮年期(20～40才)段階の可能性が高い。

性別：性別の推定に有効な部位が遺存していないが、大腿骨の骨幹部がきしゅな印象を受けることと歯冠計測値の大きさが江戸時代男性の平均値(長岡 2003)よりか小さい傾向にあるので、女性の可能性が高い。

## 参考文献

- 馬場悠男1991人体計測法.人類学講座別巻1.雄山閣.東京.  
 藤田恒太1949 歯の計測基準について.人類誌 61: 27-31.  
 Marti R. and Saller K. 1957. Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. G. Fischer, Stuttgart.  
 Molnar S. 1971 Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology, 34: 175-190.  
 長岡朋人 2003 江戸時代人の歯冠サイズの地理的変異人類学雑誌 111 (2), 143-154



A 1号古墳出土人骨：左下顎第大臼齒 B 5号墓人骨：頭骨 C 5号墓人骨：上肢骨 D 5号墓人骨：下肢骨

第87図 出土人骨

## 第1節 吉ヶ谷津遺跡出土の人骨について

表23 齒冠計測値 (mm)

	1号古墳出土人骨		3号墓出土人骨		4号墓出土人骨		5号墓出土人骨		8号墓出土人骨		10号墓出土人骨											
	右側		左側		右側		左側		右側		左側											
	近 縁 心 様	背 縫 舌 様	近 縊 心 様	背 縫 舌 様																		
中切歯							8.12	7.03	8.10	7.39	8.07	6.65	8.14	6.62								
側切歯							7.36	7.18	6.64	7.02	6.54	5.75	7.10	8.03	7.36	7.18						
犬歯							7.10	8.20	7.83	7.12	7.50	8.22	7.44	8.22	8.30	8.53	7.10	8.20				
第一小白歯							7.07	8.95	6.62	8.78	7.20	9.66	6.98	9.22	6.83	8.99						
上顎							6.46	8.75	7.22	9.28	6.72	9.05	6.29	9.11	7.18	9.38						
第二小白歯							10.40	11.26	9.97	11.17	10.47	11.03	10.85	11.42	10.40	11.18						
第一大臼歯							9.24	11.69	9.25	11.52	9.98	9.95	9.62	11.63	9.41	11.51						
第二大臼歯							7.90	9.45	8.45	10.03												
第三大臼歯											5.93	6.63			5.78	6.51						
中切歯							5.99	6.35	5.95	7.17	6.04	6.02	6.17	6.07	6.20	6.19	6.77	6.64				
側切歯							7.14	8.03	6.65	6.76	6.57	6.32		6.30	7.67							
犬歯							6.35	7.36	7.22	8.01	6.84	7.21	7.20	7.47	6.92	7.77	6.72	7.65				
第一小白歯							6.24	7.90	7.59	8.71	6.41	7.85	7.09	8.02	6.88	8.07	6.89	8.25				
下顎							10.49	10.26	11.54	11.05	10.61	10.02	9.97	9.94	11.45	10.67	11.12	10.25	11.49	11.29	11.08	10.87
第二大臼歯							10.37	10.05	11.55	10.36	9.03	9.62	9.89	9.22	11.08	10.27	10.45	10.53	10.47	10.17		
第三大臼歯							12.37				9.63	9.18			10.16	9.64						

## 第4章 まとめ

吉ヶ谷津遺跡の立地は、秋間丘陵南東部の丘陵端、秋間川に流れる鍛冶屋川によって開析された舌状に伸びた尾根端に位置する。遺跡の各調査区は、尾根上の平坦面がD区、中段の狭い平坦面がC～B区、下段の平地から谷地がB～A区となる。遺跡内の比高差は17mと大きく、D区とB・C区間は急峻な傾斜面となる。遺跡地周辺における現在の土地利用を見ると、集落は鍛冶屋川右岸沿いに開析形成された平坦地を川に沿って走る県道下里見安中線の両脇に集落が展開している。遺跡のA・B区がこれに当たる。D区の北側にも住宅が存在するが、明らかに尾根を削平・拡張した新しい分譲地とみられる。C・D区の周辺は、斜面上の狭い平坦面を墓地として利用している。この墓地は、小規模な単位の所謂「家墓」で、新しい墓標に混じり近世石造物も散見され、本遺跡D区検出の墓坑群も同様のものであったと考えられる。水田耕作地は、B区においても一部が検出されているが、主体は遺跡の南の少し離れた秋間川・九十九川の両岸部に沿って広がっている。

遺跡内の傾斜面については、調査時より古代の須恵器・瓦窯や近世～近代の自性寺焼(安中焼)窯、また、これら窯業生産に伴う炭窯などの存在が想定され、斜面の精査や試掘も入念に行われたが、窯跡などは検出されなかつた。これまでの分布調査等の成果を見ると、近世～近代の自性寺焼の窯跡は鍛冶屋川を挟んだ対岸にその存在が確認されている。ただし、本遺跡の調査においても、1号池を中心とする灌漑用水施設やB区第1面遺構確認面より自性寺焼の製品と併せて窯道具が出土していることから、遺跡の直近においても窯場が存在していた可能性も考えられる。また、古代の須恵器・瓦窯跡群については、分布調査等の成果やゴルフ場の建設に伴う発掘調査などにより、遺跡地より北東方向に谷筋を昇った峠付近の二反田周辺に窯跡が確認されている。

窯業生産に欠くことのできない粘土の供給元として、秋間丘陵を東西に走る館凝灰岩帯と中間・増田川橋凝灰岩帯に伴う粘土層があり、中間凝灰岩帯付近では窯業に適した良質の粘土が採取される一方、南側の山裾を走り

遺跡地にも近い館凝灰岩は、凝灰岩上部に亜炭層を有し、戦前は亜炭の採掘時に粘土も採掘され煉瓦生産に使用されていたが、古代の須恵器・瓦窯と近世～近代の自性寺焼窯共に主たる粘土は、北側の峠付近を走る中間凝灰岩層からの採掘であったと考えられ、古代の古窯跡群もこの粘土帶に沿って分布している。また、自性寺焼窯の粘土採掘も嘉永2(1849)年頃から、二反田の採掘坑にて採取された記録が残る。

この凝灰岩層は、「秋間石・鹿間石」の俗称で知られる溶結凝灰岩で、秋間丘陵北側稜線部に沿って東西に15～16kmほど堆積する。中でも茶臼山付近の堆積が70～80mほど最も厚く、溶結度が高いため暗灰色を呈し硬質であるのに対して、東側は石尊山以東で灰色～明灰色を呈してやや軟質となり、板鼻地区では堆積も10mほどと薄くなる。

この溶結凝灰岩(秋間石)は、古墳の石室石材として古くからその利用が知られており、東国でも最大級を誇る大型横穴式石室を有する高崎市(八幡)觀音塚古墳の最大で50t近い天井石などをはじめとし、秋間川流域の7世紀後半の築造と推定される万福原古墳(秋間12号墳)や二軒茶屋古墳(秋間3号墳)・磯貝塚古墳(秋間2号墳)・めおと塚古墳(秋間14号墳)などの截石切組積石室の石材の他、周辺の多くの古墳の石室石材として用いられている。当然のことながら、本遺跡の1号古墳も石室石材のほとんどが秋間石である。1号古墳の年代については、7世紀第4四半期の築造と考えられ、その被葬者については、玄室内から出土した人歯の鑑定より15～20歳程度の若い男性と推察される。

この1号古墳の東側斜面下方の中段には、横穴式石室の羨道部を失い、開口した玄室の奥壁に石仏が陽刻されている吉ヶ谷津北古墳(B K42、安中市1062遺跡)があり、更に下段のC区東端に接した所には、葺き石が露出した状態の吉ヶ谷津南古墳(B K56、安中市1279遺跡)がある。谷の入り口方向から眺めると、左側の山裾に3基の円墳が連なるような位置関係にある。秋間丘陵の古墳群については、その時期が7世紀以降と古窯跡群の開窯



第88図 秋間川方向より遺跡と秋間丘陵を望む

～操業期と重なり、截石切組積の石室構造を持つ古墳が存在することなどから、山王廃寺(放光寺)造営に関わる瓦生産も担った窯業集団との関係や総社古墳群との関係が示唆されている(『安中市史第四卷 2001』)。本遺跡の1号古墳を含む3基の被葬者は、吉ヶ谷津の古代窯業集団のリーダーであった可能性が考えられる。

一方、集落遺構に関しては、C区で検出された古墳時代後期の竪穴建物2棟と後世の破壊を受けて逸したと思われる平安時代の竪穴建物1棟の計3棟のみである。地形的に調査区外に集落が広がる要素は無く、水田を中心とした農業生産を営む大規模な集落が想定でき得るのは、周辺では秋間川沿いの微高地上となる。これに反して、窯業を主たる生業とする集団の集落となれば、より斜寄りの窯場に近い鍛冶屋川沿い、若しくは鍛冶屋川に流れ込む沢筋に集落を営むことが可能であり、当遺跡は、その狭間に位置していたとも考えられる。

D区で検出された近世墓坑群と遺構上に在ったと考えられる石造物群との関係は、付近に現存する斜面上の狭い平坦面を利用して造られた小規模な単位の家墓と同様の

ものであったと考えられる。石造物の年代から、寛保元(1741)年から天保12(1841)年の100年間に渡る墓地であることと、記された法名から成人男子5名、成人女子6名、子供2名、不明1名の墓であることが読み取れる。一世代20年ほどとして5～6世代、ちょうど成人男女の人数とも一致する。

近世において、天明三(1783)年の浅間山噴火は、東南東に34kmほどの距離にあるこの地にとっても大きな出来事であったと察するが、検出された遺構からは、降下テフラであるAs-A(浅間A軽石)の堆積以外にはその被害を読み取ることが出来ないが、前記の墓坑群を見る限り、天明の浅間焼け以降にも同所に4基の墓が造られていることから、復興後に営みが続けられていたことは明らかである。

下秋間の地において、嘉永2(1849)年頃より開業された陶器生産である安中焼(自性寺焼・下野尻焼)は、明治38(1905)年に最後の陶工となる須藤勇次郎氏が益子に移り幕を閉じるまでの半世紀余り、鉢や鍋などの日用雑器を主な生産品として開窯したが、名称から製品に至る

## 第4章　まとめ

までその実態には不明な点が多い焼き物のようである。本遺跡の出土遺物にも製品や窯道具が多く、須藤勇次郎の窯印である「ト」の刻印がある窯道具も含まれる。報告では出土陶器の実測図については一部の掲載に止めたが、写真についてはできうる限り掲載を計った。今後の研究資料となれば幸いである。

旧石器時代の遺物や縄文・弥生時代の遺構に関しては、いずれも検出し得ず、縄文～弥生時代の遺物の出土も極めて少ない。地理的に生活環境に適合していないことが要因であろうが、僅かながら南に面した平坦面も有し、付近には沢(銀音沢)もあるが、調査成果からは生活の一端さえ感じ得ない。

末尾に、出土遺物の石材鑑定を依頼している郡馬地質研究会の飯島静男氏には、発掘調査現場における1号古墳の石室石材の鑑定に加え、秋間丘陵の溶結凝灰岩層について、参考文献の供与やご教示をいただいた。群馬県立歴史博物館の右島館長・徳江専門調査官には、検出古墳をはじめ周辺の古墳についてのご教示をいただいた。また、当事業団の大西雅広専門官普及課長には、自性寺焼(安中焼)について、調査から整理を通して指導・助言を受けた。記して感謝申し上げたい。

### 【参考文献】

#### 【県史・市史】

- \*『安中市史 第一巻 自然編・自然編付録 他』、2000年、安中市
- \*『安中市史 第二巻 通史編』、2003年、安中市
- \*『安中市史 第四巻 原始・古代・中世資料編』、2001年、安中市
- \*『新編 高崎市史 資料編 I 原始古代 I』、1999年、高崎市
- \*『群馬県古墳調観』2018年、群馬県教育委員会

#### 【展示図録】

- \*『安中のやきもの - 秋間古窯跡群から自性寺焼へ』、2018年、安中市学習の森ふるさと学習館

#### 【地質関係】

- \*小林二三雄・飯島静男・角田寛子・矢島博、「秋間層の溶結凝灰岩(茶臼山溶結凝灰岩)」、「良好な自然環境を有する地域」 学術調査報告書(XXXVI)、2010年、群馬県自然環境課

- \*飯島静男・小林二三雄・高桑祐司・矢島博、「湯原山地滑り地帯」、「良好な自然環境を有する地域」 学術調査報告書(XXX)、2014年、群馬県環境森林部自然環境課

- \*小林二三雄・飯島静男・金子稔・沢口宏・高桑祐司・矢島博、「板磚層の凝灰岩」、「良好な自然環境を有する地域」 学術調査報告書(第42号)、2016年、群馬県環境森林部自然環境課

- \*下川信夫・竹内圭史、「横名山地域の地質」、「地域地質研究報告(5万分の1 地質図幅)」、2012年、独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター

#### 【論文】

- \*栗原和彦 「山王庵寺出土の『放光寺』銘文字瓦をめぐって」 2006年『群馬文化288号』 群馬県地域文化研究協議会

- \*小山 宏 「近世・近代、上野国陶磁器生産に関する一考察—安中下秋間・吉が谷津周辺の諸窯と伝世品について—」 1993年『群馬文化235号』 群馬県地域文化研究協議会

# 写 真 図 版





1 遺跡遠景 北東より



2 遺跡遠景 北より



1 遺跡遠景 南より



2 遺跡遠景 東より



1 遺跡全景 上空より



2 B・C区1面全景 上空より



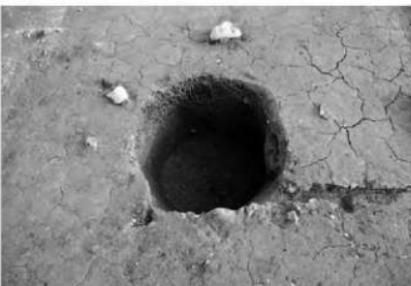
1 C区1面全景 上空より



2 D区全景 上空より



1 7号土坑 木材出土状況 東より



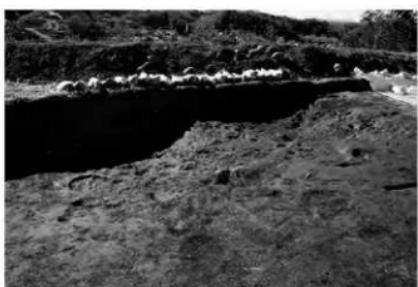
2 7号土坑 全景 西より



3 22号土坑 全景 東より



4 22号土坑 近景 東より



5 10号土坑 全景 北より



6 10号土坑 遺物出土状態 北より



7 10号土坑 確検出状態 東より



8 10号土坑 確検出状態 北東より



1 26・27号土坑 全景 西より



2 26・27号土坑 磯検出状態 東より



3 27号土坑 木枠検出状態 西より



4 27号土坑 磯検出状態 東より



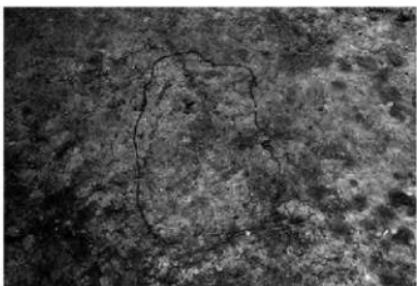
5 27号土坑 全景 西より



1 30号土坑 全景 東より



2 25号P i t 全景 南より



3 焼土集中微量散布1 北より



4 焼土集中焼土1 断面 北より



5 焼土集中微量散布2 北より



6 焼土集中焼土2 断面 北より



7 焼土集中微量散布3 南より



8 焼土集中焼土4 断面 北より



1 1号池 全景 北東より



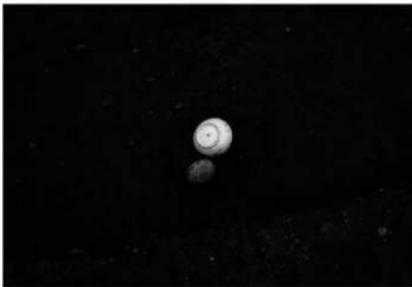
2 1号池 全景 南より



3 1号池 遺物出土状態 南より



4 1号池 遺物出土状態 北より



5 1号池 遺物出土状態 近景



1 5号溝 遺物出土状態 西より



2 5号溝 近景 南より



3 5号溝 埋土断面 北より



4 5・7号溝 全景 南より



5 7・5・12号溝 全景 南より



1 6号溝 全景 南東より



2 6号溝 全景 西より



3 6号溝 遺物出土状態 西より



4 6号溝 遺物出土状態 近景



5 11号溝 全景 東より



6 11号溝 石組み状態 北より



7 12・5号溝 全景 南東より



8 12号溝 埋土断面 南より



1 B・C区 溝群 上空より



2 2号溝 全景 北より



3 2号溝 全景 南より



4 3号溝 全景 西より



5 8・9号溝 埋土断面



1 1号烟 全景 北より



2 1号烟 検出状態 北より



3 1号烟 近景 北東より



4 1号烟 軽石堆積状況 北より



5 1号烟 近景 南より



1 2号烟 全景 南東より



2 2号烟 検出～軽石除去状態 南より



3 2号烟 全景 南より



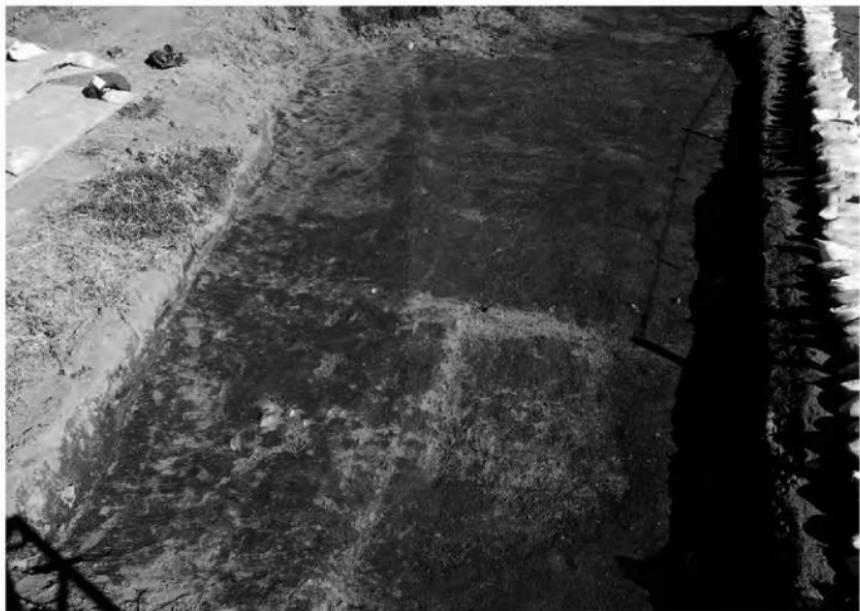
4 2号烟 全景 南より



5 2号烟 近景 南より



1 1号道 検出状態 全景 北より



2 1号道 検出状態 全景 南より



1 墓坑群 全景 上空より



2 墓石基礎 検出状態 南より



3 墓石基礎 下半裁状態 北より



4 墓石基礎 全景 東より



5 墓石基礎 全景 北より



1 墓坑群 全景 南西より



2 表採石造物(墓標)



1 1号墓 人骨・副葬品出土状態 北より



2 1号墓 全景 南より



3 2号墓 副葬品出土状態 北より



4 2号墓 全景 南より



5 3号墓 人骨・副葬品出土状態 東より



6 3号墓 全景 東より



7 4号墓 人骨・副葬品出土状態 北より



8 3・8・4号墓 全景 東より



1 8号墓 人骨・副葬品出土状態 東より



2 8号墓 全景 東より



3 5号墓 人骨・副葬品出土状態 北より



4 5号墓 全景 東より



5 6号墓 人骨・副葬品出土状態 東より



6 6号墓 全景 東より



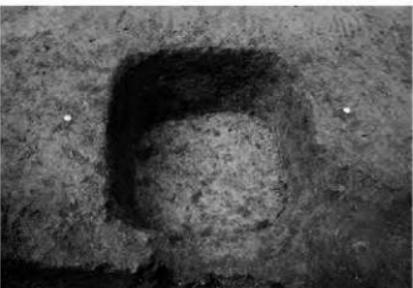
7 7号墓 人骨・副葬品出土状態 南より



8 7号墓 全景 南より



1 墓墳群 全景 上空より



2 12号墓 全景 東より



3 9号墓 人骨・副葬品出土状態 西より



4 9号墓 全景 西より



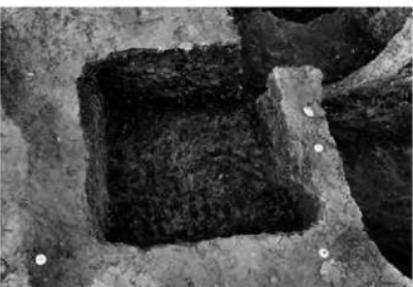
5 10号墓 人骨・副葬品出土状態 西より



6 10号墓 全景 西より



7 13号墓 人骨・副葬品出土状態 東より



8 13号墓 全景 東より



1 11・14号墓 上部墓石基礎 出土状態 全景 南東より



2 11・14号墓 全景 南東より



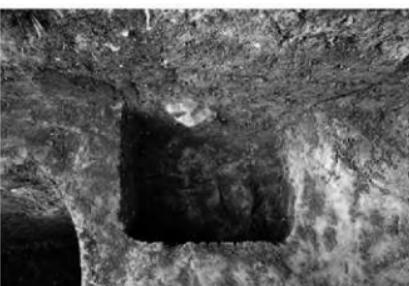
3 11・14号墓 上部墓石基礎下面



4 11・14号墓 上部墓石基礎下面



5 11号墓 人骨・副葬品出土状態 南東より



6 11号墓 全景 南東より



7 14号墓 人骨・副葬品出土状態 南東より



8 14号墓 全景 南東より



1 B区2面 遠景 北より



2 C区2面北 遠景 南より



1 D区2面 遠景 南上空より



2 D区2面 遠景 上空より



1 1号竪穴建物 遺物出土状態 南東より



2 1号竪穴建物 遺物出土状態 近景 東より



3 1号竪穴建物 カマド 全景 南西より



4 1号竪穴建物 遺物出土状態 近景 東より



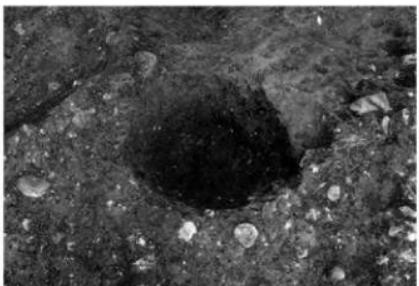
5 1号竪穴建物 カマド掘り方 全景 南西より



1 1号竪穴建物 貯藏穴全景 南より



2 1号竪穴建物 コーナー部壁溝 北東より



3 1号竪穴建物 P1 全景



4 1号竪穴建物 挖り方全景 南東より



5 1号竪穴建物 挖り方全景 南西より



1 2号堅穴建物 全景 東より



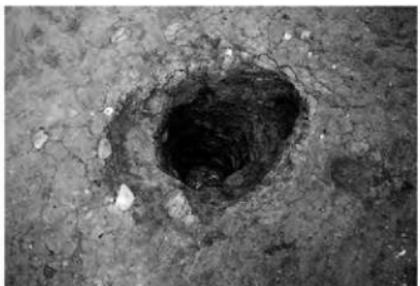
2 2号堅穴建物 挖り方全景 東より



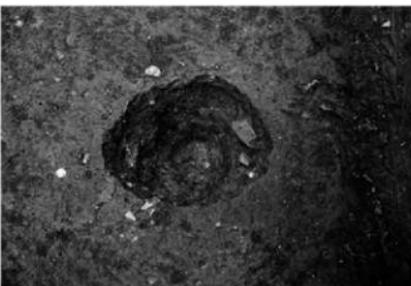
1 2号竖穴建物 遺物出土状態 南より



2 2号竖穴建物 遺物出土状態 南より



3 2号竖穴建物 P1 全景



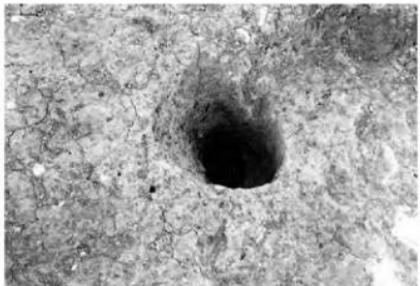
4 2号竖穴建物 P2 全景



5 2号竖穴建物 P3 全景



6 2号竖穴建物 P6 全景



7 2号竖穴建物 P7 全景



8 2号竖穴建物 挖り方全景 北より



1 1号土坑 全景 北より



2 2号土坑 全景 北より



3 3号土坑 全景 北より



4 4号土坑 全景 北より



5 5号土坑 全景 北より



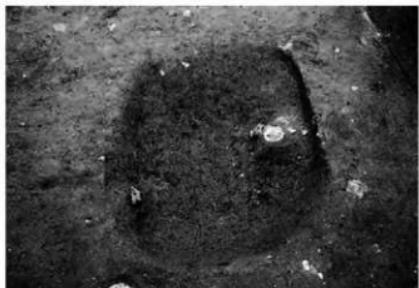
6 6号土坑 全景 北より



7 8号土坑 遺物出土状態 南より



8 8号土坑 全景 東より



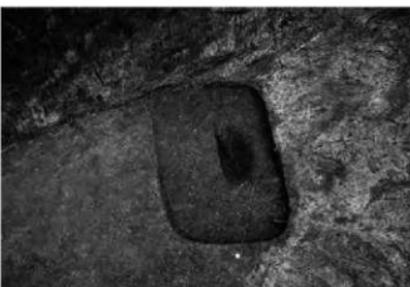
1 9号土坑 全景 東より



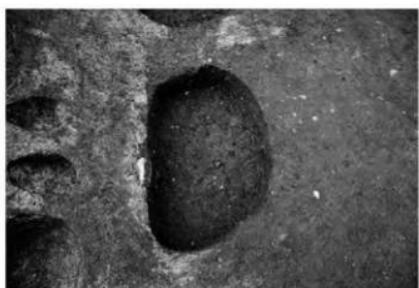
2 11号土坑 全景 北より



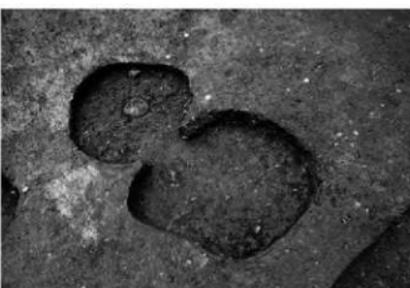
3 12号土坑 埋土断面



4 13号土坑 全景 西より



5 14号土坑 全景 東より



6 15・16号土坑 全景 北東より



7 17号土坑 埋土断面



8 18号土坑 全景 東より



1 19号土坑 全景 東より



2 20号土坑 埋土断面



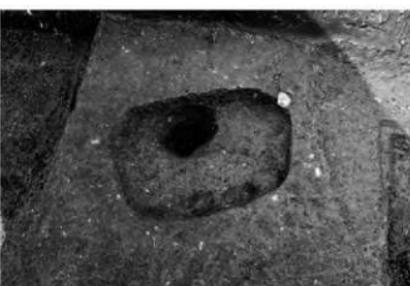
3 21号土坑 全景 南より



4 23号土坑 全景 東より



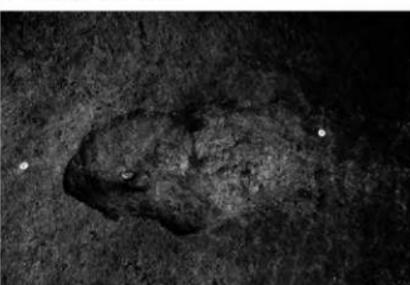
5 24・25号土坑 全景 東より



6 29号土坑 全景 東より



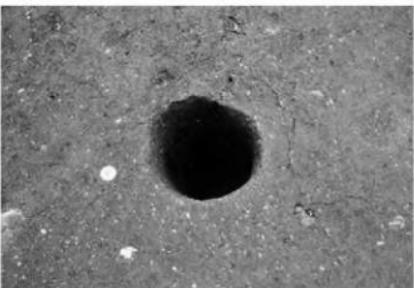
7 30号土坑 全景 東より



8 31・32号土坑 全景 北東より



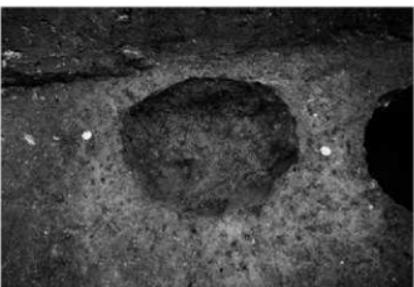
1 12号ピット 全景 東より



2 13号ピット 全景 東より



3 14号ピット 全景 東より



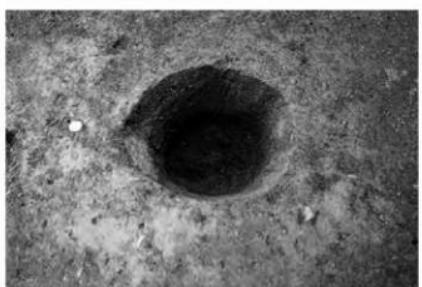
4 15号ピット 全景 西より



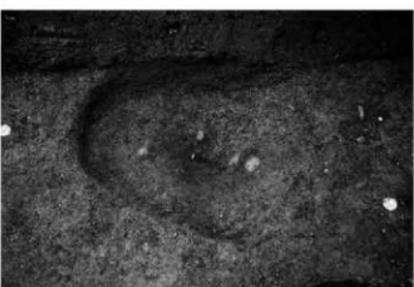
5 16号ピット 全景 西より



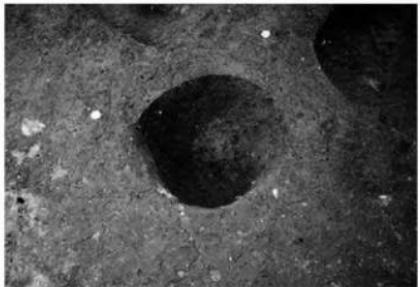
6 17号ピット 全景 西より



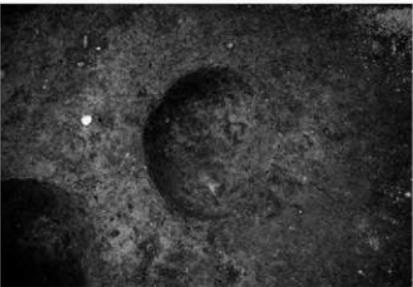
7 18号ピット 全景 西より



8 19号ピット 全景 西より



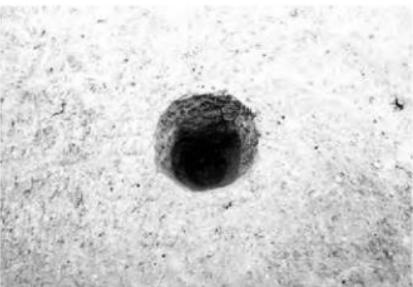
1 20号ピット 全景 西より



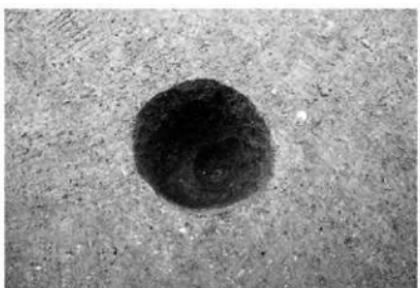
2 21号ピット 全景 西より



3 30号ピット 全景 西より



4 1号柱列P 2 全景 南より



5 1号柱列P 3 全景 南より



6 1号柱列P 2 全景 西より



7 1号柱列P 4 遺物出土状態 西より



8 1号柱列P 4 全景 南より



1 1号柱列 全景 北より



2 1号配石遺構 遺物出土状態 全景 西より



1 1号配石遺構 磨出土状態 全景 東より



2 1号配石遺構 遺物出土状態 近景 西より



3 1号配石遺構 全景 東より



4 1号配石遺構 磨除去状態 全景 北より



5 1号配石遺構 磨除去状態 全景 東より



1 1号溝 全景 東より



2 4号溝 全景 東より



3 10号溝 全景 上空より



1 3号烟 1戻断面 東より



2 3号烟 1戻全景 南より



3 3号烟 2戻断面 南より



4 3号烟 2戻全景 南より



5 3号烟 全景 南東より



1 3号烟3畝 全景 南東より



2 3号烟5畝 全景 北より



3 1号水田 南西半部全景 北東より



4 1号水田 北東部 南西より



5 1号水田 中央部 南西より



1 1号水田 南西半部 全景 北より



2 1号水田 南西半部 近景 南東より



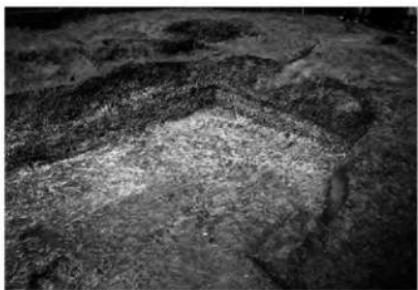
1 1号古墳 全景 南上空より



2 1号古墳 全景 上空より



1 1号古墳 石室掘り方 全景 南より



2 1号古墳 石室玄室部掘り方 南東より



3 1号古墳 石室玄門部掘り方 東より



4 1号古墳 石室掘り方 全景 南より



5 1号古墳 石室掘り方 全景 西より



1 1号古墳 石室基底部 全景 南より



2 1号古墳 石室基底部 全景 西より



3 1号古墳 石室基底部 全景 北より



4 1号古墳 石室基底部 近景 東より



5 1号古墳 石室基底部 近景 東より



1 1号古墳 石室壁設置状況 北東より



2 1号古墳 石室壁裏込石 北東より



1 1号古墳 石室側壁設置状況 南より



2 1号古墳 石室壁裏込石 南より



1 1号古墳 石室側壁設置状況 西より



2 1号古墳 石室側壁裏込石 西より



1 1号古墳 前庭部掘り方 西壁下 東より



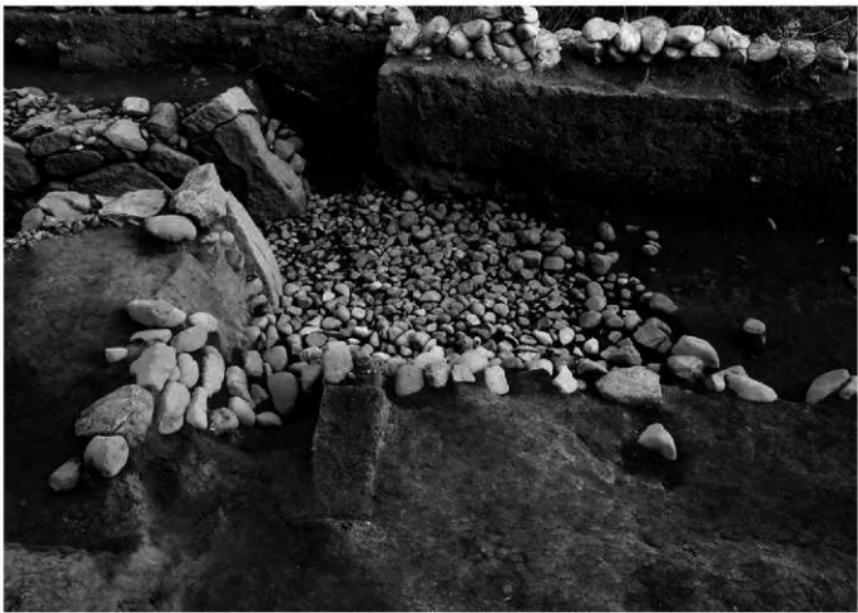
2 1号古墳 前庭部掘り方 西壁下 東より



3 1号古墳 前庭部掘り方 西壁下 南より



4 1号古墳 前庭部掘り方 南より



5 1号古墳 前庭部 全景 南より



1 1号古墳 石室 全景 南より



2 1号古墳 石室 全景 西より



1 1号古墳 石室 全景 北より



2 1号古墳 石室西壁 東より



1 1号古墳 玄室西壁 東より



2 1号古墳 玄室奥壁 南より



3 1号古墳 玄室東壁 西より



4 1号古墳 玄室玄門 北より



5 1号古墳 玄室 全景 西より



1 1号古墳 玄門～漢道 北より



2 1号古墳 玄門～漢道 北より



3 1号古墳 漢門～漢道 南より



4 1号古墳 漢門～漢道 南より



5 1号古墳 漢道東壁 西より



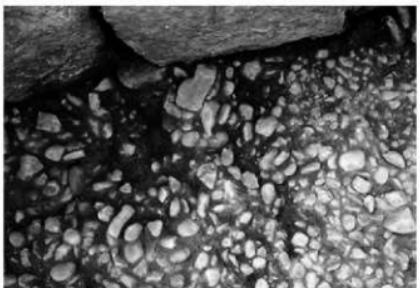
1 1号古墳 漢門～前庭 西より



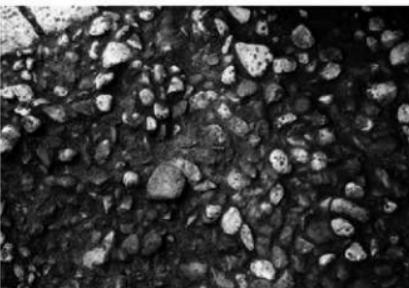
2 1号古墳 漢道部閉塞状況 南より



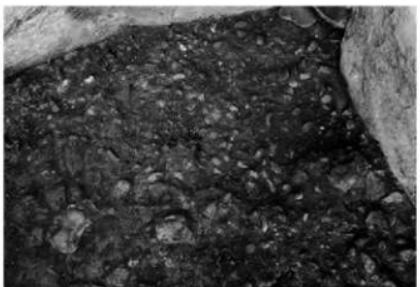
3 1号古墳 漢道部閉塞状況 北より



1 1号古墳 石室内铁製品出土状況



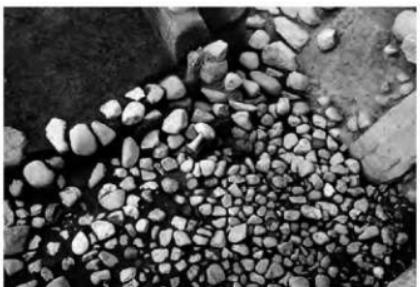
2 1号古墳 石室内铁製品出土状況



3 1号古墳 石室内人骨出土状況



4 1号古墳 美道部遺物出土状況



5 1号古墳 前庭部遺物出土状況



6 1号古墳 前庭部遺物出土状況



7 1号古墳 前庭部遺物出土状況



8 1号古墳 前庭部南遺物出土状況



1 1号古墳 石室埋没状況



2 1号古墳 石室埋没状況



3 1号古墳 石室埋没状況



4 1号古墳 石室埋没状況



5 1号古墳 石室検出状況 北より



6 1号古墳 石室検出状況 南西より



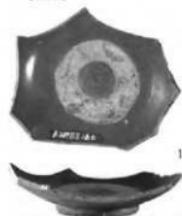
7 1号古墳 石室検出状況 南より



8 1号古墳 石室検出状況 南より

# PL.52

26号土坑



27号土坑



1号池(1)



1号池(2)



PL.54

1号池(3)



28

29



30



31

32

33

1号池(4)

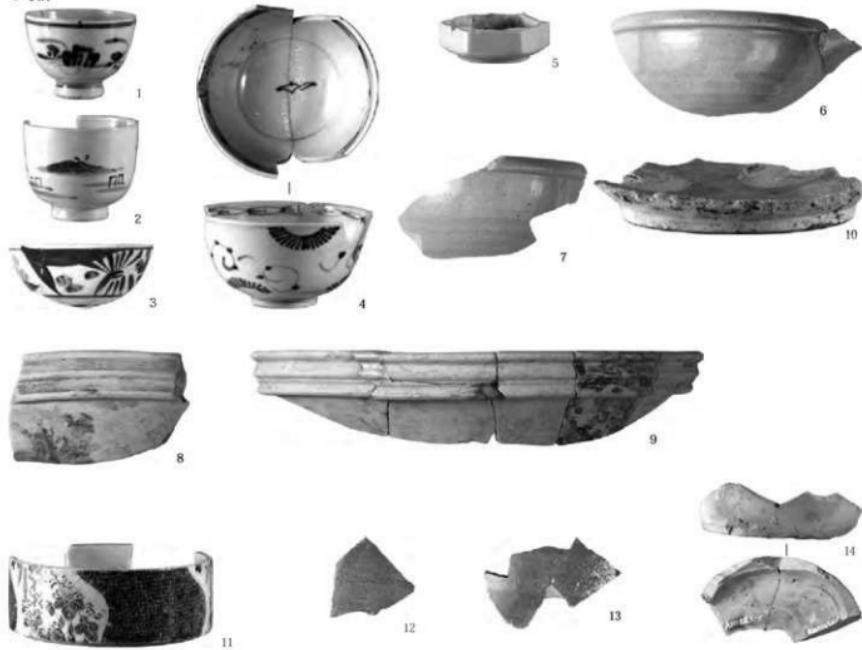


# PL.56

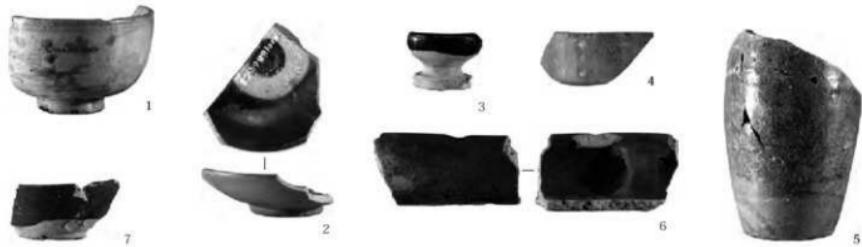
## 1号池(5)



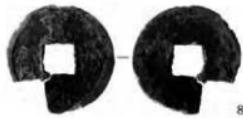
## 5号池



## 6号池(1)



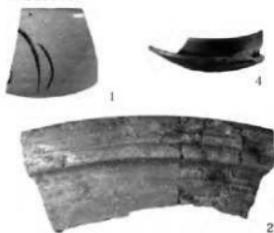
6号溝(2)



8号溝



11号溝(2)



12号溝



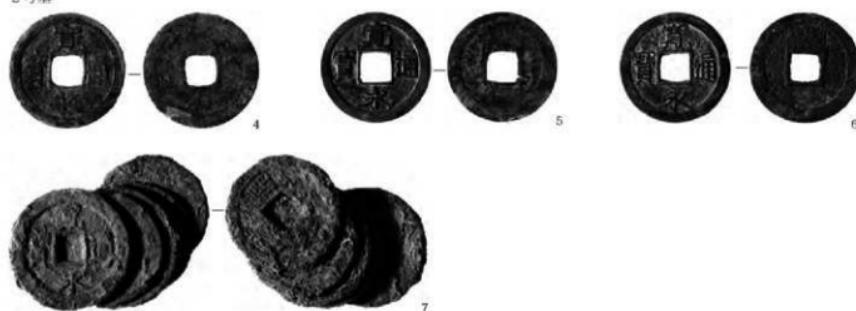
3

PL.58

1号墓



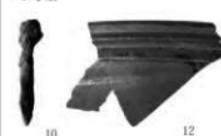
2号墓



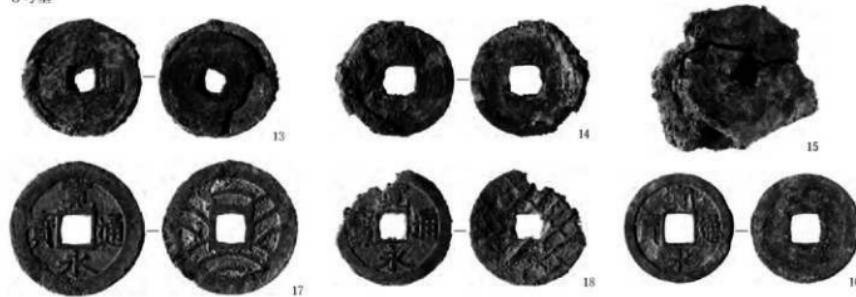
3号墓



4号墓



8号墓



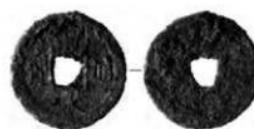
6号墓



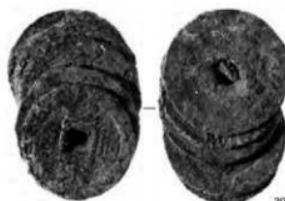
7号墓



26



29

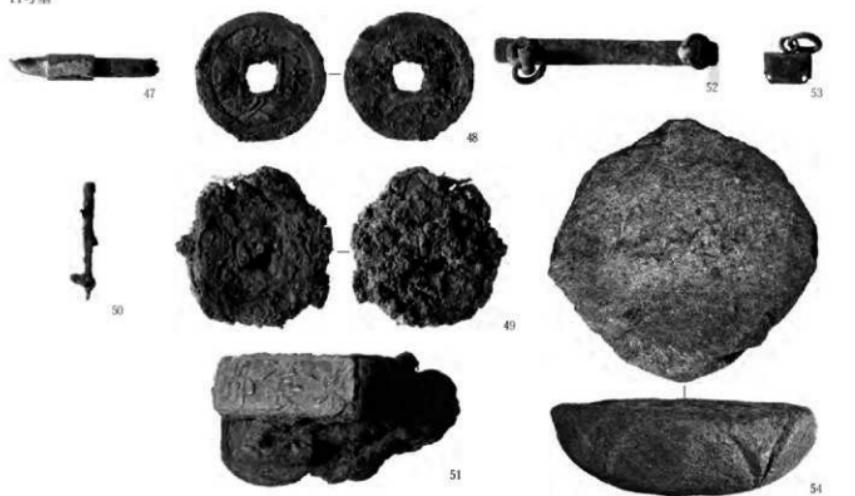


30

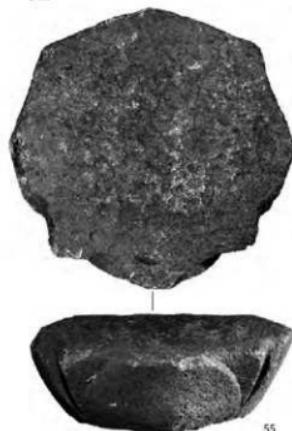
9号墓



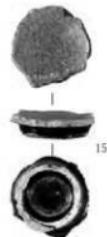
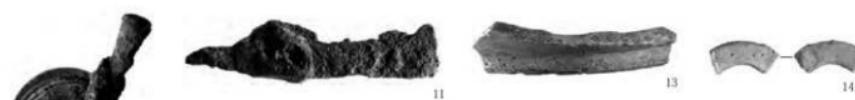
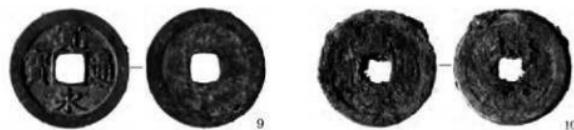
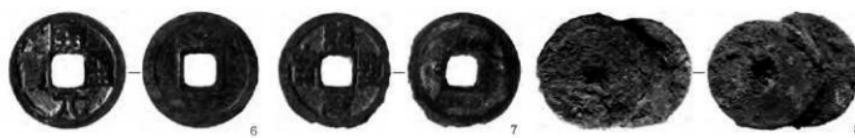
11号墓



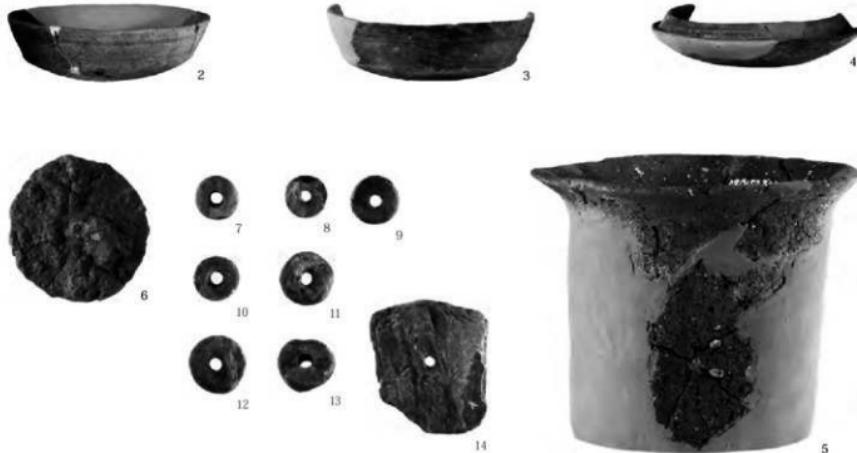
14号墓



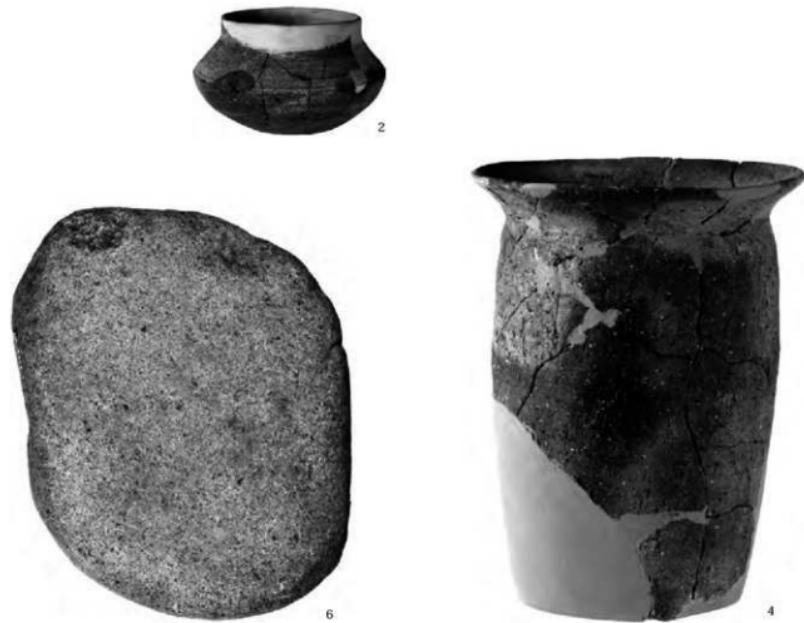
1面遺構外



1号竖穴建物



2号竖穴建物

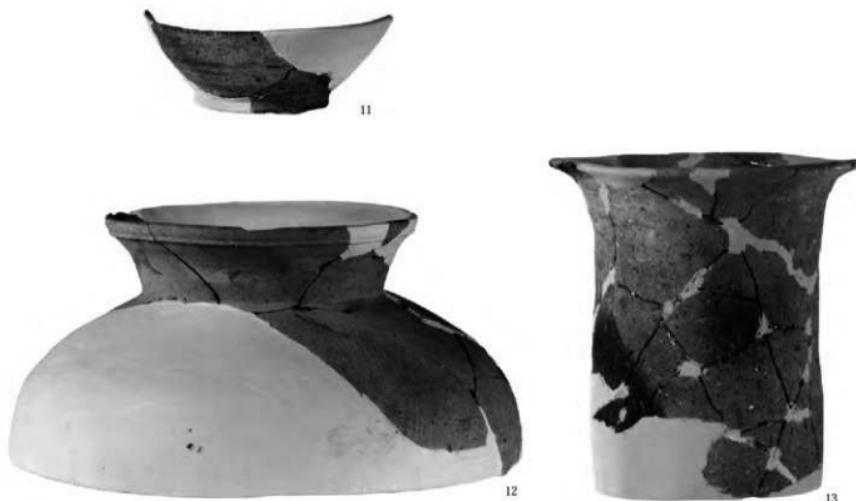


PL.62

8号土坑



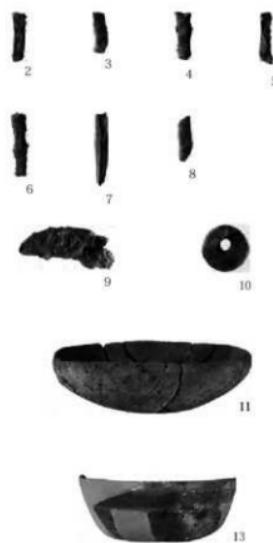
23号土坑



1号配石

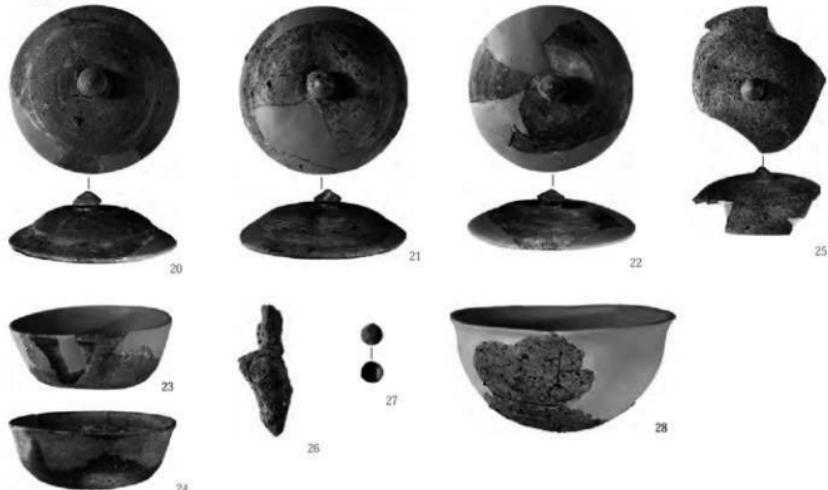


1号古填(1)

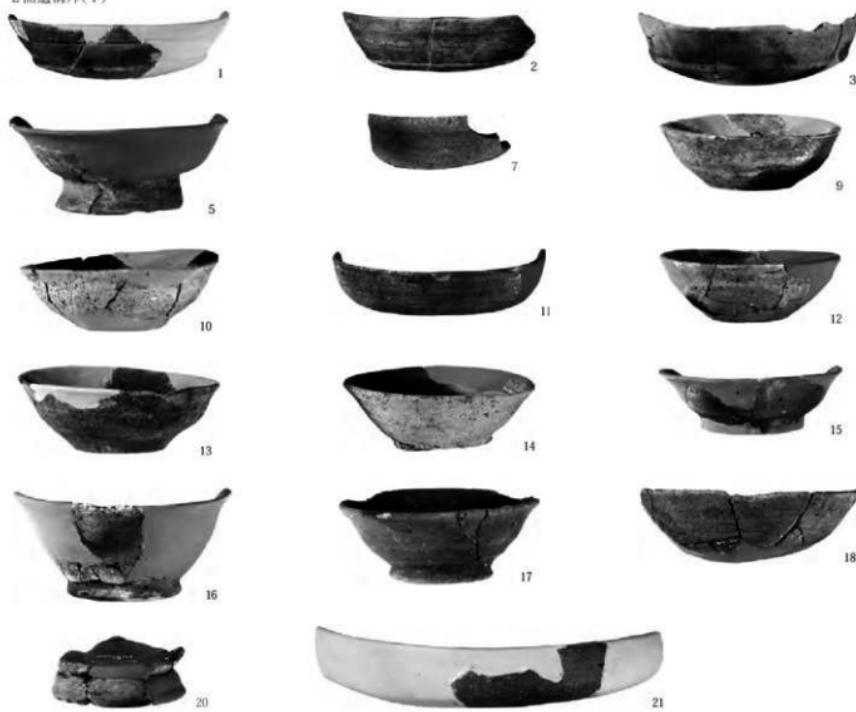


PL.64

1号古墳(2)



2面遺構外(1)



2面遺構外(2)



## 発掘調査報告書抄録

書名ふりがな	よしがやついせき（あんなかし 0201いせき）
書名	吉ヶ谷津遺跡（安中市 0201 遺跡）
副書名	社会資本総合整備（活力・重点・補正）（一）下里見安中線（西毛広域幹線道路安中工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書
シリーズ番号	第679集
編著者名	新倉明彦、杉山秀宏、神谷佳明、岩崎泰一
編集機関	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20210319
発行法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地-2
遺跡名ふりがな	よしがやついせき（あんなかし 0201いせき）
遺跡名	吉ヶ谷津遺跡（安中市 0201 遺跡）
遺跡所在地ふりがな	ぐんまけんあんなかしもあきま 361-2 ほか
遺跡所在地	群馬県安中市下秋間 361-2 他
市町村コード	12113
遺跡番号	0201
北緯（世界測地系）	36° 20' 28.93
東経（世界測地系）	138° 53' 29.39
調査期間	[第1次] 20190101 ~ 20190331 [第2次] 20190901 ~ 20191130
調査面積	[第1次] 5651.64m <sup>2</sup> [第2次] 442m <sup>2</sup>
調査原因	公共開発事業（道路建設工事）
種別	集落、畠、水田、墳墓
主な年代	古墳時代・平安時代・中・近世
遺跡概要	古墳時代墳墓+集落、奈良平安時代畠、中世水田、江戸時代灌漑用水施設+墓
特記事項	秋間古墳群の吉ヶ谷津北古墳（BK-42）、吉ヶ谷津南古墳（BK-56）に隣接する古墳の調査。

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第679集

## 吉ヶ谷津遺跡(安中市0201遺跡)

社会資本総合整備(活力・重点・補正) (一)下里見安中線  
(西毛広域幹線道路安中工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

令和3(2021)年3月11日 印刷  
令和3(2021)年3月19日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2  
電話(0279)52-2511(代表)  
ホームページアドレス <http://www.gumaihun.org/>  
印刷／川島美術印刷株式会社

---

